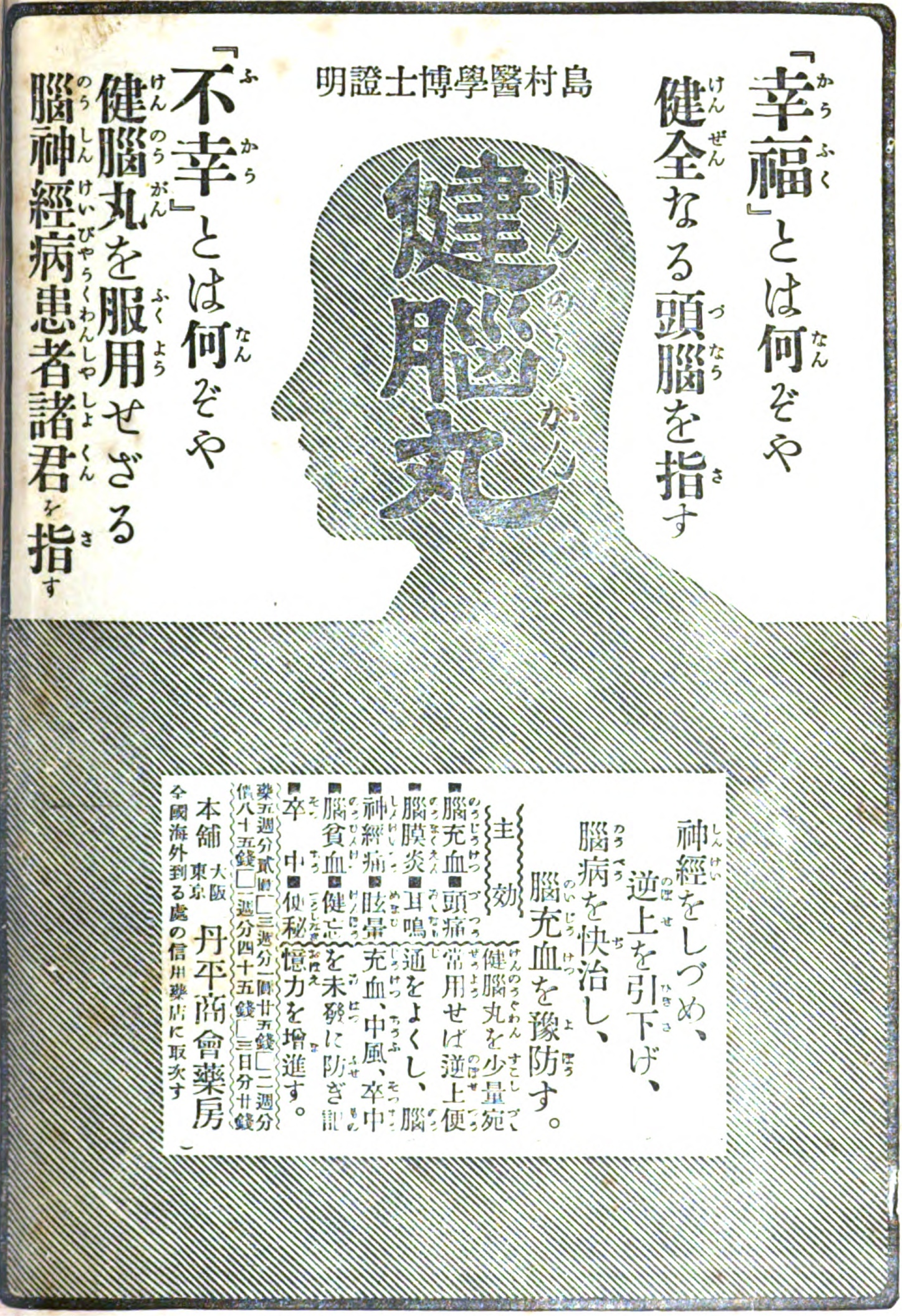
THE CENTRAL REVIEW

V. 29
No. 3
1914

中央公論

三月號

第廿九年第三號
第三百二號


『幸福』とは何ぞや
健全なる頭腦を指す
島村醫學博士證明
健腦丸
『不幸』とは何ぞや
健腦丸を服用せざる
腦神經病患者諸君を指す
神經をしづめ、
逆上を引下げ、
腦病を快治し、
腦充血を豫防す。
主効
■腦充血■頭痛
■腦膜炎■耳鳴
■神經痛■眩暈
■腦貧血■健忘
■卒中■便秘
健腦丸を少量宛常用せば逆上便通をよくし、腦充血、中風、卒中を未發に防ぎ記憶力を增進す。
藥價 五週分貳圓「三週分一圓廿五錢「二週分八十五錢「一週分四十五錢「三日分廿錢
本舖 大阪 東京 丹平商會藥房
全國海外到る處の信用藥店に取次す

嶋村抱月氏
生田長江氏
森田草平氏
昇曙夢氏
相馬御風氏
野上臼川氏
小林愛雄氏
本間久雄氏
金子薰園氏
徳田秋聲氏
講述

新文學百科精講

全二冊 總洋布最上製美本

紙數 大判 一千二百餘頁

▼定價金參圓——小包料拾六錢

特價三千部を限り——金貳圓四拾錢 小包料拾六錢

内容見本
——申込次第無料進呈——

▼本書は近代文學に就いて、其の思想の方面より、其の作品の方面より系統的組織的に之を詳密精細に講述せるものにして小說、劇、評論、詩等の各方面に於ける近代文學の關鍵たり。且つ進んで**創作の筆**を執らんとする人々の爲に其の用意を說くと頗る周到、本書を讀了して始めて文學者たるの根本的修養を全うすることを得べき也。

本書卷を分つ事二、編を分つ事十二、第一編を**藝術論講話**及**藝術叢話**とす。即ち藝術とは何ぞやてふ根本問題について解說せるもの、藝術の爲の藝術、人生の爲の藝術、人生と藝術との關係等の諸問題に就きて平明に詳述し、なほ批評論について深切なる解釋を與へたるもの也。講者は島村抱月氏。第二篇**近代思想講話**は野上文學士の講話にかかり、近代思想の種々相と近代人の生活の

て我等の呼吸しつゝある現代の空氣のいかなるものなるかを明かにすべし。筆者は本間久雄氏。第六編を**明治文藝講話**とし、相馬御風氏が其明快の講話になり、明治初年より最近に到る文藝史を說けるもの。殊に自然主義勃興以降最近の狀勢について詳述し、現在活動しつゝある諸作家の研究には最も多くの力を濺げり。第七篇を**詩歌講話**とし、主として小說の創作に從事せんとするもの、

▼本書の講述は飽く迄平易を主とし、以て一般の理解に便にす。近代文學の最高意義を語り盡くせるものなるも、巧みに之を説き砕きて何人にも難解の憂なからしむることを期せり。
▼十名家の講述にかゝるも、各講話皆緊密なる聯絡を保ちて毫も重複せる所なく、相乖反せる所なく、各科相待ち相補うて、其の理解を易からしむ。
▼紙數實に一千二百餘頁、文藝百科の事悉く本書に盡く。加ふるに卷頭三十頁に亘れる『索引』あり、語を録すること三千有餘、本書は一面に於いて、最も實用的なる**文學辭典**の觀を備ふ。
▼本書の編述、從來文藝の書に見る可からざるもの極めて多し。卷頭に載することろの『近代文學年表』の如き即ち其一たり。
▼本書は小社創立滿十週年紀念出版として發賣するもの。最低の特價を提供せるは此の故也。但し特價は僅に三千部、これに滿つれば直ちに定價に復す。好機は今也、迅速申込みあれ！

種々相とを併せ説きて頗る明快、ルッソオ、ショウペンハウエル、ニイチエ等よりオイケン、ベルグソンに至るまで、皆悉く其平易の筆に詳説せられたり。第三篇は生田文學士の筆に成る『最近文藝講話』にして、其の第一部を**自然主義講話**とし、主として文藝上の自然主義を説く。其根本精神及び作品に現はれたる特色等に就き、一々現代作家の作品を引例して具體的に示せるもの。又擬古主義浪漫主義等にも遡つて、其特質を詳説す。其第二部は**新浪漫主義講話**にして、前者を承けて、目下將に勃興せんとしつゝある新主觀主義文藝の精髓を説く。神秘主義とは何ぞ、象徴主義とは何ぞ、享樂主義とは何ぞ、是等の疑問は立地に氷解せられん。第四篇を**西洋文學講話**とし、更に總論、南歐、北歐、英米の四篇に分ち、森田草平、昇曙夢諸家の分擔講述になる。浪漫主義以降目下に至るまでの文藝史に就いて説き、其主なる作家作品等に就きて詳細に講述し盡くせるもの也。第五篇を**明治思想講話**とす、明治文藝の背景をなせる明治年代の思想界の推移變遷に就いて詳述す。近代思想講話と相俟つ

爲に説く、講述者は現代小説界の泰斗德田秋聲氏。自家の經驗を語ると共に他の諸家の説をも親切に紹介し、實例によつて創作の方法を説く事極めて周到。第八篇を**詩歌講話**とし詩歌についての歴史、理論、及び實際創作上の用意を説く。筆者は金子薫園氏也、第九篇を**新文章の研究**とし、小林文學士の筆に成る。新しき文章を根本的に解剖して技巧上の諸問題について研究せるもの、前者と相俟つて筆を執らんとするものゝ親切なる指導者たらん。なほ卷頭に附するに近代文學年表と索引とを以てす、**近代文學年表**は十九世紀以降の文豪作品等に就いて詳細に表示し、明治初年以降は外國と我邦とを相對照して示し比較研究上の興味頗る豊か也。**索引**は最も詳密、三千餘語を網羅して文學辭典の用をなす。尚卷中に挾める**東西文豪の肖像及び小傳**は五十餘家に亘り、**東西名作の梗概**は三十篇を超ゆ。其規模の雄大なる、其内容の豊富なる、斷じてこれ文壇無二の大著、一書實に數十卷の内容を併せ有するもの也。

◎**發行所**
東京市牛込區矢來町中の丸
電話（番町）二、二貳三番
振替（東京）一、七四二番
新潮社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

!!大好評!!大歡迎!!

トルストイ著 矢口達氏譯 **コサック** 正價金壹圓 小包料八錢

ダヌンツイオ著 矢口達氏譯 **巖の處女** （第三版） 正價一圓十錢 小包料八錢

■ピエール・ルゥイィ著■矢口達氏譯■

最新刊

不朽の戀

（野口柾夫氏装）

四六版洋装總布極美装箱入
紙數約三百頁
正價八十五錢
小包内地八錢

開卷一頁讀者諸君の前には不可思議なる世界が展開されるであらう。熱烈にして而も畸形な、淫媚にして而も神聖なる夢の如くまた現の如き戀愛の場景を蒼褪めた月光のやうな紗を透して打ち眺むるが如き心地がするであらう。鬼才ワイルドが、かの妖麗なる一卷「サロメ」を捧げたる佛國の奇才ルゥイィの傑作長短六篇を網羅したのが此の譯書である。至純な神秘な藝術に觸れんとする諸君の愛讀を俟つ。

ビョルンソン著 矢口達氏譯 **アルネ** （三版） 正價六十五錢 小包料八錢

トルストイ遺著 土岐哀果氏譯 **隱遁** （再版） 正價七十五錢 小包料八錢

ワイルド著 矢口達氏譯 **架空の頽廢** （再版） 正價四十錢 郵税四錢

チエーホフ作 伊東六郎譯 **女天下** （新刊） 正價四十錢 郵税八錢

發行所 東京小石川高田豊川町 **新陽堂** 振替口座東京一五五七〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

英國ハヴェロックエリス原著

相對主筆 小倉清三郎和譯

性學界唯一の名著

最新刊

性的特徴

菊判布製全一冊
—圖書挿入—
定價壹圓五拾錢
送料十二錢

譯者の挨拶の一節に曰く

爰に性的特徴といふのは身心の構造及び作用に於ける男女の種々なる相違特徴を申すのであります種々なる點に於て男性には男性的特徴があり女性には女性的特徴があります、……性的特徴には第一義のものと第二義のものとがあります……本書に於て取扱はれて居るものは第二義のものであります。

婦人問題を論ずるにもせよ其他凡て男と女とを對立させて考へて見ねばならぬやうな問題には少くとも一應は性的特徴の研究を參考して置ねばなりますまい、多くの社會問題の根底には常に男女の相違てふ事の横りありて此の點を度外視しては社會問題は到底滿足に解決し得るとは出來ますまい「エリス」先生の「男及び女」即ち本書は既に各國語に釋されまして今のところでは最大の權威を有する著述なのであります。

「男女兩性の科學的研究」

本書は最近の讀書界に於て最も著しき注意を以て迎へられつゝあるもの、一なり

書齋の重寶

櫻井鷗村著
■リンコーン物語
定價一圓二十錢送料八錢

■校訂略本 八犬傳
小形六號活字カナ付 定價一圓二十錢

櫻井鷗村著
■歐洲見物
定價一圓七十錢送料八錢

■校訂略本 弓張月
小形六號活字カナ付 定價一圓

東京市麴町二丁目 丁未出版社 振替貯金口座東京七八四七



中央公論第廿九年三月號目次

▼公論



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

NILS KREUGER.



"Horses in Movement"

中央公論



三月號
第廿九年第三號
第三百二號

最近の政局

（一）

一月廿四日都下諸新聞紙に登載されたる伯林に於けるリヒトル裁判に關する路透電報は宛も快晴久しく雨なきの天の一方に向ひ遙かに一拳大の黑雲を見るの觀ありしが、乍ち議會の大問題と爲り海軍の當局ヵ知らぬ存ぜぬの一天張を以て論難者の包圍を切拔くること能はず、遂に海軍省に査問委員會を設置し、之と前後して司法省亦た前の路透社東京通信人プーレ及びジーメンス・シユッケルト、支配人ヘルマン其他ヘルマンの手先となりて賄賂を取次ぎたる嫌疑ありと思惟せらるゝ吉田某を拘引せり、且夫れ唯だ之のみならば事件は一の局部問題として限られ審問の結果を待つて當局の責任を問ふべしと云ふを以

て唯一の順序なりと云ふべかりしも、同時に片岡主計大監太田大佐等が公開壇上に立ち薩閥海軍の專肆橫暴とコンミスションの內情を爆露せしかば玆に一大疑惑は海軍全般を蔽ふに至り、山本伯巨萬の富亦た自ら累を爲して醜類の首魁と見做され、初には拳大の雲片も乍ち滔天の黑雲と化し時ならぬ迅雷風雨と爲り、山本內閣死活の大問題を胚胎せり、國技館の大演說會は數萬の群衆を狂熱せしめ、延いて二月十日の日比谷公園に於ける國民大會及び大示威運動と爲り、遂に衆議院に於ける內閣彈劾案の大討議に至り、山本內閣攻擊の議論は其高潮に達せるの觀あり、但し彈劾案は少數を以て否決せられしも、問題は容易に終結すべくもあらず、海軍收賄問題と之に伴ふ當局責任問題は更に貴族院の重要問題と爲れり、吾人が本論を起草するに際しては未だ上院最後の態度に付き知ること能はざるも、當路が惡戰苦鬪の有樣蓋し想像に餘あり、刻下の形勢を以て察すれば當局は今直に引責辭職の意なきが如きも、僅々數日前まで旭日沖天の聲望ありし山本首相が忽ち疑問の人と爲りて其威信の大半を失墜せるは蔽ふべからず、殊にリヒテル事件の爲め帝國海軍が其最も光輝ある名譽を汚穢されし一事は天下萬人の齊しく痛憤する處たらずんばあらず。

(二)

ジーメンス・シュッケルト會社と帝國海軍の一部に醜關係ありと云ふこと獨逸の法廷に爆露せしが爲め又た某々休職將校の口よりコンミスション及び薩閥橫暴の內情發表せられしが故に山本內閣は直に辭職すべしと云ふは義憤の迸る處として至極尤の言分なれども、政略としては果して其目的を達し得べきや

否や、若しも論者が所謂心證に基き認定するが如く山本伯にして果してコンミスションを取り、又た其黨與を以て海軍に跋扈するが如き人物なりとせば、彼豈に其本心に恥ぢて引責職辭するが如き聖人君子ならんや、又た若しも彼にして毫も心に疚しき處なしとせば世論の攻撃は宛も空砲を發つと一般毫も手答へあるべからず、故に孰れより見るも單に輿論の囂々のみを以てしては容易に現內閣を破壞すべからず、之を仆すの法只だ實力を以てするの一ある耳、所謂實力とは首相が　宮中の御信用を失墜する樣に仕向くるか、又は帝國議會に於て不信任案を通過する乎、或は刻下進行中の查問及び裁判の結果として部下犯罪の事實決定するか、三者中必ずその一に出でざるを得ず、然るに一たび　宮中の御信任を辱ふして組織されたる現內閣が世間の風說、憶測、強く言へば所謂心證の故を以て乍ち御信用を失墜すべしとは恐れながら想像せられず、又た山本伯の味方たる政友會が未だ犯罪の決定せずして、責任の明ならざるに喋然として其去就を改むるの理由あるべからず、若しも所謂心證に據り山本伯一派の不人望なるに乘じて之を見棄てんか、是れ偶々自家の輕薄を表白するものにして、政黨として信用を維持する所以に非ず、蓋し查問及び裁判の結果次第に依り當局の引責處決を餘儀なくせらるゝこともあるべく、又た政友會として其態度を一變するの必要もあるべし。

　吾人は政府反對各派が不信任案を提出したる時機に關し聊か其理由を知るに苦まずんばあらず、既に查問會を開始し、ジーメンス・シユツケルト關係者を裁判に附せる以上は兎に角その結果の發表せらるゝを待つべきに非ずや、政府當路と直接又は間接に關係ある事件なるが故に審問の公平を期すべからずと

云ふは必ずしも一理なき疑問に非ず、然れども伯林裁判所に押收せるリヒトルに關する證據書類も亦た我裁判所に入手するの道なきに非ざるべく、假りに海軍査問委員會は多少情實に制せらるべき懸念ありとするも、我司法裁判の審問及び判決に至りては毫も其公平なるべきを疑ふの理由を見ず、若しも之を疑ふに於ては我邦が文明國たるの第一要素を缺けると做すも同然にして、例へば外國より治外法權復舊の申込を受くることあるも亦た之を拒むの理由ある可らず、而して法廷に於て明白なる證據の提出せらる場合に於ては海軍査問委員會と雖も之を不問に付すこと能はざるべきは理の睹易きものならずや、故に吾人は大に裁判及び査問委員會の結果に期待せんとするものなり、政府反對の各派とても我法院の公平を信ぜずとはまさかに公言し能はざるべし、然らば暫く隱忍して審判の進行を觀、その結果に基き政府彈劾を試みるも亦遲しとせじ、或はリヒテルを告發せずして國外に遁れしめしことの緩慢を責め、或は軍人に賜はりし　敕諭を標示して反省を促し、又人民多數の心證に訴へ當路の引責を要望するが如きは論據の頗る薄弱なるものなり、政府黨は目下審問中の一天張を以て容易に民軍の包圍を破るを得たるは素より怪むに足らず、是れ吾人が不信任案提出の時を誤れりと爲す所以なり、若しも之に反して民黨三派が少しく隱忍して審問の結了を待ち其事實を提げて政府に肉迫するに於ては其目的を達せんこと必ずしも期し難きに非ず、然るにも關はらず三派の領袖輩が謀こゝに出でず、猥りに事功を急ぎ脆くも彈劾案の否決を見し耳ならず、端なく海軍豫算の事より國民黨と中正會との間に一紛擾を生じ僅かに成らんとしたる三派の非政友的聯合も終に望なきに至れるは近來の恨事と謂ふべし。

（三）

說を爲すものなり、曰く三派の彈劾案を提出せしは必ずしも無謀に非ず、世論の喧囂なるに乘じて内閣に突喊し、政友會をして自衛の爲め天下の怨府たる薩派と絕たしむるか、左もなくば政友會の一角を打壞せんとするに在りと、吾人を以て之を觀れば斯の如き計畫果して之ありしとせば、策士の眼未だ政界の形勢に徹底せざるを示すものと云はざるべからず、如何となれば現在の日本は團結堅固なる大政黨の存在を必要とし、政友會は已に時勢の要求を自覺し且つ大政黨の妙味を實驗しつゝあるが故に、容易に分裂するが如きことなければなり、夫の正友會の少壯輩の如き野心滿々として每に克く氣焰を吐く、然れども彼等は大政黨内にありてこそ其氣焰の往々にして實効あるを知るなれ、若し一たび少數派に奔らんか永久空論家たるの寂寞を忍ばざるべからず、吾人故に云ふ、民黨各派が合同して一大政黨たるに非ざるよりは政友會の絕對多數を破らんこと頗る困難ならんと、蓋し一たび團結して議員頭數の百六七十人を網羅し得たりと假定せん、僅々二三十人を政友會より奪ふに於ては則ち多數黨と爲り要路に立つの望あるに至るべきを以て、政友會中の不平分子は寧ろ爭ふて脫黨することなきを保せず、然れども現在の如く三派分裂し、剩さへ國民黨は他の二派と大に反目するに於ては今後三派の合同するを待つは殆んど河淸を待つの感なしとせず。

憲政擁護は昨春以來の流行なり、今や其二柱の神は嫉視反目して互に惡聲を放ち、天下を擧げて一大政黨の跋扈跳梁に委して敢て顧みる處あらず、想ふに憲政擁護は二大政黨の樹立を急務とす、二大政黨

の妙用に依らずして別に政界改善の法を求む、吾人は其終に却て非立憲の行爲に終るべきを豫言するを憚らず、抑も立憲的とは何ぞ、議會に於て勝を制するなり、獨立公平の法廷を維持するなり、賢明なる輿論を喚起して選擧の神聖を保つなり、これ皆な立憲運用の要訣ならずや、然るに立憲擁護會の諸氏徒らに言論に雄にして、大政黨を組織して政友會に當るの道を講ぜず、多少輿論を喚起するの効能はありとするも、大政黨の跋扈を制するの實力なし、茲に於て勢群衆心理を利用し累を當局に及ぼし以て民心の離反を來さしむるの擧に出づるに至らざるを得じ、去る十日の國民大會の如き素より憲政擁護會又は立憲同志會幹部の與り知らざるは吾人の疑はざる處なるも、其運動者は多くは民黨三派の孰れにか同情するもの丶如く又た三派の中隱に群衆の盲動を挑發したるものなきに非ざるが如し、彼等は議會に於て勝つこと能はざれば自ら他に勝利の法を求めざるべからずして、勢の窮する處往々其手段を擇はざるに至ることなきを保せざるなり、是れ吾人が小黨分立を以て非立憲なりと爲し、今の時局に對し大同團結することを知らざるものは憲政に忠ならざるものと見做す所以なり。

（四）

民黨三派の不一致が政友會をして益々優勢ならしむるが如く、薩閥の沒落また政友會に利せんとするもの丶如し、近來に至り薩州閥なるもの果して政界に存在したりや否やは一の疑問なり、山本伯は昨春の政變に突如として出動する迄約十年間も政界の外に逍遙し、高島子は早く巳に政治と絶縁し、大浦子は桂公の股肱たり、牧野、安樂諸氏は政友會に接近し、元老の松方侯あるも頽齡また政務を統攬するに

耐へず、玆を以て藩閥の遺壘は獨り山縣、桂、寺内等長州先輩の占領に委し、藩閥は即ち長閥、長閥は即ち官僚閥たるの觀を呈し、同時に之と相對し別に薩閥なるものあらざりしなり、唯だ海軍は依然として薩の海軍たり、長の陸軍と相並んで政府部内の一敵國たるを失はざりしも、政治の本舞臺上に於ては殆んど打算の數に入らず、僅に溫厚なる齋藤海相一人を内閣に列せしめたる耳、山本内閣の成立以來世間には薩閥復興を説くものあれども、是れ寧ろ伯一人の政界に復活せるを意味せるのみ、他の牧野、安樂、床次諸氏孰れも已に西園寺内閣の下に於て要路に立ち、伯の外薩人中よりは一人の新人物も現はれざりしなり、然れども山本伯一人の爲め各方の薩人間に一種の生面を開きしは否むべからず、殊に況んや海軍の偉大なる潛勢力を根據とするに於てをや、然れば物は凡て見樣次第なれば、山本伯に依り薩閥の復活ありと云はんとすれば云はれざるにも非ず、閣僚中の色別に就て之を觀れば齋藤、牧野、奥田、高橋諸氏は山本系に屬し元田氏、山本（農相）氏は原系即ち純政友會系に屬すと云ふべく、山本伯優勢なれば政友系自ら雌伏せざるを得ずして、政友會は薩閥長老の走狗たるの誹を免れずして、大政黨の面目を害すること尠少ならず、然るに最近海軍收賄問題の發生せし以來山本伯の威信大に削減せられ、假令當分其地位を持續し得べしとするも、一時復活し始めし薩閥は玆に一大頓挫を來たし、海軍の薩閥に至りては殆んど致命傷を受けたりと云ふも失當ならず、素より査問の範圍終に廣きに及ばずして、少數の收賄者を出だすに過ぎざらんも知るべからず、然れども國民の心證は動かすべからずして、假令當局の交迭を見ざるも其失墜したる威信は容易に回復すべからず、輿論の制裁遂に抗すべからずして海軍の

廓清を見る遠きにあらざるべし、之に由て之を觀れば昨年の政變に依り長閥の斃れしが如く、今次の海軍收賄問題より誘致せられしコンミッション內情の爆露により薩閥は確かに致命傷を負へり、國民の心證は今直ちに山本伯を臺閣より逐ふの力なしとするも、伯が何かの方法により自證雪寃せざる限り、到底久しく其位地に留るを得ざらしむる丈けの力あるは疑ふべからず、蓋し伯に對する世間の疑惑が昨年二月の政變以前に發し居りたらんには伯の政界復活は到底話頭にも上らざりしや想像に餘あり、但だ其在職中に突發し且つ未た法律上的確の罪蹟擧らざるを以て努めて其位に留り得るのみ、其退職の遠からざるは勢の免れざる處たらん、斯くて昨年は長閥を葬り本年は薩閥を斃す、此間自ら憲政の進歩の認むべきものなくんばあらず、即ち政權の愈々大政黨に歸せんとすること是れなり、同時に他の方面には一の大に憂ふべきの徵候なきに非ず、群衆政治の漸く萌芽せんとすること即ち是なり。

（五）

抑も群衆の自覺は大正年度の特長にして、吾人は國情の一進歩として之を歡迎するに躊躇せず、但し之を何處までも合法的に誘導して以て國家の基礎を益々堅固ならしめんことを欲する耳、昨年の政變に際する群衆の激動は實に輦轂の下無政府の光景を呈し、電車を破壞し、交番所を燒き、新聞社に放火せんとするが如き亂暴狼藉を極めたり、世間亦た往々快哉を呼び義憤の橫溢する處と爲すが如きは眞に思はざるの甚しきものと謂ふべし、爾來殆んど帝都の常慣を爲すものゝ如く一事件ある每に群衆騷亂の恐れあり、昨秋阿部局長暗殺事變に於ける如く、又た今次の海軍收賄事件に於ける如く、內治外交擇ぶ處

に非ず、一事件ある毎に國民大會は開催され、其餘焔は散じて夜間の騷擾と爲るを例とす、而して其取締の方法に至りては寛嚴宜しきを得ること最も困難なり、若しも嚴に失せんか人權蹂躪の問題を惹起して當局の累を爲し、若しも寛に流れんか群衆を增長して亂行を屢々せしむるの恐あり、昨年二月の政變に際しては警視廳の取締頗る嚴密に失して大に物議を釀もし、阿部局長暗殺に際しては寧ろ寛大に流れて警察權の輕侮を招きしの憾あり、而して最近の群衆に對して稍々取締を嚴にしたれば遂に大に人權蹂躪の非難を喚起せり、兎に角東京市に於ける群民の跋扈は帝國政界の今後の一大禍根たらんこと識者を待たずして知るべし、然らば則如何にして此禍根を絕つべきか、吾人は大に政治界の各方面に向ひ注意を喚起せずんばあらず。

倩々群衆亂暴の內情を察するに其每回必ず或方面の間接又は直接の使嗾に因ることは否むべからず、吾人は其內情を披露して茲に歸すべき處に其罪を歸するの必要を見ず、每時暴動を指嗾するものは時の失意者にして其爲めに禍を蒙るものは時の得意者なりと云ふを以て足れりとせん、從來の使嗾者として識者の心證に存するものの中には政黨もあれば藩閥の一流もあり、而して今や各方面とも大概一巡は惡戲を爲了したれば痛快も痛苦も味はれたるべく、未だ痛苦を味はざる方面にありては少しく考へなば人を殺さば穴二つの道理を會得すること容易ならん、然れば今後各方面の野心家間に在りて心して群民利用の念を絕たんこと肝要なり、次に注意を喚起せんと欲するは各新聞社なり、吾人は各新聞が概して群衆の暴動に寧ろ無頓着なるが如きは必ずしも深く咎むべきに非ずと思ふ、大凡そ日刊新聞は其商賣柄總

て世間に事變の多きを好むもの、從つて群衆暴動の如きも一種の面白き事件として之に對するの傾あり、然れども時に頗る尤むべき例なきに非ず、前年甲新聞が乙新聞の態度議論を惡むの餘り其紙上暴徒大擧して乙新聞社を破壞するの戯畫を揭げしが如き實に亂暴使嗾の責を免るべからず、然れども斯の如きは稀有の除外例のみ。唯だ遺憾とするは諸新聞の調子往々亂暴を義憤と混同し寧ろ之を宥恕するの傾向あるが如きこと是れなり、吾人は是より諸新聞の一層進んで大に群衆暴動を戒飭するの態度に出でんことを希望せずんばあらず。

蓋し明治維新以來國家の重鎭たりし藩閥閥を失へる我政界は是より無責任なる群衆の手に委せらるゝ乎、或は責任ある政黨の指導に任ずべき乎、二者孰れを擇むべき乎は方さに我邦人の愼思熟考を要する所ならずや、若しも苟且の野心と一時の勝心に驅られて群民政治を馴致せんとせば是れ則ち非立憲の行動なり、專制武斷のみ豈獨り非立憲と云ふべけんや、社會の秩序を紊亂し市井の示威强迫により大勢を左右せんとするもの亦實に非立憲の徒なり。

（六）

之に由て之を觀れば我邦が今後立憲國として穩健にして秩序ある發展を爲すや否やは一に繫りて二大政黨の樹立如何にありと謂はざるべからず、若しも一の大政黨ある耳にして、他は即ち小黨分立互に鷸蚌の爭を是れ事とするに於ては、大政黨は愈々益々橫暴を逞ふして自ら腐敗墮落し、各小黨は非立憲的行動を事として綱紀を紊亂するに至るべく、而して現今の政局稍々此徵候なきに非ざるが如きは吾人の

最も痛歎する處ならずとせず、加藤男、大石氏、犬養氏、尾崎氏、各一方の雄たるは世人の認むる處なるも、彼等が政友會なる大政黨の跋扈跳梁を眼前に眺めつゝ尙ほ一致協力するを得ざるは何たる無様、何たる不體裁ぢや、殊に最近犬養、尾崎の喧嘩の如き最も憫笑に堪へたり、彼等は孰れも憲政擁護を標榜す、然れども其實は非政黨、非立憲主義なる閥族の殘黨輩の離間策に乘ぜられ將に憲政發展の一大機會を逸せんとするものなり、謂ふ勿れ藩閥斃れたれば復た憲政を賊するの恐あらずと、藩閥の斃れたるは宛も佛國にブルボン王室やナポレオン帝室の斃れたるが如し、斃れて後多年其殘黨の禍あるも亦た同じからんとす、佛國第三共和政の創立以來約三十年間に於ける政界の陰謀多くは帝政・王政の殘黨により企てられ、人々相猜し小黨分離し容易に政界の中心點を求得ざりしも亦た彼等非共和主義者の劃策に出てたり、彼等は其野望を滿足せん爲めには如何の陰險なる手段を取るを辭せざるなり、昨日はブーランゼーの軍隊主義を煽動し、今日は頑迷なる舊敎派を使嗾してドレフェー事件を勃發せしめ、更に又た明日は非國家的の社會主義を謳歌せんとす、其主張の一貫や行動の公明は期する處に非ず要は國政の紊亂により共和制度の不信用を來たし以て帝政或は王政を恢復せんとするに在り、我邦の閥族の根蔕は佛國の帝政黨や王政黨の如く深且つ遠きに達せざるだけに、恐らく其殘毒を流すこと亦比較的に淺かるべきも、二大政黨主義の堅立せざる今日は決して油斷すべき時に非ず、畏れ多くも帝室中心主義の美名の下に非政黨を鼓吹しつゝ、隱に亂民を煽動するが如きは決して彼輩の採り能はざるの手段にあらず、吾人は此種の隱謀に對し憲政の同愛者の爲め一言警告の必要あるを思ふ。

公徳心の向上

（一）

日清日露二大戰役により天に迄擧げられたる帝國軍人の名譽は今や地にまで落ちんとす、嗚呼何たる因果ぞ、昨年は長閥の陸軍その横暴私曲を爆露したるに間もなく、本年は復た海軍の收賄事件あり、其法律に問はるべきは極めて狹き範圍に在るべきも、世間一般の心證に因れば海軍の大頭目も亦た嫌疑を免れず、而して其人今内閣の首班に立つが故に國民は宛も一大侮辱を蒙れるの感を爲すも、事件の合法的に確定する以前に在りては殆んど如何ともすべき道なし、吾人は一日も早く事件の決定し山本伯の潔白の證明せらるゝか、左もなくて伯がその身の廉潔を證明する能はずんば御即位式以前に何とか處決するあらんことを要望す、斯の如き疑雲に蔽はれたる身を以て最も芽出度御式に臨むが如きは吾人臣民の視るに堪へざる所たればなり。

想ふに我邦公徳の信用は凡ての方面に於て近年著しく毀損せられたり、是には日糖事件により政黨内の醜態を爆露し又た前警保局長、前知事の刑事事件は官吏社會の腐敗を爆露し、今や陸海軍の失態を以てす、素より一部の醜事は未だ以て全部の是非を定むるに足らずと雖も、若しも山本伯が巨富を有するが故にコンミスションを受けし疑ありとなさば、他の元老輩亦多く富めり豈に疑なきを得んや、今日世

間の一部よりは公人道德の標本視さるゝ大隈伯の如き亦た同穴の狐狸たるを免れじ、或は伯は多くコンミスションを取りしも亦た能く多く散ず爲めに幾分恕すべき處ありと云ふものあり、是の論法より云へば石川五衞門の如きも能く其金を散じたるが故に恕すべき所ありと謂はざるべからず、吾人を以て之を觀れば、若し從來大官がコンミスションを採り又は不正の方法に依り富を爲せしに對し幾分恕すべき點ありとせば之を時勢に嫁せざるべからず、大隈伯の如きが獨り自らを高しとして、又は桂公の幕下に馳參して隨喜の涙を流せし人物輩が山本伯一人を天下の大惡人と爲すは之より大なる自家矛盾あるべからず、蓋し有名なる公人としては故伊藤公、西園寺侯、板垣伯、故陸奧伯の如きは毫も收賄の疑あるべからずと雖も、其他の人々に於ては概して疑はんと欲すれば容易に疑ふの餘地あるべし、故に吾人は我邦の功臣元老の或る裡面の汚行を恕せんとするには之を時勢の罪に歸せんとするより他に道なきを思ふ。

回顧すれば明治の歷史は振古未曾有の革命の歷史なり、此一大革命の餘に建造せられたる現代の日本を以て嘉永安政間の舊日本と比較せば殆んど天壤の大差と云ふべく、宛も大革命とナポレオンの偉業とに由り改造せられし佛國が路易十五世の佛國と異なるが如し、斯の如き大改革の最中に在りては何れの國に於ても、平時に許すべからざる亂行も國政の要路に立つ人の間に默許せらるゝを常とす、所謂彼等は亂世の英雄にして、其私行の如き決して秩序ある泰平の下に模範と爲すに足らず、大正の新時期に入りてコンミスション問題の爆發したる亦止むを得ざる次第にして、偶々山本伯が此新時期に入り政界に復活せしを伯自身の爲めに憐れむのみ、此の國民自覺の前に立たんとするものは須らく自ら省みて毫も

疾しき處なきの人物たるべく、譬へば天明け日昇ると共に蝙蝠がその跡を隱くすが如く、舊時代の人物は假令元老功臣と云ふも、若し身に疾しき所あらば速に政界を退隱すべきなり、大正年度の政治道德の標準は明治時代の標準とは自ら異なり、其要求は一歩を進めて更に大に嚴正なればなり、吾人は山本伯一流を殊更に苛責せざると同時に、伯が能く時勢の趨行を解し進んで相當の方法に依り處決せんことを勸告するものなり、但し若しも眞に疾しき處なきに於ては必ず其潔白を證明するの方法を採るを要す、他の元老輩の間にも同類ありと云ふが如きは、大正時代には通用せず、今日局に當る是れ伯の不運のみ、須らく公明正大の態度に出て、以て其忠誠を表すべき耳。

之を要するに近時の歎息すべき出來事に依りて帝國公德の信用は大に傷けられしと雖も、吾人は必ずしも前途を悲觀せず、近年大に實價以上に買被られし我邦公德の評價が相當の程度に迄下落せるは止むを得ざる處にして、斯くてこそ近年頻りに浮氣勝心に驅られたる軍人を戒めて其本心に立歸らしむることも得べきなれ、又一般政治界、經濟界、教育界に於ても自省發憤の氣象を喚起し得べきなれ、吾人は寧ろ近時の形勢に於て輿論の向上を認め、國民義憤の發する處必ず大に各方面の公人を戒むるに足るべきを思ふ、殊に青年輩に對しては更に大に戒むるに足るものあらん、今の青年が萬事範を先輩に取らんとするは止むを得ざることとなれども、該先輩なるものは亂世の英雄たることを忘るべからず、亂世に處して恕すべきことも秩序ある泰平の世に於ては許容すべからず、英雄は細瑾を顧みずとは亂世に付て云ふべき耳、是より身を立て大に公人たる手腕を振はんとするものは其志は大なるを要するも其處世の法

に在りては最も愼重の考慮を要す、而して青年諸氏にして若し深く時代の要求に顧み修養を積み大成を期するに於ては邦家の前途須らく大に樂觀すべき耳、蓋しダニエル・ウェブストルが曾て云へし如く國家の前途は一に其青年子弟の作るがまゝに成るべければなり。

司法官に望む

今や藩閥斃れ、官僚閥潰へ、國家の政機は多數黨の掌握に歸せんとし、稍々もすれば大政黨の横肆暴戾に流れんとするあり、然らざれば群民政治の端緒を開かんとするの恐あるに際し、吾人は我司法官の剛直明斷に依賴するの情轉た切なるものなくんばあらず、之を譬へば法律と之を運用する法官は國家の骨格なり、政治、經濟、軍事等の各機關は宛ら五臓六腑の骨格に支持さるゝ筋肉の中に潜んで活動するが如し、假令法典は如何に完美なるも法官にして賢明剛直ならずんば吾人は如何で其生命名譽財産を安全にせんや、殊に近年政治の樞軸大に動搖し、二大政黨の妙用未だ實現せざるに際しては司法官の責任一層重大なるものありと謂はざるを得ず。

今次の海軍收賄事件に關し、政府反對各派の言論を聞くに、輕々にして我司法官の公明を疑ふが如きの語氣あるは吾人の大に遺憾とする處なり、吾人は奥田法相が情實的牽制を司法官の上に加ふることなきを信ずると共に、司法官が必ず其權限の許す範圍に於て最も自由に最も公明に其審査を行ひ、罪惡の

伏在する處は假令臺閣の上と雖も用捨なく之を摘發し、以て天下萬衆をして秋霜烈日の威嚴に服せしむるの擧に出てんことを信ぜんと欲す。

更に又我法廷には今次の騷擾事件に關する幾多の案件あり、其中には警官の人權蹂躙に關する案件もあらん、殊に人權問題は最も愼重にして最も公平なる審議を要す、人民保護の大責任ある警官にして、假令正當防衛を名とするも、良民を刄傷せりと云ふに至りては咄々怪事なり、而して刄傷されし一人は溫厚なる新聞記者たるに於ては世人が大に憤慨する亦實に理由あり、其他數百人を一網に羅致し取調ぶると云ふ如き個人の自由及び名譽を損毀すること甚だ大なり、是等は必ず法廷の審議に上るべきを以て、吾人は公明の判決に依り將來に對する人心の不安を一掃せんことを希望す、但し警視廳が周到の注意を以て騷擾を未然に防止せんとするは大に諒とせざるべからず、若しも其取締法宜しきを得ざりしならば、本年も亦昨年の如く帝都を化して一大騷亂の巷と爲らしめたらんこと想像し難きに非ず、然ればとて人權侵害の事は決して容捨すべからず、即ち社會の秩序を維持することゝ個人の權利を尊重することと二者その範圍を明白にし、兩立して相犯さず以て立憲的國家の本義を貫徹すべし、一方世間の人氣に投ぜんとするが如きは權勢に壓せられて法を曲ぐると同じく最も愼まざるべからず、我關係法官が能く法文に照らし、能く人情を參酌し、又た能く時勢に鑑み、妥當穩健の判決を下して以て法廷の威信を維持せんことを要す。

水力電氣國有論

野間五造

水力電氣事業の現況

四周環海の我島帝國は外部が水に據て圍繞せられて居るのみては無い、邦土全體が水を以て成り立つて居るの觀がある。山には澤山の湖沼を有し、野には多數の河川を持つて居る、猶ほ其上に中央部が森林帶てあるから比較的雨量の多い所へ持つて來て毎歲夏季南洋方面より送り來る低氣壓の水量は恐らく世界一てあろふかと想はれる程てある。佛國が毎年の平均雨量貳拾六吋、米國が平均參拾吋内外なるに比較して我積分は六拾吋余即貳千「ミリメートル」位の平均を保つて居る次第てある。

斯水量、斯雨量なる者は實に我邦に於ての富の淵源てある。過去に於て計上せられたる我參百億圓と稱せられつゝ、在る富力は過半此水なる者に因みて生產力を構成して居る譯け合ひてあつて、從つて毎歲の收得たる彼の五千萬石の米も、二千二百萬石の麥も、二億萬貫の甘蔗も、千萬貫の煙草も、一億萬貫の馬鈴薯も、貳億萬圓の產繭も、八千萬圓の林業收入も、又た更らに一億參千萬圓の海產及鹽業の收入も是れ總て水より生ずる賜て在つて實に水は一種の寶貨と言つて然る可きてある、此貴重なる寶貨は過去に於て動植產物を發生

せしめたる外、將來に於ては其活力が工業界の原動力たらんとしつゝある次第であつて、夫の所謂活力利用より生ずる原動力なる者が即ち水力電氣事業である、我邦が山岳に富み水量が豊かなると云ふ事は取りも直さず水力電氣國であると云ふ證據で、米國北部の五百萬馬力、佛國の四百萬馬力、伊太利の百八十萬馬力、瑞典諾威の各五百萬馬力、瑞西の百三十萬馬力、等に比較して我邦が優に六百萬馬力の發電力を生ずると云ふ事は實に一種の誇りとして恥かしからぬ事と想ふのである。

蒸汽工業は十九世紀と共に其終りを告げ、今は全く電氣工業の世と成つて居る、殊に水力電氣の應用は各種工業に向て一大革命を促し、既往に於て工業立國の模範と成つて居つた英國の如きも今日は却て諾威瑞典の如き第三流國に凌駕せられんとする氣運が見へて居る、是れ必竟諾威や瑞典が山國に兼ぬるに雨國を以てし到る所水力電氣の利用が出來て石炭工業に比較して非常に低費の工業が興し得らるゝからである、言葉を替へて言へば水力工業が蒸汽工業を壓逼しつゝ在る例證であると言つ可きである、我邦は實に理想的水力電氣國であつて、一塊の石炭一滴の鑛油をも用ゆる事無くして良く工業立國の實を擧げ得る天與の國柄である、北は陸奥の果てより南は筑紫潟に到る迄で、谷と言はず河と云はず何れを見ても水力電氣の發動地たらざる所は無いと云ふ始末で、世界無比の好地位を占めて居るのである、

水力電氣事業の重なる仕事と云ふは何んであるかと云へば。(第一)が電化工業。(第二)が鐵道、電車、其他諸器關の原動力。(第三)電燈事業である、然るに我邦にては水力電氣事業の重なる仕事と云ふのは電燈事業であつて其次が電鐵事業である、電化工業の如きは殆ど全く未着手の姿に捨てられてあると云ふ始末であつて利用の輕重が顚倒して居る樣に想はれる、將來我邦が工業國として立たんとする以上は此電化工業の事業を盛んにせねばならぬ譯け合ひで、此電化工業の製作品を支那、西比利亞、印度等へドン／＼輸出すると

云ふ事が工業立國の目的であるのである、然るに今日は却て此電化工業品が毎年貳參千萬圓位づゝ輸入されて居ると云ふは怪しからぬ話では無いか、大正元年度に於て、我邦に輸入されたる電化工業品は硫酸「アンモニーム」、硝酸曹達、曹達灰、鹽酸「カリー」、苛性曹達、「アルミユニーム」、曹化加里、其他肥料原料類を合して金貳千六百八拾萬圓の輸入が出來て居る次第である、豐富なる我天與の水力電氣も此方面には全く利用せられて居らぬ事が判かる、又た其次ぎに鐵道事業はどーであるかと云ふに亦此方面にも未だ全く使用せられて居る實例が無い、實に情け無い次第では無いか、大正元年度に於て鐵道院が自己の有する發電所に於て水力を使用して居る者は、秋田停車場内電燈用として三内川の水力四百「キロワット」を用ひて居る丈けである、其外動力用としては一も用ひて居る所は無い、輕井澤附近、岩見澤附近、長野甲府街道等の急勾配に對して使用しつゝある電力は或は蒸氣力或は瓦斯力より起りたる電力にして水力を基礎としたる者では無いのである、瑞西は國内千參百哩全線路を悉く水力に據る電氣車に變替せしむる目的を以て政府は已に昨年度迄に五百哩以上の原動力變替を强行した、米國は「ナイヤガラ」瀑布の水力を利用して北部鐵道全部の動力變替を企て着々實行しつゝ有り、又他面に於て、現に「ニウジャアシー」附近の如き已に悉く變替し終れりと聽く、伊太利は「ゼノア」鐵道を始め須次水力動力の電氣力に變替しつゝあり本年度に於ては全國の四分一は皆水力基礎の電氣車に變替さるべしと想はれる、我邦の鐵道政策とても勿論歐米諸國と同樣蒸汽動力を電氣動力に變替せしむる方針は一定して居るのであるが、經費や何かの都合で未だ實行の緒に就き得ぬ始末と想察する、聞く所によれば猪苗代水力の成功を待つて此動力を使用して岩越線を全部電氣車とすると云ふ噂てある、瑞西が國有鐵道の全部を電氣鐵道に變替する經費の全部は其變替に依つて生ずる利益（索引力の增加及經費の削減）を以て拾箇年間に償却する豫算ださうだが、我邦にても何卒速かに鐵道動力變替をしたい者

である、次に吾輩は現在我邦の水力電氣事業が如何なる模樣であるかを知らしむるが爲めに、電燈及電車を目的として營業しつゝある會社及個人持ちの水力事業の概況を左に摘記して見よふ

（一）水力電氣供給事業之概況

水電事業にして大正二年一月の現在に於て業務を開始したる者は數に於て百四拾九、「キロワット」に於て拾九萬九千百八拾、「キロ」にして未開始の分は數に於て六拾參、「キロワット」に於て四拾萬六千五百九拾貳「キロ」、合計箇數貳百拾貳、「キロワット」六拾萬五千七百七拾貳「キロ」なり、其資本金電燈供給を重とする事業資金八千六百九拾四萬七千百八拾五圓、電車動力資金貳百七拾壹萬千六百九拾五圓、供給動力兼業の資金貳千七百拾六萬五千參百四圓にして合計金壹億壹千六百八拾壹萬四千百八拾四圓也。

（二）水力電氣事業の公線資本と動力
（一千馬力以上の者）

（東京）東京電燈（總資本五千萬圓馬力七萬八百九十八「キロワット」）桂川（八百萬圓、二萬四千「キロ」）鬼怒川（千三百五十萬圓、七萬千三十九「キロ」）猪苗代（二千百萬圓、七萬三千七百三十「キロ」）富士（百三十七萬圓、一萬五千四百五十「キロ」）

（神奈川）相模水力（五百萬圓、八千二百「キロ」）

（長野）信濃電氣（百四十五萬圓、三千六百四十「キロ」）

（靜岡）富士電氣（三十萬圓、千「キロ」）富士水電（二百二十萬圓、二千四百「キロ」）

四日市製紙（七十二萬五千七十三圓、千七百九十二「キロ」）

（愛知）名古屋電燈（千六百萬圓、一萬九百五十「キロ」）

豊橋電氣（百萬圓、千「キロ」）岡崎電氣（五十萬圓、千「キロ」）

（三重）四日市電燈（百萬圓、千五百「キロ」）

（岐阜）岐阜電氣（百五十萬圓、二千八百「キロ」）

揖斐川電力（百萬圓、千六百「キロ」）

（福井）福井電燈（京都支社千六百六十「キロ」）

（石川）金澤電氣（二百萬圓、二千二百「キロ」）

（富山）高岡電氣（百二十萬圓、千六百五十五「キロ」）

（新潟）新潟水電（百二十萬圓、千百十三「キロ」）北越水力（百萬圓、二千五百六十二「キロ」）

新潟水力（百五十萬圓、千「キロ」）

（福島）福島電燈（百九十萬圓、千「キロ」）奥羽電氣（百萬圓、千「キロ」）

仙臺市電（二百十四萬六千三百七十圓、二千五百九十「キロ」）

（青森）青森電燈（三十萬圓、千「キロ」）

（京都）京都電燈（七百萬圓、八千三百九十「キロ」）

（奈良）宇治川電氣（千二百五十萬圓、二萬五千「キロ」）
關西水力（百萬圓、千「キロ」）
（兵庫）播摩水力（三十萬圓、千二十「キロ」）
（廣島）廣島電燈（百三十萬圓、二千百「キロ」）
（島根）松江電燈（五十萬圓、千「キロ」）
（德島）德島水力（百十萬圓、二千二百「キロ」）
四國水力（百二十萬圓、二千「キロ」）
（愛媛）伊豫水力（百三十萬圓、千四百六十「キロ」）
愛媛水力（四十五萬圓、千百八十「キロ」）
（高知）高知縣電（四十五萬六千五百六十五圓、千百八十「キロ」）
（佐賀）九州水力電燈（佐賀系二千五十「キロ」）
（福岡）九州水力（千百五十萬圓、一萬三千五百「キロ」）
（熊本）熊本電氣（二百萬圓、五千「キロ」）
（大分）大分水力（百九十一萬圓、二千「キロ」）
（鹿兒島）鹿兒島電氣（百萬圓、千七百六十「キロ」）
（北海道）旭川電氣（五十萬圓、千「キロ」）
王子製紙苫小牧（二百九十七萬千二十八圓、一萬三千二百「キロ」）

（三）電車動力事業

横濱電氣（早川發電四千九百五十「キロ」）
利根發電（片品川發電二千三百「キロ」）
高崎水力電氣（烏川及鳴澤川發電二千百「キロ」）
越後電氣（關川發電千「キロ」）
京都市電（琵琶湖三千六百「キロ」）
和歌山水力（日高川發電千「キロ」）
廣島呉電力（黑瀨川及河內川發電千「キロ」）
豐後電氣（矢田川發電、千「キロ」）
九州水力博多系（那珂川發電千「キロ」）
函館水電（大沼川發電二千九百五十「キロ」）

（四）個人有發電事業

久原氏日立鑛山（發電八千五百三十三「キロ」）
古河氏足尾鑛山（發電九千六十二「キロ」）
東海紙料會社（大井川發電二千八百「キロ」）
富士瓦斯紡績（鮎澤川發電千二百五十「キロ」）
三井神岡鑛山（發電三千五百五十「キロ」）
三菱佐渡鑛山（濁川發電千五百「キロ」）
古河氏阿仁鑛山（發電千十五「キロ」）
三菱會社（手澤川發電二千三百五「キロ」）
藤田氏小阪鑛山（大湯川發電三千五百五十「キロ」）
住友氏別子鑛山（國領川發電四千九百六十「キロ」）

石炭と水力事業

我邦の石炭は實に五拾億屯を地下に蓄藏して居ると云ふ噂であるが、實際經濟上の眼光から見て商品として使用し得らるゝ額は全國を通じて約拾億屯を多くは出て無いと云ふのが專門家の斷定である、而して毎年

の出炭料は貳千屯であつて近年の増加率が四年倍増しと成つて居る樣であるから向ふ貳拾幾個年の後には我邦の經濟的炭料は盡き果てゝしまう勘定合ひである、或人は撫順炭の豐富を唱ふる人があるけれども之れは以ての外の事で吾輩も滿洲には永く居つたから多少其邊の消息を知つて居るが、該炭採掘には勞働賃銀が非常に高く(山東苦力)剰へ炭質に燐氣を含み居りて取り扱ひに非常に無駄金を要し到底南滿鐵道の運賃を無代價にせざる限り撫順炭なる者は月の世界の金塊と同じ物で此世に於て經濟的の使用物とは成り得ぬのである、現在に於て多少の出炭を見て居ると云ふのは鐵道所有者と炭坑所有者が同一人であると云ふ結果殆ど運賃を無代價同然に認めて出炭して居るからである、若し普通に撫順驛から柳樹屯迄の運賃を拂ふたら非常な高價な者に成つてしまうのである、到底經濟的に我內地に於て使用し得らるゝ品物では無い、果して然らば今後工業界は參拾年後に於て如何なる者に向て其動力の原素を求む可きであらふか、誠に心細い次第では無いか、

參拾年後を待つ迄も無く已に今日に於て我邦の石炭は工業動力の原素としては頗る高價の者と成つて來て居るのである、數年前に比して其價格の騰貴したるは約貳倍强である、嘗て一萬斤貳拾五圓內外の者が現今は六拾八圓以上に成つて居る、其源因は種々であるが第一に數ふ可きは英領殖民地の炭坑夫の「ストライキ」の結果印度及濠洲等に於て我石炭を需用する樣に成つた事や、或は數年來航海業繁盛の結果東洋方面にて專ら我石炭を用ゆる樣に成つたのやら、或は又た我內地の工業が隆盛と成り鐵道が延長された結果でもあろふが兎も角く我石炭の需用は非常に增加し從て價格も暴騰した譯である、現今石炭の海外輸出が每年約五百萬噸で一噸拾圓と見て五千萬圓の正貨を得て居る勘定だが、明年巴奈馬運河が開通したら一層需用が增加するであらふ。何分大平洋沿岸は一帶石炭の不自由の所であるから總て我邦の石炭を用ゆるのは極まり切つたる事柄で恐らく期年ならずして我輸出炭が每年千萬噸以

上を算する樣に成り其價格も一層高騰する事てがなあろふと信ぜられる次第てある。

此石炭價格騰貴の結果に伴ふて一種惶る可き顯象が現れて來た、夫れは何てあるかと云ふに、支那及露國炭の逆輸入てある、現に三井物産會社は安南及東京附近の鴻基炭と共に長江の萍郷炭を多量に輸入せんと企て昨年來其實行に着手して居る、又た天津の松昌洋行は直隸の開平炭やら山東省の坊子炭博山炭を毎年參拾萬噸以上輸入の計畫を立て現に其内の幾分を東京瓦斯會社、釜石製礦所、(枝光製鐵所、大阪瓦斯會社等に向て賣買契約を締結し了した樣子てある、其他露國の「ダライノール」の石炭が近頃函館及敦賀附近に現れて來たと云ふ事てある。之等經濟上の襲撃者(インベイダー)に對しては吾人は充分の覺悟を以て夫れが防禦の地位に立たねばならぬ次第てある、然し今後我邦の炭價が益々高騰するに於ては之等外國炭の逆輸入も萬止を得ざる結果とあきらめねばならぬ時がくるかも知れぬ。

商工國として立たんとする我邦に於て石炭價格の騰貴は恰も動物界に食料品の缺乏したると同樣全く枯渴するの外無き次第てあるから、何んとかして此窮境から脱する工風をせなければならぬ、其蟬脱の方法は外でも無い即はち水力電氣業の勃興を促せば良いのである、内地の火氣動力の原素を廉價なる水氣動力に需める、內地の火氣動力の原素を廉價なる水氣動力に需めて得られる樣に成つたならば一方に於て我高價なる石炭は悉く海外に輸出し得られ毎年此貿易のみにても壹億萬圓以上の正貨を握ぎる事が出來るし他方に於ては低費の動力に依て工業界の隆盛を來し輸出貿易が益々繁榮する次第に成つて來る譯け合ひである。

今一萬斤六拾五圓以上の石炭を以て一「キロワット」二斤半の消費率にて動力を起すとせば、一「キロ」壹錢六厘强に該當す。其れに對する諸雜費乃利子(火夫工夫の賃銀油代器械消耗費及蒸氣機關代利子合算)を金入厘と假定せば合計貳錢四厘と成る、此計算は現今石炭を使用する各種大會社の普通相價にして若し小會社か或は個人にて少量の動力を起さんとする場合は一「キロ」拾錢以上にも相當する事に成るてあろふ、然る

に若し水力電氣を用ゆるとせば一「キロ」金壹錢內至壹錢五六厘にて充分使用し得らるゝ次第にして別に火夫を要せず機關を要せず少額の雜費にて充分利用し得らるゝ次第である、現に宇治川電氣が大阪の各所に販賣する價格は「壹錢貳厘」にして晝間殘餘分を大阪市に賣渡すは一「キロ」金六厘なり、元來大阪市電が今日迄費消したりし經費は一「キロ」晝間石炭代及雜費共にて金壹錢九厘なりしを以て今宇治川より金六厘にて買入るゝとせば一「キロ」に付て金壹錢參厘の利益となる、一日四千「キロワット」の賣買契約なるが故に每年金拾參萬圓を利益する勘定と成り機關取替費用を假りに金貳拾萬圓とするも貳個年にて償却し得らるゝ計算である、石炭動力に比して水力電氣動力の利益なる實に斯の如しである。

我邦の一大工業と目す可き紡績工業が現今使用しつつある動力は六萬五千四百三十七馬力にして其動力は殆ど悉く石炭動力にして、其石炭消費高は每月約壹億餘萬斤であつて、今石炭一萬斤にて金拾圓騰貴したりと假定せば一個月金拾萬圓餘の損失と成り壹個年に直せば百貳拾餘萬圓の經費膨脹である、其れが若し反對に一「キロ」金壹錢の水力を使用するとせば倍額金貳百五拾萬圓の利益を得る事と成る、現在の紡績業拂込資本金六千百六拾九萬何千圓と云ふに比して見ると約五分近き利益を增加せしむる次第で實に大變な譯けでは無いか。

米國は石炭動力約參千萬馬力であるが若し「ナイヤガラ」其他米國內地の水力發電を悉く利用するに於ては約四千萬馬力の動力を得て一箇年一馬力の利益を金拾貳弗と見て壹個年の利益總計壹億八千萬弗卽ち我參億六千萬圓に相當する、又た伊太利は有名なる石炭缺乏國で每年外國から壹千萬噸以上の輸入を以て辛やく各種の工業を支へて居つたのであつたが千九百四五年頃から水力電氣工業が起つて來た爲めに「ミラン」地方の如き彼の有名なる「バデルノ」發電所の如き者與り來つて其附近のみにて工業用のみに百萬馬力以上を使用する計畫に向つて前進して居る次第であると云ふ

事である、水力電氣事業の發展の增進率は歐米各國にて千九百三年より同十年に到る七年間に於て參拾六割の增加率を示して居る、我邦も明治三十六年僅かに五萬「キロ」しか無かりし水力發電事業が拾年後の大正二年度に於て未開始の分を合して六拾餘萬「キロ」に迄達して居るは實に驚く可き發展と言はねばならぬ次第である。

石炭の次に論ず可きは石油問題であるが、我邦の產出高は約百五拾萬圓で未だ以て軍艦の燃料にだも使用するの域に進まず、將來は知らず今日にては工業効力の原素として論げらふ程の價値は無い譯けである、然し外國油の輸入が約千萬圓とも上らんとしつゝある今日であるから水力電氣應用の効果を以て此輸入丈けでも防ぎ止めたい者である。燈火と云ひ動力と云ひ低價の水力さへ澤山出來れば石油の輸入位を止めるは譯けの無い事であると想はれる。

國有の利益

吾輩は元來の主張として政府萬能主義に反對する論者の一人であつて、從て民業を官業に移すと云ふが如き事には決して賛成する譯けでは無いのであるが、然し其れは物と事に依るのである、煙草專賣、鹽專賣、酒專賣と云ふが如き政府事業は何卒民間事業にして置て貰ひ度いと常に想ふて居るのであるが、而しながら夫れと同時に水の私有(從て河川の私有)、山岳の私有、(從て谿谷の私有)、道路の私有(從て電柱線路の私有)、等の如きは甚だ以て好ましき者でない、かゝる性質の者は總て國家の有として置き度いと考へて居るのである、水力電氣國有論の基礎は實に爰にあるのである、況や現在國有である所の六千餘哩の鐵道も、各市街地に縱橫して居る市有の街鐵も將來に於て悉く水力を基礎とする電氣動力に變替せんとする今日に當て其原動力たる水力電氣事業を國有と成さうと言ふのは別段不思議は無いことで全く當然の事柄であると想ふのである、ナゼ今日迄此水力國有の說が世に出なかつたかを吾輩は實に不思議に想ふ次第である、況や左項に列記

するが如く水力事業を國有にするに於ては非常なる利益を生ずるに於てをやてある、吾輩は爰に水力事業の國有と成るに伴ふて生ずる利益を擧げて見よふ。

（一）　事業の發展を促進するの利益

前述べたるか如く我邦は理想的水力電氣國てあつて良く六百万馬力の發電を爲し得る國柄てあるに係らず現在實地に使用して居る馬力は約其十分一位ゐの者てある、御同樣水力國てある瑞西は人口千人に對し八拾馬力を使用し居る勘定て、伊太利は參拾貳、瑞典は貳拾八、諾威は貳拾五、と云ふ比例なるに係らず我邦の平均率は人口千人に對し僅かに參馬力にしか相當して居らぬとは情け無い次第ては無いか、或人は、今後東京や大坂は一時水力電氣の洪水がある即ち供給過剩て困るてあろふと言ふ者があるけれども、夫は頗るの短見者て、我邦の工業動力の進步と原動力の騰貴（石炭騰貴）とを度外にしての議論てある、論より證據曾て水力電氣の供給過剩を憂へられたる大坂ては如何てあると言ふに本年一月限りて水力電氣の動力は殆と欠亡したのてある、即ち宇治川電力の殘部を市電に廉價を以て賣り拂ひたるを限つて今後數年間は大坂の地に於て水力を基礎としたる動力販賣は跡を絕つ次第てある、東京も其通り決して今後供給過剩の顯象を見る事は無い、現に東京電燈は桂川發電第一回分參千九百「キロワット」六臺全部使用、第二回七千七百「キロワット」六臺（壹臺豫備）は現今は晝間貳臺夜間四臺を使用し居りて過日來電燈競爭の結果點火數劇增し本月限りか或は來月中には全部賣り竭す計算てあると聞く、桂川水電會社の分は七千「キロワット」四臺（壹臺豫備）の内日本電燈へ對し八千「キロ」賣渡濟、參千五百「キロ」京濱電車へ賣渡濟、殘部は橫濱、川崎、大崎附近の各工場へ賣捌中にて本年五月中には全部賣拂濟となる豫定てある、鬼怒川水力會社は公稱馬力非常に高額と成り居れとも工事着手後種々見込の差違を來し實際に於て集中最高率貳萬「キロ」を超ゆる事は困難だ、此全送電額は東京市と締結せる三次の送電契約額にだも達し得ざる次第にして全部賣買濟と見て不可なく、

又た東京市は今後發展する電車（全線貳百五拾哩として）と電燈（六拾萬燈）に全部使用するに於て猶ほ壹萬内至貳萬「キロ」の不足を告ぐるに到るてあらう、是を要するに東京に於ては本年六月以後に於ては一滴も賣買すべき水力電氣なく全く水力を基礎とする動力は一時東京に於て欠乏するだらう、他日猪留代水力會社が良く四萬貳千馬力（第一回分）の送電を爲すも深川方面の工場と東京電燈との契約を履行し終らば之れ又た直に一滴の「キロ」をも剩さゞるに到る可く、同會社が嘗て鐵道院と契約したる岩越線其等へ供給する送電は第一回分にては到底實行を得ざるとにならう、大坂東京附近に於ける水力電氣需給の現況はザット斯の如き者てあつて或人の如く供給過剩を唱ふるは頗るの短見てある、此水力電氣需用の劇增は決して東京大坂丈けては無い地方到る所此必要を認めて居るのであるが如何せん資金の欠乏の結果思ふ樣に水力事業を發展せしめ得られ無い始末に成つて居るのである、吾輩が國家の力を以て斯低廉なる動力原素を供給せしめ度ひと云ふのは其所から起るのである、我邦が將來商工國として立たんと欲するに於ては是非共之等低費の動力を自由に使ふ事の出來る樣にせなければならぬのである。

（二）國有は水力不統一の弊を救正するの利あり

水力電氣事業の現在の摸樣は全く群雄割據の姿てある、從て統一を欠いて居つて夫れより生ずる無駄の費用は漠大なる者てある、僅かの東京市中丈けてさへ競爭の結果電燈線を二重三重に引き廻すは無駄てあると言ふて世間ては統一合併を主唱する論者がある位ゐて有るのに、況や廣茫幾百里に亘つた地點に於て同一目的の線路を二重三重に設くる無駄沙汰殆とお話に成らぬ贅費てある、國家の損失少々ては無い事が誰れにても譯る、一例を以て言へば群馬縣埼玉縣附近に於て鬼怒川、猪苗代、利根發電、日光發電などが二重三重に成つて居るのを看。又た神奈川に於ても相模水電、富士水電其他各種の水電線が縱横に網を張つて居るを見

ては誰人も寒心せずには居られまい。其他に於て電氣「サイクル」の不統一なども困つた者である、現に東京市電は鬼怒川の貳拾五「サイクル」式を用ひて居り、其他の各會社は一樣に五拾「サイクル」式を用ひて居るが故に一朝鬼怒川水電に故障が起つた場合に他の電力會社から應援する事が出來ないのである、假令ば風雨の爲め鬼怒川の電線に故障出來て東京市内の電車が停電したる場合に何れの會社からも援助に行く事が出來ぬ、是れは畢竟「サイクル」式の統一を缺いて居る結果である、吾輩は嘗て坂谷君が市長と成つた時一番に此事に就て注意を與へて置いたが其後同氏は吾輩に向て先日御注意の事は直に鬼怒川に向て「サイクル」變替の事を命じて置いたと話された事があつたが、今水力事業發展に就ては統一と云ふ事が非常に必要な事柄である。

(三) 河川法施行の妨害を撤去する事

我邦は水の恩惠を多く享けて居ると同時に洪水の害も亦た澤山である、政府は四十年度豫算に於て巨額の河川改良費を計上し將來我邦の河川全部を改修しようと云ふ案を立てた、議會に於て種々論爭あつたる後ち遂に金壹億一千萬圓を以て全國六拾五大川の砂防工事を明治六十年迄にする事に決定した、是れが即ち河川法規て在つて其第一着手として最も急を要する貳拾大河を限り繼續事業として同年より着手し始めた、大正三年度の豫算に依ると内務省所管治水費金千百貳萬七千圓と云ふ大金が計上されてある、其外地方〳〵に於て毎年治水費に費消して居る金額は莫大な者である、然るに近年に到りて水力電氣事業が各所に起る樣に成つて來て、其水力發電工事の爲め河川を荒す事夥だしく、折角の河川法を滅茶〳〵に毀損する事がある樣に成つて來て、縣當局は勿論内務省に向ても此苦情は盛んな者である、或は堰堤工事の爲め水瀬が變化したとか、貯水池掘穿の爲め土砂が流下するとか種々雜多な苦情が出て來て居る現況である、會社の方では遞信省の許可を得て居るのであるから少々位ゐ苦情があつても會社の利益の爲めなら水利問題などは眼中に無いと

云ふ傾きがあり、地方廳では下流住民の利害問題にのみ重きを措て工業原動力と云ふ様な事には至つて注意が薄い、之等兩極端の爭論は今後益々盛んに成り、一方動力製造を妨げ一方では河川法を破壞する様に成る恐れがあるのである、是れが若し政府事業と成つて、河川法施行者と動力製造者とが同一人に依つて支配されるに至らば箇様な矛盾は起らぬ事に成るであらうと思はれる、今現に改修着手中の十數大河と水力事業との關係を掲げて見ようなら、利根川は利根發電會社及利根水力電氣會社等に依て河心を弄されつゝあり、澱川は宇治川水電に關係あるは勿論洛北水力會社、京都電燈の桂川等に據て川水を縱横に成しつゝあり九頭龍川は其支流瀧波足羽兩川が京都燈電の福井支社の水力工事に關係あり、木曾川流域は名古屋電燈は勿論岐阜電燈等に至大の關係を有して居る、其他信濃川は信濃電氣は元より松本電燈長野電燈千曲川電氣業に大關係を有する、其他渡良瀬川吉野川高梁川荒川北上川遠賀川庄川等悉く水力電氣事業の策源地ならざるは無く、實に河川治水法と水力電氣事業とは密接の關係を有する者にして、願くは一指揮の下に統轄させ度き者である。

(四) 植林、貯水、放水の利用

幾百幾千の水力電氣が出來たればとて、造林上の事迄に手を延して用意する事は無かろふ、全體から言へば水力の根源たる森林の調節は此事業に取つて頗る必要の事項で有つて此事業から着手せなければ完全に四時の水量を平均に保つ事は六ヶ敷いのである、然し悲哉資本の關係上箇様な所迄に金を注ぐ事は出來ぬ譯けてあるから止むを得ず今日は其儘に成つて居るが若し之れが國有と成つた節は政府は一方殖林政策の實行として兼ねて水力事業の援助と成る兩辨法の上から森林調節事業に從事する事が出來、數年の後ちには想はぬ國富を增殖する事が出來る結果と成る譯である。

今日迄我國民の水に對する觀念は、只だ天から降る水を一刻も速く海の外に流し出すと云ふ工風のみを考へて居つたのである、河村瑞賢の治水論でも熊澤蕃山

の改浚法でも皆な一樣で有つて、成る可く山岳の水を海洋に導びくと云ふ考のみを講究した者である、然るに今日では夫れが全く反對で、天から降つた水を可成的長く貯へて置いて種々に是れを利用しようと云ふのである、其故三伏の夏時貿易風に連れて南洋方面から襲來する低氣壓は實に一種の國寶であつて一滴の雨雫も貨幣同樣の價格がある者と見て差支へ無い樣に成つて居るのである、玆に於てか貯水池の必要が起る譯けで、廣大な貯水池を設備して置て天から降つた水を悉く之れに集め四時平均に放下する時は一方に於て、洪水の害を防ぐと共に他方に於て幾百萬馬力の水力電氣を起すの効果を生ずるのである、中禪寺湖に於ける日光水電及び足尾水電、猪苗代湖に於ける、湖苗代水電及日橋川化學工業、琵琶湖に於ける宇治川電氣、京都市電の如きは右の理由を應用した者に外ならぬのである、貯水池で有名なのは諾威であつて同國「スキーン」河流域に於ては五億六千萬立方尺の「メースバンド」貯水池あり又た「マンネ」河流域には三億萬立方尺の水をたゝへたる「チンスヨー」貯水池有り、近頃又た「ノートーデン」附近に於て貳拾億萬立方尺の水を貯へ得らる可き世界一の人造貯水池掘穿中であるさうなが若し是れが成就したる時は前後通じて百萬馬力以上の水力發電を成すの計畫で在ると云ふ事である、我邦も各所に堅牢な大貯水池を設け度き者であるが之等は到底小資本では成しとげられる者では無いので是非共國家の力を以て成就させねばならぬ事業の一である。

次には放水利用が必要である、今日の水力事業では未だ何れを見ても放水を利用して價格ある結果を孕み出さして居る者は無い、誠に惜しい事である、水力事業に利用し終りたる流量は之れを上手に甘く引用する時は幾多の水田を孕み出す事が出來るのである、我邦に於ける上田(高地田)は一般に畑地である、下田の水田が一反步參百圓も五百圓もして居るのにツイ眼の上の高田になると一反步僅かに百圓か百五十圓しかせぬ乾田と成つて居るのである、夫れが若し水力電氣の放

水路に當つて居るか或は放水を誘ひ得らるゝ箇所ならば其放水を乾田に放下灌漑する時は上等の水田を生出する事が出來て其土田所有者の利益は申迄も無く、國家の上から言ふて瘠土を變じて良田と成すの利益は決して少々の者では無からうと思はれるのである、然し之等の事業は一會社や一個人の良く成し得る所では無い。是非共國家の力を借らねば出來ぬ事柄である、國有としての利益の一部には之等をも數へる事が出來ると思ふ。

(五) 豫備水力の流用蒸汽機關の節約

我邦の電氣法案にては豫備水力の强行命令がある、大概四分の一位の豫備水力を常に備へて置かなければならぬ事に成つて居る、之等には種々の理屈があつて玆に改めて述ぶる迄も無い事であるが、實際に於て國家經濟の上から言ふて誠に無駄な話である。實に勿體無い譯けて有る、而し是れも必竟各會社が箇々に成立して居つて互ひに有無相ひ通じないから起る事であつて、若し水力事業が一手に統一された場合には甲乙互ひに流用し合ふ事が出來るから此豫備設備と云ふ者は殆ど必要が無い事と成つて來るのである。若し此の豫備水力を放つて悉く活用せしむると云ふ事となれば現在の水力使用馬力が參割方增加する事となつて來る、資本を增加せずして從來睡眠せる動力が參割方も生きて活動するので在るから國家經濟の上に利益するのは少々では無い。

今日迄の我邦の工業は殆ど悉く石炭動力であつたから必ず蒸汽機關を据ゑ付けなければならなかつたのであるが、今後若し大規模の水力電氣の動力を賣捌るゝ事に成れば、今日迄高價を以て購ふた蒸汽機關は今後必要無い事に成り、其結果種々の贅費を削く事が出來る樣に成るのである、自分一個で右の手に於て水力を起し左の手に於て或種の工業を營むと云ふ事は中々困難であるが、玆に商工界上の分業作用が行はれて動力丈けはたゞ簡單に電線一本で供給してくれる樣に成れば將來工業を起すに於て誠に容易に成て來るのである、吾輩が水力國有を唱ふるのも一方から言へば一種

の分業組織を呼號すると見て貰ふて差支へ無いのてある。

最近に於て電氣を家内工業に利用する事が中々盛んに成つて來る傾きが見える。誠に結構な事てある、現に東京市内に於て米搗屋、豆腐屋を始め各種の手内職に電氣動力を利用する事が流行し懸けて居るのてあるが、是れ必竟蒸機汽關の不便が捨たれて簡便なる電氣動力が起つて來たからの結果てある、今後は大工業に向つても此種の流行を見る事が必然てあらうと思はれるから、動力丈けは政府の手て低廉の價を以て供給して貰ひ度い者てある。

（六）　競爭の弊を根絶する事

物價は競爭に依て低廉に成ると云ふ原則は現今に於ては往々反對の現象を呈する樣に成つて居る、十が十迄さうとは行かぬけれども、無益の競爭はその結果に於て却て物價を高くする傾きがある、殊に電氣業の如き高價の資本を要する者に於て無益の競爭を爲すに於ては其極双方共倒れと成つて、事業界に非常な害毒を流す結果を致す次第てある、猶ほ其れのみならず双方が疲勞の極倒死するのを見て將來に於て資本家なる者が其等有益の事業に向て放資せぬ樣に成つて來て遂には國家經濟を痺痲せしむるに終る恐れがあるのてある、政府者は箇樣なる國家事業に對して無益の競爭を杜絶せしむる樣に仕向けねばならぬ道理てある、然し實際に於ては中々ソー言ふ注文通りには行かぬと見へ現に電燈業の如きは到る所て激烈な競爭を惹起して居る次第てある、現今の電燈業位ゐ競爭の盛んな者は他に類が無い、東京大坂は勿論各地方到る所火花を開して競爭して居るが、國家經濟の上に於て實に寒心すべき事柄てある、玆に於てか吾輩は此電氣事業の國有を唱道するのてある。

國有と成す方法

吾輩は前項に於て第一に水力電氣事業の現況を述へ、第二に我邦に於ける石炭動力の益々高價に向ひつつある所以を說き、第三は此水力事業を國有と爲すの

利點を擧げて一々理由を論じて見た、今や將に其の方法手段を說述す可きの場合に進んだのである。

苟も世界に於て水力國と呼ばるゝ國々では大概水力電氣の事業を以て國有と爲すか或は半官半民の會社事業に成さんと企てつゝあるに係らず、官業好きの我邦にて未た嘗て此件に付て噂だも與らないと云ふは實に不思儀千萬の事柄と言はなければならぬ、現に佛國にては千九百三年「グレノーブル」の會議に於て水力研究の「コングレス」を興し全國の水力を統一して國有と成すの議を定め漸次此方向に向て前進しつゝ有つて、「アルプス」附近に於て發電したる五拾萬「キロ」の大電力を巴里に輸送する大計畫は政府事業として完成を告けた筈である、瑞典は千九百一年水力調査院の發議に基き議會の贊成を得て水力國有の大方針を確定し「トロールベッタン」に一大發電所を政府事業として建設し今や全國の水力業を統一する事にして勉めつゝあり、又た米國北部に於ても州政府の事業と向て國寶保存會を設立し水力電氣事業を州或は國の公共事業と爲さんと企て居り現に「ミシガン」や「ヲンタリヲ」湖の流域諸州に於ては水力事業を個人事業とする事を否認して居る、加奈太政府に於ても「ナイヤガラ」瀑流附近に於ける水力事業は私有を許可せぬ事と成つて居る次第である、何れの國も水力事業丈けは國有に直す方針を持つて居る譯け合ひである。

我邦に於て若し水力電氣事業を國有と成すとして、果して如何なる方針を以て現に許可せられて營業して居る各種水力會社を所置するかと云ふに、其事に關しては已に政府に於て充分の經驗を有し豐富なる材料を持つて居る筈である、鐵道國有の時の先例もある、煙草專賣の爲めに葉煙草製造所を買收した經驗もあり、更らに近く電車を市有にするか爲めに市街鐵道を買收せしめた覺へもある次第で在るから吾輩が爰にクダクダ敷論する事は休めにしようと想ふ、たゞ大體に於て政府が現在の諸會社を拂込金の倍額で買收するとするも猶ほ政府は將來五朱以上の收利を得る事は確かであると云ふ事丈を斷言するに止めて置こふ、現在の諸會

社なる者は大概最近數年間に於て設立されたる者てあつて、其新設當時に於て會社の重役は自己會社の成功を誇らんとするに急にして比較的安價を以て水力の押し賣を爲したる傾きがある現に晝間僅かに一「キロ」六厘にて大坂市へ賣渡したる宇治電の如きは正しく其例證てあつて勉めて安價を以て賣り盡さんとする傾きがあるを以て第一期の賣買契約は大ひに低廉なる者と成つて居るが恐らく數年後の第二期契約の際は今日の契約よりは多少共利益多き者と成る事てあろふと思はれる、其證據には各會社の關係者は申合せたるが如く同一口吻を以て將來會社の利率が倍額以上にも增進する事を明言して居る次第てある、故に今日年壹割の配當をして居る會社を政府か拂込金（借入金を含め）の倍額にて買收すると假定せば政府は將來買收金に對し五朱の利を得る勘定てあるが實際は數年後に於て壹割或は壹割以上の利益をも得らるゝ計算が出て來る次第である、吾輩は此場合必ずしも拂込の幾倍に買收せよと云ふのては無いけれとも政府が今日少々位ひ高く買つて置いても將來決して損をする氣遣ひは無いと云ふ事を言ひ添へ度ひのてある。

現今各水力電氣會社の利率は平均して年壹割てある尙ほ念の爲め茲に買收價格の根據に資するが爲め左項に於て金拾萬圓以上の拂込を了し現に營業を成立しつつ在る全國各水力電氣會社（八十四會社）の利益配當率を掲けて見よふ。

水力電氣供給業者の收得利率

東京電燈會社（壹割）、茨城電氣（八朱）、下野電力（八朱）、信濃電氣（壹割八歩）、松本電燈（六朱）、長野電燈（壹割貳歩）、諏訪電氣（壹割貳歩）、飯田電燈（壹割貳歩）、安曇電氣（六朱）、甲府電力（壹割貳歩）、日英水電（五朱）、天龍電力（壹割參歩）、富士電氣（壹割）、富士水電（壹割貳歩）、名古屋電燈（九朱）、豐橋電氣（壹割）、岡崎電燈（壹割）、津電燈（八朱）、岩倉水電（壹割貳歩）、松坂水力（壹割五歩）、岐阜水力（壹割貳歩）、板取川電氣（壹割）、敦賀電燈（壹割）、越後電氣（壹割）、金澤電氣瓦斯（九朱）、富山電氣（壹割）、高岡電燈（壹割貳歩）、新潟水電（壹割）、北越水力（八朱）、新潟水力電氣（六朱五厘）、福島電燈（壹割）、郡山絹糸（八朱）、會津電力（壹割貳歩）、川俣電氣（壹割壹歩）、白河電燈（壹割壹歩）、奥羽電氣（七朱）、鶴岡水力（八朱）、山形電氣（九朱）、增田水力（九朱）、盛岡電氣（壹割）、青森電燈（壹割）、弘前電燈（七朱）、八戸水力（八朱）、近江水力（九朱八厘）、和泉水力（七朱貳厘）、關西水力（一割）、南海水力（九朱）、新宮水力（壹

割五步)、猪名川水力(六朱五厘)、姫路水力(八朱)、播磨水力(八朱)津山電氣(九朱六厘)、廣島電燈(壹割貳步)、備後水力(八朱)、松江電燈(九朱)、濱田電氣(六朱)、山陰電氣(九朱)、鳥取電燈(壹割)、德島水力(七朱)、四國水力(四朱五厘)、伊豫水力(壹割壹步)、愛媛水力(七朱)、島原水電(壹割)、久留米電燈(壹割貳步)、筑後水力(五朱)、日田水電(貳割參步)、日向水力(九朱五厘)、都城電氣(壹割)、日本窒素肥料(壹割)、鹿兒島電氣(壹割參步)、札幌水力(壹割貳步)小樽電氣(六朱)、

非募債と云ふ看板は數代の內閣が頑守した所であつて吾輩も亦た大に賛成する所であるが、然し夫れと同時に亦た生產的事業公債は其例外であると言ふ事をも承認して居るのである、貳拾億の借金を脊負て居る我邦が何事にも消極主義のみに沈んで居たならば終りには破產の外無いのである、今日の場合は朝野一致して生產的事業に奮勵せねばならぬ時であるから從て生利的事業公債は遠慮なく募集して差支へ無い譯である。爰に說く水力電氣事業公債は東京市債や鐵道公債以上の生產的公債であると云ふ事を承知して貰らわねばならぬのである。

若し水力電氣を國有とすると假定したならば果して

幾千の金を要するかと云ふに、今假りに已設會社の株を拂込金(借入金を含む)の倍額に買收するとせば約金貳億圓を要する次第である、前項記載せる拂込金拾萬圓以上の八拾五會社の總拂込金は金八千六百九拾四萬七千百八拾五圓にして社債は金參拾八萬七千五百圓、借入金は金壹千八百八拾八萬四千九百六拾六圓にして合計金壹億〇六百貳拾壹萬九千六百五拾壹圓と成る勘定であるから、夫れから計上して若し倍額にて買收し得らるゝとせば貳億圓あれば宜しい譯である、而して其貳億圓を外債に依ると假定したならば、株主への拂渡しは半額現金半額公債を以てしてよろしいと想はれるから、貳億圓或は參億圓の借入金の內半額を支出品殘餘の半額壹億圓か或は貳億圓は之れを將來の發展費として保存して置ひて現在未開始の分に向て着々工事を進捗せしめ度い者である。

實際に國有を斷行して現在存在する各種水力會社を買收したりと假定せば其買收金の貳億圓の大部分は果**して如何なる方面に向て流れ出づるかと云ふに、恐ら**

く其多くの部分は斯水力電氣の動力を利用する各種の工業に向て注入されるであろふと信ぜられるのである、今日迄は未だ現れて居らぬ各種の電化工業も與るであろふし、已設の紡績業織布業製糸業等も一層の隆盛を來すであらうし、動力の低廉と相ひ待つて我國の工業界は面目を一新する事と信ぜられるのである。

前にも鳥渡述べたる通り水力の國有と云ふ事は一面に於ては工業界の分業組織を實行する譯と成るのである、今日に於ては工業の大小に係らず自分に動力を起して自分に工業を營なまねばならぬ樣な仕組に成つて居るのであつて、其の固定資本を要する事と費費を要する事は中々な者であるが、是れが若し一朝低廉の動力を他方面から電線一本で輸送して呉れる者と假定したならば、工業者の便利は非常な者て有ろふと思はれるのである。

吾輩は茲に最後の斷案を下だそうと想ふ、若し一「キロワット」金五厘の動力が六百萬馬力運轉する樣に成つたと假定せは、我邦は五年を出でずして東洋及南洋貿易を獨占する事が出來、拾年を要せずして貳拾億の借金を皆濟し竭す事が出來ると斷言して憚らぬのである、斯國運に向て速かに到達せんと想はゞ是非共水力電氣の國有を斷行せねば成らぬ次第である、水力電氣の國有論は或る意味に於て、我國寶の扉を開く「キー」であると言つて宜ろしい。（終）

英の情味、米の意氣

田川大吉郎

英國の滯在は樂しかつた、米國の滯在は面白かつた、その説明の仕方には窮する、けれども、最も深く英人の情味に感じ、米人の意氣に感じた、英人の情味は、人のホーム之を證し、米人の意氣は、米國の建物、

ひ換ゆれば五十四階、七百八十尺（底礎を加へれば九百十尺）に餘る、突拍子も無い、圖拔けた、調子外れの高き家を見ても分ると思ふ、試みに、英國から書いて見る、但、英國の雜感の一二を書くのである、その本題に叶ふか否やは、必らずしも趣旨て無い。

評判の倫敦市

先づ倫敦市長の名は天下に轟いて居る、英人の希望は、進んて總理大臣と爲るか、退いて倫敦市長と爲るかゞ、その最高の名譽、理想だと傳へられて居る、その倫敦市はどんな所かと尋ねて見れば、僅か一哩四方の狹い小さい所てあつて、坪數にして八十萬坪以下だらう、人口の數は、夜と晝とて大いに違ふ、夜の人口は一萬五六千、それも年々に減じつゝある、晝の人口は三十二三萬、どちらにしても大した所ては無い、それて以上の如き多大の名譽を荷ふて、英人瞻仰の中心と爲り、英帝國活動の基軸と爲り、而して世界に雄視し、倫敦が榮へれば、世界が榮へ、倫敦が衰へれば、世界が衰へるとまて、世界の消長盛衰の運を眇たる一市、區々たる六百三十英町の小區域の間に擔ふて居る、妬しくも、驚かるべき世界の大市は、如何にして成つたか。

僕は之を思ふて明白なる答へを得なかつたが、只一案を得た、極めて平凡なる一案を得た、曰く人の爲に謀ること、己れの爲に謀るのみならず、併せて人の爲に謀ること、此簡單なる情合と理想の發展は、これが即ち倫敦市の今日ある所以だと思ふた。

話を理屈に落しては濟まない、事實を以て申上げれば、倫敦市は、僅に六百三十英町以内の小さい都會だけれど、その働きはいろ〳〵その以外の廣き區域に及んて居る、一例は、食料品の市場てある、倫敦にはその市場が凡そ七つか八つかある、その建設の費用は凡そ四千萬圓ばかしかゝつて居る（小市場は別として）此市場は、皆、以上の狹き市の設備てあり乍ら、設備の場所は、狹き市の區域以外に亘り、而して之を利用する者は、右の一萬五六千か、三十二三萬の僅の民に

止まらず、一般に世間て所謂倫敦市の、四百五十萬の市民が、廣くその利益に浴し、恩澤に浴し、供給し、需要し、集散し、分配する所に爲つて居る、即ち、狹き倫敦市が、廣き倫敦市の爲に、その費用を以て、之を設備し、供用して居ることに爲つて居る、更に繰返せば、狹き倫敦市は、獨りその市内の事を爲すに止まらず、進んてその市外の、廣き倫敦市の爲をも思ひ、その爲に義務を感じ、費用を擔ひ、力を捧げ、利益を謀ることに爲つて居る。

更に申せば、右の市場を利用する者は、必らずしも四百五十萬の市民に止まらず、世に所謂大倫敦は、七百五十萬に餘る多數の人民を含んて居るのだから、狹き倫敦は、僅か一萬か二萬、多くとも三十二三萬の市民を以て、進んて七百萬市民の生活に必要なる、若くは活動に必要なる、大規模の事業を其肩に擔ひ、自ら利すると共に、廣く他を利しつゝある次第に爲つて居る、これ唯だ一例てある、他は御推察を願ふ。

それて、僕は、此己れの欲する所を推して他に及ぼす、獨り自家一身の事にのみ屈託せず、進んて他の益を謀るといふ氣風が、英人の生活習慣の上に善く現はれて居ることを思ふ者だ、即ち、狹き倫敦市は、廣き倫敦市の爲を謀り、廣き倫敦市は廣き英國全體の爲を謀り、廣き英國は廣き全英帝國の爲を謀り、いづれの市も、國も、民も、その一身、一家の外に、その思想を高調しつゝある傾向を見たと思ふ者だ、日本ても、今は、朝鮮の爲に、臺灣の爲に、政府官憲の努力の外に、いろ〳〵盡瘁して居る人があらう、僕は、それを絶無とは思はないが、然し聞く所、知る所の太だ少き割合に對して、英人のそれを思ふ態度情合が、日本人以上のやうに感じ、少くとも僕等以上のやうに感じた。

ツイ數日前の事てある、南阿に激烈なる同盟罷工が行はれ、南阿政府は、その首領數名を捕へて、何所かへ秘密に護送したとの報道があつた、而してそれに對し、英本國の勞働團體が激怒し、政府の非違不法を攻撃しつゝあるとの電報があつた、僕は、此報道に對しても、直ぐ英人の人の爲に謀る、人事を人事として、

人の痛さは三年も忍ぶ流の不情無神經ならず、人の事、即ち我が事なりとして、今日は人の身の上、明日は我身の上、彼れ既に此辱に遭ふ、我亦現に此辱に遭ひたるの態度氣合もて、此間に處し、解決を期せざるべからずとして立てる、高尚の意氣、精神を、羨ましく看取した。

今や、英國は愛爾蘭の自治問題に行惱んで居る、最近の電報に由れば、今年の議會は、實に有史以來最大の議會だと注目されて居る相である、僕は、彼地の滯在中、特に此問題に興味を感じた、これは言ふ迄も無く政治問題である、去り乍らその特に紛糾し來つた譯は、必らずしも統一黨の自由黨に對する黨派的確執軋轢の爲のみては無い、實に宗教問題に起因して居る、愛爾蘭の多數は舊敎の信者なるに對し、その少數の新敎信者を、自治案成るの日は、多數の舊教者が、多數の力を笠に着て、少數新敎者の信仰の自由を妨げ、敎育の自由を妨げることに爲るであらうとの憂慮を憐み、之に英全體の統一黨若くは新敎徒が同情を寄せ、その不幸を悲しみ、非運を救はんとの同類相引き同朋相照らすの態度氣合が、その有力な根底を爲して居る、即ち、ウルスターの民が、自ら守らんがために動くといふよりも、ウルスターの民を憐む、ウルスター以外の民の同情が、殊に有力なる要素と爲つて居る、こゝに自治問題の大騷ぎと爲りつゝある素因がある、同時にその問題が黨勢の消長以外に、多大の興味を惹く特種の理由がある、とは云へ、多數は多數である、若し多數に由つて決するといふなら、英國の政府黨は、反對黨に比し、凡そ百名以上である、而して議會法も新たに出來て、既に、前々議會、前議會と、二度まで自治案を認め、今度はその三度目の議會に當り、三度まて下院を通過すれば、上院の協贊なくとも、法律に成し得べき規定に爲つて居る、政府黨として、之を成立さするには、何の困難も無い、只々勇往邁進すべきてある、傍き目も振らず、一心に邁進しさへすれば、此法案は確に法律と爲つて、自由派三十年來の功業即ち成り、それだけ反對派の勢力を挫きて、政界の新氣運を

拓くのである、それにも拘らず、方々に圓卓會議、圓卓會議といふ聲が起りつゝあつた。

圓卓會議とは、僕のバーミンハムの市廳を訪ふた時、市長代理は、僕を案内して、稍々薄暗き一室に入り、古びたる圓形の卓子と數脚の椅子とを指して、僕に特に注意をしてくれた、どうぞ此卓子に注意して置いて下さい、折角の御訪問に、何のお土産話も無いが、此圓卓だけは英國の土産である、英國の誇りである、英國の憲政の奥義は此圓卓に在る、御覧なさい、圓卓だから、始めも無ければ、終りも無い、此圓卓に就く時は、互に胸襟を叩き盡して、圓満なる互讓の終局を期するから、黨派も無ければ、階級も無ければ、委員長も無い、一同、卓を圍んで、事の穩當なる熟慮と疏通を期する、これが英國憲政の今日ある所以であると、**それは市の話である、國にも此圓卓はある、折々此圓**卓會議が行はれる、屢々ては無い、而して自治案もその圓卓會議を要望さるゝ運びに爲つたのだ、始めなく、終り無し、長幼なし、黨派なし、互に相寄り相助けて、圓満なる解決を期す、左しもの難問題たる自治案も遂にはそのやうな方法に依り、穩當の解決を見るであらう、現に今回の開院式勅語にも、互讓に依り好き解決を望むとあつた、權利と曰ひ、多數と曰ひ、理窟といふは、學者の事である、必らずしも政治家の事で無い、圓卓會議といへる此一介の簡單なる事實の上に、英國の政治の情味に富んで居る、乾燥で無い、無趣味で無い、形式で無い、融通無礙、八方に圓通して、運用自在なる傾向の一斑が窺ひ知らるゝては無いか。

序てと申すも變だが、僕は、昨十二日の衆議院て、尾崎氏の豫算修正案を、獨立の修正案と認めず、賛成案として、他の修正案の附庸と看做さんとする政友派の横議のため、議院が混雜を起した時、之を疏通解決するための交渉會に臨んだ、**圓卓は其中央に在つた、その形だけは、正しく英國て看**せられたそれに類して居つた、大きさも略ぼ相似て居つた(稍々小さかつた)而して協議の結果は不調に終つた、各派はガヤ〳〵ザワ〳〵として室に入り、又、ガヤ〳〵ザワ〳〵、規律

も無く、秩序も無く室を出てた、入る時に、必らず之を解決せんとの沈んだる思慮、互讓の精神も無く、出づるとき、解決し得ざりしそれを、悲しみ、恥づる、憂ひの色も無く、嘆きの情も無く、只、ガヤ〱ザワ〱、忽然として、騒然として、遽々然として、入つたり、出たり、もぢつたりした有様を看て、現に其中の一人と爲つて、而して何事も爲し得ざりし身の微力を悔ゆるに當り、憮然として英國の圓卓會議その事を想ひ起し、言ひ知れざる感慨に撲たれた、餘談になるが、議場の討議も、彼に及ばぬこと夥しいが（曾て書いた通り）圓卓會議の事に立つては、その精神は、固より、趣旨も、形式も、我には未だ理解されて居ない、相距ること殊に遠しと感ぜざるを得なかつた。

何にせよ、情味の遠い生活である、遠人をいたはり扶けるといふことは、無論、我國にも、昔から有る習慣だけれど、僕の、巴里を發して、倫敦に至らんとし、カレーの汽車を下らんとするや、偶々一英人の世話に爲つた、彼は、僕を遠來の旅人として、ねんごろにいたはり、先づ、多からざる赤帽を、尋ね求めして、僕の行李を運ばせ、次て汽船に搭ずるや、僕の爲に坐席を作りくれ、僕の不在の間に、稅關吏の來るや、彼は僕の行李の中には、一物たりとも不正の品なきことを告げて、その監査を終らせ、直に監査濟の札を貼らせ、將にドーヴァーに上陸せんとするや、重ねて僕の爲に赤帽を雇ひくれ、何かの注意を與へ、いよ〱汽車に乘込むや、僕と彼との席は、自然に別々に爲りしため、出車間際、彼は遽たゞしく僕の室を訪ひ、忘れ物は無いか、萬端都合は好いかと、入念に見舞ひ氣をつけてくれた、只々、車中の客である、曾て相知らざる路上の人である、然るに彼は、此の如く慇懃に、周到に世話してくれた、而して曰く僕も幾度か他國に旅したことがある、差支へなく、やれるやうなもの丶、隨分不自由なものだ、僕はそれを經驗して居る、君も、始めての旅となれば、嘸、不自由であらうとお察しする、何事でも打ち明けてお命じ下さいと、彼は、彼の經驗を以て、僕の境遇を察し、僕のために、何くれとなく、

世話面倒を見たのである、僕は、從來、幾多の外人を我國で視た、去り乍ら、此樣な世話面倒を看てやつたことは曾て一度も無つた、それだけ、一倍裏耻かしく感じて、而して彼等のより深き同情の賜を殊に忝けなく謝した、而して彼一人のみならず、隨所にかゝる氣合の流露して居ることを感じ、如何にも想ひやりの厚い人民だと思つた。

例へば、他人の葬儀に、足を駐め、帽を脫して敬禮するといふことは、能く言ふ外人の美風であるが、僕は此行に於て、幾度もその實物敎授を受けた、勿論、これは獨り英國に限つたことでは無かつた。

こゝで言ふことが適當か否やは、疑問ながら、何にせよ、僕は、英人が、自ら謀ることの外に、併せて人の爲に謀る、自ら憂ふることの外に併せて人の爲に憂ふ、その主人はその雇人の爲に謀り、その家はその市の爲に謀り、その市はその國の爲に謀り、その國はその殖民地併せて世界の爲に謀るといふ工合に、常に心を自己以外の高き所、廣き所に存して、その爲に憂へ勞すること、自身の爲に、自家の爲に、自村の爲に、自國の爲に憂へ勞すると、殆んど相似たるの態度形跡に少からず感歎した、英國の社會では、實に到る處に、此樣の現象事實を看た。

廉價なる食料品

右の所感にモー一ツの事を附け足す、僕は、英國に於て食料品、若くは生活必用品の頗る廉いことに驚いた、牛肉は英人の最大副食料であらうが（パンを主食物として）その一斤の値段は凡そ三十錢であつた、但、三十錢といふは英國產牛の肉である、それは高い方で、濠洲から來る（濠洲とのみ限らず）冷藏肉の値段は、更に廉い、大抵一斤二十錢であらう、市中では、その日なしものとして、十五錢、十二錢の看板も少からずあつた、日本にも濠洲の肉は來つたけれど、不味として喜ばれなかつた、英國で用ふる濠洲肉は、少しも不味の嫌は無い、英國肉の新鮮なものと、同じ程度の味ひにて用ゐらる、只、英國の牛は、英國の紳士の如し、

暇にまかせ、金にまかせて、育てられて居るから立派だと、英人の申す如く、その肉は、肥え、太つて脂ぎつて居る、脂肪分に富んで居る、濠洲來の冷藏肉は、幾分、之に劣るといふまでだ、その英國の肉は、せい〳〵全數の二割か二割五分に過ぎなくて、外國物は七割以上にも達して居る、無論、これは倫敦の統計である、故に、英國全體の摸樣は、此中に現れて居ないけれど、又以て一斑を知るに足ると思ふ、英國人は、此の如く多量に外國肉、言ひ換へれば冷藏肉を用ゐて居る、それだけ英人は、一斤大概二十錢の牛肉を常用に供して居る、而して魚肉も亦相應に使ふ、僕等が、日本で評判して居たよりも、より多く魚肉を用ゐて居る、現に、英國の朝食には、大概、魚肉は附き物である、その通り、魚肉は用ゐられて居るが廉い、牛肉廉く、魚肉廉く、馬鈴薯又廉い、これだけあれば、英人の生活は足りるのである、而して醤油も廉く、鹽も廉く、砂糖も亦廉し、例へば普通の料理砂糖は、一斤七錢乃至八錢である、珈琲や、紅茶の場合に使ふ角砂糖、ザラメの類でも、一斤十二三錢である、日本に較べて非常の差である。

これは所謂自由貿易の結果に相違ない、若くは英國民の商業的天才、並にその歷史的因襲の結果である、然も強く言ふて置きたいことは、政治家が、國民の生活を、政治の第一要素として、その生活を容易ならしめ、便利ならしめ、生活の資料を潤澤ならしめ、その故障、不便の關係を除去するため、多年鋭意努力した賜といふことである、僕は、此點を殊に強く言ふて置きたい。

若し天然を言へば、英國は、生活上天然に惠まれたる國では無い、その土地も、その氣候も、その水利も、決して良好でも、潤澤でも無い、而して今日ある所以は、主として人力の結果だ、人力は誠に巧みに用ゐられて居る、特に、その政治の結果だ、その政治が實際的に、常に人民の利害休戚を土臺として、研究され、苦心されたから、だん〳〵に改良され、發達され、今日に至つたのであると信ずる、然し、これは此邊に企

かう。

根から生へた政治

以上の述べ方が下手てあつたから、お分りに爲らなかつたかも知れないが、僕は、以上のばら〳〵の觀察事情の中にも、僕が、こゝて結論的に述べて見たい、政治が根から生へて居る、英國の政治は實に根から生へた政治だといふ感じを起した要素の一部が含まつて居たと思ふ。

先づ、中央の政府にかたどつて、府縣の政治組織を作つたといふよりも、府縣の政治組織にかたどつて、中央の政治組織を仕組んだといふ方が實際に近い、府縣の政治組織を拵へた後に、市町村自治の機關をその次に結び合せたといふよりも、市町村自治の機關が、先づ出來て、自由自在に市町村の事を處理した上げ句、市町村以上の機關を必要とする實際の要求に鑑みて、府縣の組織が起つたのであると謂ふた方が實際に近い、而してその市といふものも、市が出來て、後に區を作つたといふよりも、區が出來て、十分に働いて、而してその力の足らざる所を充たすために、後に市を作つたといふ方が事實に近い、此故に、英國の政治組織を視て感ずることは、いづれも實際の產物である、實際その必要あることを、少數識者の感ずるのみならず、多數人民の洽ねく之を感じて、之を要求し、誠實に、熱心に之を要求するに至つて、始めて之を案出したといふ趣がある、從つてその善惡は別の論として、人民は頗る之に滿足しつゝある、その趣が殊に明かに鮮かに見える。

之を日本に移して、日本の人民は、我國會に信賴しつゝあるか、どうか、我府縣會を尊敬しつゝあるか、どうか、我市町村會に滿足しつゝあるか、どうか、我敎育の制度を喝采しつゝあるか、どうか、我裁判の組織を理解しつゝあるか、どうかと顧みて見れば、いづれも多大の疑問である、他人如何と問ふ迄も無く、僕自身にもいろ〳〵の不安と、疑懼と、憂慮がある、而して、將來之をどうしたら可からうかといふ氣遣ひが、

頗る深い。

英國のそれにも、改良、轉移の工夫は、いろ〳〵あらう、研究心の深い、世界最善のものを得なければ、誓つて休せずといふ意氣、抱負に充されて居る英人だから、そんな工夫思念には凝つて居るには相違ないけれど、要するに、彼には滿足があり、我には不滿が充ち滿ちて居る、それが、その最大相違點であらう。

英國の政治社會組織が、極めて自然的なるに比して、即ち、根から生へた木の如くなるに比して、日本の政治並に社會組織は、喩へば打込んだ杭の如に、僕の眼には見える、只それ根から生へた木である、彼の政治には生氣があり、自然の光りがあり、潤ひがあり、何日とは無しに生長の跡が見える、只それ打込んだ杭て、從つて葉もなければ、枝も無く、花もなければ、實も無い、生命が無い、潤ひが無い、光りが無い、生長が無い、丈夫は丈夫である、或場合に於ては自然の木よりも丈夫である、然し乍ら杭の自然木よりも丈夫だといふことは、無理に打込んだからてある、その場限りのことてある、一時限りのことてある、永久に然りとは決して謂へない、即ち、英國の政治の情味に充てるに比して、日本の政治に情の無い缺點が、こゝから起つて來る、例へば、僕の英國に在る時、婦人參政權の運動のため、捕へられた婦人が數名あつた、然るにその婦人達は、相應じて絶食同盟を企てた、監獄に在つて監獄の供する食物を取らず（一切の差入れ物をも）坐して疲憊して死を待つといふ態度を示した、無論、死するの覺期てはあるまい、此決心を以て政府に迫ることだけてあつたらう、此くて數日、いづれも疲憊して危ぶくなつて來た、政府は即ち醫師に命じて、餘儀なき場合と見て、假出獄を許した、而してよくなつたら又捕へ、惡くなつたら又出した、或人は之を兒戲の如き政府の所作と妄評するかも知れない、然し乍ら僕は之を人情ある致し方だと思ふた、而して之を日本に試みたらどうだらう、政府は多分、勝手にしろ、政府は政府の務めをして居る、死にたければ、汝の勝手に死ねと、坐して其死を視るべく、自然の儘に放委する

てあらう、現に人民を背ろから斬りつけた巡査もある、僕は、日本の政治は今此程度の狀態に在りと觀て居る、當か、否か、判斷を四方に仰ぎたい。

向、英國に在つた時の事である、或囚人の父が病氣のため危篤に陷つたので、介抱のため出獄を許された、旣にして父死して、その囚人は監獄に還つて來た、監獄の係り員は、監獄は不正の徒を懲す所である、汝の如き正直な人は、監獄に留める必要が無いからとて、卽時にその罪を赦して放ち還したとの新聞記事があつた、(記臆のまゝ)前の婦人の場合では、僕の人情感を切實に感じない人も、此場合に於ては、期せずして泌々その面白味を感ずるであらう、その如く、向ふの政治は人情に富んで居る、それだけ生命がある、それだけ實際に適して居る、それだけ根から生へて居る、日本の政治は、敢て惡口を吐くでは無いが、枯淡にして砂を嚙むが如し、全く人情に切ならざる所のものがある。

僕は、英國に視て、此點をつくづく感じた、太だ雜駁であつたが、こゝて英國の所感の部を終りとし、まづい筆ついてだけれど、米國に關する所感の一二を次に書く。

冬にも氷水

米人の意氣を感ずる一例は、先に述べたる五十四階の建物の外、米人が常に世界一と誇唱することに由つて明かである、紐育の河を隔てゝ向ふに見える一個の大時計は、たしか直徑三十二尺といふことであつた、左すれば、屋根時計の大きさが、直徑五間以上といふことに爲る、倫敦の議事堂の時計は、隨分大きいと思つたけれど、之に比すれば流石に劣る、紐育では之を以て世界一の大時計だと稱して居る 如何にもさうであらう、費府に有名なワナメーカーの雜貨店は、又之を以て世界一だと稱して居る、華盛頓の停車場も亦世界一だと稱して居る、スケネクタデーの電氣會社も職

工の數六萬人、或は世界一てあらう、此の如きもの、例を擧ぐれば此他にも幾個もある、要するに彼等は世界一を願つて居る、世界一たらんことを目指して居る、それが彼等の一統の理想てある、そこに米人の特色が見える。

僕の見た所、米人の氷水を飲むことは、特に世界一てあらう、朝の食事にも之を用ゐる、晝の食事にも之を用ゐる、晩の食事にも之を用ゐる、夜、十一時、十二時、大宴會、大夜會のはねた、夜ふけにも亦之を用ゐる、米人は、朝から晩まて氷の飲みつゞけてある、氷なくては夜の明けぬ國てある、夏のみ之を用ゐるといふのては無い、冬も之を用ゐる、年から年中之を用ゐる、僕の米國を過ぎつたのは、十一月から十二月、屋外には氷柱の立つた寒冽の時てあつた、その時てすら盛んに之を用ゐて居た。

空氣が乾燥してるから、自然に之を要するといふのか、一般の解釋てある、僕は、それに異論を挿むものては無い、然し乍ら、少しなり僕の意見を加味して言へば、僕は前段に述べた、米人の世界一を欲する氣合と努力が、此氷水の必要を喚び起したものだと思ふ、即ち、空氣の作用のみにあらず、外來の逼迫のみにあらず、胸中に、燃へて、燃へて、燃へ上らんとして、炎々止め度なき所の活火が、自然に人を驅つて、寒中尚氷を求むる異常の習慣を作り成させたものだと思ふ、彼等の話はせわしい、彼等の動作はそゝつかしい、彼等の行歩、文章、新聞、言論、計畫は、皆々意氣を以て勝つて居る、長所こゝに在り、短所こゝに在り、大膽、率直、明快、誇大、その半面には、疵も、ボロも、やりそこないも、累々相接して居る、つまり米人は、意氣を以て世界を凌がんとするものだ、それだけ、胸中の活火、氷なくしては一日も堪へ難いのてあらう。

馬場辰猪の墓

米人に關する所見をこゝに止めて、直に在米日本人に關する所見に移る。

僕は費府を訪ふた朝、馬場辰猪の墓を弔ふた、而し

て至大の快感に撲たれた、馬場といふ人は、その生前に僕の相知らざる人であつた、その有名の演說は、僕は一度も聞いたことは無つた、尙、その民權自由のために、全力を盡した志士たることだけは之を認めて敬して居た、然もその墓を弔ふた一刹那に於て、此人の生前の演說文章よりも、此人の默して語らざる此一丈前後の墓碑が、遙に盛んに語りつゝあるとを感じた、即ち、生前の雄辯は、雄辯であつたらうが、その雄辯よりも、此墓石の方が更に雄辯であることを感じた、思ふに此墓石は、今日既に僕の前に語ることが太だ多かつた、今日以前にも太だ多かつたであらう、今日以後にも太だ多いであらう、僕は、此墓石の語ることの分量が、將來にかけて千萬無量であることを感じた、それだけ頗る愉快に、感慨に堪へなかつた、人皆死あり、貴く死することは義人にあらざれば能はず、ゲニ〱然り、とはいへ、義人として死することも、萬人には叶はず、人若し死處を擇むの自由があるならば、人は須らく海外に出てゝ死すべし、異境に飛び出てゝ死すべし、その國家、民人のために、利する所、眞に測り知るべからずと感じた。

十萬の墓標を

僕は此感慨を齎して桑港に入つた、桑港では、否應なしに、日米問題に關する意見を徵せられた、用意が無いとは、どうしても言へなかつたから、ところ〱ばら〱の意見を述べた、その一節に、僕は、在米十萬の老若男女に、悉く米國の土と爲つてくれ、米國にその墓標を立てゝくれ、さうさへすれば、所謂日米問題の如きは、問はずして片がつく、問ふの必要が無くなる、最も有力なる、最も確實なる、最も徹底的なる解決の方法は只これあるのみだと告げた、僕は、中心より之を彼等に期待するものである。

實際、僕は、今日の慰問旅行を、そんなに有り難く思ふて居ない、日本の抗議を少しも賴みにして居ない、在米の日本人から、日本に寄越す種々の文書硏究を、珍らしく、賴母しく、力にしては居ない、僕も一と通

ちや、二た通りは、それらのものにも目を留め、又、相談にも與かり、主張にも觸れた、けれども、問題解決の要素としては、僕は、失禮ながら、それらを逸視して居る、僕は、それらの効力の太だ少きことを信ずるものだ。

嫁は白裝束で、再び還らぬ決心で家を出る、堂々たる丈夫の態度、豈彼の可弱き少女の類に及ばざるべけんや、諸君か日本を辭せらるゝの日は、又、所謂水盃を擧げて、業若し成らずんば死すとも還らずの決心で出られたに相違ない、僕は、此樣の決心が、諸君の米國に向はるゝ當初に充ちて居た、漲ぎつて居た、溢れて居たことを信ずる、今日もこの決心はあるであらう、只多分、將來にもこの決心は持續せらるゝであらう、只だ當初の此決心を持續すべきのみ、その嫁、若し實家を笠に着て、婿に誇れば、結果は知るべきのみ、只破裂あるのみ、たとへ誇らねにせよ、絕えず實家をたよりにして、事ごとに實家に報じ、實家に訴へ、實家を引合に出して爭へば、結果は尙測り知るべきのみ、僕は此場合に於てのその嫁の態度を是認し得ない、諸君の米國に在るは、少女の他家に嫁ぎたる場合と全然同じくは無い、そこには多大の懸隔がある、然し乍ら物も相談、僕の勸告の目標はこゝに在る、諸君は、その少女の如き、その嫁の如き氣に爲つて、こゝの社會に居り、こゝの社會に落ち着き、而してこゝの社會の利益、幸福を謀り、その百年の後の遺骸を此土に葬ることは出來ないか、左樣の決心、覺期、氣合にはなれないか、それが、僕の憚らずして言ふ意見の全部であると申した、即ち、十萬の日本人の墓標を米國の彼土に立てんことは、僕の今日に於る最大の希望である。

日米銀行如何

僕は、此等の決心基礎の上に、差詰め日米銀行を立てんことを勸告した、米國に在る日本人の多數を出資者として、米人と協同し、米國の金融企業に貢せんため、この機關を必要とする、必要とする筈だ、諸君はそれを必要としないのかと責め問ふたのである。

尤も、銀行の出來るには間があらう、此く發達したからとて、直に此く爲るものでは無い、僕は、目下の方法としては、米人の銀行に預托せよ、即ち、米人の銀行に預金者として、資本家と爲り、日本人の資本もて、米國の金融界を潤ほし、以て米國の生産貿易の世界に、深き日本人の根をおろし、離るべからざる關係を植ゑ付けよと主張した。

勿論、此くすれば、海外から日本に入つて來る金は減るに相違ない、それを苦に病むものは第一に日本政府、第二に正金銀行、正金銀行も、日本政府も、今日に於ては、諸君の仕送りを、大いに賴りとして居るに相違ない、二千萬圓か、三千萬圓か、諸君の故郷に仕送るその金を、外國貿易の逆調を救ふために、日本の、苦心憂慮しつゝある外債利拂ひの關係の上に、要するに日本財政の救急作用の上に、大いなる影響、力あるものとして、當にして居るに相違ない、少くとも當にして居たに相違ない、然し乍ら僕の意見は違ふ、僕はそんなものを當にしない、僕の意見に由れば、子供の仕送りを當にする親は、親の不心得である、料見違ひである、況や、娘を嫁に遣はして、嫁入先から仕送りを待つなどゝは、以ての外の沙汰である（前に述べた如く、場合は違ふけれど）、僕は日本の政府國家の爲に之を期しない、僕は、諸君が、その稼ぎ得たる所を以て、十分に、十二分に、諸君の今後の目的を成し、諸君の將來の地歩を成し、兼ねて此土の開發の爲に致されんことを希望する。

それには、日米銀行が必要であらう、諸君の毎年日本に送らるゝ所二千萬圓、若しそれだけあれば、二千萬圓の銀行は一年にして出來る、若しその一半を日本に送り、一半を此地に殘すとせば、一千萬圓の銀行は立ち所に出來る、若しその四分の一を殘すだけでも、五百萬圓の資本は脚下に在る、之に米人の資本五百萬圓を加へれば、尙一千萬圓の大銀行は出來る、積んで二年に爲れば二千萬圓の銀行は出來る、三年四年と爲れば、三千萬圓、四千萬圓の銀行は出來る、米國の企業界大なりといへども、三四千萬圓の實際資本あれば、

又以て雄視するに足る筈だ、諸君は、ナゼ之を謀らないのか、諸君は、遂に之を謀る能はざるか、遂に謀るの意思なきか、僕は、諸君が勞働者として此地に在るのみならず、又、資本家として此地に活躍せんことを祈る者である。

一流の病院を作れ

銀行のみならず、病院を作らんことも僕の願ひてある、僕の、聞き違ひかも知れないけれど、米國の醫術は、太して發達して居ない割合に、日本の醫術は較々發達して居る、之を歐洲に較べれば、まだ〳〵遜色があらうけれど、之を米國に較べれば、必らずしも然らず、隨分、互角の太刀打が出來るといふ噂てある、これは、日本人が大いに其力を試むべき分野ては無いか、僕は、桑港に日本人の經營する大規模の病院を作りたく思ふ、大規模の病院を建て、日本第一位の醫博士とは往くまいけれども、第一流の醫博士を聘し來つて、親しく診療に從事するとなると、日本人の患者は固より、米人の患者も、多大の益を受けるてあらう、即ち、その門には、日本人も、米人も、續々蟻集してその治を受けるてあらう、日本人よりも、寧ろ米人の數が多からうかと思ふのである、實際は、諸君の判斷を仰がねばならぬが、どう思はれるか、僕には、そのやうの感じが直覺せられる、果して此の如くなれば、又以て日本の光りてある、而して諸君の利益てある。

敢て、辛酸を嘗めて、努力しつゝあらるゝ諸君をけなすては無いが、僕は、諸君が、何日までも、勞働者としてのみ奮鬪せらるゝ現況を厭ふ者てある、勞働者は勞働者として、その分を守るのも宜しいが、同時に、日本は日本として、此土地に紹介すべき文明をも、資力をも、幾何かは有つて居るのてある、諸君は之を紹介せねばならぬ、御互に之を紹介せねばならぬ、日本の醫術は、其一つて無いか、要するに、自他相益せねばならぬ、受けんと欲すれば先づ與へよ、諸君は勞働者として彼等から受ける代りに、彼等にも、諸君の有てる何かを與へねばならぬ、諸君はその何を與へつゝ

あるか、受けるだけ、貰ふだけては、何だか卑しく思はるゝのも無理て無い、彼等のみ優者て、吾等は劣者の如く、彼等は世界の文明を促進し、指導し、左右し得る現代の先進者てあつて、我等は、それに何ものをも寄與し能はざる附隨者の如く、劣弱者の如く思はれ、辱しめられ、依つて疎外せらるゝに至るのも致し方が無い、彼等が諸君を辱しむるにあらず、吾等自らが招ぐのてある、招いだのてある、招かんとするのてある、思ふに我醫術は、我文明と威信とを發揚するに足る一種の信用勢力てあらう。

或は、之を日本赤十字社に經營されたらどうだらうとの感想も泛ばう、僕も、一寸はそう思ふ、而して赤十字社は、現に有り餘る多大の資本を死藏して居るのだから、爲さんと欲すれば直に爲せるだけ、極めて重寶にも感ぜらるゝけれど、何だか、疑い深き今の世態時勢てある、日本赤十字の事業を米國に進むるとありては、一部米人に如何の思惑を感ぜしむるか、その影響も測り知り難い、故に、此考案も、一寸思ひ附だけれど、僕は、今日に於ては之を提出しない。

それよりか、米人は獨立の民である、何事も自分でやる民である、此氣風の國民の間に處する諸君としては、矢張、諸君の力に由つて之を經營したら如何てあらう、而して資力は、僕の推測する所、前段の如く、諸君の手許に、遊刃恢々、多大の餘地がある、何も之を本國に仰ぎ、之を四方に求める必要は無い、僕は、諸君の手に由つて、諸君が自ら創始し、經營し、而して諸君のため、日本のため、新しき氣運を開き、地歩を成すと共に、兼ねて米國のため、その利澤を廣くし、深くし、大いにされんことを希望する者てある。

同胞の使命を思へ

餘事は拔きにして（僕は尙二三の事業計畫に就て語つたのだ）一體、加州（若くば廣く）若くば加奈陀に入りたる日本人の使命は何だ、諸君は、意識して居るにせよ、意識して居ないにせよ、人間の此世に落ちるには、落ちた初めから一定の使命がある筈てある、故

なくして人間は此世に生れはしない、況んや、生れ本國を去つて、遠く異郷に、故郷の同胞を代表し、晴の戰ひを鬪ひつゝある諸君に於てをや、僕は、諸君の移住に、確實なる一定の目的あることを信ずる者である。

先づ農業の民、して、加州の農産の進歩を謀り(加奈陀に於ては漁業の發展を謀り)依つて、加州の富源を開發し、即ち米人に依つて、若くばその先住者に依つて、未だ開かれざりし天與の富源を、我日本民族の手に由つて開發し、以て自他の生活の資を豐富にし、而して世界の文化發達の一助の資と爲すことは、即ちその使命の主なるものである、思ふても見玉へ、日本の農民ほど、農事に長けたる勞働者が、世界に比類があるか、僕の見聞の範圍に於ては、斷じて其比を見ない、日本の農民は、此點に於て、祖先以來、鍛へに鍛へられた百練の手腕と經驗とを有つて居る、故に、日本の農民は、農民として、加州の地に必適の資力を備へて、活動の地歩と、發達の望みを、十分に、天に由つて保障されて居る。

更に、米國は、農業の未だ振はぬだけ、農村の生活が、日本ほど有趣味に出來て居ない、米國の社會は、殆んど都市が先づ出來て、農村が後に出來つゝある姿がある、日本は之に反し、農村が始めに出來て、都市が後に出來つゝある、それだけ、日本の農村は、個人の住居より、村の組織に到るまで、各種の要素が、較々整頓して居る、日本の農民は此仕組を加州に移し植へねばならぬ、隨つて、日本の農民は、今日の馬小屋同樣な、低き、狹き、見苦しき穴藏の如き中に籠つて居ては駄目だ、もつと、その家を家らしきものにせねばならぬ、庭も必要だ、垣も必要だ、森も必要だ、花も必要だ、泉水も必要だ、總て家らしき家を作らねばならぬ、而して米國の農村生活を、もつと多趣味に、婉美にせねばならぬ、米國の工場的都市の生活に、別に一生面を開いて與へねばならぬ。

與ふるの外に學ぶことの必要なるは言を待たない、僕は、米國に近世的生活の意義と實例を學びたいと思ふ、それには、諸君がそれを學んで、日本に傳へねば

ならば、此點に於て、諸君を介して日本に傳へらるべきものは、極めて多かるべき譯だ、日本の西洋に學んだもの既に已に多しといへども、その多くは殆んど學びそこねて居る。眞にその要諦を解したものは頗る少い、諸君は、幸に此地に在り、日夕、彼等と相會して、之を熟知する機會に富んで居らるゝのだから、この眞諦を傳へて、日本今後の發達のために、模範を垂れ、先例を示し、之を指導し、之を促進さるゝのは、即ち諸君の任だ。

中にも、僕は、立憲政治の意義と運用に關して、諸君が特に注意を拂はれんことを願ふ、日本の立憲政治は、僕がこゝに批難し、指摘する迄も無く、僅にその形式を模して、未だその精神に觸れて居ない、否、否、その形式すらも、未だ滿足には研究し、模倣し得て居ない、僕は、外國の立憲政治は、その家庭の中に在り、その町村の間に在り、その合資的、協同的株式會社の間に在り、宗教的團體の間に在り、而して後、始めて議會の上に現れたものと思ふ、故に、僕は、諸君に向つて、この地の中央議會の趨勢に着目し、而して得たる所を以て、之を故國に傳へ敎へて下さいとは、必らずしも謂はない、由來日本人は獨りぼつちの民である、ばら〳〵の民である、喧嘩好の民である、協同生活の出來ない、合議生活に馴れない、互讓的、包容的、共濟的生活の出來ない民である、それだけ立憲的氣風趣味に乏しい民である、諸君は海外に在り、協同の必要を自然に感ぜられつゝあるだらう、而してその好き實例模範を、種々外人の實際的生活の間に發見されつゝあるだらう、それを傳へて下さい、それが諸君の任である、大切なる諸君の任である、日本の諸君に待つ所のものは、必らずしも所謂二千萬圓か、三千萬圓の仕送りにあらずして、只、これである、只、これである、僕は、諸君に、此利福のお裾分けを要求する。

支那人と視較べて

諸君は、自ら支那人に視較べて、以て勝れりと爲すか、將た及ばずと爲すか、僕は、痩我慢に逸るては無

いか、諸君の中には、支那人に及ばずと卑下して居らるゝ者は、一人も無いと信ずる、確に無い筈だと信ずる。

而る時桑港の支那町は如何、僕は、桑港に來ると早々、その支那町への案内を受けた、更にシアトルに於ける支那人の基礎如何、桑港の支那町は、嘗て一掃的排斥の議があつた、僕は、本國に在るの日、數年以前に之を聞いて居た、然るに今來て見れば、その支那町は堂々として聳へ、桑港の名所の一つと爲り、米人觀賞の一部と爲つて居る、その由來、事情、變遷の跡は、諸君の僕よりも善く知つて居らるゝ通りである、シアトルには、曾て支那人排斥の激烈なる運動があつた、流石の支那人も、最早身を置くに處なく、すご／＼引去らんとして、いよ／＼その所有せる土地の賣却並びに銀行預金の引出しに掛つた所、經濟界の變、形勢は急轉し、その銀行業者を始め、市中の先達有志は、相携へて支那人の前に頭を下げ、泣きを入れ、一切の放逐論を已めにして、永久の和解を求め、辛ふじてその引上げを押し留めたといふては無いか、支那人の條約上に排斥せらるゝこと依然たり、風俗上より嫌忌せらるゝこと依然たり、而して能く此の如し、これ何のためぞや、その實力ては無いか、知るべし、實力あるものには、百の感情論も、嫉妬論も、妨害運動も、煽動演說も、寸効なくして、反つて、その發達の地步、活動の分野、廣袤無限、天地は只力ある者にのみ與へらる、力ある者のみ之を占む、又何等の制限も、故障も、障礙も無きことを。

問題は、諸君が、支那人以上なりや、支那人以下なりやといふに歸着する、而して僕は、諸君が當然に支那人以上であることを信ずる、左すれば紛々たる眼前の事何かあらんやだ、僕は、それらの一時的故障、妨害には、少しも屈託せぬものである、屈託するの要なしと思ふものである。

只々諸君次第のみ

敢て語を切にして言ふ、所謂日米問題を解決するは、

諸君の任なり、諸君と彼れ米人との間の事なり、必らずしも我政府と米政府との間の事にあらずと。

此く言ふは、我が政府に、日米の問題を知らざる顏して等閑に過せよと謂ふにあらず、政府は政府として爲すべきの務めあり、爲しつゝある骨折も多からん、政府は、その爲め世に全力を盡すべし、そは僕の希求しつゝある所である、去り乍ら僕は諸君に言ふ、我が政府の努力と、米政府の協和的態度に依り、幸に條約は改正され、加州の法律のそれすら、工合よく條正されたりとするも、若し、諸君と米人と、關係、今日の如く他人行儀にして、その間に一點の親情なく、意思の疏通なく、好意の理會なくば、矢ッ張駄目である、到底駄目である、いつ〳〵迄も駄目である、之に反し、若し、米人と諸君との間に、その理會あり、疏通あり、親善の情合關係だに融洽し居らば、たとへ法律は今の如く酷に、條約は今の如く不備なりとも、僕は、諸君の活動の地歩尚存し、その發達の餘地尚廣く、諸君の永住的基礎と計畫と共に鞏くして、日本民族の世界的雄飛播延の大業は、確實に諸君に由つて成し遂げらるる譯だと信ずるのである。

左ればこそ、之を成すも諸君に在り、之を成さざるも諸君に在り、只々諸君次第だと謂ふ所以である、諸君の飽迄堅忍し、持久し、努力されんことを祈る。

僕は略ぼ此の如きことを我が同抱に告げた、凡そ滯米中の感想多かりしといへども、これが、その最大、最强、最烈なるものであつた、因て、米人に關することを語らずして、之を語つた、記者足下、並びに讀者諸君の高諒を仰ぐ次第である、若しその米人に關するものに至つては、他日更に再説の機會ならんことを待つ、二月十五日朝、昨夜、營業税案の討議て、悪戰苦鬪を經、大いに疲れて聊か喜び、百感叢集の時に。

■蘆花德富健次郎著

みゝずのたはごと

參拾四版

著者が田園生活の產物なる短小說、即與スケッチ、瞑想、默想、紀行等皆始めて世に出づるものゝみを集む。雲雀の歌、麥の風涙と笑と恐怖と幽玄の詩趣卷中に充滿す。出版以來既に數萬部を賣悉し三十四版發賣す。

■紙數約八百頁定價金壹圓五十錢郵稅十六錢■

發行所　東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂
東京日本橋區呉服町八（振替二〇七六番）服部書店

日記兼用

卓上備忘曆

約束違反豫防器現はる

本器は目下歐米諸國に於て「デスクカレンダー」又は「メモワヰル」と稱し家庭用事務用として大流行を極めつゝあるものです。既に我邦に於きまして內閣大臣の卓上や銀行會社の重役のデスク上に實際に使用せられて居ります。其特徵はカレンダーであつて日記と備忘錄とに兼用する事が出來る點です、本器を巧に應用すれば大切の約束を忘るゝ憂がありません。甲號七十五錢乙號七十五錢小包各八錢

構造を示せる目錄は往復ハガキにて御報次第進呈

發行元　東京市銀座通新橋　新橋堂
（振替東京二〇〇番）
賣捌元　市內並に全國各地書店

體力養成叢書

第一篇　大澤醫學博士述　冷水浴と冷水摩擦　定價二十錢郵稅四錢

第二篇　二木醫學博士述　腹式呼吸　定價廿五錢郵稅四錢

第三篇　栗本醫學博士述　海水浴　定價廿五錢郵稅四錢

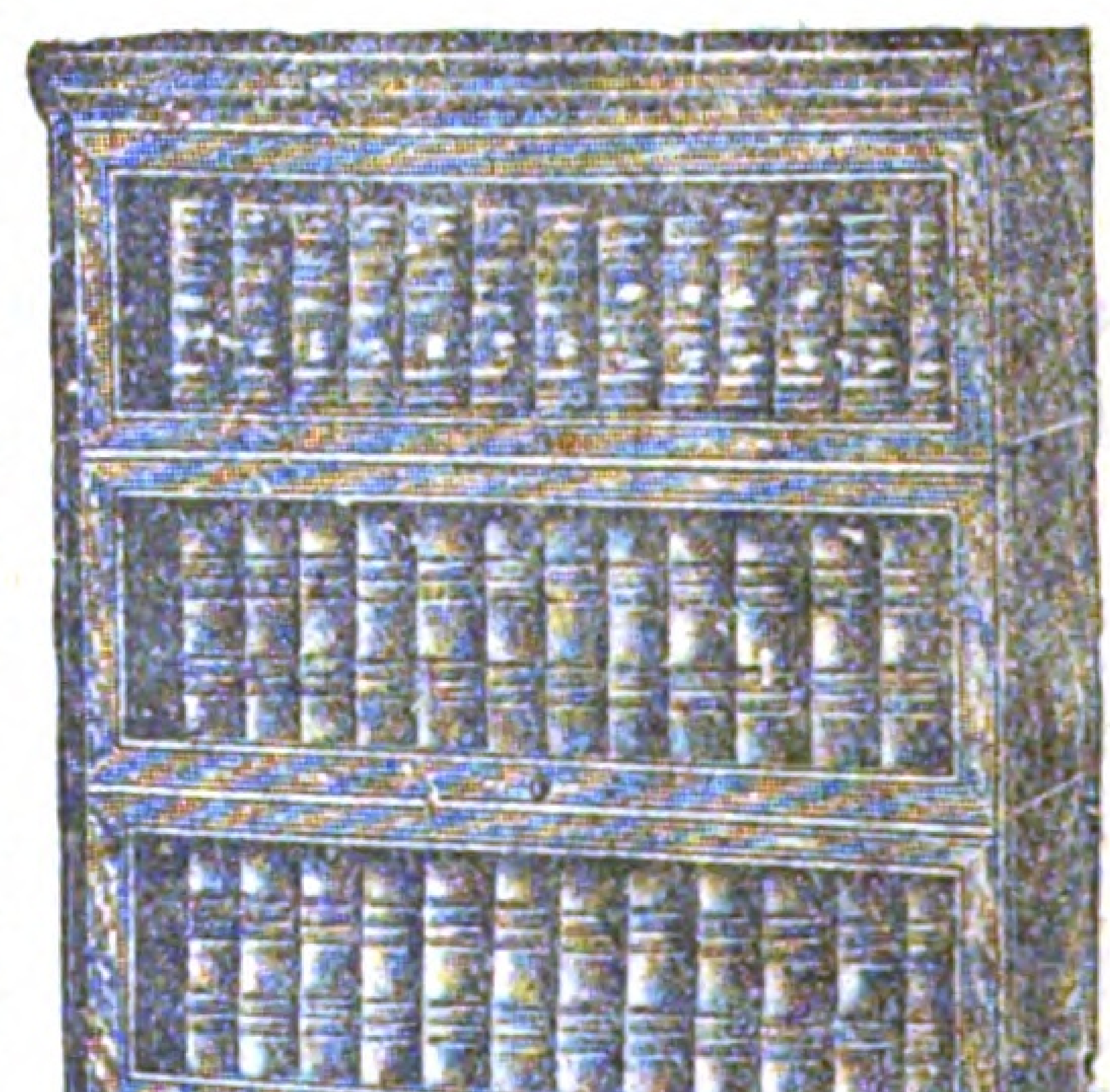
第四篇　樫田醫學博士述　滋養物の攝取　定價五十錢郵稅六錢

第五篇　遠山醫學博士述　新呼吸　定價廿五錢郵稅六錢

●文明の家庭に必備の家具!!!

組合せ本箱

構造を示せる目錄は往復葉書にて御報次第進呈



▲某宮家德川公爵家太隈伯爵家を始め其他の諸名家より御注文の榮を辱うせる本箱!!

▲多數の優れた特徵を有した現時歐米諸國に大流行を極めゐる本箱!!

定價
金廿六圓檜製
金廿八圓欅製
金卅圓櫻製

發賣元　東京市京橋區銀座通新橋際　新橋堂　振替口座東京二〇〇番　電話新橋二九一九・二九九一番

（中付一の一）

類書中の模範として實に天下一品

醫學博士 永井潛先生序　醫學士 杉江董先生

兩性と體格との關係及其解剖

男女とは何ぞやとは、よく言ふ所なるが、よく其の差異を究めたる者はなし。蓋し男女の差異は啻に外形上のみならず内臓及び組識の如き極めて細微なる點に至るまで存するが故也。此等の差異を發見して初めて男女兩性に關する諸問題は解決せらるべき也。そも醫師の男女に依て其治療法を異にするは何故なるか。何故に教育家は男女に依て其方法を別にするか。何故に法律家は男女に依て其待遇の道を殊にするか。これ男女は根本に於て體格及び心性を異にするが故也。本書は科學上及び醫學上より男女兩性の差異と相互の關係とを極めて眞摯に說述したるものにして、文章は平易流暢何人にも了解し易し。文學者、醫師、教育家、法律家等は言ふに及ばず、一般男女の參考書となり家庭にも缺くべからざる良書たり。

既婚未婚との男女幾百萬人の必讀書

性慾學者 澤田順次郎先生合著

最新刊

實物寫眞木版七十餘挿入
懷中持新式一頁菊判組總布製金文字入天金裝幀頗高尚極美定價貳圓

特價 金壹圓卅錢

送料密封十二錢清朝樺海外三十錢

發兌 東京神田區五軒町十八番地 有文堂書店 電下二四五二 振替東京二三七

泌尿生殖器科

黴毒科及外科

診察 午前 午後

入院應需

本郷湯島新花稻荷祠前

下平尿科醫院

電話下谷二三四二番

讀書せらるゝ諸賢の是非共備ふべき第一の寶庫は是

大正參年全部改版增訂發行

分類圖書總目錄

定價金五拾錢送料金六錢切手代用御注文は壹錢増

特長 本目錄は往時より本日に至る迄に東京市内は勿論日本全國各書籍出版店より發行されたる各種類の書籍名定價送料等全部詳細に網羅したるものなり故に本目錄を見ればあらゆる書籍名知れ望む所の

特典 書を弊店より壹割引にて求むるを得（醫書教料書は除く）

販賣元 東京神田鍋町電車通 振替東京壹六九八六 明進堂書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶學界稀有の二大名著◀

文學博士 福來友吉著

心理學審義

（大正二年三月新刊）

本書は心理學の泰斗福來博士が、數年の星霜を費して新に著作せられたる一大名著にして、邦文にて叙述したる心理學書中の白眉たり。巨擘たり。次に記せる特長につきて、其の內容の全豹を窺ひ、一本を座右に備へられんことを切望す。

本書の特長

◉生命を以て一切の精神活動及び生理活動の根本的原理と解釋し、オイケン及びベルグソンの生命哲學と相呼應す。◉有限なる人格中に胎藏せられたる無限の法心的意義を格致し、以て人生の歸趣を闡明せんことを期す。◉產生（創造）を以て人格の根本義と解釋し、以て宗教、道德、藝術の眞相を極めんことを期す。◉從來の心理學が精神活動を機械的に分析し結合するに止まりたるに反し、本書は生命實境を目的とする統合的一體の活動として精神及び生理を解釋せんとす。◉從來の心理學は意識を最後との事實して、其の存在を承認するに止まりたるに反し、本書は生命實現論の見地よりして、意識存在の理由を說明せんことを期す。◉以上の如くなるに依り、本書は在來の心理學と異りて倫理學・宗教學・哲學等の理論と交涉し、以て人生の眞面目に接觸せんことを期す。

上製背革菊判全一冊
紙數千六百餘頁
插畫數百個
定價四圓八拾錢
送料金拾六錢

東京高等師範學校教授 文學士 吉田靜致著

倫理學演義

（大正二年七月發行）

好評嘖甚

本書は著者が該博にして確實なる知識と、最新にして卓越せる見識とを以て、倫理學の巨細を懇切に叙說せられたる名著なり。著者嚮に『倫理學要義』を公にして多大の好評を博し、今や又本書を著して斯學の蘊奧を闡明し、以て學界に貢獻する所あらんとす。中等學校教官・文檢受驗並に一般斯學考究者の參考書として蓋し無二の良書なるべし。敢へて推薦す。

上製背革菊判全一冊
紙數千三百余頁
定價金參圓八拾錢
送料金拾六錢

（中付一の三）

東京日本橋區本石町 振替口座東京二八〇番
寶文館
大阪市東區淡路町 振替口座大阪四三番

信用なき小店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



ソマトーゼは食慾を振起し血液及體量を増加し元氣を旺盛ならしむる故に諸般の衰弱を速に恢復せしむ

お氣の毒です。

學問があつても、才氣があつても身體が弱かつたら諺にいふ「寶の持腐」ばかりでなく其人にとつてこれ以上な不幸はありますまい！

身體の弱い人が丈夫になる一番早い方法は有名なる滋養強壯劑ソマトーゼを服用するにあり

說明書進呈

定價
粉末 百瓦入 二圓四十五錢
五十瓦入 一圓三十五錢
液狀 一瓶 一圓六十錢

發賣元 橫濱市山下町 神戸市明石町
バイエル會社

(中付一の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

コムミッションに對する論議と研究

△コムミッション問題

法學博士　堀江歸一

コムミッションなるものは、經濟上の必要から、或る種類の營業者の收益と爲る可きものであつて、營業其ものが今日の經濟社會に於て必要であり、有用である以上は、コムミッションの存在を否定すること出來ない。彼の仲立業、問屋業の如きは、商行爲をする者の間に立つて、其成立を媒介したり、又は商業家の委託を受けて、賣買を行ふものであつて、コムミッションを以て、自家營業の收益とする。賣買の仲立をしたり、賣買の委託を受けたりする者があるので、今日物資の供給と之に對する需要とは廣い範圍に於て調節されて、物價の水準を保たしめ得る譯であるから、斯る營業者は社會上必要であり、又有用であり、斯る有用な職務を爲す者がコムミッションの形で利益を得るのは當然と云はなければならぬ。

然るにコムミッションは斯る仲立業とか、問屋業とか、立派な看板を懸けた者が得る許りでなく、或る人が政府なり、大會社なりの注文を或る事業家に取次いだ勞に酬ゆる爲めに、支拂はるゝこともある。單に其人の紹介で發された注文に對して許りでなく、第一回の取引後、續いて行はれる同一手筋の取引に對しても依然最初の紹介者にコムミッションを與へる例がある。さうすると最初大きな注文の紹介をした者は一度紹介をしたゞけで、其後は座ながらにして、大なるコムミッションを授與さるゝ譯で、此勞に對して酬ゆる所大に過ぐるの觀はあるが、コムミッションを與へる事業家の方から云へば、斯く最初の紹介者を優遇して置いて、更に第二、第三の紹介者を得、益々事業の繁昌を謀るに外ならないのである。僅少な勞を爲したゞけで、多額のコムミッションを得て、暴富を貪ると云ふ點に於て、斯るコムミッション取りは世間から非難を蒙るかも知れないが　コムミッション其ものゝ發生した由來に就ては、攻撃を加へる餘地はないのである。

昨今海軍のコムミッション問題で、頻る攻撃されて居る赤星某が英國の造船所から得たコムミッションの如きは、即ち此類のものではあるまいか。若し然りとしたならば、コムミッション其ものに就ては、非難はないが、尙ほ政府が直接に英國會社に注文を發して然る可き場合に、特に赤星某を製艦契約に介入させて、コムミッションを食らせたのは不可

僻の事であるし、又赤星某の得るコムミッションは獨り某の所得と爲るに止まらず、某々契約に介入させた或る有力者に頒たるゝのではないか、共に議す可き問題であるし、既に赤星某が斯る仲立業に依て、莫大な收入を得て居るとすれば、政府が今日まで同人の仲介業者として得て來た營業收入に營業税を賦課しなかつたのは、大なる手落ちである。

コムミッション問題が以上の事實だけで止るとすれば、大なる議論とはならないが、昨今世間に傳へらるゝ所に據ると、製艦契約の局に當る海軍々人なり、製艦方針を決定する海軍高官が外國會社からコムミッションを食ると云ふことであつて、まだ此風聞を否定するだけの確證がないやうである。山本なり、山内なりが赤星某と同じく、仲立業を行ひ得る人間であれば、海軍省と外國會社との間に立つて、製艦契約に斡旋し、其勞に對して、コムミッションを取ることは敢て差支ないのであるが、彼等は帝國の軍人であつて、商業を兼營するを許さない。商業を營むことの出來ない官吏が官職に居つて、コムミッションを收めたとしたならば、是れはコムミッションに非ずして、立派な收賄であると云はなければならぬ。或は外國では商業家が注文を紹介した人にコムミッションを與へるのは一箇の常習であつて、假令ひコムミッションを辭した所で、注文品の代價は低減しないと云ふ事を擧げて、暗にコムミッション取りを辯護する者もあるが、私は此事實に就て疑を挾まざるを得ない。無論大會社が注文を受けるときには、多くは仲立業者の仲介に依り、此仲立業者にコムミッションを拂ふ以上は、物品の代價もコムミッションを含ました程度を標準として定める譯であるが、一國の政府が直接に外國會社に注文した場合、即ち注文者の性質上、仲立業者の口入を要しない場合にも、尚ほ外國會社はコムミッションを含ませた代價を徴收して、裏面に於てコムミッションを誰かに與へると云ふことを主張するであらうか。誰れかに與へやうと云うても、正當の貰ひ手はないではないか。英國政府自身も自國の會社に軍艦の製造を託することがあるが、此場合に會社は英國の海軍當局者にコムミッションを與へることを提言するであらうか、官紀の嚴肅なる英國に於て此類の事あるは、私の信ずる能はざる所である。

假に一歩を讓つて、コムミッションは取つても、取らぬでも、注文品の代價は同一であるとした所で、既に日本の官吏として取る可からざるものを私した以上は、自ら此事が自分の弱味と爲り、注文品の檢査、注文品製造中の監督が粗漏と爲り、粗惡な物品を國家に推し付ける結果と爲るのは免かれ難い。然らばコムミッション問題にして事實であるとすれば、海軍々人は收む可からざるものを勝手な口實の下に私し、國家に粗惡な物品を賣付ける手傳をしたと云ふ責に當らねばならぬのである。

右の如くであれば、コムミッションなるものは、或る種類の商業に於ては、正當に發生す可き商業上の收益である。同時に、一歩を誤まつて濫用されたならば、賄賂と爲つて、其授受者を罪するのみに止まらず、社會を毒するに至るのである。コムミッション問題は偶々海軍省と外國の造船會社との關係に就て、六ケしい事件と爲つたが、此問題の生ずる

のは、斯る狭い範圍に限られず、御用商人の存する所必ずコムミツシヨンが伴うて、色々な害を生ずるのである。玆に於てか、英吉利のやうな社會上の風紀の嚴肅なる國に於ては、御用商人なるものを蔑視し、如何に富を蓄積したからと云つて、社會の上位に立たせないのは勿論、政治家の如きは御用商人と接近することを好まない風がある。然るに我國に於てはどうか、重なる富豪實業家の如き、多く御用商人ならざるはなく、三井三菱の大を以てしても、政府に石炭を納めるとか、官用品を輸入するとか、色々の御用をして、富を積んだことは爭ふ可からざる事實である。殊に近年官業の擴張されたに隨て、御用商人を要すること益々多く、實業家の如きは政府の官吏に接近して、御用を奉ずることを以て能事として居る。斯る有様であつたならば、賄賂の性質を帶びたコムミツシヨンが我國に横行して、經濟上の道德を害するのは明白の事實であつて、私は一方に海軍の收賄問題（敢てコムミツシヨン問題と云けず）に對して適當の處斷の下されると同時に、世間の識者が更に眼界を廣くして、政府と一般御用商人との關係、官業と民業との關係、官業擴張の餘波として、御用商人の跋扈を致した事實等に對して、相當の注意を致すに至らんことを望むのである。

△コムミツシヨンを取るは竊盗強盗に等し

安部磯雄

コムミツシヨン問題で大分國論が沸騰した。私はこれを當然の事だと思ふ。如何に從順な國民でも國務大臣が公金を着服したといふ評判を聞いては默つて居る譯にゆくまい。大臣としても斯る疑をかけられたる以上これを曖昧の裡に揉み消す譯にゆかぬ。國民も大臣も飽くまで其僞すべきを僞して其黑白を判明すべきである。實際今日の如き物質萬能の社會に於て金錢の誘惑ほど有力なるものはない。若し天下の公人が此誘惑に打負くることゝなれば、精神教育といふ様なことは全く無意義のこととなる。公金を着服したる人が大臣の椅子に在り、國民がこれに儀表を仰ぐことが出來ぬとしたならば道德の權威は何處にあるのだらう。勅語も倫理教育も全く無視せられて、精神界は全く暗黑に鎖されてしまふのである。私は外敵の侵入よりも寧ろ此の如きことを恐れる。國民は日露戰爭當時に於ける熱心を以て此一大誘惑を擊退せねばならぬ。然し實際のところを言へば國民の熱度は未だ白熱といふ程度に達して居ない。これは全くコムミツシヨンといふことに就て徹底した考へがないからである。一部の人々の間にはコムミツシヨンを取るのはそんなに悪いことと

かしらんたどと極めてボンヤリした考へを懐いて居るものもある位だ。コムミッションを取るのは實業界の習慣だ、大會社が殆んど悉くコムミッションを提供するのは公然の秘密だなどと物識り顔に說いて居る論者もある。こんな曖昧な思想に占領せられて居る樣では攻擊の鋒が鈍るのも無理はない。コムミッションは果して彼等の言ふが如くに罪のないものであらうか。

コムミッションの本義は委任とか委托とかいふことである。從つて委任せられ委托せらるゝ所の人をもコムミッションといふ樣になつた。此場合にはコムミッションを委員と譯するのが適當であらう。今度海軍問題を調査するために任命せられた査問會の如きはコムミッション卽ち委員である。コムミッション問題のためにコムミッションが任命せられたのは最も適當のことであるかも知れぬ。委托された人をコムミッションと呼ぶのだから、終に貨物の販賣を依托せられた商人をコムミッション、マーチヤントと稱する樣になつた。問屋は卽ちこれである。問屋は當然依托者から口錢を受取るのであるから、終に口錢をもコムミッションと呼ぶことゝなつた。コムミッションを取るのは實業界の慣習だといふことが上記の如きコムミッションを意味するならば、何人かこれに對して異議を唱へるものがあらう。問屋や其他の依托販賣商が相當の口錢を取るのは恰も大臣が俸給をもらひ勞働者が賃銀を受くると同樣で何等不都合の點はない。其他保險會社の勸誘員が一定の手當以外勸誘金高に應じて手數料を受け、或は汽船會社員が自ら勸誘したる乘客一人に付き若干の報酬を會社より受くるが如き何等非難すべき點はない。此等の手數料は啻に弊害なきのみか、從業員を敏速に活動せしむるの効がある。然し斯る有益なるコムミッションのみを見て、すべてのコムミッションが實業界になくてならぬものであるかの如く考ふるのは玉石混淆も甚しい。或種のコムミッションは上記のものと全く其性質を異にし、軍人は勿論、實業家と雖もこれに手を觸れてはならぬものである。例せば今回の問題になつて居る所のもの、卽ち賄賂の性質を帶びて居る所のコムミッションである。コムミッションは正當取るべきものと取るべからざるものとの二種に區別することが出來る。正當取るべきものを取つた場合には公明正大であるから何等隱蔽すべきものがない。取るべからざるものを取つた場合には必ず秘密といふことが伴ふて居る。問屋は依托者に對しても一般社會に對してもコムミッションを取つたことを公示することが出來る。然し軍艦でコムミッションを取つた場合には、贈賄者に對してこそ公明正大(?)であるかも知れぬが、國民に對してこれを公開する譯にはゆかない。同じくコムミッションといふても其の間には雲泥の差がある。更に私は兩者の間に一層大なる相違のあることを認めずには居られない。問屋や委托販賣商の間に行はるゝコムミッション制度は實業界の運用に大なる便宜を與ふるもので、現在の社會組織に欠ぐべからざる重要機關である。然し賄賂的コムミッションは全然これに反して居る。斯るコムミッションが道德上如何に非難すべきものであるかは別に多言するの必要はあるまい。單に實業界に及ぼす害毒といふ點より考へてもコム

ミツションの含むべきことは明白である。コムミツションは贈賄者のポケツトから出るのではなくて、品物の價の中に含まれて居る。例へば一千萬圓の軍艦を注文して五分のコムミツションを取るとする。其場合に於て造船會社は豫め五分のコムミツションを見積つて一千萬圓の中に計上して居ることは明白である。これによりて見ればコムミツションが廣く行はるれば行はるゝ程物價は一般に騰貴することゝなる。別言すれば少數者の非行によりて社會一般が損失を蒙る譯だ。更に恐るべきことはこれによりて技術の標準が低下するといふことである。實力の競爭が繼續する間は眞價を有するものが社會に歡迎せられる。從つて技術の發達を促すことゝなる。然しコムミツションを贈りて得意を得るといふ惡風が流行することゝなれば、技術で競爭するよりもコムミツションを多く贈るものが成功することになる。要するにコムミツションの目的は粗品を高く賣りつけて其利益を當事者が分配するに在る。私は此意味に於て政治界のコムミツションを苦々敷思ふ如くに實業界のコムミツションをも甚だ危險に感ずるのである。

コムミツションを受くるのは貰ふのであつて取るのではないと思ふて居る人があるらしい。若し大臣が竊盜をしたとか强盜をしたとかいふ嫌疑を受けたとしたらばどうであらう。如何に呑氣な人でも默しては居るまい。然し今日大臣達がコムミツション取りの汚名を蒙つて居るに拘はらず未だ誹毀の訴訟すら起さないのを見れば、彼等はコムミツション取りと强竊盜の間には尚ほ大なる距離があるものと考へて居るらしい。私にはこれが甚だ不思議に思はれる。コムミツションを解剖すれば公金費消である。何處に竊盜と擇ぶ所があらうか。假りに軍艦建造費を一千萬圓とし、コムミツションを五十萬圓とする。此五十萬圓が如何なる形式に於て軍艦注文者たる軍人の手に渡さるゝとしても、これが一千萬圓の中に含まれて居ることは何人も疑ふことは出來ない。若し此五十萬圓が公明正大なる手數料であるとすれば、軍艦注文者は最初これを差引き殘額九百五十萬圓を造船者に仕拂へばよいのだ。然しこれは勿論正當なるコムミツションでない。其處で一度これを造船者の手に渡し、更に彼からコムミツションといふ形式に於て受取るといふ樣な手續を履むのだ。これこそ眞に形式である。其實は九百五十萬圓を造船者に渡し、自ら五十萬圓を着服するのである。もらつたのでなくて取つたのだ。公金を橫領したのだ。これは決して私がコジツケた說ではない。原來賄賂といふものは强竊盜の性質を有して居るものである。贈賄者の方から言へば少し許りの賄賂を以て大なる利益を釣らんとするのである。受賄者も亦釣らるゝと知りながら橫着に其餌を食ふのである。英米人は慥に賄賂を强竊盜と同一視して居る樣だ。スタンダードの辭書にもウェブスターの辭書にも賄賂なる語が竊盜及び强盜と同一意義に用ひらるゝ場合のあることを示して居る。私はこれが眞實の解釋ではないかと思ふ。どう考へてもコムミツション取りは竊盜である。コムミツション取りの嫌疑を受けたる大臣は全く强竊盜の嫌疑を受けたのも同樣だ。大酒家といふ誹謗を受けてさへルーズヴェルトはこれを法庭に訴へたではないか。然るに山

本首相は海賊の頭領と罵られても尙ほ毀毀の訴へを起さない。私は實に奇々怪々の事であると考へる。

然し内閣たると外國たるとを問はず、造船會社がコムミツシヨンを提供することは公然の秘密である。コムミツシヨンを取らぬからとて造艦費を割引して吳れる譯でもないから、取らぬが損だといふ考へも起るのであらう。若しコムミツシヨンを取つてこれを公明正大に使用するの途があれば、別段差支がないかも知れぬ。私は某會社に於て比較的公平なる賄賂處分法の行はれて居ることを聞いた。該會社は毎月莫大なる物品の買入を爲すのだから、購買係は常に賣込商人より種々なる贈物を受くる。然し購買係は一々これを會社に渡し、會社は時々此贈品に低廉なる價を附し、抽籤によりてこれを社員に分配するのである。今日の如く賄賂的贈與の一般に行はるゝ我國に於ては此の如き贈與品分配法を取るのは比較的公明なる途であらうと思ふ。然し政府として此の如き方法を取ることは無論許すべからざることである。若し政府にして其受けたるコムミツシヨンを維牧人の中に組込むことが出來れば僅に公平なる方法に相違ないけれども、コムミツシヨンを受くるといふこと其自身が既に國家の威嚴を損するではないか。私はたとひ千萬圓のコムミツシヨンを棄てゝも國家を精神的に救ふのは公人の當に爲すべきことだと思ふ。斯く論じ來れば私は如何なる方面より見てもコムミツシヨン問題を寬恕することは出來ない。然し今度海軍問題の爆發したのは我社會全體に賄賂の惡習が充滿して居る結果ではないかと考ふる時私は實に慄然として恐れざるを得ないのである。政府に關係ある會社は盆と年末に必ず重なる役人に附物をするといふことを聞いて居る。某會社が贈品として買ひ入るる反物だけでも毎年四五千圓に及ぶといふことだ。地方の荷主が魚河岸に來る時問屋は先づ彼を料理屋に伴ひ或は待合に案內して杯盤の間に取引をするといふ有樣だ。我國に於て賣買の取引をすれば其處に必ず或種の賄賂が行はれる。實に我國は火山國であると共に賄賂國である。海軍の收賄事件を責むるはよい。然し首相の財產公開を迫ると共に自己の財產公開を爲し得るものが果して幾人あるだらうか。私は海軍收賄問題を獨り政治家のみに放任したくない。寧ろ政權爭奪といふが如き疑のない宗敎家及び敎育家の奮起すべき時ではないかと思ふ。收賄問題は單に政治問題のみとすべきものでない。これは維新以來最大の風紀問題である。宗敎家や敎育家がこれに對して沈默を守る樣では、彼等自ら最高批判者たるの權威を放棄するものではないか。私は鶴首して彼等の間より正議正論の出でんことを待つて居る。

△商賣人には當然

大倉喜八郎

コムミツシヨンを取るといふ事は商賣人には當然の事である。只之れをお役人に當嵌める事は出來ない。

元來商賈といふものは、物品の處を換へるのである。その處を換へる爲めには必ず勞力を要するのであつて、其勞に酬ゐる處のものがコムミツシヨンである。この勞力を費すことなしに、又は別に給料を他から受けてゐるものがコムミツシヨンを取るならばそれは全然不都合と謂はればならぬ。

△社會經濟より見たるコツミツシヨン

服部文四郎

一

小リヒテル事件の飛報一度伯林より我國に傳はるや、我國の朝野は爲めに愕然として驚かされ、或は衆議院に或は民間各所の演說會に海軍の非行を非難し之を攻擊するもの甚だ多く、終には民間に於ては日比谷の騷擾を惹起して恰も日露戰後若くは昨年憲政擁護運動の二の舞を演じ、衆議院に於ては縱令其通過を見ること能はざりしとは云へ內閣不信任案となりて院內爲めに紛々を極め、事態甚だ容易ならざることとなつた、而して諸種の運動は直接に其効果を奏すること比較的少なかりしとは云へ少なくとも我國の朝野をして海軍部內に何等かの腐敗の伏在せるを大に疑はしめ、又此の事件は甚だ容易ならざるものなれば現政府に於ても其責任を明らかにするが爲めに何等かの手段を執らざるべからざることとならしむるに至つた。

抑も事は斯く重大なる關係を有するに至つたが併し其事件の發端はリヒテルなるものがジーメンスシユルケツト會社の我東京支店より盜み出せし重要秘密書類の中に同會社が我海軍々人にコンミツシヨンを支拂ひつゝありしことが知れたと云ふにある、併し固より未だ其證據明白となりたる譯ではなし、又縱令證據明白何等疑ふ餘地無きものとなりたればとて其れが凡ての我海軍々人の甚しき腐敗を示すものとも一概に斷ずるとは困難であるが、但し其孰にせよ此の問題の根本はコムミツシヨンにあるので、一にも二にもコムミツシヨンを責め、海軍々人はコムミツシヨンを取りたるが故に暴富を極めて居るのである、實に甚だ不都合なる腐敗なりと云ふにある。

併し此の問題の終局は如何に成行くや、調査の結果海軍々人中にコムミツシヨンを取りたるもの明らかとなり、從て政治上には內閣諸公が責任を負ふて辭職することとなり、裁判上には刑事問題となり、財政上には海軍費の削減となるや否や、其れは先づ兎に角として其根本たるコンミツシヨンなるものは如何なるものなるや、コムミツシヨンは我國語に之を譯して手數料若くは口錢と云ふべきものなるが之れは本來惡しきものなるや否や之を定むるが先づ第一必要である。

二

惟ふに今や世上にはコムミツシヨンと云へば直ちに惡いもの、コムミ

ツションとは賄賂に外ならず、腐敗行爲なりと斷ずるもの甚だ多き樣なるが、又一方にはコムミツションとは決して惡德に屬するものにあらず却つて之れは正當なる報酬に屬するものなりと解するもの甚だ少なくない、現に世上にはコムミツシヨンマーチヤント(Commission merchant)なるものあり、立派にコムミツシヨンを以て渡世をして居る、而して此等のコムミツション商人なるものは歷史より云ふならば十四五世紀に始めて歐洲の商業界に現はれたるもので遠隔の地方間に於て取引する外國貿易の發達と相伴ふ 發生したるものである、即ち商人は甚だ遠隔なる地方に自ら出張するか、若くは手代番頭を派遣するが如きは時に大なる困難を感ずる者なれは斯る場合には夫れ〲平素より取引する者を定め置き自己の爲めに賣買其他の行爲をなさしめたものである、之れが所謂コムミツション商人なのである、此のことは今や各國の法律中にも明らかに承認せられて我國の商法中にも其規定あり、此の種の商人は他人の爲めに自巳の計算で取引する者を云ふのである、然れば此の點より見るならば、コムミツション商人は決して違法なるものでないばかりではなく、寧ろ商業取引上必要なるもので其商人の受取る手數料即ちコムミツションも亦從て適法な立派な報酬なりと見なければならぬのである、コムミツションが不法なる若くは腐敗せるものなりと見るは大なる見當違ひである、併し斯く云はゞ人は必ず其れはコムミツション商人のことなり、商人たる以上其勤勞に對して必ず報酬を受けざるべからざるものなれば之れは敢て怪しむに足らないと云ふに相違ない實に其通りである、然らば商人以外の私人は如何、例へば玆に交際廣き一紳士あり、非常に多數の人を知り居りたれば其内の甲なるもの其紳士に依賴して乙に或物若くは事件を紹介せんことを以てしたりとせよ、然るに甲は其紳士の紹介ありたるが爲めに其目的を達したりとせば甲は之れより大なる利益を得たるものなり、之を以て紳士は其紹介に對して一種の報酬を要求したりとせば如何其要求は決して不法なるものではあるまい、又甲に於ても其紳士の紹介ありたればこそ大なる利益を得たるものなりとするに於ては其要求を退ける理由はない、而して此の要求其報酬は何である、之れコムミツションに外ならざるのである、然るときは一私人と雖もコムミツシヨンを取るは決して不法なるものではあるまい。

又吾人の日常經驗する處に於ても例へば不動產賣買に於けるが如く仲買若くは仲介者たるものに對しては必らずやコムミツションを拂つて以て正當のことなりと考へて居る、其仲買若くは仲介者が其を職業とし商人の部類に屬して居るか否やは敢て問ふ所ではない、此種のコムミツシヨンも亦不法にあらざるのみならず適法のものにして一種の報酬と見なければならぬのである。

三

斯く云はゞ更らに又右の如き場合は私人の場合なり、私人は其行動自由なり但し國家に於ては然らずと云ふものあらん、即ち國家はコムミツシヨンを取ること能はずと云ふものがあらう、併し現今何れの國に於ても手數料即ち一種のコムミツシヨンは國家の立派なる收人の一として財

政學上に於ても詳細に研究せらるゝ所なると共に國際經濟上より見るならば英國は實に國と國との貿易の上に於て大なるコムミツシヨンを取りつゝあるもので或意味に於ては一の大なるコムミツシヨン國(Commission country)であると云ふことが出來る、而も之れが爲めに英國は腐敗して居ると云ふこと能はざるのみならず、英國々家の經濟的基礎は實に此のコムミツシヨンにあると云ふことも出來るのである。

斯く觀し來らばコムミツシヨンは一種の報酬で其報酬は多くの場合勤勞に對するものなるが故に之れを經濟學上より見るならば一種の勞力に對する報酬即ち賃銀(Wages for labour)と云ふべきである、其勞力が正しいものならば其報酬たる賃銀は之れ又正しいもので決して非難すべきものではない。

今更らに之を外國の例に付て見るも我國の人々が常に唱ふるが如くコムミツシヨンなるものは極めて普通のことである、西洋諸國に於ては如何なる事に對しても必ずコムミツシヨンを拂ふのである、甚しきは巡査も平氣でとる、之れ惟ふに西洋諸國に於ては物質的の思想大に發達し、又人の勞力を尊重して他人の勞力に依賴したることあらば其輕重は兎も角必ず之に相當する報酬をなすべきものとするに基くものと思ふ、我國の如く人に隨分迷惑を掛けても之を當然のことと念ふのとは勞力に對する經濟的感念が非常に違ふのである、例へば極めて卑近なることにしても西洋諸國に於ては必ず報酬之に伴ふものなるにも拘らず、我國に於ては然らずと云はざるを得ないものが澤山ある、之れは新聞記者や雜誌記者若くは其訪問を受くるものは夙に十分承知のことである。

夫れ斯の如くコムミシツシヨンは其自身に於ては必ずしも非難すべきものではなく、却て時には其性質上正當なる一種の報酬なりと云はざるべからざるものである、が然ればとてコムミツシヨンは何時如何なる狀態に於ても立派に正當なるものなりと云ふことを得るや否や、或る意味に於てコムミツシヨンを適法なるものなりとするも果して然らば今回我國に起りたるが如き海軍事件に其理を直ちに應用しても差支なきものなりや否や斯く云はば玆に大なる疑問が起る。

さて然らばコムミツシヨンなるものは如何なる場合に正當にして如何なる場合に不法なりとすべきものなりや、コムミツシヨン夫れ自身に於て毫も非難すべきものにあらずとするも其が如何なる關係の下に來りたるとき不法不正なるものとなるや之れが問題である、而して此のコムミツレヨンが不正なるものとなるは之れ實に人的關係にありと云つて大なる間違ひはあるまいと念ふ、換言すれば一個獨立せる人間にて經濟上自營し何れにも雇傭關係を有せざるものなるに於ては縱令コムミツシヨンを取るも之れは敢て非難すべきにあらざるも、雇傭關係を有するか、或は主從の關係を有して他人の爲めに働きつゝあるものが他よりコムミツシヨンを取るに於ては玆に之れは不正不法なるものとなるのである。

四

例へば玆に一の銀行あり、其銀行の貸付係が銀行の資金を他に貸付くるに當りて銀行の分として利息若くは手數料を取る外に尙個人として別

にコムミツシヨンを取り之を自己の懷中に着服するが如きこと之あらば如何、之れ銀行の貸付係がコムミツシヨンを取る場合にして之れは明らかに不正である、不法である、何となれば銀行の事務員は銀行に對して雇傭關係を有し、銀行より正當に俸給を受け、此の俸給によりて生活し、之によりて銀行の事務を取扱ふ樣に依賴せられたるものである、其れ以外にたとへ其受くる俸給が如何に低きものにせよ、銀行の金を着服すべき理由はない、即ち他語を以て云はゞ銀行と銀行の事務員との間には人的關係が存在するもので其人的關係は雇傭關係なるからである、若し銀行の貸付係にして銀行の資金を他に貸付くる每にコムミツシヨンを取ることが正當なりとせば銀行より資金を借受くるものは其れ丈け餘分に高き利息を拂はざるべからさることとなり、而も銀行は受くべき利益を受けず、時には却て損失を蒙らざるべからざることとなるのである、天下豈に斯の如き理あらんやである。

其と同一の理は之を官吏にも應用することが出來る、即ち今玆に問題となりつゝある海軍々人にしても之れは一種の官吏に外ならぬものであるが、軍人は國家より其俸給を受けて居る、俸給以外に尙ほ他に餘分の所得を納むるを認めては居ない、從令官吏が國家の爲めに或る物品を買入るゝの役目に當るとするも其職分を行ふが爲めに國家は彼に俸給を與ふるので、之れより餘分の報酬を貪るべきものではない、官吏も其國家と人的關係を有するもので之れ又一の雇傭關係にあるのである、コムミツシヨンを取れば不法不正なるや明白である。

若し夫れ銀行の役員なり、國家の官吏がコムミツシヨンを取れば之れは明らかに刑法上一の背信罪と見做さなければならぬのである、其罪や決して輕しとせぬ、又た唯一概にコムミツシヨンを取ると云はゞ其罪や甚重きものなりと信ぜられずとするも、例へば銀行の事務員が貸付の場合に手數料を取りたる場合に於けるが如く、不法不正なる金錢を着服するものとすれば之れは恰も彼れ自身が銀行の金庫の中より其れだけの金錢を盜み取りたると事實に於ては異ならないのである、恐るべき犯罪なりとせざるを得ない、蓋し雇傭關係あるものは其の事務若くは其勤勞は主人の爲めに之をなすのである、從て其之れより生ずる凡ての結果は之を主人に歸せざるべからざるものである、主人に歸すべきものを其雇人が之を其途中に橫領すとせば、之れ一旦主人に歸したるものを盜み出したると其結果に於ては毫も逕なる所なきものである。

斯く觀察し來らば從令コムミツシヨン自身に罪なしとするもコムミツシヨンを取ることは時に甚しき不正で、我國にも遺憾ながら不正不法なるコムミツシヨンの行はるゝもの少なからざる樣である、之れは甚だ悲しむべきである、即ち我國の銀行だけにても右述べるが如き種類の手數料は往々にして之あるを見るのみならず、又た聞くこともある、嘗て勸業銀行の貸付には不動産の評價に少なからざる手數料を奪はるゝと聞いたが幸に之れは今や殆んど其跡を絕つた樣である、然るに尙ほ今日に於ても銀行によりては其貸付係が手數料を貪るが故に時には銀行より借入るゝよりも高利貸より借入るゝ方安しと云ふものさへ之れあるを聞く、

諸官省の物品買入れ其他にも此種の手數料若くは袖の下少なからざるものありとは屢々風説かも知れないが人の噂に上ぼる。

五

海軍の收賄事件は今や調査中なりとのことなれば遠からず天下に其眞相を發表せらるゝに相違あるまい、若し海軍々人にしてコムミツシヨンを取りたりとすれば其れは人的關係から當然不正不法なるものである、畢竟これは右の如き人的關係から云ふならば其コムミツシヨンは實に手數料にあらずして賄賂である、賄賂なる以上之を受くるものも之を贈るものも共に有罪なるや明らかである。

遮莫、外國政府に於てはコムミツシヨンは如何に之を取扱ひつゝあるや、若し國家之を受くるに於ては之れ明らかに國家の一の收入として現はされざるを得ない、然らざればコムミツシヨンを受くる代りに其買入品の價格を安價ならしむる方法を取るに相違あるまい、今之を英國に付て見るも英國の議會と豫算並に決算の審議に付ては周到なる用意を拂ふや申す迄もなく到底我國に於けるが如き比ではない、若し海軍々人にして手數料若くは賄賂を納めたりと云ふが如き事實あらば之を彈劾するに毫も憚るものではない、又之を內閣員に付て考ふるも海軍大臣獨り餘分の收入を得て他の大臣が之を知らずに居る筈はない、必ずや斯ること行はれずして買入品の價を低からしむるに相違あるまい。

我國に於ては外國の短所缺點を模倣したのであらうか、今や伊太利に於ては我國と同樣のことが同國の陸軍に關して起りつゝありと云ふことであるが、其他には斯ることは聞くこと稀である、外國の社會道德高くして我國に低きか、或は外國は之を意に介せざる迄道德的感念麻痺して我國の道德的感念甚だ鋭敏なるを示すのであるか、之れも疑問である。

併し今回の事件は或る一部のものゝ間に於て陸閥に好意を有せざりしと今年こそは減稅と念ひしに其れが海軍擴張の爲めに奪はれ海軍に對して好感情を有せざりしものありし所へ、平素海軍々人に暴富を有するものゝ多く、之れ必ず軍艦注文より生ずるコムミツシヨンの所得ならんと邪推しつゝありしに、果然海軍々人の手數料事件湧出し、恰も平素の疑念を解決する樣に響き其間に何等か因果的關係ある樣に念はれるから事件は愈々重大なるものとなつたのである、人は平素を愼むべきものなることは之によりても知らるゝが、去るにてもプーレー、ヘルマン共に外國人にてありながら今や未決監の人となり其の罪名は證據湮滅とか、詐欺取財とか云ふ忌むべきものである、而してジーメンスは少なくとも一旦は二十五萬圓支拂を承諾したと傳へらる、故なきに二十五萬圓と云ふ大金を猥りに書類の爲めに支拂ふ理由なかるべく、此等皆な海軍に關して起りたりとすれば之を疑ふも是非ないことである。

若し海軍省ならぬ海軍々人にしてコムミツシヨンを受けたるものあるに於ては其れは右述べたるが如く不法不正なるものである、天下を戒しむるが爲め嚴重に處分せねばならぬ。

△金を溜めたのが山本の誤り

福澤桃介

我々は商人だから、コムミツシヨンの問題はよく知つて居る。例へばアームストロングとかヴヰツカースとかいふ會社が總代理店を日本に持つて居る。日本から來る注文は、直接であらうが、間接であらうが、必らず其總代理店に向つていくらかの手數料を拂ふ。之ばもう商慣習であつて、さうしないと代理店が働いて呉れない。其代理店で取つたコムミツシヨンを官界に送るか送らぬかといふことは之は又別問題だが、總代理店即ちソールエゼントといふものがコムミツシヨンを受くるのは當り前だ。今回の海軍收賄問題について矢釜しい赤星某なども商人であるからコムミツシヨンを取るのは一向に差支がないし、又彼がアームストロングや何かに注文したのは確か山本時代でなくして樺山時代だやうに思つて居る。兎に角今度の事について赤星某なるものゝ事は議論しなくてもよい。只其赤星が其コムミツシヨンの一部を官憲と別つたとすれば、こりや惡るい。官吏がさういふものを取るのは、之はコムミツシヨンといはない。それは明かに賄賂である。即ち英語でいふブライブである。

ブライブ即ち賄賂の惡るい事は論の無い事であつて、ブライブの多く行はるゝ國は必らず亡び、ブライブの多く行はるゝ會社は必ず衰へ、ブライブを授受する個人は必らず腐敗する。其例は歴史上にも、又現在の事實としてもいくらも見ることが出來る。支那や朝鮮にブライブが盛んに行はれたのは其衰因をなし、英吉利が長く國勢が盛んなのも、ブライブが比較的少いからだと思ふ。

今日問題となつて居る所の、海軍の將校がブライブを取つたか取らぬかといふ問題については裁判の決定を待つべきで、今日では私は取つたとも取らぬとも斷言することは出來ない。然し人間は神様でもなく、又總てが聖人君子といふ譯にも行かぬから、さういふ事は絶無ではなからうと思ふ丈けだ。而して山本伯が取つたか取らぬかといふ問題になれば、私は伯の平素の生活振りや性格などに照して取らぬだらうといふ風に考へて居る。何故といふに、賄賂を取るといふ方の人は多くは金遣の奇麗なものだ。人のものを只取るんだから、相場で儲けた金も同様、多くはパツパと奇麗に遣ふものだ。金遣が奇麗だと、假令賄賂を取つたにしても餘りわるくいはれぬものだ。海軍のものを買つて賄賂を取つたといへば一種異様の感じを起させるけれども、在來の政治家で賄賂に類似したものを取らぬもの果して何人あるか。伊藤公は人も知つて居るが如く貧乏を賣物にした政治家である。然し彼ぐらゐ金を遣つた人間は餘り澤山なからう。其金はどこから出たか。初めは毛利公から、中頃は宮中から、晩年は朝鮮の統監府から貰つた。之に即ち一種の賄賂ぢやないか、若し賄賂といつて語弊があるなら、一種の可笑しな金、少くも當り前の給料でない事は事實である。けれども伊藤公は其等の金を皆奇麗に遣つ

た。政治家として人氣のあつたのも、金遣の奇麗であつた事が一因をなして居る。又陸奧宗光なる者があつた。彼も亦金遣が奇麗であつた、之は古河から貰つた。いはゞ一種の乞食である。古河は一商人であるんだから、其貰ひ方は伊藤公よりもわるい。けれども其貰つた金を皆遣つた。それで評判がよい。更に星亨なるものがある。之は一層わるい。或時には脅迫的行動を採つた。言葉を强めていへば、白晝公然强盜に近い仕打もあつた。然し其取つた金は皆遣つた。だから其行動は非難されても、金に汚ないといふ攻擊は受けなかつた。それで伊藤も陸奧も星も、皆一種可笑しな金を取つた男であるが、金遣が奇麗な爲めに餘り世人の怨を買はなかつた。賄賂は以上の三人の取り方に比べればもつと惡るいに相違ない。惡るいに相違ないが、遣つて了へばそれ程に憎まれなかつた。山本が假令賄賂を取つても奇麗サツパリと遣つて居つたら、恐らく今日の攻擊は無かつたらう。處が山本は金遣が汚ない、恐ろしく汚ない。溜めて〳〵矢鱈に溜め込んだのだ。私は彼の資産といふものも、世間でいふ程のものでなからうと思ふが、兎に角溜める一方にやつたのが彼の間違である。前に話した三人の政治家の外に原敬といふものがある、僕の聞く所によれば、彼の一箇年の生活費及び其他に遣ふ金は凡そ三萬圓だといふ。處が三萬圓といふ金は勿論大臣の月給ばかりでは出來ない。況んや大臣を罷めた時でも彼は其位遣ふ。けれども彼は別に金持とも思はれぬし、又人も金に於てわるくはいはぬ。山本が金があり、若くはあり相に見えるのが彼の一番の缺點である。

山本位の地位勢望を以てすれば、金などはいくらでも取れる、貰ふこともゆすることも出來る。いくら乞食をしても强請をしても、入つた金を皆遣ひさへすれば世間はわるくいはない。例へば今度の東北九州の災害義捐の募集といつても、僕などにいはせると、矢張り一種のゆすりの性質があると思ふ。松方とか澁澤とか大岡とかいふ勢力家の名をずらりと並べて是非出して呉れといふのは明かに一種の脅迫ぢやないか。星の金の取り方と餘り變りはない。けれども其金は決して澁澤とか松方とかの懷ろに入るのぢやない、皆他人にやるのである。だから少しもわるい事はないのである。詰り金は自分の爲めに溜めて置くといふのがわるいのだと思ふ。

又實際金を溜めるのがわるいといふ事には一個の眞理があると思ふ。どうかといふに、天下の富を一箇人が私して居るといふ事は決してよい事ぢやない。然し世の中といふものは妙なもので、一方には世間の攻擊を恐れながら、實は攻擊されるやうな位置にあることを嬉しがつて居るものだ。山本も金持といふ非難を恐れながら、自分の邸宅が廣いとか、何十萬の財産があるとかいふ事が嬉しいのだ。然しそれが嬉しいなら、世間の攻擊などを苦にせぬがよい。又世間の攻擊が苦になるなら、そんなものを遣つて了ふがよい。遣つて了つて、今後は貰つたりゆすつたりして取つた丈けをドシ〳〵遣ふがよい。それが出來ずして、金は欲しい、攻擊は恐ろしいといふのは矛盾である。

僕は以上の見地からして、山本が金を溜めたのが一番間違と思ふ。今

日世間の非難攻擊が山本の一身に集つて、山本一人が天下の不德漢のやうにいはれて居るが、之を攻擊する連中が果して如何なる人間なるかを考へると、實に滑稽の念を禁じ得ない。あれを攻擊して居る代議士などの中にも、友人の借金を踏倒して居るものもあらうし、選擧費などについて隨分香しからぬ事をして居るものも少くなからう。第一其旗頭たる尾崎などもよく、人から金を借りる。中には友人として氣の毒だといふ意味で金をやるものもあらうが、中には又彼は矢釜しい男だから遣るとか、辯が旨いから何かに利用しやうといふ意味でやるものもあらう。彼の意味の金は一種のゆすりと思ふ。そして貧乏〳〵といふが、外國人の妻君を持つて可なり贅澤な暮しをしてゐる。あゝいふ貧乏なら隨分洒脫れてゐるぢやないか。又犬養などは早稻田に六千坪の邸宅を持つて居る。一坪二十圓と見て十二萬圓の邸宅である。十二萬圓の邸宅に住める貧乏なら羨ましい貧乏である。又天下の志士とかいはるゝ頭山とか内田とかいふ連中も皆、ほゞお抱扶持の連中である。此等の人が寄つて集つて、正義とか何とかいつて山本を攻擊する。僕等から見れば、誰か烏の雌雄を知らんやであつて、寧ろ一場の滑稽劇を見るの感に堪へない。(二月六日)

△收賄事件は一點辯護の餘地なし

松山忠二郎

海軍收賄事件について直接に辯護するものは何人もないけれども、間接にそれとなく之を辯護する意味の事をいふものがある。其說は、西洋では何か注文すれば必らずコムミッションの附くのが當り前である。附かぬのは例外である。からして賄賂の意味でコムミッションを取つたのは惡いが、コムミッション其れ自らは當然であるといふやうの事をいふものがある。之は一種の海軍擁護說である。遠方から遠廻しに海軍を辯護したものと見る。そして箇樣な說の出るにも又理由のあることで、現に海軍の御用達をしてゐる會社商人といふものは數が多い。此等の海軍御用達も多少足の裏の擽つたい人もあるのである。そこで陰ながら之を辯護しやうと思ふのである。之は獨り海軍のみでなくて、政府の御用達は總てさうである。鐵道院にもあるだらうし、遞信省、內務省其他すべて御用達がある。そして其中には同じやうな臭氣のする所もあるのである。故に今度のシーメンス事件が餘り大きくなつて其火の手が擴がる時には、此等の御用達の中には餘程不安の念を抱くものがある。そこで彼等が前記のやうな遠廻しに辯護するのは當然であるが、之は大いに間違つてゐる。理窟が違つてゐる。成程銀行とか會社とかいふものゝ中には

コムミツシヨンを當てに營業してゐるものがある。例へば銀行が政府の公債を引受ける。若くは輸入商が何等かの材料を外國から輸入するとして、之を政府に納める。此等はコムミツシヨンが目的である。コムミツシヨンなしには營業は成り立たぬのである。此人達がコムミツシヨンを取るのは當り前の事である。が需要者と供給者と直接の關係に於てコムミツシヨンといふべきものがあるべきものでない。需要者と供給者との間に何か挾つてゐるのはコムミツシヨンを取つても構はぬが、直接の時にはさういふものはない譯である。例へば私が物を買ふが、代價は何程であるというてそれを拂ふ。其中幾分はコムミツシヨンだというて商人から受取ることは決して無いのである。

で、此點からいふと、今度の海軍々人がコムミツシヨンを取つたのはコムミツシヨンで無くて賄賂といはなくてならぬ。海軍の軍人が軍艦其他の兵器を外國人から買ふ時には其の軍人は政府を代表してゐるのである。其軍人の買ふのは政府の買ふのと同じ事である。即ち品物の需要者と供給者の直接の關係であつて、中に何物も入つてゐないのである。然るに其間にコムミツシヨンありとすれば之はどうしても賄賂である。收賄である。從つて收賄の爲めに買はなくてもよいものを買つたり、惡るい物を買つたりするといふ嫌疑を受けるのは當然である。現に獨逸の法廷でも今度の事件を以て不正の取引というて居る。不正の取引がリヒテルの犯罪を誘發したものだというて居る。之を見ても其の不正な事が分る。又不正の取引といふ事を知つたからしてリヒテルも其證據書類を盗み出したのである。之が普通のものであるなれば盗み出しても何の材料にならないから盗む譯はない。又其證據書類を手に入れたプーレーがヘルマンを脅迫したといふのも其脅迫する丈けの値打があると思ふたからである。ヘルマンといふ男はなか／＼の遣手のやうであるが、之がムザムザ二十五萬圓といふ大金を只取られたといふのも詰り怪しからないコムミツシヨンの取次をした弱點があるからである。脛に疵があるから取られたに違ひない。若し先にいふた商人共の辯護するやうな具合に歐米にはコムミツシヨンが普通とすれば、海軍々人で賄賂を取つたものは、今問題になつて居るシーメンス事件に關係ある將校ばかりでない。其他アームストロングなり、ヴヰツカースなり、クルツプなりにいろ／＼の軍艦兵器を注文したが、之にも皆附いてなければならぬ筈である。而して其行方は不明である。故に海軍は勿論、陸軍も疑を受けることになるのである。鐵道院の官吏、遞信省の官吏、其他すべての官吏が皆疑を受くることになる。けれども私はさう思はない。といふのはコムミツシヨンは必らず附くものでないと信ずるからである。賄賂の場合の外附かないと信ずるからである。從つて今度のシーメンス事件についてはコムミツシヨンの性質を研究するまでもなく、之は海軍の收賄事件として正々堂々と攻撃して構はぬと思ふ。

編輯だより

▽四月一日發行の「春期大附錄號」が如何に光彩陸離たるべきかは小說欄の前に挿入せる折込廣告を一見せらるれば明かなるを信ずれども、玆に其內容の一端に就て些か書きしるし置かん。

▽久しく一部閥族の壟斷に任せられたる政權が、今や漸く其正當の所有主たる國民全體の掌中に取返されんとするの機運に向ひつゝあるは、大正新政の大いなる歡びとして慶賀せざるを得ずと雖も、各黨各派が餘りに政權の奪取に熱中焦心するの極は、目的の爲めに手段を擇ばざるの弊を致し、政府反對者は、主義主張正論正議に據るよりも、諸言流說示威暴力によつて當局者を倒さんとすれば、當局者及び多數黨は又、暴に報ゆるに暴を以てするの策法にて、公明正大にその政策を遂行せんとするの精神氣魄なく單に數を恃み勢を恃みて少數黨の意志を抑壓せんとするが如き、何れも皆非難すべき行動にして、苟も黨派的感情に囚はれざる限り、帝國の前途の爲めに深く戒飭すべき狀勢なるに拘らず、我國新聞紙の大多數は、その論調皆公正穩健を缺き、黨人の偏僻なる感情論に油を注ぎて火を放つが如き狂暴の筆を弄するか、或は曲辯曲庇、味方の事は黨を烏といひくるめ、烏を鷺と白を切り其陋劣の態度、寔に痛嘆に堪へざるなり。本誌の如く常に獨立の地位に立ちて、公正の見地を持するもの、我現下の如き政局に對して一層其責務の重大なることを感じ、即ち社論に於て、今期議會の總評を試みて天下有識の士の熟慮を煩はし、又其文章眼識一代に高き山路愛山氏に乞ふて、同問題に對する其評論を求めたり。殊に群衆の勢力を籍りて時局問題を解決せんとするは、ポーツマウス條約に對する國民大會以來の風潮にして、此風潮は恐らく今後も永く繼續すべく、我國政治上の最大問題なりといふも過言にあらず。依て之に對する專門學者の徹底せる見解を求めて國民の反省を促さんと欲し、東京帝大の吉野作造氏、早大の浮田博士永井柳太郎氏、慶應の林毅陸氏に乞うて其高見を蒐錄せり。又匿名氏(論壇第一流の某大家)の原、加藤兩氏の人物性行閱歷に對する深刻精透の解剖評論は、獨り人物研究の興味甚深なるのみならず、將に純然たる政黨內閣の實現に近きつゝある今日に於て、政友、同志二大黨の中心人物の如何は直ちに二大黨の運命に關すべきを思へば、時節柄何人も必讀すべき大論文たるを失はず。

▽本誌新年號に「フリードリツヒ・ニーチエ」を寄せて此天才が獨創の哲學を產み出すまでの徑路を敍述せる中澤臨川氏は「超人の福音」に於て、其獨創の哲學の如何なるものなるかを解說批判して文藝界思想界に多大の貢獻をなすべく、曩に斬馬劍禪の名を以て「東西兩京大學の比較」を草し、文名を一時に馳せたる五來素川氏は滯歐八年にして新たに歸朝し、其歸朝土產の第一として「歐洲文明の將來」なる大論文を寄せらるべし。其議論其文章の雄麗博大必らずや江湖を驚かさん。

▽松崎天民氏の「三人の忘れ遺兒」以下說苑欄に收めらるべき數編は何れも皆趣味津々たる好讀物なるが、中にも政界內幕通の隨一たる一政客の「政界秘史」は何人も未だ聞知せざる事件を公けにして世人を驚かすべく、博覽會について深き經驗を有し、黑人の仲間よりは斯界のオーソリチーを以て目せらるゝ山脇春樹氏の「博覽會の觀方」は大正博覽會を觀んとする何人にも多大の利益を與ふべし。

▽若し夫れ附錄小說の十篇に至ては、何れも皆第一流作家の苦心慘憺の餘に成れる名篇佳作にして、恐らくは本誌數年間の附錄號中最も出色の出來榮なるべしと信ず。切に江湖の熟讀批判を俟つ。(編者しるす)

イブセン傑作集第貳

島村抱月譯 海の夫人（最新刊）

總布製美本
挿圖數葉入
正價九拾錢
郵税金八錢

此劇は『人形の家』の姉妹篇のやうなものである。ノラが殘した婦人の自覺問題を此劇の女主人公エリーダが自由意志と自己責任とで解決して目出度幸福な新生活に入るといふ重大な喜劇であると共に、海の神秘と自由とを象徴した象徴劇であり、繼母と繼娘との關係を寫した人情劇である。藝術座一月演劇は此書を臺本としたもので其舞臺寫眞數葉をも挿入してある。譯筆は益々圓熟して創作と全く擇ぶ所がない。

イブセン傑作集第一
島村抱月譯

人形の家

（好評再版）

總布製美本
挿圖數葉入
正價金九拾錢
郵税金八錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三番 早稻田大學出版部

賣捌 神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 大阪盛文館 其他

(中付二の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

豫約出版廣告

漢籍國字解全書

菊判總布製金文字入
第壹輯拾貳冊七千九百餘頁
第貳輯拾參冊八千百餘頁
第三輯八冊凡四千七百頁

本書目錄

第壹輯（孝經、大學、中庸、論語、孟子、易經、詩經、書經、小學、近思錄、老子、莊子（內編）列子、唐詩選、古文眞寶、（前後））（拾貳冊七千九百餘頁）
第二輯（左傳、傳習錄、楚辭、管子、墨子、荀子、韓非子）（拾參冊八千百餘頁）
第參輯（禮記、莊子、唐宋八大家文）（八冊四千七百頁）

講述者

熊澤蕃山、中村愓齋、眞勢中州、松井羅州、大田錦城、山本洞雲、毛利貞齋、太田玄九、荻生徂徠、服部南郭、榊原篁洲、林羅山、鵜飼石齋、加藤正庵、三輪執齋、淺見絅齋、菊地晚香、牧野藻洲、桂湖村、松平康國

特約申込要項

第壹輯（甲種（即納） 金拾參圓五拾錢
　　　　乙種（壹圓卅錢宛分納） 金拾五圓六拾錢
第貳輯（甲種（即納） 金拾四圓五拾錢
　　　　乙種（壹圓卅錢宛分約） 金拾六圓九拾錢
第參輯（甲種（即納） 金八圓
　　　　乙種（壹圓廿錢宛分納） 金九圓六拾錢

送料　市內（壹冊）（貳冊）（參冊）何れも各四錢內地（壹冊）拾貳錢（貳冊）拾六錢（參冊）貳拾錢支鮮樺台（壹冊）貳拾五錢（貳冊）四十五錢（參冊）五十錢
◉第一輯は拾貳回、第貳輯は拾參回、第參輯は八回分を要す貳冊以上合送する期間は冊數相等の送料入要

申込期限　大正三年三月三十一日限り
送本期限　各輯とも大正三年四月より毎月一冊宛發行

▲各輯內の書は選擇豫約を受けず▼

內容見本　申込次第送呈

徳川時代の大儒が後進の爲に特に著せる國字解は其講述極て懇切にして學問の普及を助けしこと幾許なるを知らず。其書が現下の學界に切要なる架說を要せず。是れ嚮に發行せる本全書の第一二輯が出版界空前の歡迎を博せる所以なり。然るに儒教の經典中、最も重要なる禮記は浩瀚難解の爲に古來一の國字解を見ず。諸子類の巨擘たる莊子、學界必讀の書たる唐宋八大家文も古來未だ完書を見ず。是れ今回萬難を排して其發行を企て茲に之を發表せる所以也。今や本全書は孝經、四書五經等の諸經典、小學近思錄、傳習錄等の准經典より、老莊列管墨荀韓等の諸子類、楚辭、古文眞寶、唐詩選、唐宋八大家文等の詩文集に至るまで不朽の眞價を有する一切の漢籍を網羅するに至れり。厖然三萬餘頁三十三冊の眞價は之を言ふを要せず。豫約期間極て短く、豫約以外に販賣せず。請ふ此好機を逸して憾を遺す勿れ。

◉豫約申込所　東京市牛込區早稻田　振替東京一一二三番　早稻田大學出版部
豫約取次　全國書肆

（中付二の三）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

勝屋英造先生編●大好評●

新形四百餘頁上製無類美本 紙函入携帶至便 全一册 定價金七拾五錢 郵税金六錢

最新刊

外來語辭典

附 新語及神話小解

本書は外國語(英・佛・獨・伊・露・蘭・西班牙・希臘・拉典)にして今日我が邦に於て盛に行はるゝ新語七千餘を撰び、之に原語を加へ解釋せるものなり。文藝、科學、哲學、政治、法律、經濟、社會、宗教、各方面に亙る學術語を始め實業社會の用語、社交上のハイカラ語、野球、庭球用語、飛行器其他新機械用語等を網羅す。附錄と**新語**及**神話**小解を添ふ。苟も社交界に活躍せんとするハイカラ、時勢の潮流に後れざらんとする紳士淑女は是非一本を座右に備へ!!

林喜一先生著

公開絶叫

アキレ申り

大好評大歡迎忽再版

中判上製頗美本 定價金一圓十錢 小包郵送料八錢

上は政府の予盾を剔抉公開し、以下大臣紳士の横暴より貴婦人の墮落、新聞の功罪及女優藝者の正體等巨細數十項に頒ち一々事實を根據として大膽に氣の毒な程素つ破抜き且論難したる活社會あらゆる裏面の總まくり吾作アキレ申候之も正義の戈なればグーの音も出まいと思ふ而かも痛烈骨を刺す筆鋒言々肺肝より出づ實に無二の毒滅殺菌劑なり内容の二三を示せば

内容 危險なる哉美人?? 危險なる哉貞操・痴劇紳士色師・賭博處分の奇怪事・藝者泣かせ待合檢擧・何故に藝者は役者と密着するか・命賭け御殿女中の役者買の事實・藝者にもてる法・上流家庭の墮落觀・内部展望(奥様の不遇)以下數十項。

發行所 東京市神田區錦町一丁目十六番地 振替貯金口座東京第三四〇九番 二松堂書店

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



朝野の財政通

鷺城學人

一

○英國には官制の上に總理大臣（プリミアー）といふ特殊の官職なく、ファスト・ロード・オフ・トレヂユアリー、譯していへば名譽大藏卿が總理大臣に擧げられる習はしになり、專門の大藏大臣はチヤンセラー・オフ・エキスチエッカーと稱し、今日の英國內閣でいへばロイド・ヂヨーヂ氏がそれである。此官制は昔からあるのでなく、グラッドストン內閣の時からだと聞いて居る。

○政治の最も主要なる部分は無論財政でなければならぬ。內治、外交、軍事其他產業なり交通なり、總て財政の本が立つて初めて働きがとれるので、財政を離れて政府の仕事はない。

○大藏卿の名に於て總理大臣になるといふとは、日本の官制から見れば何だか變なやうであるが、之れに依て財政の如何に重んずべきかを說明し、苟くも燮和の任に膺るものは財政運用の道を知らなければならぬ。

○グラッドストンは政治家として天才に近かつた。彼の才は總ての點に發達したが、財政についても其『インポータンス』を覺知せんことを英國に敎へたといはれるほど趣味と能力を有した。

○斯る天才は容易に得られるものでないが、彼の後に首相に選ばれた人々はバルフォアなりバンナマンなりアスキスなり、孰れも財政に關して沒知識沒交渉でなく、今のロイド・ヂョージは世界有數の財政家として將來の總理大臣たるべき約束を持つて居る

○然るに日本では財政を知らんでも總理大臣になれる。歷代の首相中萬更盲目でないのもあつたが、多くは大藏大臣任せで、自ら知らざるを恥としない。然らば大藏大臣は總て財政の事に通じて居るかといふに、通の程度も略々知れたもので概ね屬僚任せだから心細い。

○一體日本の大臣は自分に頭がないから何事も屬僚を智惠嚢と賴み、恰も負うた子に敎へられて淺瀨を渡る方だから、自然屬僚の權力が强くなり、狹い官卓を天地とせる屬僚の意見に依て國務を左右され、今日も尙ほ大臣政治四分屬僚政治六分の割合である。

○大臣が議會で答辯するに先んじ、議員から出さうな質問について次官なり局長なりから敎はり、其範圍だけの問題は辛うじて口移しに答へることが出來るが、一たび豫想以外の質問に會うとヘドモドして助舟を呼び、屬僚から紙片に要領を認めて貰つてお茶を濁すのが多い。

○現に過ぐる衆議院豫算委員會に於て、藏相高橋是淸は一議員の質問に對し、そんな法螺を吹くとか何とか馬鹿口を叩いて失言呼はりされたが、次官の勝田主計から注意されて取消したなどは氣の利ない骨頂ではないか。

○それは兎に角政府に一人前の財政家が居ない事は財政を扱ふに財政らしい手段と用意とを以てせず、單に其年度限りの歲計豫算面に於ける數字の辻褄を合して議會を瞞着すれば能事終れりとして居るのでも分る。或は將來立派な財政家が出るかも知らんが、今日までは主義あり計畫ある財政を觀るを得なんだ。言ひ換ゆれば國家的財政にあらずして大藏省的財政である。

○近頃國民は何程か財政に注意することになつたといふが、それも少數の識者で多數は相變らず冷淡であ

る。其證據には財政の立方が好い惡いに依つて國民の利害に直接關係のある譯ながら、空理空論を唱へたり、派手に騷いだりするのを政治と心得、随て財政經濟の如き實のある問題は餘りに地味に見えて興味を感じない。

二

○最近政場を騷がしたのは海軍問題と廢稅問題であるが、孰れが國民の血を沸かしたかといへば無論海軍問題で、廢稅の方は之れが爲めに蔽はれた形がある。

○尤も海軍武官のコンミツシヨン取りは政府の運命を危くせんとするだけあつて、容易ならざる問題に相違ない。同時に廢稅も國民生活の實體に觸れた問題で、其性質よりいへば二者輕重あるを認めず、寧ろ關係の直接であるだけ後者に力を入れるべき順序である、が事實はさうでない。

○蓋し日本人は浮ツ調子の國民であるから煽動に乘り易い。ソラ日比谷の國民大會だ、ソラ議會を包圍しろ、ソラ燒打だといへば有頂天になつて喜び、而も正邪を甄別する力がないから、昨日まで味噌糞のやうに貶したものを今日は味方として謳歌して居る。

○高等政策（ハイ・ポリチック）即ち多少思考力を要する政治上の問題は容易に頭に入らんが、一たび抽象的の大體論になると頭に入り易い。殊に桂とか權兵衞とか總て人を目標とした運動を好む傾向があるから、民心を煽揚するには斯くの如き問題を持出すに限る。昨年桂内閣を葬つたのも、又た今度の薩閥打破運動も現實に此單純なる國民性を發揮したものであるまいか。

○それ故に廢稅論よりも海軍問題の方が分り易くして而も眼かであるから、何うしても其方に氣を取られる。そこで憲政擁護會が營業稅・織物稅及び通行稅を廢止するといふても、國民黨が七千萬圓の減稅を決議しても彼等は自家の頭にふりかゝつた問題と知らずして、餘計な世話でも燒くかに思ふて居る。

○我輩は常に言ふことであるが日本に憲法政治の名あるも今尙ほ專制時代の遺習を存し、政府は國民を一種の器械視し、國民は殆んど習慣性になつて敢て之れを意に介しない。政府と國民との關係が双務的なる處に立憲政治の妙諦あるに拘はらず、實際は片務的で國民のみ過重なる義務を負ふて居る。此點に於て日本人の如く柔順なる國民はない。

○殊に實業家の意氣地のないことは一層である。彼等は政治の立憲たると專制たるとを問はない、唯だ金さへ儲くれば可いのである。今度の廢稅問題についても政府に氣兼遠慮して表面運動をなし得ないではないか。國家財政及び國民經濟の事に熱心なるべき筈の實業家が此通りであるから、一般國民の不熱心なるのも無理はない。

○國民が財政に冷淡なる所以の一は、昔から算盤勘定を云々するを素町人の仕業とし、武士は喰はねど高楊子的に之れを卑んだからで、此事が延いて政府にも民間にも財政通の少い原因になつて居りはせぬか。

三

○財政經濟通といふてもいろ〳〵種類があるが、大略實務家、批評家、學者の三つに區分することが出來る。實地家は政府に於て財政に携はる者の外に、民間に於て財的事業に關係するものも含み、批評家は議會及び新聞雜誌に於て論議するものをいひ、學者は名の如く學校其他に於て單に財政經濟の學を講明するものを指す。批評家は多少實際を知るの必要あるが、學者は全然これと懸け離れて居る。尤も學者にして批評家を兼ぬるものもないではない。此順序に依て如何なる財政通が朝野に居るかを物色して見やう。

○先づ元老についていへば今までいろ〳〵な元老があつたが、財政通の元老と軍閥の元老のみ生殘り他は悉く死んだ。黒田淸隆・西鄕從道・副島種臣・寺島宗則・伊藤博文等はいづれも財政の智識に於て皆無であつた。

○財政方面の元老は松方・井上・大隈の三人であらう。言ふまでもなく彼等が專ら力を傾注したのは金祿公債の整理、不換紙幣の整理を始め維新創業後十餘年間に於ける財政で、其中松方は日淸戰爭前後まで其衝に當り、農工銀行の創設を最後の紀念として退いた。即ち此三人は舊時代の勢力を代表するものであつて、新時代の財政には直接關係せなんだ。

○一時財界は此三人の勢力に依て三分され、自然系統が明瞭であつたが、大隈は段々其方面から遠ざかり、今日何程か三菱に關係ありといはゞいへるが、それも世間で想像するほど濃密でない。昔なら大隈の手紙一本で銀行でも會社でも人を用ゐたが、今日は其紹介が通用しない。是れは詰らぬ人間を無暗に紹介した爲めに懲りたからでもあらうが、一は財界に勢力を失うた結果であらう。

○松方も以前程の勢力はない。全盛の時代は日本銀行を始め東京の會社銀行に羽翼を伸ばし、大阪では松本重太郎、京都では田中源太郎等の巨頭と深い關係があつたが、今では段々範圍が縮まり自分も餘り熱心に世話を燒かない。併し惰力とはいへ大隈に比すれば何程か勢力を有し、息子の正作・幸次郎・巖・正雄・五郎等はそれ〴〵財界に入つて相當の位置を占めて居る。

○三人の中何といふても井上の勢力範圍が一等廣い。東京の三井なり、大阪の鴻池なり九州の貝島なり、いづれも此老の差圖に從はねばならぬ關係になつて居るし、京都の本願寺でも財政を整理するといへば彼の助力を仰かねばならなんだ。彼の兒分は政府側よりも寧ろ民間に多く植付けられ、伊藤公が政友會を組織する時も彼に依て實業家を羅致せんとしたが、贊成をせなんだ爲めに最初入黨を豫約したものも、彼の思惑を憚つて見合はしたのが多い。今でも内田山に出入するものは大部分實業家である。

○大隈でも松方でも財界の勢力を恃んで隨分表向きに出來ぬ金銀財寶を手に入れたが、井上に至つては殆んど權柄づくで徵發するのだから堪らない。書畫でも骨董でもこれは珍らしいから一寸貸せと、持つて歸つたが最後巻上げられるものと覺悟せねばならぬ。若し返せと催促すれば後の祟りが恐ろしいから、内心困つたと思ひつゝ其儘獻上することになる。三井でも鴻池でも貝島でも將た本願寺でも　これまで内田山に捲らた一

種い税は却々少くないと思ふ。

○何故に井上が斯くの如き潜勢力を造つたかといへば、一は長閥三尊の一人であるからでもあらうが、自ら財政の顧役を以て任じ肝癪を起す代りに、面倒がらずして熱心に世話を焼いたからである。中には蒼蠅く思ふても相談を持込まぬと此老の氣に入らぬから忌々ながら持込んだものもある。

○昨年の政變で元老なる者の威力を失うたが、從來政府の財政についても井上と松方とが顧問の位置に居り、特に井上は何か問題が起ればオセッカイを試みて動もすれば政府を左右した。當局者は内心喜ばなんだが姑に事へる積りで意見を徵し、たとひ松方を無いもの扱ひにしても、井上を閑却するを得なんだ。

○權兵衞が天下を取つてから井上は容喙權を奪はれた形であるが、其代り松方は隱然後見役とも相談役ともいふべき立場に居る。又た彼の厚掛りで政府の要路に立つものも少くない。

○井上にせよ松方にせよ財政上の眼識、手腕のある譯でなく、唯だ元老といふ位置が物をいふて居るに過ぎない。長い間政府に立つたから一通り實地を心得て居るにしても、それは過去の事で現在將來に通用しない。其處になると大隈は頭が働いて居る。才子だけに其智識は各方面に發達して居るが、財政を最も長所とし、古いこともいひ出鱈目も多いが、新しい議論もし、いろ〳〵に說を立てる處は流石である。

○井上は以前相場をしたが今日はしない。松方は初めから手を出さないやうである。大隈の相場は公然の秘密にして、夫人の兄某の名に於てし、間々自分の賣買に都合の好い意見を發表することがある。

○江藤新平は屢次井上をフン縛る計畫をしたさうであるが、實際彼には金錢上の缺點が多い。彼が如き位置と閱歷を有しながら、未だ嘗て內閣の首班に立つを得なんだのは、人格上の信任に關する大缺點があつたからであるまいか。松方は人物上の汚點こそなけれ、金に汚いことは流石に薩摩人たるに負かぬ。自分の子にすら一文の金を與へるのを惜む位で、隨て所得稅の如きも期限內に滿足に收めたことがない。

○金離れは大隈が一番好い。一寸旅行をするにしても大名的で、茶代を惜まぬから宿屋でも歡迎する。彼の財產は一の疑問であるが、大部分は相場だと稱されて居る。世間では大隈を平民主義だといふが、表面平民的の如く見えて實際は貴族的である。又た彼の性質が貴族主義を愛するやうに出來て居る。

○彼は近頃箔の剝げたと同時に大分箍が緩んだ。質の好くないものから煽てられて得意になるのを看ても寄る年波は爭はれぬ。要するに三人とも明治から大正に引從いだ舊政治の紀念品で、時の力はやがて彼等を歷史上の人にして仕舞ふであらう。

四

○三人に亞て財政家として看るべきは渡邊國武と阪谷芳郎である。渡邊が第一伊藤內閣の藏相として一錢一

厘問題て議會に爭ふた頃は、政府の財政を背負ふて立ち其勢ひて進んだなら伊藤が死んても政治的生命を失はず、少くも中元老の位置に立つて財政上の相談に與るを得たてあらうが、餘り調子に乘過ぎて脫線した爲め、第一政友會內閣の大藏大臣を最後の幕として伊藤に見棄てられ、といふて前に松方から伊藤に裏切した爲め、薩摩からも相手にされず、政界の惑星になつた。

○日露戰爭の時、南佐莊を起して七博士等と共に對露問題て騷ぎ、故近衞公と握手せんとしたが物にならなんだ。其後も萬吏政治の野心を抛つた譯てなく機關新聞まて起して腰を使つて見たが、乘出すべき機會を得ず、其中にいろ〳〵形勢が變化して年一年遠かり、遠かるに從うて世間から忘られ、今ては生きたか死んだか分らなくなつた。

○學問の點に於てもさまて劣つた譯てないが、大藏大臣として貫目の足らなんだのは阪谷てある。彼が第一西園寺內閣の財政を引受けた時、背後に外父の澁澤榮一が控て、其上に井上が頑張つて居たから三人の大藏大臣ありと稱せられ、井上の差圖を俟たなければ仕事の出來ぬものとして世間は鼎の輕重を問ふた。

○鐵道計畫について井上の激怒を買ひ、遞相山縣伊三郎と共に罷めたことは適々此事實を證明して居る。併し今までの大藏大臣中、歲出歲入共に約五十億の現金を取扱うたのは阪谷一人てある。

○彼は大學を出てから澁澤の女婿となり、局長・次官を經て大臣に進み、苦勢した經驗がないから世間の實情に迂く、殊に我れこそは日本一の財政家だといはぬ許りの顏し、男爵を鼻に懸けて殿樣振る處は靑臭い。

○死んだ曾禰荒助も長州では井上に亞ぐの財政家といはれ、初めて外資輸入論を唱へたといふので有名になつたが、今までの藏相中一番物が分らなんだ。併し人間は一寸風流氣と俗氣とあつて山縣系通有の窮屈な處がなかつた。

○現在ては財政論者にして國家財政の大本を知るものに博士田尻稻次郎が居る。其閱歷よりいへば夙に大臣になるべきてあるが、久しく會計檢查院に隱れ、長州の勢力が如何に伸びた時ても其歡心を求めるてなく、薩人なるが故に薩摩が天下を取つたからとて得意にな

るてもなく、我れは我れなりといふ風に超然として重きを成して居る。

○彼は常に書籍に依て新しい智識を攝取し、無頓著のやうて却々いろ〳〵な事に注意して居る。彼の『財政と金融』は流石に智識材料の富贍なるを示し、財政經濟の權威(オーソリテー)として今も尚ほ多くの人に讀まれて居る。

○金子堅太郎も好んて財政經濟を談じ知つた振りをするが、振りをするだけて附刃燒に過ぎぬ。併し今の樞密院ては兎に角此男が財政通といふのだらう。古い處には松尾臣善・目賀田種太郎などが居る。松尾は大藏の小役人から理財局長に進み活字引といはれたが、唯だ循吏として事務に熱心といふだけて財政上の頭はない、日本銀行總裁としても無能の聲が高かつたが、それても男爵になり私財も餘程積んだらしい。

○目賀田は實行力に乏しいが、常に國家の財政經濟に著目し、頭も松尾よりズット新らしい。曩に主税局長在職中韓國の財務顧問に聘せられ、滿期歸朝後貴族院に入つたが、これまてとても大藏大臣の呼聲があつたし、故海舟が見立てゝ佳婿としただけに人物もシッカりして居るから、將來大臣になる場合がないとも限らぬ。

五

○財政の何たるを知らずして財政の重きに任じ、閣僚からも世間からも馬鹿扱ひされて居るのは現藏相高橋てある。權兵衞が特に彼を所望したとすれば餘程鑑識の明なしといはねばならぬが、恐らく松方の推薦に依て餘儀なく入れたものと思はれる。

○彼の初半世は小説染みた歷史に富み、嘗て秘露(ペルー)て山を當て損うて歸つてから、小石川邊の棟割長屋て喰ふや喰はずの境涯に沈淪したが、當時の日銀總裁故川田小一郎に救はれて建築課の主任になつた。人間萬事塞翁の馬、それから段々運が向直つて副總裁に進み、横濱正金の總裁を兼ね、兎に角財界の大頭の一人に數へらるゝに至つた。

○日露戰爭の前後二回、外債募集の任を帶びて外國に行き、少からぬコンミッションを獲て歸つた。其中の

幾分を土産だといふて井上と松方に與へ、大部分を自分の懐ろに入れた結果、俄に財産家となり赤阪表町に堂々たる邸宅を築いた。權兵衛が海軍の泥棒なら高橋は財界の泥棒て、名は是清なるも行は不是不清てある。現内閣はコンミッションに縁があるから面白い。

○彼が外債募集の功に依て男爵を接けられたのは、泥棒をして褒美を貰うたのと同じてある。其上日銀總裁に進み、果ては入閣までして其過報を美まるゝと共に、世間は餘程彼を買被つた。

○處が昨年突出から議會て滑稽を演じて案外なるを暴露したが、本年に至て愈々低能兒たるを證據立てた。彼の答辯は奇抜といはんか大膽といはんか、普通人の言ひ得ないことを言つて退け、腹を立つれば立つるほど益々無茶を言ひ出す。此點に於ては確に傑物てある。

○海坊主然たる形貌には愛嬌が充滿し、頭の天邊から足の爪先までポンチ的に出來て居る。隨て他の大臣がいへば議員を憤らすやうな言ても彼の口から出れば笑うて濟む。此點に於て一種の人徳がある。

○世間て彼を脱線家だといふのは、餘程贔屓目に見た批評て初めからレールに乘つて居ない。圖體ばかり大きうても頭も腹もない。

○脱線振りを見んとて冷評半分に質問するのは罪だし、又た此男から要領を得た答辯を聞かんとするは間違つた考へて、分つたものと分らぬものと押問答すれば、分つたものが負けるに定つて居る。

○日本銀行總裁て居れば買被られたまゝて通るものを、愸い出世して大藏大臣になつた爲め、すつかり人間の相場が分つてしまうた。世間も愛惜を竭したと同時に、權兵衛も飛んだ代物を大藏大臣にしたと後悔して居るだらう。

○高橋に比べると山本達雄は三枚役者が上だ。深い學問こそせざれ財政經濟に趣味を有し、いろ〳〵研究をして居るから何程か寸法が分つて居る。議會に於ける答辯でも常識的にして辻褄が合ひ、高橋の如く出放題なことを言はない。

○第三西園寺内閣の藏相たりし時、山本が消極政策を唱へると、高橋は日銀總裁として積極論を口にし事毎に反對した。これは多少焼餅の氣味もあらうが、元來仲が善くないからでもある。

○最初權兵衛から入閣の交渉があつた時、山本は無論藏相になるものと豫期したに相違ないが、意外にも高橋に希望の椅子が廻り、自分は農商務大臣といふことであつたから卽答せなんだ。同夜或人が訪問すると彼はプン〳〵怒つて居つたといふが、翌月になつて承諾の意を通じた。

○山本としては拒絶するのが當然なるに、平素馬鹿にして居る海坊主の下風に立つを辭せなんだのは、大臣にさへなれば何んでも好いやうに見えて意氣地なく思はれる。内閣では伴食扱ひされ自分も愉快でないから何となく元氣がない。議會に出ても存在を認められて居らぬ。

○隈侯側で財政通といはるゝは勝田主計・橋本圭三郎・櫻井鐵太郎・菅原通敬・市來政方等であるが、いづれも一の鑄型の中から財政經濟を見る人々である。此外に元と主税局長にして現に朝鮮總督府にある荒井賢太郎を見逃してはならぬ。是れは頭も人物もなか〳〵シッカリして居る。

○近頃役人を罷めて柄にもなく政黨の人になつた若槻禮次郎は此列の白眉と稱せられ、財政の上に於て常に桂の懐中刀であつた。併し財政を扱ふに國家といふ大きな見地よりせずして、やはり大藏省といふ狹い天地に於てし、金の遣繰算段をする才ありても、財政上の識見がない。如何に贔屓目を以て見ても次官以上の器でなく、歴代の藏相中一番小僧大臣であつた。

○唯だ此に注意して見るべきは正式に學問を修めたものと修めないものと、其間に如何なる違ひがあるかといふことである。財政の根據なくして單に常識でやるものは稍もすれば其人の人格が顯はれる。曾禰の時代には富籤競馬が繁昌し、桂の時は相場を盛んにした。

○學問で鍛へたものは其成績の善惡は別として、兎に角法則に從ふて處斷するから、自分の趣味性行を退けるとになる。坂谷・若槻の如きは其方の部類に屬する。

六

○民間では維新以來、政府の元老と共に國民の財政を直接間接に代表したのは澁澤である。其富をいへば三菱・三井・安田・大倉・藤田・古河等の十分の一にも當らぬが、是等の財閥の上に立つて多年重きを成したのは、財界の建設者指導者として勢力を認められたからである。

○何人も其財的功勞を認めるが、日露戰爭後に至て彼の方針は國家の前途を誤まつた。當時の經濟界は萎縮すべかりしに彼は逆に考へ、何でも發展せしめなければならぬといふので百餘の會社を濫興し、一人にして其重役を兼ねたがこれが總て失敗に終つた。

○そこで彼は直接の指導者たるべき位置を去るの餘儀なきに及んだ。今でも依然として財界の元老として立てられて居るが、謂はば惰力末勢で將に過去の人にな

らんとしつゝある。

○餘り表面に顔を出さなんだが、三菱の大番頭として裏面より日本銀行を制肘し、財界に侮るべからざる勢力があつたのは豐川良平である。然しこれも今日は最早過去の人と見て好い。唯だ彼の美點は友人思ひといふことて、犬養・大石・楠瀬・仙石等は各々政治上の立場を異にして相爭ふて居るが、豐川より看れば等しく友人であるから、誰に厚くして誰に薄くするが如きなく、依然として舊誼を守つて居る。

○日銀總裁も民間財政の指導者と看做なければならぬが、今の三島彌太郎は薩閥といふ後景に依て此位置を得たるに止まり、格別重きをなして居らぬ。正金頭取の井上準之助も少壯派中の人才と唄はれて居るが、其頭はやはり鑄型の中に入り、大處に目を着けて仕事をする男でない。

○民間で何程か話せるのは之れを東にしては興銀の添田壽一、之れを西にしては百三十の小山健三位なものであらう。添田は嘗て大藏次官として實際の事も知り、多少政治の頭もある。これまで多少遣損ひの跡なきにあらざるも、それは曾彌の失敗を、自分で責任を負ふたのである。小山も役人上りであるが公平達眼の士と目せられ、大阪の財界に少からぬ勢力を有つて居る。

○大阪には中橋徳五郎といふ名物男があつて好んで財政經濟を談ずるが、空論にして内容に乏しく、分つたやうで分つて居ない。それよりも早川千吉郎の方が久しく大藏省の役人をしただけに少し實地に通じて居るかも知れぬ。

○直接本論に關係ないが、序だから東京と大阪の財界の事情異る一端を説明して置こう。東京は財政主義に依て立ち、大阪は總て經濟主義に依て立つて居る。言ひ換ゆれば東京は政府議會の目色即ち總豫算に依て財界が動かされるが、大阪は日本の經濟に依つて動かされる。

○財界を支配するものは外國貿易であるが、横濱の輸出入は殆んど固定の狀態にあるから額こそ大なれ、東京の民間經濟に及ぼす影響は微動である。之れに反して大阪は支那貿易を控へて居る上に、九州の石炭の需給に從うて經濟界の高低が常ない。神戸の港が歲と共に發展するのは之れが爲めて、大阪は其處の寫眞をうつして居る。それ故に東京は受身に

なつて大阪の爲めに押へつけられて居る。

○東京でも大阪でも民間經濟の指導者は將に更迭せんとし、舊勢力に代るに新勢力が起らんとしつゝある。今後如何なる形に於て變化するか知らんが、東京に於て澁澤・豐川が現在より遠からんとしつゝあるは其の證據と見るべきであるまいか。

七

○本來政府の財政方針を質し豫算議定權を有する議會に相當な財政通が居らなければならぬ筈であるが實際居ない。分つた顔をしてゐてもそれは歌を聞き踊を觀て一向分らぬ癖に拍手をするのと同じである。

○議會は豫算案の面に顯はるゝ死せる數字に依て或は査定し、或は協贊を與ふるに過ぎぬ。言ひ換ゆれば豫算の形式に囚はれて毫も財政の根本に觸れて居ない。

○財政を知らずして質問するから要領を得た質問なく、其場遁れの胡魔化しをいふから要領を得た答辯のある譯がない。衆議院に政治家は多いが、財政論が出來ないから空論家といはれ、政府からも民間からも馬鹿にされるので、それが大なる欠點である。

○貴族院には谷と曾我が財政論を代表したが、唯だ名物といふだけて、名物にうまい物なしとある如く餘り感服せなんだ。乳臭兒の三島彌太郎が唯の豫算通として珍重されて居るのは心細い。

○衆議院には嘗て中野武營・田口卯吉・三崎龜之助・阿部興人・栗原亮一・森本駿等を財政通に數へ、此外に故濱口吉右衞門・金岡又左衞門を加へたが、中にも阿部と中野を以て改進黨に於ける豫算通の一副對とまで稱した。

○今日中野は財界の親分になり濟して居るが、頭がグロミーで旨ふことが不得要領で、議員として半文の價値もない。而も財政通の虚名を博したのは當時の議會の智識程度が如何に低かつたかを知るに足りる。阿部は大藏省の役人をしただけに何程か實際の事情に通じ、隨て議論も一番筋道が立つて居た。議員として將來伸びるかに見えたが、いつの間にか退隱して世の中から忘れられた。

○今日の衆議院の第一流と稱せらるゝ者の中、犬養は多少經濟學の素養があり、嘗て東洋經濟新報に筆陣を張つただけに萬更知らんでもない。國防を論し外交を議するに當て財政の根本に及ぶが、いづれかといへば長所でなく又た趣味を持たぬらしい。大石・尾崎は頭が空疎たから財政問題について全く沒分曉(イグノラント)で、抽象論を得意として居るがそれも近頃は黴臭くして聽かれない。

○政友會では野田卯太郎・改野耕三・井上角五郎が豫算通といはれ、いづれも豫算委員長となつたが心細い通である。鶴原定吉は嘗て日本銀行に居たこともあるし、新しい書物も讀むし一番其方の頭があるが、政友會

に痛を置く悲しさには思ふ存分に意見を吐くことが出來ない。

○國民黨には高木正年・鈴木梅四郎・金尾稜嚴等を財政通とせねばなるまい。高木は數字を細かく知つて居るだけで格別名論卓說もないが、記臆力の强いことと根氣の好いことは黨中第一といふて好い。唯だ目の見えぬ爲に何處へでも出裟娑るのは目障りである。

○同志會の外交問題は加藤高明の意見に依て決する如く財政問題を若槻の智慧を借りることになつて居る。舊官僚系には濱口雄幸・長島隆二あるも、唯だ大藏省の飯を喰うたといふだけで局部の事しか知らぬ。

○同黨議員の中で一等分つて居るのは武富時敏で、恐らく衆議院に於て彼に拮抗するものはなからう。初期議會の頃は一向著はれなんだが、第十三議會に地租增徵案の提出された時、非增租派を代表して二時間餘に亘る處女演說を試みて以來頓に名を知られ、其後豫算案の討議には必ず黨を代表して演壇に立ち單に財政眼のみならず、雄辯家としても第一流を以て目せられ居る。

○武富に亞て片岡直溫・町田忠治を數ふべき順序であるが、町田は世人の豫想以上に財政經濟の造詣があるにしても巡查上りの片岡にそんな頭がある譯ない。然るに武富の向ふを張らんが爲め好んで豫算演說を試み、或は財政意見を發表し一廉の財政通めかして居るが、これは總て若槻の受賣りで今では誰れ一人知らぬものはない。

○此外に加藤政之助といふ大天狗あるを忘れてはならぬ。嘗て慶應義塾に居た頃、タムソンの社會學（ソシアル・サイアンス）を交際學と譯して物笑ひになつたといふが、彼の財政論も恐らく此位の處だらう。黨人として古いけれども人間が馬鹿だから同志會でも重んぜられない。

○中正會には早速整爾と石橋爲之助がいつも代表してシヤベる。深い智識はないけれども財政趣味を有し、辯も相當に立ち共に新聞記者を兼ねて居る。

○各黨の議員競うて豫算委員の運動をするが、斯かるは選擧區に其名聲を誇るの目的よりし、豫算について自家の主張を吐く譯でないから忌になるではないか。

八

○從來財政學は經濟學の一部に屬し、英國の如きは今でもさうであるが獨逸は夙に專門的に講究して居る。日本でも官私立大學に財政學の講座を特に設けたのは

近年である。

○學者側では東京大學に博士松崎藏之助あり、京都大學に博士神戸正雄・小川郷太郎あり、共に財政の講座を擔當して居る。此外に金井延・田島錦治なども有名な學者であるが古い方に屬し、それよりも新しい經濟學者として博士戸田海市を擧げねばならぬ。

○松崎は元と田尻の門下生で、東京高商の校長としても評判の好い方でなかつたが、大學でも除者にされて居る。學問の造詣は世間にいふ程でなく語學の素養も頗る怪しい。一頃セッセと桂に取入り、或る特種會社の社長になる運動をしたが成功せなんだ。井上哲次郎・上杉愼吉等と共に御用學者の系統に屬し、學者中の俗物である。

○神戸と小川は智識の新しい點に於て官學中之れに及ぶものがない。戸田は大學に入る前に大林區署の小役人を勤め、時の山林局長高橋琢也に知られて學問した人で、頭の好い上に篤學であるから先人の糟粕を嘗めるのと違ひ學問上のオリヂナリテーに富んで居る。

○私學では早稻田に田中穂積、慶應に堀江歸一がある。堀江は學校で講義をする傍ら新聞に雜誌に財政經濟に關する意見を發表し、今では大家として認められて居る。田中は自分で許す如く蘊蓄あるやの疑はしく、堀江に比すれば遙に落ちるやうだ。

○近年すつかり世間から忘れられて仕舞うたが、昔土子金四郎といふ學者があつた。阪谷と同級で澁澤が婿選みの時、飛鳥山別莊に招かれた仲間の一人である。却々の才子で辯舌が巧みであつたから、其時も先方の氣に入る話をして鹿を射止めやうとしたが、白羽の矢は遂に阪谷に立つた。そこで是等の岡燒黨は盛んに妨害運動を試み、添田が其急先鋒であつた。

○土子は久しく早稻田に教鞭を執り、幾種も著書を公けにしたが、財政經濟を講釋するよりも金を儲ける方の實行主義に轉じ其後正金銀行に居たが、近頃横濱邊の或る會社の社長を勤めて居るとか。

○財政經濟の評論家は今日の處日本新聞の伊藤欽亮と大阪朝日の本多雪堂を以て白眉とする。伊藤は特に其方の學問をした譯でないが、前に日本銀行に勤たこともあり、又た常に財政問題に注意して居るので、觀察が總て肯綮に中つて居る。

○本多は東大在學中目的以外の學科目を修めるのが忌だといふので我れから好んで本科より選科に移つた。友人は切に其不利益なるを説いたが、財政經濟を專攻するのは此方が便利だといふて肯かなんだ。大藏次官の勝田と同時代であつたから若し本科で通して役人になつたなら、今頃は少くも局長位に行つて居るだらう。

○大學卒業後暫く京都同志社の教師となり、罷めて間もなく添田の紹介で大阪朝日の經濟部主任に聘せられ朝日の經濟記事をして重からしめた。加藤高明の東京日々新聞を經營するに及んで主筆になつたが、其後再び朝日に關係し東京に在て專ら財政經濟の筆を執つて居る。其「一筆啓上」は文章といひ議論といひ他の追隨を許さない。

○彼は福井の門閥家だけあつて貴公子然たる形貌を具へ、自ら標置すること高く、餘程旋毛が曲つて居るが其處に彼の特色がある。財政經濟の才は天禀に近く、殊に無味乾燥に陥り易き議論を面白く平易に讀ませる手際は流石である。最近餘業として「財政經濟時報」といふ雜誌を發行したが、普通の實業雜誌と違ひ内容の充實せる處に其價値を認める。

○勸銀の志立鐵太郎も元と大阪朝日の經濟部長であつたが、銀行を離れたなら評論家の部類に入れて好からう。淺野陽吉も自分で通がつて居るほど通でなく、此位の通なら世間ザラにある。

○松山忠二郎も好んで財政論に筆を執るが、文章は本多に及ばない。然し議論の着實にして、材料を精査することは今の新聞社會に稀に觀る所である。此外評論家として相當任じて居るものは多いが、いづれも月並だから名を擧げて紹介することは御免を蒙らう。

女優生活の追懐

某女優

舊文藝協會は私の生涯にとつて決して〳〵忘れる事の出來ない所で御座います。大隈さんが會長であつた最初の協會が本郷座でハムレットや入鹿浦島などで旗上げをした當時は、私はまだ女學校の二三年でせいぜい運動會の假裝行列か記念祝賀會の餘興ぐらいをやつて滿足してゐた時代で、新しい芝居の事などはてんで頭にございませんでした。其後女學校も卒業し進んで女子大學の英文科に入るやうになつてから私の頭も大分混雜して參つたのです。私が英文科の豫科に入學した當時、すぐ眼の下の早稻田大學では自然主義が全盛でして、若い同士が寄るとさはると自己擴張だの女子解放だのといふ言葉が盛に持囃されました。好奇心の燃え立つてゐる當時のことですから私ももう譯なく其等の熱に浮かされて終つたのでせう。それに私の遠縁の者で二人までも早稻田の文科にゐましたものですから、私はこれらの人々から種々樣々な思想の導火線を與へられましたらうし、また坪內先生や島村先生の講義振りなども話して聞かされました。當時私はまだ見も聞きもせぬ坪內先生のシエークスピアや島村先生のイプセン研究などにどんなに熱心な憧憬と尊敬とを持つてゐたでせう。何時とはなしに私の心は兩先生を愛慕するやうになつてゐたのでした。何とかして先生方に面會がしたいなど〻思つて、學校の空時間などには竊つと學校を拔け出してむなつき坂から駒塚橋を渡り、早大の正門近くへ行つた事もありましたが、いつも角帽を冠つた學生方がうよ〳〵往き來してゐますので、先生方がいつもお通りになるといふ馬場下から喜久井町の邊までは一度も行かずに終いました。それか

らまた前に申しました文科生が坪内先生の御令息士行さんと同窓の間柄でしたので、時折先生のお宅へ伺つてお孃樣達の踊りのお稽古などを拜見して來てはそれを私に詳しく話して呉れましたので、私の心は益々先生を慕ふやうになるばかりでした。いつそ先生のお弟子になりたい、それが出來なくば女書生でも下女でもいゝ、何でもいゝから先生と同じ屋根の下に呼吸して先生のお歩きになる足跡に跟いて行くのが、私にとつて最も生き甲斐のある生涯のやうに思はれたのです。どうしたら先生に近寄る機會を得られるだらうと其麼事にばかり頭を惱して日を暮してゐました。

　私のゐました曉星寮は西洋人の監督で大方英文科國文科の生徒ばかりでした。イプセンやショーを賣藥か化粧品の名と間違へるやうな珍談もございませんでした。當時國文科の一年の河野さん（現在舞臺協會の林千歳さん）は私の隣のお部屋にゐらつしやいました。大して仲好しといふのでもございませんでしたが、一番よく私がお喋りをしたのはこの千歳さんとでした。二人はよく文學の話をいたしました。其頃漸く世間で騷ぎ出した女優問題なんかにも二人は非常な興味と好奇心とを持つてゐました。さうなると前にも申したやうな譯で規則的な學校の勉強などよりは自由勝手な熱を吹き合つてる方が面白くなつて、閑な隙かな寮舍の裏の草叢や寮舍の空部屋などでコソ〳〵話し合つてゐる所を、・ゴラスなお學姉樣達の白眼で駭かされた事もございました。千歳さんは當時「ベルが鳴つてはいりベルが鳴つて出るやうな生活には飽きが來た」つまりベルのいらない自由な生活がしたいといふやうな事をしきりと言つてゐらつしやいました。そんなこんなで私達はもう生優しい事では滿足が出來ない、第一興味がない、何かもつと〳〵新しい意義のあるものを要求してゐたのです。その矢先或月の早稻田文學に文藝協會の再興と男女優募集の事が簡單に出てゐたのです。それを眞先きに見付けたのは千歳さんでした。私は一も二もなく「私行く、學校なんか今からでも止す」

と即座に決心してしまつたのを今でも忘れません。しかし千歳さんは一先づ歸國してよく親達とも相談して來ると仰在いました。私は其翌日履歴書を書いて出すと同時に、病氣を口實に寮舍を出て南品川の保證人の家へ一先づ歸りました。

いよ〳〵明治四十二年五月の某日といふ私にとつては一生記念すべき日が參りました。其日私は早稻田大學で男女優の入學試驗を擧行するといふ通知のハガキを懐にして家を出ました。出掛けに日頃たえて手にした事のないお白粉を念入りにつけて出ましたものですから、電車の中でも妙に人に見られるやうな氣がしまして、江戸川の終點で降りるまで顏をさすり通しに擦つてゐました。電車を降りてから一歩々々大學に近づくにつけ私の心は妙にざはつき始めました。試驗に對する不安、日頃敬慕する先生方に愈々會はれると思ふ嬉しい心配などで私は火事場のやうな混雜した慌しい氣分に襲はれました。そうかと思ふとまた境遇の變化などゝいふ事も思はれまして、葬式の通つた後に春雨の降るやうな淡い悲しがこみ上げて來たりなど致しました。とにかく言ふに言はれぬ妙な心持ちで大學の受付まで參りました。そこで敎へられた通り職員方の控室の方へ行かうとすると、焦茶色の洋服を着た眼玉のギョロ〳〵光るお方が出てゐらつしやいまして「試驗を受けに來たのですか」とお尋ねになつた、そして私を控室めいた所へ案內して下さいまして「今先生方がお出てになりますから少し待つてゐて下さい」と仰在つて出てゐらつしやいました。このお方が東儀先生だといふ事はすぐ後で解りました。控室の壁には雜誌の口繪などで見覺えのある先生方の寫眞などが掛けてありました。程なく次の敎員室と書いてある室に大勢の人の氣配がしたと思ふと、先の東儀さんがお出でになつて私を敎員室へ案內して下さいました。そこには坪內先生始め金子先生島村先生其外澤山のお方が居並んでゐらつしやいました。坪內先生は優しい親しみの深いお顏をニコ〳〵あそばしながら「ずつと寄つて、その椅子

にお掛けなさい」と仰在いました。私は胸をドキ〳〵させながら小さくなつて腰を掛けました。先生は私の履歴書を御覧になりながら、私の心の騷ぎなど少しも御存じないものゝやうに、色々な事をお聞きになりました。新舊いづれの芝居が好きか、どんな芝居が理想か、何故女優なんかになるのか、兩親も同意かとか、私はただ「はい」とか「いゝえ」とか、さながら人中に出たことのない少女のやうにおど〳〵した答をするばかりでした。最後に先生は今まで見た芝居の中で覺えてゐるのがあるかといふ意味の事をお尋ねになりました。私は幡隨院の長兵衞を覺えてゐますと申上げました。ところが、そんなら長兵衞の聲色を大きな聲でやつて下さい出來るだけ大きな聲でと仰在いました。私は吃驚してたゞもぢ〳〵と長い間先生をお待たせ申したゞけでした。先生は重ねて故團十郎張りでも八百藏でも乃至吉右衞門でも誰でも宜しい其れともあなた自身の工夫があれば尚ほ結構と仰在つて、しばらくお待ちになりましたがきまり惡るさうな私の樣子を御覧になりまして、此度は桐一葉の中の或頁をお開きになりこれを讀んで下さいと仰在いました。私はどうしても遁られないものと觀念しまして、讀み損ひのないやうに一度默讀をしてから聲を出して讀みました。それは片桐且元の奧方の科白で——鈴の綱のきれて落ちしは凶事(まがごと)の知らせと、胸のみさゞろに打騷がれ——といふ所でした。それが濟むと次の室へ案内されまして其所で島村先生から一寸した會話(ダイアログ)の試驗を受けました。これが濟むと東儀先生がまた次の室へ案内されまして、五六枚の原稿紙をお渡しになり「これへ吾が理想の演劇といふ題で書いて下さい」と仰在つて出てゐらつしやいました。やつと一人(ひとり)になつてホッとすると、次の室から會話(ダイアログ)を讀む聲、尚ほその彼方(むかう)の室からは故團十郎張りの片桐且元や音羽屋張りの家康の聲色などが大きな聲で漏れて來ました。硝子扉越しにすかして見ますと書生風の男の方が二三人づゝ先生方の前へ呼出されて試驗を受けてゐらつしやるのです。そんな事に氣をとられまして、肝心の自分の原稿紙には一句も答案が出來

ませんでした。其中に東儀先生が二度までも催促にゐらつしやいましたので、私も愈々氣を落付けて——私の理想の演劇はまだ日本にはためされてゐない、どんなものか自分にも解らないが早晩出來て來なければならないもので、それは在來の新舊俳優のやうな頭のない品性の低い者からでなく、相當の人格と學識を備へた人によつて實現されなければならない——といふやうな事を書いて出しました。それでも私は實際其時は何所へ出しても恥しくない立派な事を書いたやうな積りで、內心頗る得意だつたのです。こんな事で試驗は濟みましたが其夜は安らかな眠りを得られずに終ひました。翌朝は早くから起きて女子大學に千歲さんをお訪ねして試驗の模樣を詳しくお話ししました。二人で護國寺の裏の雜木林を歩きながら此の話をしました時には私は何だか急に自分をどえらいものにしてゐました。とにかく有名の大學で大勢の男子の中に唯一人の女性が同じ試驗を受けたといふ事はなどと、もう大した得意、聞いてゐらつした千歲さんもあの大きな眼を尙ほ大きくして一大椿事でもお聞きになるやうなお顏をなさいました。

試驗を受けてから五日目に東儀先生から「試驗は通過した就ては話したい事があるから來て呉れ」といふ意味の端書が參りました。當時文藝協會の事務所は戶塚の東儀先生のお宅にございましたので、私は早速先生のお宅へ伺ひました。通された八疊のお座敷には床の間に大きな琵琶と琴が立掛けてございました。崖を截崩したやうなお庭には小さなお孃さんとお坊ちやんが遊んでゐらつしやいました。先生のお話といふのはつまり坪內先生のお傳言なので、兩親の事や一家の事情や一身上の事にまで隨分御懇切な御注意がありました。協會の修業は必ず續けてやれる乎若し萬一親の不同意や物質方面に不安な點があれば此際思ひ切つた方が身の爲めであると仰在いました。私は斷じてさういふ心配はございませんと幾度も念を押してお答へいたしました。其實私はまだ國元へも學校の方へも女優志

願の事に就ては一言も相談してはゐませんのてした。無論事後承諾を豫期してゐましたのてしたが、先生に急所を質されました時は實際不安な思ひが新たに胸を騷がせました。其後私は授業が始るまて、國元へ手紙を出すやら學校の方の始末を付けるやらてまことに忙しく、時の經つのを忘れてをりました。學校の方ては私が文藝協會へ入つたといふ噂をお聞きになりまして、傾向係や風紀係のお方は急に會をお開きになるやら、同級生の御相談が始るやら、それは大層なお騷ぎをあそばしたさうてございます。私は後て同級の或るお友達からそのお話を聞きまして寔にお氣の毒てなりませんてした。また私の母校てございますが耶蘇舊敎の或る女學校のマダムさんから其敎生を二人もお寄越しになりまして「どんな職業に就かうとも其はすべて貴女の自由てある、たゞどんな事があつても主の敎えだけは必ず捨てるな」といふ意味の誡めをお傳へになりました。そして聖人傳と殉教者の傳記とを一册に輯めたものを贈つて下さいました。私はあれやこれやを思ひあはせ無量の感に打れたのて御座いました。

愈々お稽古の第一日が參りました。其の日は先生方と入學を許された生徒だけが集つて簡單な式を擧げるといふ事てしたのて、私は一寸した着物に着換へまして牛込余丁町の假稽古場へ參りました。入學生の中て婦人はまだ私一人きりてしたが、其の中に長谷川時雨さんも御入學になるといふお話しがございました。時雨さんは當時たしか御病氣て轉地療養をしてゐらつしやつたやうに覺えて居ります。假稽古場は坪内先生のお宅から半町ほどの所にある普通の借家て、六疊二間に四疊半と三疊が一間づゝございました。そして六疊二間を通してこれがお稽古場、四疊半が先生方の控室、三疊が小使部屋といふ割當てございました。私がお稽古場へ着いた時は外はもう薄暗くつて、お稽古場の家の内からは煌々とした電燈の光や賑かな男の話し聲などが漏れて參りました。中へ入りますとその時分東儀先生のお宅にゐらつしやつた田中さんといふお方

が協會の庶務のお係りで、この方から私は皆さんに紹介して戴きました。男の方はみんな樂しさうに話合つてゐらつしやいました。私はたつた一人ぼつちの女で話相手もなく手持無沙汰にぼつねんとしてゐました。すると其うちに田中さんが眞丸い可愛らしい顏をした二人の女の方を案內していらつしやいまして「此の方も此度おはいりになつた方で小林政子さんとおつしやるのです」と私にひきあはせて下さいました。この方は今は藝術座の女王で松井須磨子さんと仰在います。須磨子さんは其晩束髮に結つて細かい縞の糸織の着物に紺の紋羽二重の羽織を召してゐらつしやいました。兩人は普通の女のいふやうな初對面の挨拶をしたばかりでした。そのうちに式が始りました。先づ坪內先生、それから島村先生、金子先生、土肥先生、東儀先生といふ順におすはりになつた。男生の中にはハムレット公演後事情あつて協會を出られた林和さん、嘗て新劇社に居られた武田正憲さん、舞臺協會の佐々木精さんなどのお顏も見えました。總て坪內先生は靜にテーブルの前へお起ちになりまして文藝協會再興の次第をお話しになりました。此時の先生のお話はたしか明治四十四年頃の早稲田文學に「演劇刷新の必要及び其方法」といふ題で詳しく掲載されたやうに存じてをります。私は先生のあの人をひきつけるやうな懷しいお聲と溫情のあふれるやうなお顏とに此時始て染々と感じたのでした。たゞ普通にお話しをなすつてゐらつしやつたのですが時には淚のさしぐまれるほど感の迫つたことも御座いました。それから先生のお話しが濟むと此度は先生方も生徒も一所に車座になつてお茶を飲みながら親しくお話しをいたしました。歸りがけに坪內先生は私に「何所まで歸ります」とお尋ねになりましたので「品川まで」とお答へいたしますと先生は道の遠いのを御心配下すつて「連れてもありますか」など仰在いました。恰度須磨子さんも芝のいさらご坂下まで電車でゐらつしやるとの事でしたから、二人は連立つて稽古場を出ました。そして色々な事を話合ひながら歩きました。須磨子さんはお連合とお二人でいさらご坂上に世

帶を持つてゐての事や、お連合が藤澤淺次郎い俳優學校へお勤めになる事や、女優になる事はまだ里方へは知らせてない事などをお話しになりました。私も學校や家庭の事情などをお話ししました。そんなこんなて二人はわけもなく仲好しになつてしまいました。電車をお降りになる時は須磨子さんは「氣をつけてお歸んなさい」などゝ仰在いました。何だか氣の優しい親切なお方だと懷しく思ひました。けれども私のやうに親の家と學校の寄宿舍より外に何も知らない女と、須磨子さんのやうに人妻となつて家庭をもつてゐらつしやる女とが、同じ道を歩まうとしてゐる事が妙な對照のやうにも思はれました。

愈々お稽古の日が參りました。私の心は嬉しさに飛立つやうでした。雜記帳にしるされた時間割には、沙翁劇及び實際心理(坪内先生)藝術論(金子先生)近代劇(島村先生)國劇史(伊原先生)狂言(小早川先生)朗讀(土肥先生)實物寫生(東儀先生)といふやうな課目が御座いました。お稽古の第一日は坪内先生のマーチヤントオヴエニスでした。疊の上に脚の短かい細長い机が六臺列べてございまして一臺に三人づゝ居並ぶのでした。しかし須磨子さと私は女だといふので二人きりで一番前の一臺をあてがはれました。こうして一同がづらり居並んだ所はまるで寺子屋のやうだといふより外はございませんでした。やがて先生はマーチヤントオヴエニスの第一頁から飜譯をお始めになりました。私は此お講義を聽かうとしてどんなに久しい間思ひ煩ふたことでせう。長いあいだの憧憬はとう〳〵現實となつて參りました。講義の進むに連れたゞもう恍惚として、これが現實か夢の世界に遊んでゐるのではあるまいかといふやうな氣も起りました。日頃ぎこちない直譯にばかり馴れた私の耳はまつたく美妙な音樂に魅せられたので御座いました。しかし男生の方々はいづれも早稻田の文科あたりからお出でになつたものと見えまして、物馴れた調子で質問をあそばしたりテキストに書入れをしたりしながら熱心に聽いてゐらつしやい

ました。正直に白狀いたしますと先生のお講義は實際當時の私には荷がかち過ぎてゐました。一字一字の意味などは到底解らないのが多うございました。隣席の須磨子さんの方をそつとお伺ひすると、やはり本一面に讀みと譯の假名を附けてゐらつしやいました。歸り途で須磨子さんは「英語は始てなので解らなくて困る」など〻仰在つて〻した。「家へ歸つてから或る先生の所へ通つて習ふので家の用事がすこしも出來ない」などとも仰在つて〻した。でも意地の强い負けず嫌いのお方だけに男生の方などにはそんな事は露ほどもお漏らしになりませんてした。

其中に須磨子さんは稽古場の近くへ引越してゐらつしやいました。私も二三週間おくれて稽古場の直ぐ向ふの家へ下宿いたしました。この家は素人下宿で或る後家さんが戸山學校の軍人連を當てにやつてゐるのてした。須磨子さんの住んでゐらしたお家は門構へのある萱葺屋根の一軒家で、小さいながらも一寸しやれたお家てした。裏には薄氣味の惡いほど深い車井戸と少しばかりの畑がございました。畑にはお連合とおふたりの御丹精で季節々々の野菜がいつも青々と育つてをりました。八字髭をはやしたお連合が筒袖の着物を無造作にお召しになつて、不似合なほど小さな鍬をコツ／＼やつてゐらつしやるのを、私はよく畑の中で拜見しました。須磨子さんもお稽古場からお歸りになるともう全く優しい家庭の奧樣で、なりにもふりにもお構ひなくビールの空壜を細でゆはへて垂下けながら石油も買ひにおてになる、或時などは八百屋から大きな大根をぶらさげて往來を歩きながら口三味線！。まあ幾ら御熱心だからつてあんまりだと後て大笑ひをした事もございました。お裁縫がまた須磨子さんは大變お好きで、暇さへあれば小布(こぎれ)を集めて肩の凝るやうな細かい細工物を根氣よく拵へてゐらつしやいました。傍て見てゐる私などは折々おかしく思ひまして「あなたのやうな性格の人がそんな事をするなんて隨分矛盾してはゐないかしらん」と申しますと、須磨子さんはいつ

も私に「あなたが髮結が好きで人の髮を綺麗に結ふなどもたしかに矛盾してゐる」などゝ仰在つてお互に笑ひ合つた事もよくございました。お洗濯やお勝手のお仕事も須磨子さんはお厭ひなくよくなさいました。をり〳〵お晝を御馳走になる時などは、須磨子さんが物馴れた手つきで煮物の味をためしたり、お香の物をきざんだりなさいますのを、私はたゞぼんやりと感心して見物してゐるのが常でございました。實際私は其當時お手傳ひをすると申しても、たかゞ水を汲んだり庭を掃いたりする位のもので、まるで無能な山だしのおさんどんにすぎやうな事より外に何も出來なかつたので御座います。

お稽古も日に〳〵面白くなつて參りました。男生の方などゝも遠慮なく話すやうになりました。こんなにして一ヶ月ばかりも經つた或日いつもの時間に稽古場に參りますと、先生方のお部屋から耳馴れない男女の聲に混つて坪内先生が折々何事かお尋ねになるお聲などもいたしました。戸があいてゐましたので男生の方など好奇心に驅られてちよい〳〵中をお覗きになつては「いゝ女が來てるぜ」などゝお笑はせになる。須磨子さんも私もたまらなくなつてつい竊つと拜見いたしました。そのうちに坪内先生のお時間が參りましたので一同席に着きますと、問題の女の方もお出てになりまして時間割などを寫してまた元のお部屋へお入りになりました。そのお時間が終むとまたお出てになりまして須磨子さんと私に「私は三田と申す者です何分よろしく」としとやかに挨拶をなさいました。この方は今は沂代劇協會の女王(クイーン)で上田浦路さんと仰在います。そして浦路さんに連れ立つてゐらつしたのは草人さんだつたのです。程なく浦路さんも稽古場の直ぐ隣りの貸間をお借りになつて、草人さんと御一緒に芝の櫻田本郷町のお宅から引越してゐらつしやいました。これで私達女生の仲間は三人になりました。三人は一日も休まず熱心にお稽古を勵げみました。しかしお稽古は如何に熱心でも、殊に私始め浦路さんでも須磨子さんで

も有りあまるお金があつてやつてゐたのではお座いませんから、着物などは恐かお小使ひても無駄には滅多に使へませんてした。時折浦路さんが「これから仕入れに行つて參ります」などゝ草人さんに仰任つて、お醬油の空罎やお砂糖の空壺(からつぼ)をお持ちになつて、櫻田本鄕町のお宅へ所謂「仕入れ」にお出てになつた事などは、私もいまだに忘れられない事で御座います。そんなこんなの裡に私達はお稽古を勵んで居りました。

お稽古もだん〳〵進んで參りまして東儀先生の實物寫生など大層面白くなつて參りました。「新しい女「裏長屋の女房「下女「町家の娘「髮結「藝妓「茶屋の女「醉拂つた女」といふやうな宿題をお出しになりました、その實物の寫生をせよと私達においひつけになりました。すると銘々その實物を研究しまして次のお稽古の時間に皆さんの前で一人々々その寫生を演つてみなければならぬので御座いました。そして皆のやるのを東儀先生が御覧になりまして、色々お直しになつたり批評をなすつたりするので御座いました。私は性來お轉婆なたちで寫生の時間などは思切つて演るのが常でございました。浦路さんも寫生はお上手でゐらつしやいました。たゞ何ういふものか須磨子さんはあまり寫生がお好きでは御座いませんでした。それでも須磨子さんの寫生なさいました町家の娘などは實に面白く拜見いたしました――見世の帳場の所に坐つて新聞を見ながら、お客さんの來る每に殆んど機械的に何の苦もなく「ゐらつしやい」と仰在る鹽梅から、折々新聞から視線を小僧達の方へ外(そら)して見張りをなさる梅鹽など――眞に迫つてゐると存じました。浦路さんの裏長屋の女房もいまだに忘れられないので御座います――あの五尺四寸の上もあらうといふ大きな柄(がら)を思ふさまじだらくにお扱ひになつて、八百屋の熊さんの荷車の前で「いくらだつて、へエお前さんは一體たかいよ、二錢でいゝだらう、お錢(あし)は明日(あす)にしてお與んな」などゝいひながら、熊さんの隙を見ては荷車の上から果物を失敬して我子に與へ「うるさい餓鬼だね、お前に買つてや

るものなんか無いんだよ、あつちへ往きな、あれ富ちやんが呼ばつてらあ」と邪慳に言つて、熊さんに勘付かれまいとする――その邊などは寔に面白く拜見いたしました。私も負けぬ氣になつて山出しのお爨どんをやつてみました時などは、生れ故郷の東北は名題のズーズー辯をブロバラーのやうにバラバラ捲したてゝやりました。それが大當りで、東儀先生もお褒めになりました。私も大きに納つて控えて居りました。すると口の惡い武田正憲さんが「生地々々！君すッかり地で行つたね」などゝお壞しになつたので、皆さん哄とお笑ひになりました事も御座いました。

坪内先生は御自分の御時間でなくともお稽古のある日にはいつも稽古場においでゝございました。そして一旦稽古場へおいでになりますと、大概な御用では滅多にお宅へお歸りになりませんでした。いつもお稽古の始らない前からおいでになりまして、其夜のお稽古が濟むまでは熱心に御覽になつてゝ御座いました。大抵は奧樣も御一緒で御座いました。奧樣は近眼鏡の下から眼を細くあそばして、私達生徒の稽古振りを萬遍なく御覽になりましては、傍の先生に何かお問ひになつたりなどしてゐらつしやいました。或晩お稽古が濟んでみんな歸らうといたしてゐる間際に急に大雨が降つて參りました時など、先生は一旦お宅へもうお歸りになりましたにも拘らず、又々稽古場へ引返しておいでになりまして、傘を持たない人の數をお調べになり、早速小使にそれだけをお買はしになりました。小使はなんでも番傘を十二三本も買つて參りました。それを翳して生徒がみんな玄關を出るまで奧樣とお二人でお見送り下さいました。こんな風に先生も奧樣も生徒の事に就いては稽古場の内外ともに周到な御注意を下さいましたのでした。殊に女生の中でも須磨子さんや浦路さんとは違つて、私ばかりはその當時獨身者で其上齡も一番下でございましたから、一層先生にはなにかに就けて御面倒な御心配をお懸け申した事と存じて居ります。

寺子屋式のお稽古も一段落を告げて暑中休暇が參りましたけれども、郷里へ歸る方は寔に少なく、生徒の三分二は東京に居殘りました。そこで此の休暇を無駄に暮すのも詰らないといふので、居殘つた連中は東儀先生のお宅で朗讀のお稽古をしやうといふ事になりました。私も居殘りの仲間でしたので須磨子さんや浦路さんと誘ひ合はしては、定日に先生のお宅へ伺つて山崎紫紅さんの史劇十二曲の所々をお稽古いたしましたが、其中に先生の方に御都合がおありになつて中止する事になりまた。それで私も毎日下宿でゴロ〱いたして居りました。ところが或日浦路さんがお出でになつて、この長い日をたゞ過すのも馬鹿々々しいから、近所にゐる者だけ寄合つて一つ芝居のお稽古をしてみませんか、これは草人のプランなんですが是非仲間入りをなさいよ、といふお話しでした。須磨子さんにも同じお話しをなすつたのです。當時草人さんはまだ文藝協會の生徒ではなかつたのですが、浦路さんとの關係から協會の方へも接近してゐらつしたのです。そしてお宅は此の時分東大久保の西向天神下に引越してゐらつしたのでした。そこへともかくも皆が例の芝居のお稽古に行くといふので、私始め須磨子さんも行く事になりました。脚本は紅葉山人の喜劇「戀の病」で、草人さんの役が主人公の樵夫、浦路さんは戀の病になる娘、須磨子さんは其娘の乳母、それから娘の情人が林和さん、武田正憲さんは手代、私が樵夫の女房といふ役割でした。須磨子さんの阿母さんのやうな柄の浦路さんが娘役をなすつて、娘々した柄の須磨子さんがフケ役にお廻りになつたなどは、妙な對照で御座いました。それでお稽古の中途で須磨子さんから役不足が出たといふやうな珍談も御座いました。しかし何うにか斯うにか科白も覺え顔も揃へて試演のやうな眞似をいたしました。そして之れが草人さんお一人を除けば皆のものにとりまして芝居の抑ものやり始めだつたのです。

恰度この「戀の病」を演りました日の朝、まだ芝居

の始らない前に、私は懷しさに堪えられぬ或る思ひを懷いて、新橋の停車場へ參りました。それは前に申しました女子大學時代の學友林千歲さんが、愈々お國元の大阪で御兩親から女優志願のお許しをお受けになつて、この朝新橋へお着きになるといふお知らせが、豫豫私の方へ參つてをりましたからでございます。二人はかれこれ二三ヶ月も別れて居りました。この短かゝらぬ時を互にかれこれと思ひ煩ひ纔に手紙の往復だけで自らを慰めて參りましたが、此度漸く千歲さんも御本望が適ひ久々で御上京遊ばすものですから、さあ私達はどんなに嬉しく待ち焦れたことでせう。汽車は勢よくプラットホームへ着きました。澤山な出迎人の中から首を差伸して私は降りて來る人每に注目いたしました。偶と見ますと群衆の眞先きに、灰色の袴を裾長に穿いて小さな鞄と洋傘を持ちながら、此方へ急ぎ足でいらつしやるのが千歲さんでした。私は嬉しさに思はず「千ちやん！こゝよ」と大聲を張上げました。近所の方はお驚きになつて皆私の顏を御覽になりました。そんな事にはお關ひなく私は千歲さんの手から鞄を受取つて、つと手を握合つたまゝ暫く言葉も出ず、二人はたゞ嬉し泣きに泣いてしまつたのでした。千歲さんの御兩親にせよ、私の兩親にせよ、何れも昔の道德思想に凝り固つた人で御座います。芝居などは河原乞食のする業であるやうにも聞いてゐたで御座いませう。その親達に自分等の希望を承諾して戴くといふに就きましては、人さまにお話し申す事も出來ない苦しい思ひが數々ございました。この心持ちを二人は無言の裡によく語り合ふことが出來たのでございました。新橋の停車場で二人の手を握り合つて泣きに泣いたこの時の涙は、恐らくお互に物心ついてから以來一番意味深いそして淨い涙であつたと今でも私は信じて居ります。荷物は市內配達に賴みまして二人は電車で余丁町の私の下宿へ參りました。宿に着きましてから二人は風通しのよい六疊のお部屋で、一別以來のお話しを長々といたしました。四五日經ちましてから千歲さんは協會の入學試驗をお受けになる事になりました

のて、二人で坪内先生のお宅へお伺ひいたしました。直ぐお隣りの新築稽古場もその時分は大方出來上つて居りました。私達はこのお稽古場の舞臺からお庭などを眺めながら先生のお出でになりますのを待つて居りました。程なくお見えになりまして千歳さんに先づ山崎紫紅さんの史劇十二曲の中から何かをお讀ませになりました。英語のお試驗もすみまして、それから「何故女優が必要か」といふ意味の題をお出しになりました。そして「答案が出來ましたら小使に渡してお歸りになつて宜しい、試驗の結果は明晩聞きにお出でなさい」と仰在つてお宅の方へお歸りになりました。私は千歳さんの論文の出來上るまでお待ちして二人一緒に下宿へ歸りました。翌日夕刻待ち兼ねて二人は試驗の結果を聞きに參りました。千歳さんは先生のお宅の御門の所に待つてゐらつしやいまして、私だけ這入つて參りました。當時先生のお宅にゐてになつた戸田猿仁さんがお取次ぎ下さいましたが、その先生のお言葉には「試驗はあれで宜しいが今少し英語を勉強して下さい」とのことで御座いました。その通り千歳さんにお話しいたしますと、千歳さんは苦い笑ひをお漏らしになりました。それから二人は須磨子さんをお訪ねしたり浦路さんにお會ひしたり致しまして、千歳さんは二學期の始らない中にもう協會の大概の方とお知合ひにおなりになりました。

暑中休暇の終るまでにはまだ一月の餘もございましたので、須磨子さんと千歳さんと私の三人が相談をいたしまして義太夫と踊りのお稽古に通ふ事にいたしました。義太夫の師匠は早稲田の穴八幡から西へ二三町ほどの所にゐらつした鶴澤何女といふ方で御座いました。そして千歳さんは宿屋、須磨子さんと私は鈴ヶ森から始めて貰ひました。少しばかり通ふうちに師匠さんは私達に「お始めてゞは御座いませんでせう」などゝお油をお撒けあそばすので、もう三人は高くもないお鼻を大のお天狗さまなんて御座いませう。お稽古の往き還りに戸山の原の草叢などで、お聲の練習とはか

りに須磨子さんが「御見物様いづれも様この駒をみせしめに親の許さぬいたづらなど……」などゝ一本調子の頓狂な聲をお絞りあそばす、すると千歳さんは天晴れ評判の太夫氣取りて「一年宇治の螢狩りに焦れ初めたる戀人と……」でドウスルを大向ふに廻した積りの妙な首の振りざまを遊ばす私はまた「やあ見苦しい其ざまで我々が目通りへうせをつたは、聞き及んだ朝顔めな……」などなんぼ赤い面の岩代でも有難涙をこぼしさうなドマ聲を張上げたりなど致しました。尤も近所に人の氣配のしない折を見計つてやるので御座いましたが、偶には突然むこうの草叢から書生さんが本を抱へてお逃出しになつたり、丘の上から不審顔にこちらを見詰めてゐらつしたりする事も御座いました。こんな時には私達もすた〳〵逃げて歸りました。

踊りの師匠は穴八幡の裏手の二階家に住んでゐらしやいました。いつも義太夫のお稽古の歸りにこゝへ廻りました。こゝでも師匠さんは三人のことをお褒になりました。三つの鼻は少からず動搖したので御座います。端唄の二つ三つも上げますともう一廉の踊手になつた積りで、鞘當や朝妻などを習ひ始めました。この師匠さんのお二階に髮の毛を長くした色の白い書生さんがおゐでになりました。私達がお稽古をしてゐますとよく二階から降りていらつしやいまして、御一緒に稽古などあそばしました。この書生の方を訪ねて川村花菱さんがちよい〳〵お遊びにゐらつしやいました。師匠さんは花菱さんの事を私達に「あの方はお醫者樣の御子息で、早稻田の文科を卒業なすたんです、小說もお書きになれば今時流行る芝居の書下しもなさるんですよ」などゝ敎えて呉れたりなど致しました。三人はこんな風に毎日々々御一緒にお稽古を勵みました。しかし三人の間にはいつも天氣ばかりは續きませんでした。時には雨の日も風の日も大荒れに荒れた日もないでは御座いませんでした。隨分子供じみた喧嘩をして一日も二日も口を利かずに睨合つたりなどした事も御座いました。しかしいつもお互に何時の間にか氣嫌を直して「ねえ仲好くしませうよ芝居は一人では出來

ないんですから」などゝ申しては、急に懐しくなつて手を握合つたりしました。兎角する間に新築のお稽古場もすつかり出來上りまして、愈々新しい檜舞臺で二學期の課業を受ける樂しい日が參りました。

今回は先づ是れ丈けにいたしまして、折があつたら又改めて其後の思ひ出を書くかも知れません。

問題の人・噂の人

鐵拳禪

▼海軍收賄問題が導火線で、國論の沸騰を見たが、政友會の正義派は何處を風が吹くかと云ふ顔で濟まして居る。滿鐵交迭の際にすら愛黨心の爲めに奮起し、大に正義がつたのであるから、今回の問題の如きに對しては。勿論蹶起すべき筈だが、今日薩派を援護して置けば、其の報酬として、原敬君が内閣組織をする事が出來るとの打算上より、沈默を守つて居るといふ事だ。

▼併し、原君に眞にさう云ふ腹があるなら、民黨聯合軍の彈劾案が議會に現はれぬ以前に、山本首相や齋藤海相に辭職を慫慂して、一方には後藤新平男とでも握手して、純政黨内閣を組織すれば可かつたのだ。が、既に民軍と鎬を削つた上は、もう駄目だ。現内閣の一部改造ではなく、總瓦解を免れまいと觀測されてゐる。果して民軍の呪咀する如く總瓦解をすれば、原君が後繼内閣を組織するといふ事は到底出來ぬ。從つて一種の興味を以て期待された東北の天下も、近き將來に於て實現されようとは思はれぬ。

▼原君は政友會活動の中心だが、院内總務や幹事が多いので、兎角意志の疏通を缺いて、大岡議長が板挾みになつて動きがとれぬ。夫れに民軍には、尾崎行雄君なり、花井卓藏君なり、島田三郎君なり、武富時敏君なり、一騎當千の士が居るので、政友會側は醜態を露はし勝である。策戰の點に至つては、多數黨は少數黨に及ばぬ。群羊の如く訓練された政友會が、動もすれば歩調の亂れんとする聯合軍に一籌を輸したのは、究り人物の乏しいのと、天意を解せざるに由るのだ。

▼葬られんとした島田君が、海軍收賄問題で議會に蘇生した。彼れは諮

骨董類の蒐集が巧みで、陶器茶器でも價値を發見するの眼を持つてゐる。夫れに能辯であるから。大抵の敵は辯殺される。星亨も亦彼れに蛛訣辯殺された一人だが、其の乾兒は今に之を恨んで居るので、今度の問題も火の無い所に煙を揚げたとすれば、決して許しては置かぬのだがと口惜しがつて居るさうだ。

▼尾崎君は、憲政擁護運動以來馬鹿に油が乘つて、『長閥でも、薩閥でも、閥と名の付くものは打破せねばならぬ』と氣焔を吐いて居るかと思へば、日本一の經綸家を以て自任する犬養君は、『薩派を斃すも可いが、長閥再興の後押をするやうだから御免だ』と悄げてるさうだ。

▼或人は犬養君を評して、『彼奴は意氣銷沈したね。宿痾が再發したのだらうか、どうも變だねえ。國民黨を淸潔分子だなど云つたのは、昔のことさ。夫れは淸潔分子も無いではないが、如何はしい人物も隨分居るよ。彼奴の旗を弄し過ぎるのと、彼奴の周圍に宵地某や前川某などが控へて居るやうでは、迚も發達しさうには思はれない』と云つて居た。

▼尾崎君が花井君と握手して、中正會を組織したのを一生一代の出來だと褒めてる者もあるが、似た者同士が寄合所帶を持つた迄の事で、大なる手腕も、多額の黃金を要した譯のものでない。議會内の掛引上と、一時の出來心とて、雙方から歩み寄つたのださうだ。鍋組夫婦としては、政薩の衎合とは別趣味の、醇な所がない。

▼尾崎君と花井君との間に、愈よ合同成文の纒つたのは、花井君が尾崎君の令息の死を弔ひに行つた日である。此の日花井君が尾崎君に『赤樂會の方は纒つたから、一日も早く政友倶樂部の方を纒めて呉れ』とのことで、提携談を試みた。政友倶樂部が却て赤樂會に促さるゝ始末となつたのである。

▼政倶の智將たる菊池武德君は、當時遊說に出て行つたが、歸京するや否や、其の消息を聞いて同志の意向を確むべく奔走を始めた。多數は贊成を表したが、鼓に說き伏せるに至難な人物が二人あつた。夫れは澤來太郎君と、稻澤桃介君とで、前者は政黨組織を實行せざるに不滿を抱き、後者は何時まで寄附をして居ても詰らぬと、尾崎君を見限つたのである。澤君は政友會に復歸したが、稻澤君は無所屬で形勢を觀望してゐる。

▼菊池君自身も、合同に就ては當面の事だけで、將來の事は深く考へて居なかつたやうだ。合同は半熟だが、今日は是れ以上を望むことは出來ぬ。餘り理窟を言はずに、合同に贊成して貰ひたい。併し、名稱は憲政會とか、憲政倶樂部とか、必ず憲政の二字だけは附ける積りだ杯と同志を慰撫して居たが、出來上つて見ると、中正會と云ふ矢張半熟的な名稱となつた。『あれだから菊池の話は當にならぬ』と嘲つた者もある。

▼菊池君には、臣武德とか、早計伯とか云ふ綽名がある。臣武德は菊池武光に似通つてゐるからであらうが、早計伯に至つては、能く彼れの性格を穿つてゐる。伯と呼ばれる巨頭には、早稻田伯、三猿伯などがある。一は地名を其儘に呼んだので面白味が薄いが、一は見ざる聞かざる言はざるの三猿で、井上馨侯の肝癪玉を破裂した時の風采がさながらに表は

れて居る。今日は侯だが、綽名を得た當時は伯であつた。大隈伯も跛脚伯と云へば、來島の爆裂彈で片足を失つたことを記念されるが、其の綽名に由つて性格を知る事は出來ぬ。後藤新平男の、和製ルーズや繼爵なども、餘り面白い綽名ではない。

▼將軍と云ふ綽名の元祖は、まづ井上角五郎君鎧甲將軍であらう。當時に於ける議政壇上の井上君の雄辯は、今日の尾崎君や、島田君の演說のやうに呼物になつて居たものだ。然るは星移り物變りて、鎧甲將軍も井の角となり、純白の絹ハンケチを首に捲いて、昔に變らぬ痘面を議會に曝してるのみだ。名高いのでは巣鴨の葦原將軍、相場界には新宿將軍、野心家には革丙將軍などがあるけれども、鎧甲將軍のやうに、頗相應な適切な綽名はない。正に豐太閤の猿面冠者に次ぐべき傑作だとは、專ら政界の評判。

▼井上角五郎君は、政友會所屬代議士中では金満家の部類で、何かの運動を試みると、多額の黃金液を搾られるさうだ。が、個人に振り蒔くだけでは幹部の目に止まらぬ。從つて黃金へ蒔いた割には利目が薄いので、何うも變だとは思つて居たが、其の呼吸は分らないので、始終憎まれ損をして居た。處が、先年某代議士の忠告によつて、本部の維持費を寄附したが、夫れから幹部の信任を得るに至つたと云ふ噂がある。

▼井上君は、二千圓の歳費は一切家計に用ゐず、選擧の運動費にのみ使ふさうだ。每年千圓は地盤擁護費に支出し、殘部は運動準備費として貯蓄し、其外に幾千圓かを運動費に使用することに極めて居るさうだ。政友會の某代議士は、井上君の斯く和戰兩樣の準備の整つて居ることを羨しがつて居た。

▼前文相の長谷場純孝君は、議會に出て居るが、健康が全く回復したとは思はれぬ。少しく高聲を發すると、氣息きれがすると見えて、頻りに額の汗を拭つてゐる。縱令推薦された處で、再び臺閣に立つて、劇職に就くことが出來まいとのことだ。

▼二月十日の議會には、各大臣の顏が見えたが、意氣甚だ揚らざるの感があつた。元田遞相は片手を胸に當て、片手で髭を捻つて居たが、暫くすると仰向いて、居眠を始めた。或は單に眼をつぶつて居たのかも知れぬが、さも衰弱して居るかに見えた。山本首相は蒼白な顏をして、神妙に兩手を前に組んで俯向き勝に控へて居たが、段々組んだ手を解いて兩手で卓上を撫で始めた。時々手帕を出して水洟をかんでは、又卓を撫でて居た。高橋藏相は甕達摩のやうだが、流石に日本酒になりさうな恰好をしてゐる。原內相は昂奮する每に眞赤になり、美しい猿のやうな顏に見える。が、議場を睥睨して活氣横溢してゐる所は、大臣中第一である。

▼全院委員長の菅原傳君は、大に收まり返つて居るが、同鄕の駒ケ嶽は、彼れを自分以下に評價してゐる。曰く『菅原の名は時々新聞に小さく出るが、俺は國技館の取組には大きな活字で、而も何の新聞でも每日書かぬものは無い』と。

▼島田三郎君の夫人は、跡見の出身だが、社交界には少しも顏を出さない。と云ふのは、島田君が常に夫人に『お前は大人しくして家を守つて

さへ居れば可い、吾輩は社會に立つてお前の働く位の事は働いてやる』と云つて居るので、夫人は臺所の行財兩政整理をやつて、良人をして後顧の憂なからしめるのなさうだ。

▼現内閣瓦解後に、何人が内閣を組織するかは興味の中心となつてゐる。政黨内閣なれば、無論同志會、中正會等の非政友派が、政友會に代つて天下を取るべき筈だが、其處まで進むや否やは疑問とされてゐる。或は寺内伯なり、後藤男なりが、頭を擡げて來るでは無いかと觀測されてゐる。

▼非政友側の某君などは、同志會は人物が多いから、加藤高明男が内閣を組織する事となれば、政友會のやうに大臣を履つて來ることはない杯と威張つてゐる。先づ入閣するに足る人物は、大浦子を筆頭に、河野、大石、島田、武富、箕浦、若槻、夫れに尾崎、花井の諸君を數へてゐる。犬養君は如何に勸めても入るまい。すると、國民黨の前途は何うなるかと、今から心配して居る者もあるさうだ。

▼河野君は、曾て内相に擬せられたが、到頭内相にならずに叉鬢徒らに銀の如く白くなつた。尾崎君は文相、大石君は農相、武富君は内閣翰長、箕浦君は遞信次官、島田君は文部權大書記官の官歴を持つてゐる。而して、桂内閣の下に内相になれる大浦子、藏相となれる若槻君が居るから、其の配置には可なり骨の折れる事であらう。

▼男爵になると同時に、松田正久君の名は政界から消えたやうだが、政友會員の話頭には屡上る。彼れの夫人は、大臣の時よりは、浪人の方が生活が樂だと云つたさうだが、今回は新男爵になつたので、嘸樂で無からうと或人は同情して居た。

▼高安月郊の『瀧口より横笛へ』と、日向欣子の『横笛より瀧口へ』とが、相並んで某誌に出たので、世の中では物珍しげに評判してゐる。所が、高安君は大に恐縮して、『あれは數年前の舊作だが、西川文子に請はるゝ儘に寄せたのである。然るに、西川夫人は日向夫人を說いて、あゝ云ふものを書かせたので、私の關する所でない。所謂雜誌經營者の賣る爲めの手段で、私が日向夫人と相談して書いたのでも何でもない』と云つてゐる。

▼高安君に、西川夫人を紹介したのも、日向夫人を紹介したのも、木村秀雄夫婦であるさうだ。一は新眞婦人會の事業の關係上で、一は『魔の曲』の愛讀者で、是非逢ひたいとの希望であつたからとのこと。日向夫人は理智の女だが、さわらび女史とか、烏林あくりとか云ふ匿名で、短篇小說を公にして居る。

▼日向輝武君は、文藝の趣味はないが、一時は移民成金で、菅原君等と共に幅を利かせたものだ。演說は拙くはないが、ともすると脫線して、贔屓の引倒しをやるので、政友會ではヒナテルにも困つたものだと云つてるさうだ。

北齋の「鼻」

黒頭巾

其一

●北齋の『鼻』といふは、『北齋の鼻』を言ふに非ず、北齋の描ける浮世繪の人物の鼻を指すなり。

●古來、吾國に於ける鼻の尤も特徴あるものは、『天狗の面』と神樂獅子と北齋の『鼻』とならずんばあらず。

天狗と獅子との鼻は、必ずしも實在を寫生せるに非ず。浮世繪は寫實を本とす。北齋は實在の人物を寫生して、這般の特色ある鼻を畫き出せり。他の兩者の鼻は虚にして、北齋の鼻は實也。而して其の實なるは、則ち、吾輩をして、深甚なる感興を起さしむる所以ならずんばあらず。

其二

●日本の三鼻には各々特色あり。而して其の特色なるものは、幾何學的に、これを說明するを得可し。

●天狗の鼻と獅子の鼻とは、好箇の對照を爲す。其の對照を爲す所以は、兩者の鼻梁が、顏面の地盤に對して成式する角度の、幾何學的に對照を爲せばなり、顏面に對して、天狗のは直角を爲し、獅子のは則ち平行す。

●天狗の鼻は、縱に線を爲し其の線は、顏面の水平線に直角に立つ。之に反して、獅子の鼻は、横に線を爲し、其の線は、顏面の水平線に平行す。

●若し、兩者の鼻に對して、眞正面より正しく之を望見することあらんには、天狗の鼻線は、唯だ一點を爲すべし。譬へば樫の丸棒を竪に見るが如し。獅子の鼻は則ち平らに一線を劃して見らる。譬へば、眼と水平に、棚板を望むが如し。

●獅子と天狗との鼻線を共に延長し、而して獅子の鼻線の中央に、直角に、天狗の鼻線を立たしめば、まさに一箇の丁字形を造り出すべきなり。

其三

●天狗と獅子との鼻は、其の鼻梁の短かき事に於ては一致す。此の兩者は、共に所謂鼻筋の通らざるものな

らずんばあらず。天狗の鼻は極めて高けれども鼻梁極めて短かし。天狗の鼻は、則ち、極めて短かくして極めて高きもの也。此の如き鼻は人間には有ること無し。

◉天狗の鼻は、或は、手長猿が其の手を正しく伸ばしたらん姿勢あり。獅子の鼻は、肥えたる人の脚を組めるにも似たり。あぐらをかくの評は、緊當にして動かす可らず。

◉獅子の鼻の、鼻梁甚だ短かくして、横に張りたるは、又た人間界に得易からず。唯だ稍々相似たるものは有り。

◉北齋の鼻は、斷じて天狗の鼻に似ず。獅子の鼻とは多く相似たるところあり。但し、獅子の鼻は鼻孔を公開す。其の鼻孔は地平線に對して直角に位置し、北齋は、全然、正しく地平線と平行す。故に、北齋の人物は、之を仰臥せしむるに非るよりは、其の鼻孔を示すこと無し。

其　四

◉美貌の要件に於ける第一の難件は鼻ならずんばあらず。天下に美人は少しとなさず。然れども美鼻は尤も得難し。明眸皓齒、一笑、百媚生ずる美女と雖も、其の鼻は必ずしも完璧にあらず。

◉生ける美人は、上乘の鼻を有せずと雖も、媚冶の艷態煥發するを妨げず。唯だ畫ける美人は鼻美ならざれば嬌態を爲さず。古來、畫家、美人の鼻を描くに苦心して、其の極、尋常無難の鼻を寫し、能く、特色を描き得る者少し。北齋は、一機軸を出せりと雖も、其の鼻は必ずしも美ならず。

◉北齋の鼻は寧ろ奇形ありて、美人を描きては、鼻が目障りとなることあれども、尚ほ美女たるを失はざるは、全面に寫實の氣漂へばなり。鼻は上乘ならざるも、明眸皓齒の生ける女たるを想像せしむるに足るものあればなり。

◉吾輩は、未だ『北齋の鼻』のやうなる美女を見たることあらず。而して北齋と雖も、嘗て『北齋の鼻』の美女を見しことありやを疑ふ。

◉吾輩嘗て思ふ。北齋ほどの畫に苦しめる天才を抱いて、美人を描きて、『北齋の鼻』を附するは、漫に得意の鼻なりといふ漠然たる態度に出づるに非ず。美貌の要件は密かに彼の心頭に映ず。彼が徹頭徹尾、北齋の鼻を描くは、必らずや確乎たる根底に本づくもの無くんばあらざるべし。吾輩をして、試みに、之を考量するを得しめよ。

其五

◎近世、吾が文藝家の自個を象徴する鼻に、特記す可きもの二あり。京傳と北斎との鼻也。

◎京傳は、黄表紙に自像を畫けるもの、其の鼻を特徴とす。京傳の鼻は、寧ろ符號といふを當れりとすべし。是れ其の鼻は獅子鼻の意を表現し、鼻翼は鍵の如し。京傳獨創の筆に屬す。

◎京傳は、眞に獅子鼻なりしやも。知れず。然れども事實に於ては、彼は僅に獅子鼻にして、筆端に、其の意味を擴張し、極端に發展せしめて、這般の獅子鼻を描き出せるものなるべし。

◎京傳が自像の鼻は彼の諷世嘲俗の精神を表現し得て頗る皮肉を極むるものならずんばあらず。およそ近世、幕末の文學に於て、諷刺の辛酷を極むるは、京傳の黄表紙に過ぐるはあらず。彼の鼻は、彼の花押に相當す。彼は皮肉なる獅子鼻の花押を以て、彼の皮肉なる文學を象徴するなり。

◎京傳の黄表紙は、深く生活問題に切込むを特徴とし、また彼の文學の價値ともすべし。而して彼の獅子鼻は、生活問題の根底よりして、世態を穿つに適合せる徽號なり。

◎或は、京傳は、事實に於ては、獅子鼻にては非ざりしやも知れず。彼は所謂通人なり。而して彼の通人たるは、道樂三昧の通人には非ず、眼嚢の口を堅く締めたる通人なり。式亭三馬の小野𥶡譃字盡に云へる『鈍』に非ず、『銈』たる人物なり。殊に彼は、儉約的の通人なりしと傳へらる。これほどの通人の京傳が、黄表紙に於て、眼中、一世を空しくするの慨を抱きながら、天狗鼻を描かずして、故と獅子鼻を擇びたるは、通人の皮肉たるを失はず。

◎北斎の『鼻』は、京傳の鼻と、其の意義を異にす。北斎の『鼻』は、彼の自像の鼻と相似たるところあり。而して自像の鼻の方、鼻筋通りて、鼻としては稍立派なるらしく見ゆ。彼の自像は、彼の晩年に、杖に倚りて立ち、門人をして畫かしめ、其の稿本を訂正したるものなりといへば、寫實に叶へるものなるべし。

◎北斎の『鼻』は、自像の鼻よりも鼻梁の短かくして鼻翼の稍張りたるを見る。北斎の『鼻』は、自像の鼻よりも力強く見ゆ。北斎の『鼻』は、彼が、浮世繪に於ける理想の鼻なるべし。

◎吾曹は謂ふ、北斎の『鼻』は、自家の鼻をモデルとして、更に研究を加へて、描き出せる彼が藝術上の鼻な

り。此の鼻は、尤も眞摯なる寫實的研究に本づくものなり。而して此の鼻は、北齋の理想する筋肉美を象徴するものならずんばあらず。

其、六

●拔群の美人といへども、お高祖頭巾に面を包みたる時、卒然として途上に相逢へば、容易に、人に辯知せられざることあり。頭巾より顯はれつゝある鼻は、何等の表情をも爲さゞればなり。

●顏面は人の表情舞臺なり。精鋭なる表情機關は、すべて此に集合す。而して此の舞臺の中心に隆起しつゝ、つねに表情機關の中心たる可くして、何等の表情を爲さゞるものは鼻也。吾輩は謂ふ、鼻は表情機關に非ずして、象徴機關の尤も精美なるものならずんばあらず。

●『眼は口ほどにものを言ふ』といへり。眼は發聲せずと雖も、能く、發語して、口よりも雄辯なる可き舌を有す。此の點に於ては鼻は頗る呐辯たるを失はず。而して鼻は、自から天賦の形を活用するの才智を有せず、則ち知る、鼻は呐辯にして且つ無能なり。高く見ゆる時は高慢なりと嘲けられ、低く見ゆる時は、鼻白むと笑はる。

●呐辯にして不幸なる鼻は、一面に於て、人の全部を表現するの光榮を有す。眼と口とは、人の心情を表現するに對し、鼻は、人の軀幹筋肉の全部を象徴す。情緒の美は眼と口とに表現せられ、筋肉美は鼻に象徴さる。情緒美の表現は刹那的にして、筋肉美の象徴は恒久的なり。

●ナポレオン一世の表情は甚だ變化に富めりき。彼は公衆の前に立つときは、光彩絢爛たる表現を爲せり。退いて、ひとり私室に在るときは、蕭索として頽れたり。彼の眼と口とは表に緊張して、裏には弛滯せり。時と處とを問はず、恒久的に彼を象徴せるものは彼の鼻なりき。

●目を視れば誰か能く隱し得んといふは孟子の觀相説なり。此の説は、千古の名言たるを失はず、然れども時尙ほ早くして、人物研究の學、尙は未だ進まず、孟子は眼を説いて、未だ鼻に及はざりしなり。心を説くの學問あり、未だ心身相關の學説無かりし也。

●事實は學問に先だつ。學説の起る前に、古人は、早く既に象徴機關としての鼻を認めたるなり。吾輩、暫らく其の一例を擧ぐ。

●漢高祖は東洋に於ける古英雄の木鐸なり。古書、高祖の風采を傳ふるもの、隆準と言ひて、眼と口とを言

はず、隆準は大英雄漢高祖を象徵して見えたるならずんばあらず。

●鼻は筋肉美を象徵す。强健なる精神は强健なる體軀に存す。强健なる體軀を象徵するものは、鼻なり。畢竟、鼻が筋肉美を象徵するは、其の精力を表現する所以なり。鼻を以て象徵されたる漢高祖の筋肉美と精力と想像するに餘あり。

●筋肉美と、其の精力の發揮とは、鼻に象徵さるとせば、人の一生涯の精華は疑つて鼻に在りといふも亦た妨げず。則ち、造物者が人の顏面の中央に鼻を位置せしむるは、或意味に於ては、其の人の『レッテル』なりといふも可なり。蓋し、商標は尤も見易き處に貼付されざる可らず。人の商標は、則ち鼻なり。世人は尙ほ公桂の鼻を記臆するや。須らく、更に、伯山本の鼻を見よ。原敬の鼻を見よ。

其七

●團子鼻なりといふとも、明眸皓齒なれば、一代の美人たるを失はざる事あり。凡そ繪葉書に現はる近來の美人を通解せば、理想的の鼻の極めて得易からざるを察知するに餘あり。

●眼と口とは表情に依つて、其の美を增減するが故に、構造の完備如何といふの一點を以て、其の評價を定め難し。明眸の一語、既に、表情を含めり。

●鼻の美は、純ら其の構造如何に依る。これを以て、鼻の滿點なるものは、眼と口とに對すれば、約半分の點數を以て到達し得可き理なり。故に、天下の美人の鼻、其の眼と口との美と均衡せずといへども、世人は、其の鼻に對して、稍、寛大なる解釋を與へつゝあるなり。

●鼻は、其の構造と共に、筋肉美を象徵する所以を觀察するを要す。鼻に於ては、其の構造は、其の筋肉美と尤も緊密なる關係を有す。

●裝へる體軀の筋肉美は、衣裝を解かざれば見難く、赤裸々の軀幹と雖も、筋肉の發達如何は、接近するに非ざれば確かめ難き事、恰も、衣裝の織物の地質如何を、裝へる上より辨知し易からざるが如きなり。若し、衣服を切り解いて、其の端を實査せば、地質の强弱如何は一見、明晰なり。鼻は則ち筋肉の組織の端ならずんばあらず。

●材木の板を、平たく、上より見る時は、其の組織美を見ず。然れども、横に、其の薄き切口を見れば、其の材木の强靱の程度は隱くされず。

●鼻は、正面より見ても、尙ほ可なり。然れども、鼻

翼、殊に、鼻孔の壁に至つては、軀幹の、尤も、薄く、其の端を露はすものにして、地質の組織美如何を審判するに適す。

◉鼻の厚くして、固く、堅靱の觀を具するものは、全體の筋肉美を象徴するものならずんばあらず。地質の技師が、岩石を測定するに當りて、金鎚を以て、岩石脈の露出する一端を叩いて、全岩を測定するが如く、筋肉美を論ずる者は、必らず鼻を見るならん。

◉吾輩は、北齋の『鼻』に對する毎に、彼が、筋肉美を象徴するの意義を以て、畫筆を執りつゝありしを疑はず。

其　八

◉北齋の聲價の一半は、其の人體美の研究に在り。吾輩は、西洋の鑒賞家が、既に、此の點に留意しつゝ、未だ北齋『鼻』に論到せざるを遺憾とす。

◉北齋の畫ける人物は、單に、其の構造が其の解剖學的に、合理なるを賞揚す可きのみにあらず、併せて、彼の人物は、つねに、如何にも、發達せる、堅靱なる筋肉を有せる、筋肉美の人なるを注意せずんばある可らず。

◉北齋の人物は、啻に、畫面の中心人物、或は雄者に於てのみならず、畫面に現はるゝすべての人物、雜兵に至るまで、皆、堅剛なる筋肉美を有する者なるやを想はしむるに足る。

◉吾輩謂ふ、筋肉美は北齋の趣味にして、また其の理想たらずんばあらず。筋肉美は、則ち、彼が人體研究の窮極の結果なり。而して彼が筋肉美の研究は、やがて『鼻』に到達せるなり。

其　九

◉吾輩の見るところを以てすれば、北齋は筋肉美の人たりしを疑はず。彼の自記するところに依れば、彼は、六七十歳を過ぎて、意氣ます〳〵軒昂に、九十歳に至りて、筆力少しも衰へず。終生、未成品を以て自から任じ、瀕死の病中に、天、我に十年の壽を與へて畫家たるを得しめと絶叫し、最後に、『せめて五年の壽を假せ』と痛嘆しつゝ瞑目せる如き、如何に、彼の意氣剛健にして、また絶倫の體質をも具備せしかを察知するに足らずや。

◉北齋の晩年の自畫像を見れば、體力と筆力の、共に、剛健なるを見るべし。彼は、袖無しを著けて、杖に倚りて立てども、颯爽たる英氣は眉宇の間に漲る。彼は、稍、面長にして、廣き額に、長く、明らかに、深く刻

されたる三條の皺を描く。其の鼻は、彼の畫ける浮世繪の人物の鼻に似て、鼻梁やゝ長し。

◉縮緬は、運筆の殊に難澁なるものなり。然るに彼が、白縮緬の大帛紗に、波上、双鴨を畫けるを見れば、一鴨は水を潜り、一鴨は波に浮べり。其の彩色の精密なる、運筆の自在なる。實に、他人の爲し難きところを强行せるものにして、其の意氣と筆力と、感嘆するに餘あり。而して此の時、彼、八十二歲なりといふは、また以て、人を驚倒するに足らずや。

◉彼は自から記していはく、人あり、彼に忠告するに、餘りに多作せざる可き事を以てす。彼答へて曰く、予は未だ一箇の畫家とはならず、勿論、研鑽中に屬し、七十歲以前の作は言ふに足らず、百歲に至らば、稍、一人前となるを得可く、百十歲にして、始めて畫家とならん。足下も幸に長壽を保ちて、予の大成を見よと。

其十

◉北齋の落欵及び印は、また彼を表現す。彼が、戴斗といひ、或は雷震といひ、畫狂人と署する如き、彼、自から告白するもの也。其の印に、八十歲の老年に及んで、『ふじのやま』の平假名を用ひ、後に、富士山形を刻し、九十歲には『百』の印を押す。彼は眞に畫狂人なり。而して彼ほどの畫狂人は古今に匹儔稀なるべし。是ほどの畫狂人たるを得たるは、彼の體力、精力に存せずんばあらず。

◉彼は、天才にして、又た尤も才分の發揮力の永續したるもの也。天才ありと雖も、天賦の鐵軀は得難し。彼の天才の光華を持續せしめたるは其の鐵軀なり。想ふに、彼は、壯年より中年を經て、體力ますく剛健を加へしならん。彼は、天才と筋肉美とを併せ得たるなり。

◉彼は六才にして畫筆を握りしといへど、其の畫は傳はらず。二十歲前後より以後の作を見れば、北齋式の出來上りたるは五十歲以後六十歲頃に在り。五六十歲以前の畫は、筆も稍軟らかに、又た未だ北齋の『鼻』を見ず。

◉彼が壯年、中年の畫は、人物、概ね面長にして、鼻は尋常なり。六七十歲以後の人物は、顏に肉附きて、肩、腰張り、筋骨逞しく、若し衣裳を脫がせたらんには、力瘤に滿ちたる腕、胸などの露はれ來る可く思はる。而して全體を象徵するものは、其の鼻なり。

◉吾輩は、北齋の體質と、其の畫ける人物との間に、緊密なる關係、存在するを信ず。彼は、頗る耐久した

る天才者なる丈けに、彼の體質の發達も中年の後に在りしなる可く、彼の書風は、それと同時に、出來上りしならん乎。

●彼の書は、筆硬く、太く、絕えて纖弱の氣無し。其の美人は、艶冶足らざれども、筋肉美は餘あり。五六十歲以前のものは、美人にも稍、軟媚の態無きにあらず。

●北齋の人物を以て哥麿の人物に對照すれば頗る感興を動かす。哥麿の人物は、輪廓の軟らかなると共に、纖細、軟媚の筋肉を想像せしむ。此の二人者は、硬軟、强弱の兩極端より人體美を發揮す。二人者の人物書を象徵するものは、其の鼻也。哥麿は軟より、北齋は强より、人體美の硏鑽に沒頭したるなり。

●北齋の强といふは强靱を意義す。石の如く硬きに非ず。筋肉美の强は、ゴムの强と齊しく、彈力に豐富なるものならずんばあらず。而して北齋の筆力、能く、這般の意義を表現し得たり。

其十一

●吾輩も亦た、時に、電車に於ても、北齋の『鼻』を見る事あり。而して彼の自書像の鼻に似たるものもあり。彼は、嘗て、北齋の『鼻』を見て、其の人の筋肉美を印像し、豁然として會得し、遂に、これを北齋式に採用するに至りしなるべし。其の時は、詳かには知る可らざれども、彼の書に徵すれば、其の甚深なる印象を受けたるは、四十歲前後の事なるべし。

●尤も能く發達したる筋肉の鼻といふは、北齋の『鼻』の一種に限定せられざるは勿論なり。人の不用意に書ける人は、自から其の人に似る事を致す。彼が北齋の『鼻』を擇びたるは、彼の鼻に似たればなるべし。彼は、筋肉美を自覺し、筋肉美に尤も深き趣味を有したる也。

●北齋の『鼻』は、時と處とを問はず、老少、貴賤、男女を限らず、一切の人物に、悉く用ひらる。彼の筆は、すべての人物に筋肉美を賦與すると共に、筋肉美を象徵する鼻を賦與したるならずんばあらず。

●北齋の『鼻』を點出すれば、眼と口とを隱くすとも、北齋の人物たるを知る。恰も、海岸線を描きて、能登の國を點出すれば、問はずして、北陸道の地圖たるを知るべきが如し、而して能登の地名は、アイヌ語、鼻を意味す。

昨日、新海、高村、渡邊諸君と、蓬楓閣に、北齋の肉筆畫を展觀す。新海、吾輩に質すに北齋の『鼻』を以てす。吾輩も亦た、一時に、多數の肉筆畫に對して宿疑を啓發せらるゝものあり、然れども席上、匆卒、談論に遑あらず、乃ち、此の篇を草して、感興を記し、併せて新海に問ふ。

二月十六日　黑頭巾記

人物評論（四十六）

積年の情弊を廓清するに足るべき

山本閥以外の海軍の人物

海軍主計大監　片桐酉次郎

△閥外の人才

海軍の情弊を廓清するについて私の理想をいへば、先づ海軍省の官制を改正して、文官でも武官でも、どちらでも大臣になれるといふやうにしたいのが年來の希望である。元より武官にも賢才若くは天才ともいふべきものがあるもので、別に大臣とか次官とかいふやうな政務官の教育を受けずとも、自分の修養次第で立派に大臣の勤まる技倆を供ふるものがある。夫れ故に文官とか武官とか一方に限るのは惡るい。どちらでもよいやうな制度にして、競爭の途を開いて置くのが、人材を集むる所以であらうと思ふ。

處が、今日の政黨といふものは誠に野卑なもので、政治家に要する技倆なり、學問なり、品格なりを備へたものが一向に見當らない。で今日の我政治界の有樣では、今直ちに私の理想を實行するといふ事は不適當である。然し之は只現今の狀況についていふのであつて、まさか我政治界も何時までも今日の如くなるべしとは信じない。夫れ故に先づ第一に政治界を改正し、其人の技倆なり學問なり人格なりが、眞正の政治家として陸軍大臣でも海軍大臣でも立派に勤まるやうな人に出て貰ひたいものと思ふ。

然し今日の如く、海軍收賄問題が一世の物論を釀して我海軍に積鬱したる情弊が一般に認めらるゝに於ては、政黨界が覺醒して、海軍大臣になる位の人物の出て來るのを待つて居る餘裕がない。先づ第一に齋藤と

か財部とかいふ山本の郎黨を葬り去るのが刻下の急務である。

そこで今、海軍部内に、所謂山本閥以外に如何なる人が、海軍大臣に適當であるかと考へて見ると、島村中將(速雄)などいふ人が其一人ぢやないかと思ふ。私は此人と同勤したことはないが、其人の行動は餘程公正である如く聞いて居る。私の海軍に居つたのは十數年前であるから、今日は多少事情が異るかも知れぬが、永く中央に來ないで、佐世保の如き田舎に引込んで居るのを見ても、山本一門の郎黨ではない事が分らうかゝる人は海軍大臣にしても相當の成績が舉る人と考へる。

又瓜生大將(外吉)、あの人なども政治家たるの技倆は今の齋藤海相などより遙に上ぢやないかと思ふ。此人とは、佛國公使館附武官となつた時に屢々話もし、又親しくもしたのであるが、確かに立派な大臣の候補者であると信ずる。

之に次いでは八代中將(六郎)の如き人がある。此人とは私は同勤してよく其性格を知つて居るが、實に純白な軍人であるのみならず、非常に武勇もあり、精力も大變に強い人である。然しどちらかと云へば大臣として政治上に携はるよりは軍令部長といふような方が適當かも知れない。本人の期する所も或はさういふ方面ぢやないかと思ふ。德望もあり、部下を感化する力も強い人で、艦隊の司令長官、艦隊の總大將などには實に恰適の軍人である。政治といふものは武勇とか清潔ばかりでも行けぬものとすれば、此人の性格から見て、大臣は其長所でないかも知れない。然し此人なども先づ大臣の候補者の一人としても差支ないと思ふ。

山本閥以外の人に大臣の資格あるものを求むれば以上の如してあるが、高級の軍人即ち軍令部長とか、艦隊の司令長官とかいふ人を求むれば、東郷大將は申す迄もないとして、井上元帥(良馨)山田中將(彦八)といふやうな人は純白な人である。決して山本一派の人ではなく、帝國の海軍々人として恥しくない、公明な考を持つ人と思ふ。さういふやうな人が海軍の首腦となつて、軍政軍令をやれば大いに面目を改め、腐敗を一掃するに大效があるだらうと思ふ。

それから私の知つて居る人で秋山少將(眞之)などいふ人は、なか〳〵の意見抱負を持つてゐる人で、將來有爲の材と思ふ。それから加藤中將(友三郎)、あの人も私は英國に一所に居つてよく知つて居るが、之も意見を持つ人であるが、近來山本一派とどういふ關係にあるか一向に知らぬ。が呉鎭守府などに長く居つた事を以て見れば、深入ではなく超然位の所であらうと思ふ。此人なども大いに用ふるに足るべき人と考へる。

一體海軍の情弊を廓清するといつても、現在底の底まで深く浸み込んで居る罪跡を今直ちに根絕して了ふといふと——即ち罪跡のあるものは大將であらうが何であらうが、皆繩をかけて了ふといふこと——は海軍外の人なら知らず、海軍部内の人には出來にくからうと思ふ。ナゼといふに、今日の海軍省の連中は、皆互に友達同志、知合同志であるから情誼上思ひ切つた事は出來るものでない。成程、大義親を滅すであつて、國家の爲めとあれば骨肉の間でも忍ばざるべからざることはある。理屈は成程さうであるが、人間は一面情の動物である。殊に武士は涙脆ろい

我れに正面より敵向ふならば、生命を捨てゝ之を抑へることは何でもないが、多年の交遊あるものからして情誼の柵にかけられれば、それを忍ぶことはなかなか出來ない。純白熱誠の人であればある程出來にくいやうに思ふ。それで私が前にお話したやうな人が、私の希望するやうな位置に進んでも、現在の情弊を直ちに根絶することは出來ぬものと考へる。然し今日以後再び不都合な事を仕出來さず、又情實によつて無能を舉げ有能を斥けることをなさず、國家的立場より公平に事務を處理し、人材を舉げ用ふれば、數年ならずして帝國の海軍は其面目を一新するだらうと思ふ。

△海軍の不良分子と善良分子

鵜崎鷺城

去年は薩摩藩の當り年で有卦に入つたが、今年は祟り年と見え櫻島の爆發に次で海軍に收賄問題が持揚り、國民の總攻撃を受くるなど不思議に惡いことが續く。支那流にいへば櫻島の噴火もジーメンス事件も、天が薩閥の滅亡を暗示したのかも知れぬ。在野黨から提出した彈劾案は政友會の忠勤に依て衆議院に破れたが、内閣は少からぬ痛手を負うた。

ジーメンス事件其物は問題の導火線になつただけで、其性質分量からいへばさまで大ならず、隨て之れに關係せりと傳へらるゝ岩崎某といひ藤井某といひ、雜魚の部類に屬する方で、從來之れに幾十倍幾百倍する事實がアームストロングなりヴヰカスなりの間に伏在し、其裏面に呑舟の魚が潜んで居る。若し權兵衞が文官の總理大臣であるなら、斯くまで攻撃の標的にならずに濟んだかも知らんが、彼は薩閥の巨頭にして多年海軍の實權を握り、而も從來如何にして暴富を積んだかを疑はれて居る。コンミツシヨンの種を播いたのは權兵衞だから、國民が之れを堀くるのは當然で、鳥なら三度に一度は逐はずばなるまいで濟ませるが、國民はさうは行かぬ。若し彼にして眞に潔白であるとすれば、苟くも紳士に對して泥棒呼はりするが如きは容易ならざることである、これが歐米であるなら大問題になるべきであるが、脛に傷を持つて居るから威張つたこともいはれぬ、言ふても人が承知しない。前年桂が内大臣侍從長になつた時、世人は彼が如き人格の劣等なるものを新帝の師傅にするの不都合なるを攻撃したが、權兵衞の今日の場合はそれ以上に道義の缺陷ありと認められてるのであるから、一國の宰相として、輔弼の任に當るべき資格なきものとせねばならぬ。

世間には今日の海軍を薩の海軍といひ、之れに對して陸軍を長の陸軍といひ一の對句になつて居る。併し海軍の薩人は皆が皆な一隊して此城廓を守り、又た總て志を得て居るかといふに必ずしもさうでない。薩人にして相反目するあり、或は馘られて怨みを挾むあり、長州の如く同族擁護の共通動作を認むることが出來ぬ。それ故に今の海軍を適切に評すれば權兵衞といふボスがいろいろな人間を周圍に集めて親分子分の關係を造

り、此人間を以て總ての樞要なる機關を壟斷して居るのである。併し權兵衛は薩の代表者であるからやはり薩の海軍といふことになる譯である。

權兵衛といふ男は初め勢力のあるものを利用したが、利用の必要がなくなるか若くは同等の位置になると排斥して段々自分の勢力を海軍部内に植ゑ付けた。彼の爲めに押退けられたものは古い處に、樺山資紀、柴山矢八、日高壯之丞、片岡七郎、有地品之丞、坪井航三、八田裕二郎あり、最近には未だ其年限にも達して居ないのに瓜生外吉を豫備に叩き込んだ。是等は其主もなるもので一々數へ立てたならいくらもある。殊に柴山と八田は劇しく反抗したからでもあらうが、其殺し方も深刻であつた。薩人で無事に殘つて居るのは此間死んだ伊東祐亨、井上良馨、東鄕平八郎、上村彥之丞、伊集院五郎、伊地知季珍、山田彥八等で、いづれも彼の爲めに薬にならぬもの若くは其節度に服するもの、又た薩人以外で相當の位置に進んだものも概ね一種の關係あるか、然らざれば降參武士のみである。就中關係の密なるを山内萬壽治とし、昔からコンミツジヨンの相棒といはれて居るが、彼の財産は權兵衛と相若き或はそれ以上と稱し、吳鎭守府長官であつた時、多額納稅者以上の稅金を收めたといふのでも分る。降參武士の中で最も親密なのは吳鎭守府司令長官の松本和で、權兵衛の娘を大佐山路一善に嫁し、山路の姪の婦人口を周旋し、誰彼れとなく閨閥の周旋をするので海軍の高等桂庵と綽名され、本省に勤めた頃は夫婦連れて權兵衛の自宅に行き踊りをして見せるなど、如才ないといふよりも總て幇間的に振舞ふて山本一族の機嫌取りをしたといふが格別能もないのに久しい間、艦政本部長の要職にあつたのも此れが爲めで、自然臭い仲間の一人に數へられて居る。

同じ兒分の中でも海相の齋藤は山内の如く奸智に長せず、又た松本のやうに卑しからず、親分よりも器の大きい處があるらしく見える。收賄問題については當局の責任者としていろ〳〵質問もし攻擊もするが、何人も權兵衛ほどに其人格を疑はない。一說に據ればコンミツシヨン黨も彼を除外しては不便であるから近頃仲間に入れたといふが、それは多分外間の想像であらう。併し部内に醜類のあるのを知りつゝ、默認した罪は免れぬ、第一西園寺内閣、第二桂内閣、第三西園寺内閣、第三桂内閣山本内閣の五代に歷仕して九年の久しきに及んだのは、柔順なる目代として權兵衛の氣に入つたからでもあらうが、斯かる例は今までの大臣中絕えて無い。彼は夙に辭意があるといふ位だから、今度の騷ぎについて査問會の結果が如何にならうとも、責任上罷めるかも知らんが、同じ罷めるなら昨年政變の際にすれば好かつたのに、こんな不體裁な問題に引掛つたのは有終の美を爲す所以でない。併し權兵衛としては齋藤を一人犧牲にして首相の椅子に噛付くやるなノンフンゾウな眞似が出來るであらうか。

權兵衛の偉く見えるのは眞に偉いのでなく、唯だ排他力に富んだ結果鳥なき里の蝙蝠になつたからである。彼の辯舌は莊重で内容に富んだ如く見えるが形容詞で人を称すだけで脫線勝ちである。人が喧嘩をしに行くとあの面附て睨み、拳骨を固めて今にも毆りさらにするが、斯かるは

鬼面人を嚇すの類で、何處までも此方が強く出るとへコタレて仕舞ひ案外臆病である。昔から新聞記者に面會するのを嫌ふのは朝党新聞を恐るゝよりし、恐れるのは即ち卑怯な證據で、此點は寺内と同じである。處が自分等の利益といふ一事になると極めて大膽不敵で、コンミッションを取つたり、財部を無暗に引張り上げたり、甥の山本英輔や馬鹿息子の山本淸を外國に派遣させたなどは其適例と見るべきである。

財部についても非難の聲が高い。英國でも獨逸でも軍人の進級は上の方から順送りにするを原則とし、今まで被命令者であつたものが命令者になるやうなことは滅多にない。財部の進級は拔擢法に因つたのかも知らんが、明かに拔擢法の濫用で而も其都度二人なり三人なり必お招伴に與つて居る。財部は見込まれて婿になつにだけに萬更の代物でないが、閨閥を鼻に掛けて先輩同僚に威張り、權兵衛の惡い點のみ眞似して鬱陶しいと思ふ人間を斥けて仕舞う。最近には少將上泉德彌、大佐太田三次郎を始め相當に役に立つもので彼の爲めに殺されたものは少くない。斯くの如く今日は軟派全盛の世の中であるが、島村速雄、八代六郎、秋山眞之其他にも權兵衛海軍に慊焉たる人々がないでもないが、表面楯を突くだけの勇氣なく、南風競はすと諦らめて居る。以上の三人は人物といひ手腕といひ何處に押出しても立派な人であるが、權兵衛なり財部なりは他の方面に敬遠して決して軍政の方に近づけない。

査問會の結果は或は泰山鳴動鼠一匹に終はるかも知らんが、兎に角權兵衛は半ば政治的に殺された譯で、随て財部の如きも今までの如く調子に馴れず、又に大臣になる時機が来ないかも知れぬ。唯だ此に注意せねばならぬのは不良分子と善良分子の區別で、或る一派の如く坊主が惡けりば袈裟まで惡しの筆法で、海軍全體を敵とし或は誰彼れの界なく腐敗呼はりし、一方を殺して一方を活すやうな惡むべき權略を弄するのは感服しない。之れを機會に情弊の源たる海軍及び陸軍の不良勢力を一掃して廓淸の實を擧げたい。

△積弊を廓淸し得るは八代中將

太田三次郎

今日我が海軍の首腦となつて山本閥の海軍を廓淸するに足る人は、私は八代中將を措いて外になからうと思ふ。

八代中將の如何なる人物であるかは、中將に關する逸話の二三を話せば明瞭であらうと考へる。

八代といふ人が海軍々人となる抑々の初まりから面白い。明治十五六年頃までは海軍兵學校の中は薩摩の芋で蔓つて居つたもので、他の縣から行つて居るものが不平で堪らない。薩摩以外のものがみんな一所になれば勿論人數に於ては多少薩摩人よりも多いけれども、何にせこちらは烏合の衆であるし、向ふは同藩人の團結であるから、衝突すれば何時も負ける。こちらは口惜しくて堪らない。そこで淺井正次郎（確か少將に

なつて退いた）などが餓鬼大将で、非薩摩同盟を作つて喧嘩してもどうしてもいけぬので、名古屋の英語學校（今の中學校の前身）へ行つて演說をやり、自分等の味方を作らうとしたものだ。其時淺井が、「此中の人で誰か海軍へ入つて薩摩の奴等をやつつけやうとするものがないか！」といふと、「私がやります!!」といつて手を擧げたのが、今の海軍中將八代六郞だつた。

八代といふ人は腕力家でもあるし、又人間が餘程しつかりして居つて實に武人の典型である。私が海軍の生徒であつた時分に、或先輩からこういふ事を聞いた事がある。「お前の國の八代といふ人は實に立派な人だ。或時軍艦に乗り込んで航海をした時に水兵が一人海の中へ落ちた。あの處が八代は衣服を着たまゝで直ちに飛び込んで之を助けてやつた。あの時の先生の態度には感心した」といふ事をいつた。それは八代が泳ぎが達者だといふ理由もあらうが、落ちたのが何人であるかも確めず、直ちに衣服のまゝ飛び込んで水兵を救ひ上げるなどいふ事は如何にも八代の人物をあらはして居ると思ふ。

それから今の權兵衞が官房主事か何かで權兵衞大臣と呼ばれて、權兵衞の聲威赫々たる時分に八代は大尉か何かで軍令部に居つた。松本和などは其時分から權兵衞のお大鼓持で、少しエラさうな人間には小使のやうな事をして滿足して居つた。當時山本は部下の各新聞から盛んに攻撃された事がある。或日松本が軍令部へ來て「今日山本さんは新聞を見て妙にイヤな顔をして居る」といふと、八代は「そんな馬鹿なことがあるものか。今のやうな地位で、新聞でヤー／＼いはれるのは一種の名譽ぢやないか。權兵衞はそれを見て內心却て喜んで居るんぢやよ」といつた。お大鼓持の松本は其事を山本に通ずると、山本は「八代は面白い男だ、一度會ひたい」といふたので、其事を八代に傳へると、八代の答が面白い。「この足は決して權門に近くを許さない」といふて拒絕した。

八代といふ人はそんなやうな剛直で、純潔で、又なか／＼才氣を持つた人であるが、未だ舞鶴の司令長官か何かて、中央の舞臺に出ないのは殘念である。

この人が若し今の海軍省に來て、本當に部內の廓淸を計るとすれば、それこそ生命がけでやり得る人であると思ふが、只少しく掛念に思ふのは、人間は位置が進むと圭角が脫れる、圭角の脫れるのを圓熟といへばよいやうなものゝ、それと共に元氣が銷磨するを免れない。で、今の八代中將に私が思つて居る位の勇氣あるや否や此頃の事は餘り知らぬが、私の知つて居る八代中將は、確かに今日の如き腐敗を一掃するに足るべき唯一の人であると思ふ。

△先づ制度を改革せよ

八田裕二郎

海軍の廓淸といふことを根本的にやるにはどうしても官制を變へねばならぬといふのが私の持論である。先づ第一に海軍の軍人でなければ海

軍大臣になれぬといふ制度、これはどこの立憲國でもない事である。ナぜ軍人でなければ陸海軍大臣になれぬか。各國の歴史でも、又現在の實例に於ても、軍人でなくして立派な陸海軍大臣のものがいくらもある。英國の如きは初まりから軍人でないものが陸海軍大臣となり、佛國の如きは軍人がなつた事もあるが軍人でないものがなつたこともあつて、決して軍人と限つてゐない。其外どこの立憲國でも、軍人でなければ陸海軍大臣になれぬといふ國は決して無い。尤も專制的の國即ち露西亞とか獨逸とかいふ國では多く軍人がなるけれども、之とても制度上では軍人でなければならぬといふ事にはなつてゐない。第一そんな事を決めるのは立憲の旨意に反すると思ふ。況んや海軍省などがモト〳〵薩摩の海軍省であると世人に評判される程、一族一派で數代持ち切つて居る。いはゞ昔の一子相傳の形になつて居る所へ持つて來て、こういふ制度で固めて居る。だからして其弊害は實に測るべからざるものがある。

抑々兵部省から海軍省といふものが獨立して新たなる一省となつたのは明治四年であるが、其れ以來ずうと薩摩大臣で持ち切つて居る。即ち初は河村純義、次に西鄉從道、樺山資紀、仁禮景範、それから又西鄉從道といふやうに持ち廻つて、終に山本權兵衞となり、其後今の齋藤となつた。齋藤は薩摩人ではないけれども、いはゞ權兵衞の代官のやうなものて、彼の後ろに權兵衞の居ることは世間何人も之を疑ふものがない。斯くの如く薩閥といふ一族一派でのみ海軍の事をやつて來たからして、弊害の生ずるといふ事は寧ろ自然である。

又其上に此弊害を助長する機關が、も一つあるのは極めて遺憾である。それは何であるかといふに即ち軍事參議官の存在である。全體國防計畫は、陸軍は參謀本部、海軍は軍令部で立案するのであるが、それを軍事參議官といふ陸海軍合併の高等樞密院の如きものがあつて、そこでその立案を議して　天皇陛下に奏上するといふ事になる。そして其計畫が本となつて、初めて海軍大臣から總理大臣に通じて、軍艦が何隻要るとか、最小計畫でもこれ丈けは必要だとかいふ。

元來國防計畫なるものは、實に一國の最も大事な仕事であつて、時の內閣の外交方針なり、財政狀態なりと大關係を有し、從つて議會にも又一般國民にも直接にかゝつて居る大問題である。それを少數の高級武官のみで拵へるといふ事であるから其處に弊害が生ずるのである。此制度からして直してかゝらぬと根本的の廓淸は六つかしいと思ふ。

今默つて事實について考へて見ても、軍令部には矢張り山本一派の伊集院といふものがあり、海軍大臣には山本の乾兒たる齋藤が居り、そして山本自らは軍事參議官である。先づ此三人あたりが相談をして軍艦が何隻要るといふやうな事を鹿爪らしく立案して、之を軍事參議官の處へ持つて行つたとする。然るに其軍事參議官の一人として山本が居る。他に二三の薩摩の大將などがある、いはゞ山本の親類同樣の人で、君等の立案ならそれでよからう。賛成だといふやうな事になり易い。さうすると國防計議といつても山本一派によつて成り立つといふ事になる。それで、誠心誠意に國家の財政に考へ、外交上の都合に考へ、如何にも國民

が納得するやうな計畫が出來れば此上もないが、若し然らずして一人一家、或は一門一族の私利私福を計るやうに出來て居つても、制度上出來た案であるんだから、無暗に之を斥けることも出來ない。だから內閣も苦しいし、大藏も苦み、他の各省も必要な經費を節して、海軍の要求を容れるといふ事にもなる。而して其弊害の本は實に斯の如き制度にあると思ふ。

軍事の技術上に屬することについては勿論、專門の軍人の智識をからなければならぬが、軍事行政といふ事になれば、之はどうしても政治家の仕事であつて、外は世界の大勢より、內は財政經濟の狀況、國際外交の如何を觀ざればならぬ仕事である。故に之には議會も國民も與らざれば眞の國防計畫は出來るものぢやないと思ふ。

一體國防計畫などいふものは、決して一定すべき筈のものでない。例へば日露戰爭以後我國の陸軍は二十五師團、海軍は五十萬噸といふ計畫を立てたさうであるが、陸軍はまだ〱二十五師團にならぬけれども、海軍は已に五十五六萬噸になつて居る。之は何れ四圍の事情によつて多少の變更は免れざるもので、或は隣國の軍備の模樣、或は遠國にしても東洋に大關係ある國の軍備如何によつて伸縮せらるべきものである。例へば米國に於てもルーズヴェルト時代には海軍擴張に熱中したが、今のウヰルソン時代に在ては大いに消極的になり、毎年二三隻づゝの戰闘艦を造らうといふのが一隻づゝに減つた。又近來英國の海軍から獨逸の海軍へ建艦競爭中止說を持出した所が、米國では大いに賛同の意として、英國が誠實にそれを實行するならば、我々も之に賛成すると決議した位である。

我國一部の人士は來年パナマの運河が開ければ恰かも米國から日本に挑戰でもするやうな事をいひ振らすが、之は非常の間違であつて、米國といふ國柄はどこまでも商業國であつて、他國に向て好んで領土擴張をするやうな事は決してしない。時に移民問題の如きものがあるけれども、之は日露戰爭前の露國が、朝鮮を取り、あはよくば日本をも丸呑にしてやらうといふ態度とは全く別のものである。其米國を對手國として、向ふで軍艦を拵へたから、此方でも拵へねばならぬなどいふのは非常の愚論である。軍艦建造の際に何か儲事でもしやうと思ふものは異議もなからうが、政治眼から見れば殆んどノンセンスである。

戰爭をするとか、艦隊を率ゐるとかいふ、軍事上の技術に屬することは勿論海軍々人でなければならぬが、只、日本の海軍を如何に編制して、如何に運用するかといふやうな、海軍行政に屬することは、之は寧ろ政治家の決定すべきことで、海軍々人にとつては却つて不得手の事柄であるといつてもよい。之は恰度郵船會社の經營などゝ同じ事であつて、會社が船を何艘持つて、如何なる航路に、如何に航海して、人間を如何に配置して、船賃をいくらにするかといふ事は、船乘りに經驗がなくても出來ると少しも變らない。例へば今日大きな郵船會社を經營して居る近藤廉平とか、吉川泰藏とか中橋德五郎とかいふ人は、船を西に廻はすことも東に廻はすことも知らなくても、立派に會社を經營し行と同じ事で、海軍の技術を知らなくても海軍大臣の勤まらぬといふ理由は毫頭ない。故に海軍大臣は金筋のものに限るなどゝ思ふのは一大偏見であつて、先づ此偏見と制度とを改め、一日も早く眞に帝國の海軍として恥かしからぬものを作りたいと思ふ。

評論

新藝術觀

文藝時評　中澤臨川

ベルグソンの哲學が、いろ〳〵の意味でいろ〳〵の方面に著大な影響を及ぼし、どれほど深く時代の要求を充しつゝあるかと云ふことは茲に説くまでもない。殊に彼の哲學の基礎をなす直觀なるものは、今迄の哲學者が取扱つた冷索の理智と違つて、至極溫かい一種の同情をその德とするものであつてみれば、それが藝術と一倍親しい關係を保つてあらうと云ふとは見易い道理である。然らば彼の哲學の歸納する藝術觀とは如何なるものであらうか、それが在來の美學とどう違ふかと云ふとを研べてみるのがこの論文の主旨である。彼の著書には到る所の藝術及藝術家が引合に出されてゐるし、『笑』と云ふ論文のなかには、簡單ながら具體的にその藝術觀が現てゐるのであるが、然かし私はただ忠實な紹介者に甘んずるばかりでなく、更に一歩突込んで、一個のベルグニアンとしての見地から、自由な推論もし、蛇足をも加へて見たいと思ふ。

一、理智と直觀

ベルグソンの哲學の基礎が直觀説に在るとは詳しく述べるまでもない。人間は生存の必要上から、事物の實用的方面ばかりを觀て、之に適應するやうな概念を作るとに馴れてゐる。斯様な功利的智識を我等に與へるものが我等の常識や理智である。我等は日常生活に於て物を視、物を聽き、物を考へるときに、眞に視、眞に聽き、眞に自分の心の奥底で考へてゐるやうに思つてゐる。然るに我等が外界に就て視たり聽いたりす

る事は、我等の五官が我等の行爲に適應するやうに、なるべく簡單に方便に採入れた一種の選擇または符號に過ぎない。また我等が自分自身に就て考へ知つてゐると思ふ事も、實に行爲を中心として沈澱させた意識の外皮に過ぎない。で、我等の五官や表面意識は實在の功利的皮相よりほか何物をも我等に敎へえないのである。人間の生活に直接必要な類似點は誇大にして受け入れられるが、不必要な個別相は全く忘れられる。言ひ換ふれば我等の常識や理智は、豫め行爲が指し示して置く一筋途を辿つて行く馬車馬に過ぎないのである。その行爲の途を進むに必要な特性のみが事物から採入れられて、やがて分類が行はれる。分類ほど實用に方便なものはない。分類の廣く詳しいほど、我等の日常生活は明るい燈明臺で照らされる。然かし一方から言へば、分類の廣く詳しいほど、我等はたゞ物の符號と類性ばかりを見て、その物如實の色形や――その物の個性を――忘れることになる。狼から見れば山羊も小羊も同じに見えるかも知れない。生殺り易く、舌ざはりの好い柔かい肉を持つた、同じやうな二つの犧性の間に何て差別をつける必要があらう。我等も人間仲間にこそ甲乙の差別を――それも實用的に――附けるが、一疋の蚊を他の蚊との區別を談りうる者はなからう。我等の常識や理智は我等の生活に必要な智識ばかりを分類法で採入れ、事物をただの符號に化して意識に上す習慣になつてゐる。殊に斯樣な智識を現はす文字がまた一種の符號である。ある文字がその現はす事物に與へる意味は全くその事物の極く表面的な概念にほかならない。

　斯う見て來ると、我等の日常の智識ほど概括的表面的で個性の失はれたものはない。それは唯だ行爲の爲めの符號、實用の方便に過ぎない。然らば科學は奈うであるか。この常識的智識が最も組識的に最も巧妙に仕上げられただけではないか。

　この事實は我等が外界からうる智識に就てのみ言ひうるばかりではない。我等は自分の內心を閱みして悲喜哀樂の情を細かく知り悉すものと思つてゐる。然る

に我等の日常の内的經驗はたゞ其意識の皮相に停滯するに過ぎない。我等が悲と呼び喜と呼ぶものも、その實は世間普通り(ひととほり)の類型的情緒の感得のみで、我等は一々その個性的色彩を味讀するわけてはない。眞に喜び、眞に悲み、眞に愛し、眞に憎むその心の奥には、意識の底を貫いて出る、個性の濕ひをもつた濃い影、深い響が無ければならない筈である。

要するに我等は、行爲に導かれて概念と符號の狹い途を歩むでゐる。て、我等と實在との間には厚い幕の距りが附けられ、我等の智識は其實在の表面に沈澱させられた。

然らば我等は眞の實在に接觸する或る能力を有たないのであらうか。理智のやうに有目的な作用のほか我等には認識の途はないのであらうか。何うすれば我等は devenir réel の中に我等を置くとが能きようか。

「直觀に依れ」斯うベルグソンが答へる。「生きた直觀的同情に依れば我等は生命の實在の中に呼吸するとが能きる」と。

我等の因習的理智は或は之を拒むであらう。斯樣な一種のプリミチーブな『同情』に依て、幾千年來そが占めて來た智識上の權威を侵かされるとを容易に承認しないであらう。然かし汝の勢威はカントの唯心論を頂點として達すべき所まて達したと同時に、やがて其れ自身の界限をも意識したてはないか。科學の究極はデユ、ボア、レーモンドを待たずとも、今日の人の皆な承認する所である。我等が若し理智の中にばかり生息する物とすれば、我等はその界限を知るとの能きる筈はない。既にその界限を知ると云ふとが、我等には理智を包括して、猶ほより廣い、より根本的な機能の在るとを證明する第一の左劵である。更に界限の自覺はそを超越する第一歩でなければならない。

如何にして超越するか?。ベルグソンの宗徒は斯う答へるであらう。『在來の我等は餘りに理智の重荷に惱まされて來た。今一度小兒のやうな原始的な直覺に歸れ。生命の哲學は至極單純である。然るに我等は餘りに學び過ぎた。『哲學をして再び the All の中に鎔ける

努力たらしめよ」。その努力は勿論困難な努力である。然かし一度その味を知つた者には忘るゝヿの能きない歡喜がある。』

Sweet is the lore which Nature brings;
Our meddling intellect
Misshapes the beauteous forms of things:
We murder to dissect.

Enough of Science and of Art;
Close up those barren leaves;
Come forth, and bring with you a heart
That watches and receives.

超越して何處へ行く？。實在へ、生命の流の中へ、自然人生の élan vital の泉へ。かくして我等は直觀の德に由り宇宙共通の故鄕に歸り、事物及び自己の絶對認識に達するヿが能きる。

二、直觀の作用と種別

前にも述べたやうに、我等が理智の界限を知ると云ふヿは、我等がそれを超越するヿの能きる何よりの證據である。我等は解剖者であると同時に建設者であり、批評家たると同時に藝術家であり創造者である。我等には同情があり省察があつて、無關心に自然人生と親しむヿが能きる。我等の感想、熱情、行爲には未だ我等の理智の解き得ない――寧ろ及び得ない――秘密が潜んでゐる。彼等は不用意でありまた自由奔放である。然かし彼等は確かに我等の實人生の眞根であると云ふヿだけは拒めない。彼等は「知」らない、然かし彼等は感じ、造り、且つ erleben する。斯様な『全經驗』から產れた『生の儘の洞察』を直觀と呼ぶのである。

理智は固化し、直觀は滲透する。理智は敵視し分析し、直觀は同情し親和し共鳴する。

『この機能（直觀）は決して不思議ではない我等の誰てもが或る程度までは之を働かす機會をもつてゐる。』と、ベルグソンは言つてゐる。例へば、著作に從事する者は能く知つてゐる事であるが、一つの問題に就て長い研究を遂げ、凡らゆる記錄を集め、いろ〳〵の覺

た書きを作つた後で、なほ今一つ缺けた物がある。それは即ち彼自身をその問題の中心に置いて、その中から能ふだけ深い衝動(インパルス)を攫んで來ると云ふ困難な努力である。で、一度この衝動を得ると、彼の問題は統一した精神を見出し、諸材料は適當に從順に按排されるとになる。斯の衝動は即ち一種の直觀にほかならない。哲學者の内省(イントロスペクション)と云ふのも、藝術家のインスピレーションと云ふのも、みな直觀の別作用である。

然かし我等の日常生活は是非とも常識や理智の支配を受けねばならない。我等が溫かい直觀の恩惠に浴するとは至て稀である。我等はいつも生命(いのち)の故郷(ふるさと)を忘れ勝ちである。此に於てか、ベルグソンの哲學は昏睡者を呼び覺ます警鐘である、『汝は再び目醒めねばならぬ』と。彼の宗徒が歡喜して彼を迎へるのもこの點である。彼等の一人(ひとり)は言つた。『ベルグソンが最先(まつさき)に我等に要求する所のものは一種の内部悲劇(インナー・カタストロフィー)である。幾人か斯樣な論理的革命に堪へうるであらう。しかし一たび斯樣な心理的變化を受け入れるとの能きた者があるならば、彼は決して再び從前の狀態に歸り得ないとを悟るであらう。……彼は丁度戀すると同じやうな趣で理解する。彼は全諸音を捉へた』と。

『戀すると同じやうな趣で理解する』――若しもここに宇宙に共通する『心靈』と名くべき者があるならば、禽獸草木の世界まで汎く瀰漫した élan vital を承認するならば、我等の眞經驗、眞理解の方法は之を措いて他に求められないであらう。而して藝術家の直觀に於て最もその適例を見るであらう。

ベルグソンは直觀に種別を與へてゐない。勿論直觀は無目的であり、不用意であり、不羈奔放である。之を區別すると言ふとが既にその本然の性質に背いてゐるかも知れない。然かし注意深い讀者は彼の說く直觀におのづから二つの類型のあるとを覺るであらう。彼はその『哲學緒論』の中で、屢ば『理智的同情』とか『哲學的直觀』とか云ふ文字を用ゐてゐる。それから彼はその著書の凡らゆる場所で、直觀の作用を例證する爲めに藝術を引合に出してゐる。然かしこの二つの直

觀が根本に於て違はなければならないと云ふとは自明の理である。今私は假りに其一つを理智的または哲學的直觀(Intellectual or Metaphysical Intuition)と名け、他の一つを情緒的または藝術的直觀(Emotional or aesthetical Intuition)と名けるであらう。勿論斯樣な截然たる區劃が事實に於て存在するわけではない。藝術と雖も少しも理智の分子の加はらないともなければ、感情が哲學に入らないわけもない。たゞ兩者の主調を基として便宜の爲めに附けた區分に過ぎない。更に我等はこの二つの直觀のほかに別な直觀世界が存在しなんだであらうかと尋ねるとが能きる。ウイリアム、ジエームスの所謂『宗教的經驗界』が示すやうな所に第三の直觀を區別する必要があり且つそれが妥當であると私は思つてゐる。然かしそれを詳しく究めるとはこの論文の主旨でない。

直觀は空手で獲られるものでない。直觀は營養と努力を要求する。『そが種々の外面的表現と永い親みを重ねて、其信用を博した後でなければ、實在と直觀即ち智的同情に達するとは覺束ない』と、ベルグソンは言つてゐる。即ち我等は理智の助により、その觀察と經驗を蒐集し、充分それに親善した上で、初めて哲學的直觀の慈光に濕ふとが能きるのである。また彼は斯うも言つた。『概念は直觀に缺くべからざる物である。なぜなら、あらゆる科學は概念から成立する。而して哲學は他の科學なしには成立するとが能きないのであるから』と。丁度それはジエームスの說いてゐる『內省(イントロスペクション)』と同じ作用である。

要するに理智的智識即ち概念を土臺にして得た直觀が哲學的直觀である。之に反し藝術的直觀は感情を基礎として成立する。我等が自然人生から得た情緒的印象が營養をなして藝術が產れる。即ち藝術とは我等が自然人生を對象(オブジエクト)とし、情緒的直觀に由て實在に接觸する手段である。

哲學的直觀は概念即ち科學を土臺にして其上に產れるのであるから、之には充分に理智の訓練を要するとは言ふまでもない。然るに藝術的直觀は感情を主にす

るから、前者よりもプリミチーブて且つエレメンタリーてある。我等は何人もある程度まてはこの直觀の享樂者てある。寧ろそれは本能に近い機能と言つてよい。ベルグソンに從へば、本能とは『無意識に行爲を表はす盲目な、しかし非常に微妙な判斷力て、修得したり證明したりすることの能きないもの』てある。而してこの本能か理智の助により自意識の域に入つたとき直觀となるのてある。て、この說明から見ても藝術的直觀が寧ろ本能に近いものてあることが解かる。また、動物が藝術をもちうるや否やと云ふ古來からの疑問も斯樣な見地から見れば、然りと答へられるのてある。なぜなら、動物にも本能があるから。

三、藝術的直觀

我等は何人もある程度までは藝術家てある。靜かに內省するとき、我等は各自の心靈の奥に時には快濶な時には悲哀な、我等の內生活の破られざる諧音を聽きとることが能きるてあらう。我等を圍繞する自然の中にも矢張斯樣な諧音がある。然かしその嚮の我等に達するのは至て微かてまた稀れてある。なぜなら、我等は常に意識の表面に住ひ、常識と概念と文字との制扼に縛られてゐるから。今我等がこの普通意識即ち理智の世界を想像するならば、それを一個の球體に例へることが能きる。その球體は行爲のために蒸發させられ凝縮させられた冷灰世界てある。この世界ては我等は概念て物を種別したり、冷かに證明したりする。然るにこの自意識の器の周圍(まわり)を取卷いて別に或る精神作用がある。それは氣體の世界て、固形意識を中心として次第に擴がり次第に薄らいてゐる。我等はこの世界を無意識界とも、第四ヂメンションの世界とも、直觀世界とも名けることが能きる。其處は我等が文字通りに眞に『經驗』し、全人格を以て試み、感じ、活きる世界てある。其處は至て公開的なホスピタルな領域て、何人の意識も自由に交通し親和しうるのてある。聖意識——神——とも我等は此處て相逢ふことが能きる。それは萬(よろづ)の生命の故鄉(ふるさと)てある。藝術が斯樣な境地に我等を導く時我等の悶みする歡喜も悲哀も、みな斯の永く忘られた故(ふる)

郷に再び足踏み入れた場所の歓喜や悲哀にほかならない。

然かし固形意識の外皮は餘りに堅いために我等が無意識界と交通することを容易に許さない。我等と眞の實在との間には厚い不透明な幕が下されてゐる。たゞその幕は藝術家や詩人たる天寵を有つた者に於てのみ半透明または透明である。て、彼等は斯樣な透視の德に由て自由に眞生命の世界に突入し、その經驗を我等にもたらすことが能きる。我等はその人達を天才と稱ぶ。

理智の太陽は餘りに輝いて我等を眩惑させる。この太陽の照る世界では我等は色盲である。獨り天才のみが心靈の深い奧底に樹蔭を見出す。そこは我等の臆病て人見知りする眞自我の初めて目醒める薄暮と夢の世界である。闇い無意識界の温かな秘密の中から直觀の泉が湧き出して我等の生命をそそのかす。我等は becoming の歡びに溶け、實在の脈搏を五體に感得する。我等は愛するか？我等は考ふるか？。最早斯樣な事は問題にならない。それは我等の眼の濁つたわけでもなく、我等の注意の怠つたわけでもない。我等は今『完全な自我』を生命の流の中に見出してゐるのである。其處には單一の中から湧き出す無限の富がある。音樂の波の移り進むやうな『持續』のリズムがある。

再び言ひ易ゆれば、藝術家は彼の人一倍に清新にして無汚な官能を以て自然人生を感受し、影と光と、色と線と、音階とリズムと、喜と悲と、愛と憎みと、そのほかさまざまな印象を採入れ、常意識界の幕を透視して藝術的直觀に到達する。彼はその德に由て物の概念と類型とを忘れる。彼は個々の物に其本然の個性を見る。彼の自我は宇宙生命の源を包擁するまで開展する。……『私はこれ等の樹木がお互に何を話し合つてゐるかを知らない。然かし彼等はきつと我等の了解能きない何事かを談つてゐるに違ひない。』と、ミレーは言つてゐるが、この詞は少くとも彼自身にとつては眞理でない。なぜなら彼が深い觀察と同情を以て之等の無心な樹木に親んだ時、兩者の間には同じ生命の呼吸が通つたてはないか。

實在は宇宙の生命である。增成し創造する持續の世界である。その世界は常に溫かく、生々し、力と欲びに充ちてゐる。我等が哲學的直觀から到達するも、または藝術的直觀から到達するもその世界は同じ世界である。殊更に『美』と云ふやうな本然的特性が事物に固着して存在するわけではない。その見解は在來の哲學が、『眞理』や『至上命令』を假設したと同じ謬である。トルストオが特にその藝術論から不徹底な美の觀念を除去しようとしたのも理由のあることだ。

て、今一度前述の説明を總括すると、感情を基礎とした直觀に依て實在その物に接觸するのが藝術で、藝術的直觀に依つて得た實在の與ふる感じが所謂美である。

四、藝術の種別と獨創

前にも述べたやうに、我等と自然との間には黑い幕が下されてゐる。若しこの幕が全く切り落されるか、透明になつたとすれば、その時我等は在の儘の純潔の姿で凡らゆる事物の相を、その形をも色をも響をも、我等自身の心靈の最微妙な變化をも感得することが能きる。斯樣な人が若しありとすれば、彼は完全な意味での藝術家である。諸藝術が渾然と融溶した形で彼に於て綜合せられる。然かし斯かるは自然に向て餘りに多くを望むとて、勿論不可能なことである。斯の世では藝術家に造られた人達でも、其幕を上げまたは透視しうるとは極めて偶まであつて、またその小部分に過ぎない。一の方面では透視の能きる人も、他の方面では盲目である。て、その方面と云ふのが我等の一々の官能に準據してゐるので、從て我等は各官能に相當した諸藝術をもつやうになるのである。

物の色彩と形に鋭敏な天才があるとすると、彼はその優れた機能の德に由り、小自我を離れて、即ち行爲に煩はされずに、色の爲めに形を見ることが能きる。彼はその色と形を通ほして事物の内生命に到達することが能きる。て彼はその直觀を或る形で表現し、我等の知覺を醒まし、我等をして自我と實在との間に介在する色や形の癖見を棄てさせ、我等をして『自然』その儘の

形容をみせ。斯うして彼は『藝術の崇高い野心』を満しえたのである。彼は彫刻家または書家である。

我々の日常生活に於て、人間本然の感情はそが表現する不完全な外形的行爲の類型に據てのみ窺はれ、それ自らの原始の情調は打消されがちなのが常である。然るに同じ外形の下に現はれる一つの喜ても悲ても必ず個性の深い感激を經て生命の源に到達してゐなければならない。斯様な感情本然の情調を、音律的の文字に上せて我等に示す者が詩人である。更に或る天才は一層深く侵入して、あらゆる人類に共通する生命の主根に觸れる。それは『彼の最奥底の感情よりも猶ほ人間に親近しい生命と呼吸の或る律』である。彼はそを表現するに普通の文字の決して及ばないことを知るが故に、別により自然な方法を發見する。彼は音樂者である。

劇と謂へどもまたこの方則に洩れない。て、その目的とする所は、我等の生活上の必要と利益とが矢張我等から隠してゐる或る種の實在を闡明するにほかならない。然らばその實在とは何であるか。我等のいろいろの感情のうちでも他人との接觸から起るものほど深く劇しいものはない。丁度充電器の兩極板に集つて最後には火花を出す陰陽の電氣のやうに、我等の間には強い牽引と反撥がある。この心の電氣の事を我等は情熱と名ける。若しも我等の間に社會的または道德的の制裁が無かつたなら、斯種の強烈な感情の爆發は日常の出來事と見做さるべきであらう。然るに人間の功利心は斯様な爆發の有害であることを教える。社會と云ふ物の必然な要求からいろ〳〵の制裁が産れる。功利の擇ぶ所を理知がすゝめる。義務の可しとする所を道德が説く。斯うして知らず識らずの間に、我等の熾烈な情火を壓し覆ふ堅い障壁が出來てきた、丁度燒熱地獄を包む地球の外殻のやうに。然かし火山が出來て爆發が起る。情熱の噴火は人間の自然が社會に對する復讐である。我等の内心に在て眞自我の一部を構成する斯様な情熱を我等は『悲劇的』要素と呼ぶのである。劇の取扱ふ實在が實にそれてある。

——斯うベルグソンは藝術を種別して説いてゐる。

藝術上の獨創(オリヂナリテー)と云ふこともまた同じやうに説明することが能きる。それは藝術家が實在を窺ふ窓である。彼の官能の最も鋭敏に働く點である。自然と彼との間に下された幕の破目である。藝術の領域を區別したと同じ理由が矢張藝術家に彼自身の專有とする獨創を與へる。即ち藝術家の獨創とは狹隘な人工的制限の樹立を意味するものでなくて、その藝術家が自然と交通する天賦の特權を指すものである。言ひ易ゆれば、獨創は彼の製作の眞實さの保證である。彼が獨創的であればあるほど、彼の藝術はより深くより自然で、從て其表現の內容も多色多樣でなければならない。

五、藝術上の二重個性

或る畫家が彼の畫布(カンバス)に上す題材は、彼が或る場所に於て、或る日或時間に觀た自然である。二度と再び閲みするとの能きない創造的映象である。勿論他人には猶更起りえない經驗である。また詩人が歌ふ所のものは矢張彼自身の、彼たゞ獨りの或る瞬間の情調で、千萬年の後にも復たと起りうる筈はない。劇作家の取扱ふパッションにしてもさうである。我等が斯樣な感情に普遍的の名を與へる所を、詩人や劇作家のみが之を個性化して我等に見せる。個性のないものは最早藝術ではない。なぜなら、概念や記號は常識に墮するのであるから。

藝術の普遍性に關する誤解はここから起る。「或る感情が一般に眞實と受取られるからと言つて、それが普遍的の感情であると言ふことは能きない」と、ベルグソンは言つてゐる。例へばハムレットの性格ほど稀有なものはない。彼は勿論いろ／＼な點に於て普通の人間に類似してゐる。しかし我等の注意を牽く彼の性格はその類似點ではない。然ら彼の性格は稀有でありながら、却てその爲めに彼は眞實の人間としてとられてゐる。即ち天才の事業は自然顯象の個性の表現であるが故にのみ、一般に承認せられる。藝術の普遍性と云ふのは實は斯樣な意味である。

然らば、稀有であり獨特であり個性的であるものが、

なぜ眞實として一般に承認せられることが能きるか。それに就てベルグソンは次のやうに答へてゐる。

勿論、それは我等の綱領に反對して、忠實に物を視るやうにしむけるからである。忠實（シンセリチー）は傳染的である。恐らく我等は再び藝術家の觀た儘を觀ることは能きないであらう。尠くとも全く同じやうには決して視ないであらう。然かし、彼が現實に觀照したとすれば、彼が其時幕を擧げるに要した努力が我等の想像を强ゆる。即ち彼の製作は我等の見習ふ御手本である。其手本の効力の奈何が、取も直さず藝術品の眞僞を判ずる正しい定規である。で、眞理はそれ自身のうちに説服力（コンヴヒクション）、否な發心力（コンヴァーション）を有してゐて、その爲めに我等をしてそを認識せしめるのである。

要するに、自然の眞相は個性的であり、之を把持して表現するのが藝術家の任務である。その製作の眞實性が深ければ深いほど、いよ／＼個性が明らかに現はれる。そして其傳染力がいよ／＼廣く行はれる。更に言ひ易ゆれば、藝術は直接にその表現した實在を他人に示すものではなくて、その努力に依り他人を刺激して眞實に通ずる幕を上げさせるのである。

斯く藝術品の内容を支配する個性なるものは、實在その物に附着した本然の特性であつて、藝術家自身に造つたものではない。然るに藝術にはまた別に藝術家自身の個性がその表現に加はる。藝術家と自然――主と客――との融合に由て藝術が生れる。二つの個性、二つの生命の接觸が即ち藝術である。で、實在本然の個性を客觀的個性と名けるならば、之から説かうとする個性をば主觀的個性と名けることが能きる。主觀的個性とは世に謂ふ樣體（スタイル）（廣い意味の）である。我等はこゝで『樣體は人なり』と云ふブフォンの警句を記臆に呼び起すべきである。

然らば我等の藝術的表現にはなぜ斯樣な主觀的個性の現はれを必要とするか。

ベルクソンの説く直觀の天地は甚だ達しにくい世界である。我等がその中に入るには非常な忍耐と努力を要する。それは彼自身も説いてゐるやうに、容易に常人には許されない天惠である。我等と自然とを遮る幕は厚く重い。たとへ天才者と雖もその一部を破りまたは透視するのはたやすいことではない。或人が天才は忍苦だと言つたのは、此意味からは至當の詞である。

様體(スタイル)とは即ち藝術家が實在との交通に努力する全自我の苦がい經驗の表白にほかならない。我等は次のロダンの詞を味つてみるがよい。『何物も辛棒强い勉强にまさるものはない。唯だそれのみが生命の秘密を打明けて吳れる。我慢に熱心に汝の一生を捧げて生命を知るとに勉めよ。汝は永遠に喜の輪の中にあるであらう。了解するとよ。見るとよ——眞に見るとよ。若しも人が理解の幸福を豫知するならば、彼は必要な努力の前に、たとへ長くとも苦しくとも缺くべからざる準備の前に屈服するであらうか』と。

直觀の途は努力である。天才が努力して實在の理解に到達したその道筋を示すものが彼の表現の樣體である。彼はその爲めには僞らざる全自我を提げて戰ふが故に、其處に彼の偉大な個性が赤裸々に現はれる。斯うして彼は自ら拓いた眞理の途を示しつゝ、他人の發心(コンバーシヨン)をも誘ふて實在の流に導くのである。

即ち藝術上の客觀的個性は實在その物に內在する特性であるが、主觀的個性はその實在に到達する努力即ち方便の爲めに存するに過ぎない。若し茲に理想的天才が現はれて、何の努力もなくかの幕を透視するとが能きたならば、否な彼と實在との間に斯樣な幕が存在しないならば、彼は主觀的個性を其製作に印象する必要を見ないであらう。寧ろ彼の個性は實在その物の個性と一體となつて現はれるであらう。

六、藝術の內容

藝術が情緒的直觀に由て我等を導く先は勿論實在の鄕である。いかなる機能が我等を導くにしても到達する實在鄕に變りはない。それはベルグソンの說く『持續』の天地である。生命の里である。élan vital の領地である。流れて已まず、造つて已まず、自由に進み、常に産む經驗界である。更に詞を變えて言へば、ジエームスの所謂宗敎的意識界、『第三經驗界』である。冷かに敵視し分析する固定意識界から逃れて、一たんこの同情親和する流動意識界に入ると、あらゆる生命がここで接觸し共援する。我等は生命の故鄕に歸る。

この說はエマーソンの說いてゐる古代の美の說と一

致する。曰く、人間の心靈はこの地球の上で肉附けられてから、その離れて來た故郷を慕つて、あちらこちらさ迷つてゐるうちに、自然の太陽の光に眩惑されて、實在の影なる大地の物のほか最早何物も見ることが能らなくなつた。そこで神が美しい物を送つて地上の善と美を回想させるやうにしたと。

とに角その世界は持續、增成、流動の世界である。全部が一部をなした世界である。切り離すとも加えるとも能きない世界である。生命の波は渾然として本然の律（リズム）に從つて動いてゐる。複雜の中に單純があり、單純の中に複雜がある。易言すれば、數の觀念の這入らない Pure quality の世界である。分析の更に用をなさない世界である。この點に就てベルグソン自身が次のやうに例證してゐる。

ある天才の畫家が彼の畫布（カンバス）の上に一個の像を描いたとする。我等は剪俠細工（きりはめ）のいろ〳〵な色の定規を持出してその畫を似せることが能きる。で、我等の使ふ定規の細（こま）かければ細かいほど、數の多ければ多いほど、原畫の曲線や影がよく複寫される。然かし無限の陰影を現はす無限に小さな無限數の部分に分けなければ、その像と全く同じ物を再製するわけにはいかない。しかもその像は畫家から見れば單純なる物として考へられ、畫布の上に一つの全體（ホール）として移植するやうに望まれ、またそれが全く分つことの能きない一つの直觀の映寫として我等に見えるほど益々完全な物であるべきだのに。で今我等の眼が大家の製作に對する時でも剪俠細工（きりはめ）としか見ることが能きないと想像せよ、または我等の理智が畫布の上の像をも剪俠細工と同じやうにしか說明能きないと想像せよ。その時こそ我等はたゞ多くの小さな定規の集合に就てのみ談りうるのであつて、我等は正に機械的假說の下に立つてゐるのである。更に我等はその畫が機械的集合であると見るほかに、何かその中に畫家の企んだ目的があるとも見ることが能きる。その時の我等は目的論者になつてゐるのである。しかしどちらにしても我等は眞の途に立つてゐない。それは畫布の上に寫された畫――即ち單純な行爲――である。

要は、藝術的作品は、理智の眼から見た無限の複雜をも綜合して、生きた單純に化するのである。即ち生命の律に由て統一するのである。『恐らく解剖學の熟語ほど身體の影の分類の方へ人間の癖見を强（し）ゆる惡い結果を齎すものはない。その爲め生命の偉大な幾何學的磁力的線は破られるやうに見える。この理論的分割が初學者の間に眞理の意味を變形させた。藝術の事業は斯樣な誤つた分類の思想に反抗するにある。此等の調和した形は蛇の渦卷のやうに波打つて一から他に移

り、また急に貫通する、壯麗な單純の一體である』とロダンも言つてゐる。

されば藝術とは――その現はす實在とは、生きた綜合であり、偉大な單純である。

更に藝術の理想郷はベルグソンの所謂純粹記臆または精神の境である。こゝには最早我等の生命の波に逆ふ物質がない。從て我等の創造は自由である。『そはかるが故に美である、なぜなら、そは生き、動き、再造するから』とエマーソンは言つてゐる。またその純粹精神の天地には創造があるばかりて、死もなく老衰もない。不斷の青春が榮えてゐる。既に自由であり、常に春であるとすれば、藝術の齎す感情は至大の幸福と喜々が其基調てなければならない――偶ま物質の起す悲哀が色強く之に伴ふとも。それはエマーソンが nobly mad と云ふ詞て現はした境地である。またロダンが藝術の三要素を數えて『生命、青春、活動』と言ひ、藝術に於て『人は彼の幸福の鍛冶屋てありうる』と言つたのも好く藝術の内容効果を示してゐる。

概括すれば藝術の内容は、創造であり、生きた綜合であり、自由と不滅と青春と歡喜との天地である。これが藝術の理想郷である。

七、結論

ベルグソンの哲學は在來の唯心輪と物質論との爭を解き、自由意志論と宿命論との藤葛を和げた。同じやうに、彼の哲學から見れば藝術觀上の矛盾も解かれるわけである。藝術の對象が實在であるとする限り、それは現實論である、むしろ經驗論である。然かし、その實在なるものは功利的常識や理智から離れた純粹經驗であつて、生活上の物質主義を超越したのである限り、その藝術論は一種の理想論である。製作の結果から見れば現實論、その動機から見れば理想論である。即ち藝術に於て、我等は理想を通ほして現實との接觸を再興しうるのである。

海外時事評論

埃及の新政治

懷沙隱客

一

大正三年一月二十二日は、埃及國に執りて記念す可き祝日なり、同國憲政進歩の階段とも見る可き新立法代議院の創設を見たるを以て也。

當日埃及國王は二十一發の祝砲と共にアブヂン宮を發し、午前十前過ぎ、國務大臣及代議院長に迎へられて議院に入り、開院式勅語を下して曰く、朕は當議會を改造し、選擧主義を擴張し、且つ國家國民發達の爲めに法律案を提出する權限を附與したり、諸子宜しく國富を開拓し、農事の發展を期するに力めよと、而して議場は國王萬歲を三唱し、歡聲、堂の内外に湧きたりき。

抑も埃及新議會の組織は如何、蓋し先きにデュフエリン卿、土耳其人の壓制に備へんが爲めに、埃及に二院制を起せりき、一は全國代議院にして二年一回開會し、政府が提出する新土地税、動産税を是認するの役目を有し、一は立法參議院にして各種立法につき諮問するの機關たり、前者は八十二名の議員を有し、後者は三十名の議員より成れりき、然るに今回埃及政府は此制度を以て不滿足とし、二院制を廢し、兩院を合併して新たに八十九名(内二十三名は任命に成り、六十六名は選擧に成る)より成る一議院を組織するの案を建つ、是れ新議院成立の基なり、而して其組織が從來埃及の議院に比し、任命議員數を減少して、人民選出議員を多數にしたるが如き、將た其權限を擴張し、第一、議案提出の權を附與し、第二、政府案を否認する權限を從前よりも廣大にしたるが如き、(從前は政府が議會の質問に答辯したる後該答辯を批評論議することを許さゞりしも、今後は之れを許せり)、明かに平民政治の主義に對し數歩を進めたるものと言はざる可からず。

二

吾人は之を見て、キチナー元帥が有爲の材賓を賞賛するを禁ずる能はず。

スーダンに於て、印度に於て多大の功績を擧げたる元帥は埃及統監に任ずるや、直ちに指を立法部改革に染めれたれば也、前統監クロマー、同ゴルスト諸氏、皆思ひを玆に及ぼしたるも、實行の勇無く、實行は遂に元帥の双肩に落ちざるを得ざりし也。

然りと雖も埃及の自治を熱望し、英人の壓制を呼號しつゝある青年埃及黨に至ては、恐らくば此種の改革を以て滿足するものにあらざる可し、何ぞや、新立法代議院の權限は擴張せられたれども、依然諮問機關たるに止まり、最終の決定權無し、是れ未だ文明國の議會を距ること太だ遠きを以て也、又た同院議員は年齡三十五歳以上たるを要す、即ち從前の三十歳以上に比し更らに五年を加へたり、目下新進の知識を有する埃及人は青年に在つて老年にあらざるに、從前以上に年齡制限を酷にしたるは、是れ果して當を得たるの措置と言ふ可き乎。

要するに新立法代議院は、埃及憲政上の一大進歩を意味すと雖も、唯だそれ一階段に過ぎず、同國國民黨の民權主張は、今後益盛んに、其政治機關も幾多の變遷を見ざるを得ざる可し。

英佛間の新協定

久しく英佛間の懸案たりし阿富汗斯旦行武器密輸入問題は漸く解決を見るに至る、兩國親交益々濃密なるの證たるなからんや。

顧みるに英國が阿富汗斯旦及び印度西北境行の武器密輸入の印度の安全を危うするを憂ふるや玆に年あり、爲めに一九〇九年ブルッセル國際會議あるや、阿弗利加武器密輸入を禁止せる一八九〇年ブルッセル、アクトを波斯灣に延長せんと主張し、佛國の反對に依りて不成立に終りし也、爾後オマン王國の武器密輸入禁止法律に關し、兩國間に國際紛議を見たりしに、今や首尾善く解決し、密輸入禁止の途立ちたりと言ふ、恐らくば之迄多數軍艦を波斯灣に送りて僅かに密輸入

の一部を防止せる印度政府は、此處に一安心をなしたるならん。
言ふ勿れ、瑣事なりと、佛英兩國が一九〇四年協商以來、着々軋轢の原因を鋤去し、接近の程度を加ふるは、確かに注目を値ゐせずんばあらず、然り、而して三國協商對三國同盟對峙の大勢は容易に變動するものにあらざる也。

日米仲裁條約

米電あり、日米仲裁條約の批准、米國上院外務委員會の可決を經、本會議も亦遠からず可決す可しと傳ふ、吾人は切に之を慶賀せんと欲す、然かも再想すれば、其眞に慶賀す可きか否かを知らず。

米國人自ら稱して平和の郷と言ひ、戰爭絕滅運動、仲裁條約運動の根源地を以て自ら誇る、國內平和協會の多きこと、世界に冠たり、然かも吾人は其眞に仲裁條約を重視するか否かを知らず。

試みに見よ、米國は昨年サンサルヴトル共和國と戰爭絕滅の理想を實現する條約を締結したり、然かも弱小のサンサルヴトル國は到底米國と戰爭し得可き國に非ず、從つて條約の存否は、何等世界の平和に關はる所無きを奈何せん、之に反して日英兩國は强國の班に列し、米國と相拮抗するの能力あるもの也、然るに米國上院が一は加州排日土地問題を海牙仲裁々判に附せらる可き虞れあるが故に、一は巴奈馬運河通航料問題の附議を恐るゝが故に、昨春及昨夏調印の再訂仲裁條約の批准を遷延したるは、抑も何等の醜態ぞや。

吾人は多くを言はざる可し、左れども世上若し之を以て米國は唯だ自己に有利なる事件をのみ仲裁に附せんとすと評するあらば、何の辭を以て辯ぜんとする乎。

（因に言ふ、日米仲裁條約第二條には今後仲裁に附す可き國際紛議ある每に、兩國は特別契約を造るを要し、同契約は一々米國上院の批准を要すと規定せり、即ち上院は今後も仲裁附議如何を決定するの權ありとす）

憐む可き瑞典國民

瑞典の農民三萬餘、ストックホルムに集合し、王宮前に軍備擴張の示威運動を試み、叫んで曰く臣等は今日以上の軍備費を負擔せんとす、冀くは軍艦を建造し、陸軍を擴張せよと、國王之を嘉みして優渥の勅語を下すや、スタアフ自由黨內閣は、軍備擴張反對の政綱の下、辭職の運に會せりき。

何が故に瑞典國民は人口五百餘萬の小邦たるを顧みず、軍備に熱中せんとする乎、他無し露國がスカンヂナビヤに不凍港を求むるを知り、之に備へんと欲するのみ、吁嗟黑鷲旗が侵略主義を標榜するは、獨り極東に於てのみにあらざる也。

西班牙の總選擧

西班牙の總選擧、本月を以て擧行せられんとす、是より先き四年振りに內閣を乘取りたる保守黨は、議會の黨勢、自由黨に可にして自黨に不可なるを見、一月已に議會解散を斷行せりき。

總選擧の結果如何なる可き乎、恐らくば保守黨多數の當選を見るなる可し、蓋し西班牙の政治は猶幼稚を極め、選擧ある每に政府黨多數當選するを原則とすれば也、唯だ最近西班牙皇帝アルフォンゾ十三世の賢明なる措置あり、稍々憲政に貢獻したりと雖も、衆民の無知に至ては、誰か一朝にして變するを得んや。

左れど、幾分憲政進步の跡を見ざるにあらざるべし、然らずんば、マドリッドの將來は、暗澹救ふこと能はざらん乎。

此一事を記せよ

英國大藏尙書ロイドジョルジ氏は快男兒也、未來の自由黨總理也、首相也、然かも其最も重んず可きは、其國際的義務を固守するの美風是れ也、二年以前摩洛其の問題起り、佛獨間の形勢危險ならんとするや、彼は英國閣員中の唯一の親獨派として知らるゝに係らず、公然演說して曰く吾人は國際的義務を重んじ佛國を援

助せずんばある可からずと、而して此一事は深く獨逸人心を驚動し、同政府をして一轉溫和政策を執るに至らしめたるにあらざる乎。

佛國民よ、願くば此一事を記せよ、此一事を記せよ、最近ロイドジョルジ氏が英國軍備縮小論を吐露せるの故を以て、直ちに三國協商に不忠なりと説く佛國新聞は先づ最も此一事を記せよ。

ナポレオン家の慶事

一月二十二日、ナポレオン王家の嗣子、白耳義ブルツセル府に於て出産す、父はビクトル、ナポレオン親王、母は白耳義先帝の皇女、佛國ボナパルト派の機關紙ルオトリテは欣賀して曰く、吁嗟是れ何の慶幸ぞや、政派の私闘に依りて分裂せる佛國を救ふものは、帝政の復活ならんのみと。

王子の誕生は吾人も之を欣賀す、遮莫、帝政回復の夢に至ては、是れ終に眞成の夢に過ぎざらん、唯だそれ百年の後、奈家崇拜者少からざるは、洵に英雄の遺風、山高く水長きを想はしむ。

名畫の米國行

二月上旬レアフエルの名畫マドンナ、カウパー卿の手を離れて米國の一富豪に歸す、是より先きカ卿、英國國立美術院に對し七十萬圓の低價を以て賣却せんと交渉せるも成らず、米富豪は却て百四十萬圓を投じたりと言ふ。

先きにレムブラントの名畫を米人に拉せられ、今亦此傑作を失ふ、古邦を以て自ら居るアルビオン島國民の名譽を如何せん。

新刊批評と紹介

△通俗講演常識大觀(全)　嚴谷季雄 加藤咄堂 共編　東亞堂發行

誰しも常識を有せない者は無いと同時に、その所謂常識なるものを省みて吾々はその知る處のいかに貧弱なるかに呆れ驚かざるを得ない。本書は便宜上各十二ヶ月に頒ち、季節に關聯して日常吾々の必ず知るべくして多くは不知の間に顧みざる所謂常識を、歴史といはず地理といはず、天文物理動植物、あらゆる事項に亘つて、興味の中に體得せしむるやう

になつてゐる誠に重寶な書物である。(定價金三圓八十錢)

△南洋諸島巡行記

佐野實著　東京堂發行

本書は著者が七年間に亘つて前後兩回南洋諸島を漫遊したる成果にして、彼地の事情風俗人情等目睹するが如く、南洋に雄飛せんとする者にとつては絶好の指針にして、否らざる者にとつても興味深き讀物たるべし。蓋し南洋は今後我國の海外發展上最も注意を拂ふべき地たるべければ也。(定價金二圓)

△海上の日本

川島清治郎著　二酉社發行

著者は「我國海上の發展は弘く世界の門戸を開放せしめ、敢て天意に從ひ、其福利と惠澤とを萬民共通に平等に之を享受せしめんを期するに在り」と序せり。此主義の下に我國の海外發展を説いて國防問題に迨び、優越なる海軍の建設を主張して所謂堂々識者を首肯せしむ(定價金一圓三十錢)

△米國對外政策

石川義昌譯　二酉社發行

本書は米國有數の外交官が匿名にて著せる"American Foreign Policy"を譯したるものにして、所謂必ずしも米國一般の輿論にあらざるべきも、一家言としては相當の見識を有し、米國の外交政策として我邦人に參考する所あるべし。(定價金八十錢)

△薩摩と琉球

横山健堂著　中央書院發行

由來健堂氏の筆は簡勁と犀利、妙味と禪味とを遺して夙に一家の風をなす。然れども觀察の奇警、見聞の該博なる亦以て氏の恒に渝らざる多數の愛讀者を有する所以たらずとせず。この文一度び大阪毎日紙上に掲げらるゝや江湖の喝采措だしかりしといふ。その文、その想、俱に共に相摩して碧流深潭の間に奔騰するもの。蓋し好個の讀物たらずんばあらざる也。(定價金二圓三十錢)

△系統的書方教授法

野地清学　島崎林八郎　共著　文教會發行

小學校の書方の教授時間を利用して兒童の實習上最も効果あらしめんとして眞面目に書方の教授を研究したものである。(定價金壹圓五拾錢)

△青年期の心理及教育

和田琳熊譯　警醒社發行

青年期は人生の危機とも言ふべき時にして、是れが心理狀態は最も研究に値ひする題目なるべく、此書米國クラーク大學教授スタンレー・ホール氏の研究にかゝるものにして、其所説の肯綮を得たる、何人にとつても興味深く且つ得る所多き書たるべし。(定價金壹圓)

△奮闘立志傳

實業之日本社編及發行

嘗ては「實業之日本」に載せられたる名士の奮闘立志談を輯めたものにして、世の青少年を刺戟し卓勵せしむる處尠からざるべし。(定價金壹圓五拾錢)

△商業孫子

原田祐三著　東亞堂發行

商業の根本觀念より商業道徳、商業に從事する者の心得等、あらゆる商業に關する事柄を論じて、商業の意義を明かにし、世の商業に携はる者に教ふる所ある書にして、商業の爲めに氣を吐けるものとも言ふべき乎。(定價金八十錢)

△泰西思潮(第一輯)

千葉鑛藏編　東京堂發行

泰西思潮輸入の目的で文藝教學に關する論文を邦譯して、之を年四回又は六回發行する計畫の第一輯として發行せられたのが本書である。本書にはハリソンのスペンサア論や、ベルグソンの生の意識等外五篇の譯文が確實に且つ解り易く載せられてある。(定價金五拾錢)

△我が國土

小田内通敏著　長風社發行

本書は地理學の方面から國土と國民生活との關係即、地と人との關係を審かにしたもので、從來の徒らに事實を羅列したるものとは異り、特徴ある地域の自然現象と人文現象とを知り、因つて地人相關の理を究めんとしたる新研究である。(定價金壹圓)

△寸鐵

奇書皮肉の人生批評として知られたるラ、ロシフコー公爵の『The Maxims and Reflections』を英文對照に譯したるものにして、特に英語を學ぶ青年には能き參考書たるべし。（定價金八十五錢）

高橋五郎譯　玄黄社發行

△兄と弟

原書はモウパッサンの長編小説ピエール・エ・ジャンであつて、モウパッサンの長篇に對する手腕の未だ必ずしも短篇小説に劣らざるを證するものである。而も譯者は此譯書を以て「今迄公にせられた何人の譯にも讓らざる飜譯上の良心を傾倒したる最も忠實なる完譯でありとするの自信を有する」とさへ言つてゐる。（定價金一圓二十錢）

水上齊譯　植竹書院發行

△健康論

本書は本邦人の體格を改善して健康と長壽を得しめんとするものにして、何人も一讀すべきものたるべし。（定價金一圓）

杉江薫　澤田順次郎共著　東亞堂發行

△大隈伯昔日譚

圓城寺清氏逝いて五年、今此書の再版を見る。氏倘今に迨んで世に在らば必ず再び椽大の筆を採つて此書を補ふ處ありしならんを。然れども此書の再び江湖に發表せらるゝを見て著者は深く讀者と共に地下に英雄の言行を聞くの樂みを頒つなるべきを思ふ。（定價金一圓五十錢）

圓城寺清著　新潮社發行

△吾が非哲學

著者は「是れまでよりも一層深く一層強く一層自由に、自己を内省し社會を通觀して、近世文明を其れの中樞と末梢とに於て鑑賞しようと試みた。それの成果が著者の謂ふところの Romantic Uteritanism の創設であつた」と。此書は著者が Romantic Uteritanism としての所説を改めたもので推奨に値ひすべき眞面目な書である。（定價金六拾五錢）

田中王堂著　敬文館發行

△新家庭講話

新しい家庭を作らうとする者にとつては一讀すべき參考書であらうと思ふ。若い夫人や細君のよい相談對手である。（定價金八十錢）

小此木武子著　大日本雄辯會發行

- △斷腸記（定價金八拾錢）　堀内新泉著　東亞堂發行
- △スエデンボルク（定價金五拾錢）　鈴木大拙著　丙午出版社發行
- △犧牲の女（定價金三十五錢）　ウエデキント作　深澤白人譯　泰平館發行
- △莊子眞義逍遙遊（定價金四拾五錢）　小野晴治著　彰古書院發行
- △行書千字文（定價金二十錢）　尾崎千代丸筆　丸竹書店發行
- △名人小野將棊速成（定價金壹圓）　小野五平著　東亞堂發行
- △少年物語ナポレオン（定價金五十錢）　有本芳水編　實業之日本社發行
- △戀愛問答（定價金三十五錢）　青柳有美著　文明堂發行
- △獨歩詩集（定價金七十錢）　東雲堂發行
- △女天下（定價金四十錢）　チエホフ作　伊藤六郎譯　新陽堂發行
- △海外文藝叢書廿六人と一人（金四十五錢）　ゴーリキー作　野尻抱影譯　海外文藝社發行
- △海外文藝叢書赤い花（定價金四十五錢）　ガルシン作　谷崎精二譯　海外文藝社發行
- △由比正雪（俗篇）（定價金一圓三十錢）　碧瑠璃園著　東亞堂發行
- △新舊對照暦の話（定價金四十五錢）　暦術研究會編　人文社發行
- △近代脚本叢書第九篇窓に立てる女（金四十錢）　ホフマンスタール作　伊庭孝譯　現代社發行
- △近代脚本叢書第十一篇青い鳥上下（金四十錢）　メーテルリンク作　若月紫蘭譯　現代社發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●中央公論讀者直接注文送料不要□二冊以上直接御注文一割引送料不要●

新刊發賣好評小説書類

踊（をどり）

森田草平

藤井達吉装

小説七篇

定價金壹圓也

送料金八錢

久しく著書を出ださざりし著者の最近の努力よりなる小説七篇を收む。著著の最も自信ある踊及名取弟子には女の心の宿命を描き、彼及博徒の群に於て男の運命を描けり。

戲曲 罪

ストリンドベルヒ著

松本武雄譯

定價七拾錢

送料金六錢

長篇三幕

ストリンドベルヒ氏の「ガスタアブ・アドルフ」を譯述せるもの。異國の女性の不安を描く、長篇三百枚

旅役者

長田幹彦

日高島助装

長篇三篇

定價金壹圓也

送料金八錢

かの天鵞絨の手觸りに似たる東山と、暖かき春の雨を含む寺々の鐘の響く京都を捨て、吹雪に暮るゝ北海の原野に放浪せる族役者の群に投じ、華の如き彼等の生活より得たる三長篇

桐の雨

鈴木三重吉作

津田青楓装畫

定價金壹圓

送料金八錢

小説四篇

たとへばナスタアシアムの花の如く美くしくて果敢なき女の宿命よ、若き生涯を色彩りゆくローマンスよ。著者が命を削る思ひ之を描き出せる四長編

素顏

後藤末雄

藤井達吉装

小説七篇

定價金壹圓也

送料金八錢

素顏に現はるゝお妻とおぬひ。面影のお袖とお浦。死繪に出づる繪草紙屋のお艶。若き乙女達の痛み易き胸には絹絲よりも細き私語の聲も泌々と刻まれるてあらう。娘達の戀物語七篇

祇園

長田幹彦著

中澤弘光装畫

定價金壹圓

送料金八錢

小説十二篇

優雅なる舊都の風光を敍し、紙燭ほの暗き祇園の夜を寫し、花の如き舞妓の美くしき十二篇の物語を集めたる本書を京都を愛する讀者及京都を知らぬ讀者に勸む。

發行所　東京市日本橋區通二丁目九番地　振替貯金口座東京二四六二三番　濱口書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

京都帝國大學文科大學教授 文學博士 西田幾多郎序
在大學院 文學士 高橋里美譯

最新刊

ベルグソン原著「物質と記憶」

菊版クロース綴 函入頗美本
正價貳圓參拾錢
送料十二錢

ベルグソンの哲學は今や遙かに西歐の思想界を聳動し來つて又我が絶東國民景慕の標的となる本書はベルグソン三大名著の隨一として學者の齊しく推賞する所たり。而も氏の眞價が世界の認むる所となりしもの亦實に本書あるがためなり。篤學高橋文學士の周匠の用意を以て拮据歲餘に涉り絶好の完譯新に成る。譯筆嚴正にして而も流暢明快也。内容すべて心理、病理、生理等諸科學の正確なる事實に基き、縱横銳利の批例を加へて遠く科學の領域を立越へ純粹經驗の新見地より「精神と腦髓」「意識と物質」「記憶と知覺」「質の世界と量の世界」「流るゝ時の世界と動かざる擴がりの世界」「自由創造の世界と必然反覆の世界」の判別點及び兩々交涉の過程を明かにし、觀念論、實在論上の問題に對して最後の哲學的斷案を下せり。斯學專攻の士は勿論苟も近代思想を味はんと欲する者、本書に依り始めて徹底的にして而も音樂的情味に富めるベルグソン哲學の眞髓に參するを得む。

發兌 東京市京橋區本材木町三丁目 振替口座東京一四四七番 星文館

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

津の國屋

近松秋江

一

昨夜から靜かに降つてゐた初雪が、薄く地て敷いてゐた。

千草は、昨日の晩遲く東京から到着した爲替を毎時の郵便局で幾枚かの五圓紙幣に換へて懷にすると、少し行つてから、下駄屋に入つて、崩し初めに足駄を買つた。千草は、乏しくなつてゐた懷中へ新らしく幾許かの纒つた錢が入つて來ると、眞先に新らしい履物と足袋とを買ふ癖があつた。

その新らしい樫齒で輕く、白い雪に鮮かに二の字を刻みながら戎橋の通りを難波新地の方に步いた。低く空を鎖してゐた灰色の雲が何時の間にか散らけて璃瑠色に光つた青空から暖かい日が照つて來た。大阪は雪が少い。

木理の眼立つまでに洗ひ磨かれた千本格子の軒並に華奢な注連飾りが張られて、いつもしつとりと落着いた心地のする粋な難波中筋の古い街筋は、茶屋の男、女の忙しい往復に踏まれて、泡雪が大方泥濘んでゐる。その軒下の雪の上に竈や臼を据ゑて、餅屋が急がしさうに餅を搗いて廻つてゐる。形の好い鳶を着た千草は、細く疊んだ蝙蝠傘を杖のやうに下げながら、「夕霧阿波鳴渡」の「年の内に春は來にけり一臼に、餅花開く餅搗きの、賑々はしや九軒町、嘉例の日取り吉田屋の、庭の竈は難波津の、歌の心よ井籠の、湯氣の大杵。……」といふ情景を聯想しながら、東京と違つた大阪の歳の暮れを珍らしさうに見て歩いた。

二

晝間でもいくらか薄暗い心地のする津の國屋の三和土の上に靜つと立つて、千草は、

『今日は。』と、小い聲を掛けた。

家の中が閑寂としてゐるので、

『今日は。』と、此度は少し大きい聲を出した。

すると、長火鉢に寄りながら開閉て出來るやうになつてゐる、上り框の二疊のも一つ奥の間から、庭に向いた小い切り窓の小障子を、內側から細目に明けて、

『どなた？』と、いつて顏を見せた。

『あゝ、若旦那、お出てやす。暫らくだしたな。さア、お上りやす。』

津の國屋の主婦は、客脚の絶えた午後に、シヤン〳〵湯氣の立つ鐵瓶のかゝつた火鉢の向に丹前を被つて、横になつて微睡してゐた眼を覺ましながら、

『ようこそ。……今日も、あなたのお噂をしてゐましたんや。昨日か一昨日小夜衣はん自家の前を通りたついでに、ちよつと寄つて、若旦那から手紙を貰ひました。今度あなたがお出になつたら、もしお花に行てゐても、都合をして來ますから、ぜひ待つてゐて耳入れして貰ふやうにいふてゐました。今時分てすから、大抵家にゐませう。』主婦は、時計を見上げて、『すぐに返事を出して見ます。……どうぞお二階にお上りやす。』

千草は、黑光りのするほど拭込んだ箱段を踏んで奥の八疊の間に通つた。濃い群青を塗つた土佐繪屛風の二枚折りの金屛風が、壁の隅に立てゝあつて、違ひ棚には赤い締め紐の眼に立つ太鼓や舞ひの扇子などが置いてある。

主婦は後から直ぐ茶と火とを運んで來て、

『外はお寒うおましやらう、……今ちよつと皆な出てゐまして、……すぐ返事をして見ますから、少し待つてゐておくれやす。』

さういひながら床の上の脇側を取つて千草の脇に置いて降りた。

二十日ばかり前の晩、宵のぞめきに、この家の前を漂々と通りすがつて、つい呼び込められて、一現て逢ひ初めてから、これて三度めて千草は小夜衣に逢ふのである。東京から大阪に來てゐて、藝者を遊

ばないで、こどもを呼ぶといふのが、千草の獨りの心に何となく自尊心を傷けるやうな心持ちもするし、大阪の女を遊びたいと思つてゐながら、東京者といふのが、物足りなくもあるのだが、逢ひそめから、種々の點に男性の情を惹着ける處があつて、千草には、あてもなく探してゐた物を、偶然探しあてたやうな、力強い興樂に身をそゝられてゐるのである。さうして、今、永い間凋萎てゐた心を十分にその興樂に醮したいやうな氣分に促されてゐた。

十日ばかり前、二度めの時にも、懷中の用意が乏しかつたり、遊ぶ勝手がよく分つてゐなかつたりして、後髮を惹れるやうな悲しい思ひに胸をとぢられながら、十二時までゝ歸つた。

遊女は、寒い夜更に、華麗な夕禪模樣の長襦袢の上に黑い縮緬の羽織を被つて、二度までも、はばかりに行くやうにして長火鉢の處に降りて行つて、仲居や主婦と何か話して來たらしい。濃い房々とした銀杏返しの頭髮に埋れたやうに、蒼いほど白い小い顏を仰向きに枕の上に載せて、ちよつと思案してゐる樣子を傍から見ると、曲線の纖細い顳顬の處に心持ち青い靜脈が浮いてゐるのが、幽暗い電燈の光の中にも見えて、長く薄のやうに切れた活々とした黑い瞳で何處かを凝乎と見てゐる。

『おい、何をそんなに考へてゐるの？』

千草は、自分の今思つてゐる通りのことを、遊女も思つてゐるのだと考へながら、脅かすやうに言つた。

『何も考へてゐやしない。』遊女は、一時遊んだやうに靜かであつた姿態を初めて崩しながら言つた。

『おや、あなた、今日は十二時までゝお歸んなさい。』自分も諦めて、男を賺すやうに優しく言つた。『私が、どうかしても可いんだけど、最初からそんなことをすると、階下でお母ちやんなど變に思ふから、……十二時までゝ歸した方が可いといふの。』

『あゝ、歸るよ、けれど雨が降つて來たのに、これから歸つて行くのは痛いなア。……電車が無くなりやしないか知ら。……これだけで何うかなりやしないかなア。』

『あなた、まだ持つてゐるの。……あるんなら、朝迄にして下さいナ……私も、これからまた他へ行くのは、それは辛いわ。』

『もう持つてやしない。此處にこの通りあるだけさ。』

『おや、とにかくお歸んなさい。そして近い内に是非來て下さい。でももし電車がなかつたら歸つておいてなさい。直ぐだつたら、私まだ此家にゐますから。……その代り此次は、來て見て、私がゐないからと言つて、寄席なんぞへ行くんぢやありませんよ。今晩も此室に靜と寢て待つてゐればよかつたのに……あんまりお錢を使はないやうになさい。』

優しくいたはるやうにいひつゝ起き上つて、跳ね返した夜具に背をよせかけるやうに、小高く重ねるやうにした長襦袢の膝頭の上に懷中鏡を取り出して、鬢のほつれを直してゐた。

さうして、まだ、これから他へお花に行くつらさを、くど／＼と繰返しながらも、手早く長襦袢を脫いて着物に着換へながら、それをメリンス夕禪の小風呂敷に包んでゐた。

千草は、その夜十二時を過ぎてから、ビショ〳〵と降る雨の中をわびしく歸つて行つたのだ。

主婦が降りて行つてから、千草は、紙卷煙草を啣へたまゝ、手枕をして横に脚を伸しながら、もつとのことで涙の流れて出さうであつたその夜の情けなかつたことを種々に追懷して、そこへ小夜衣の顏の見えるのを、今かと待つてゐた。

壁一重隔てた隣の家で、娘が淨瑠璃のお浚ひをする調子の高い撥音に連れて、六ケしい曲節を嚴重に語らうとする、まだ何處やら稚氣の脱けされぬ、生な嗄れた肉聲が耳元近く響いて來る。それを好い心地に聽いてゐると、千草は、大阪でなければ味はふことの出來ないやうな古い淨瑠璃の情調と自然に心が融合つたやうになつて、今語つてゐる「柳」と彼れとは何の關係もないのであるが、「……縋り歎けば父親は、涙に聲も枯柳、枝に流るゝ血汐の涙。」といふ音調が、小夜衣は、賤しい遊女でも、自分は構はぬ、苦界の女だから尙ほのこと可哀さうだといふ考に胸をそゝられた。

三

少許しておかみは上つて來た。

「若旦那。あの、小夜衣さんを訊きにやりましたけど、今日はどうしても外すことの出來んお座敷で、行けません。といふのだすが、今日は、私が美いのを見立てますから、どうぞ他ので辛抱しておくれやすナ。」

故鄕の九州の方で長い間藝者をしてゐて、それから七八年前に大阪に來て南地からも出てゐたといふ

おかみは、千草の仰向いて臥てゐる上に覗きかゝつて、人を外らさぬやうに笑顔を作りながら、大阪とも九州とも東京とも、つかぬ辯て言つた。

千草は、それを聞いて失望を感じたが、まだ遊ぶ勝手もよく分らず、殊に深い馴染てもない貸座敷なので、いくらか氣を兼ねながらも、

『どうかして貰つて來られないの。僕は彼女が氣に入つたんだから。』千草は失望の色を和げるやうにつとめながら、野暮を微笑に隱して、小供のやうに淡泊に主婦に縋る口調でいつた。

『えゝ、それやあもう、貰へさへすれば、仰しやるまでもない貰ふて來ますが、それが貰へんから、今日はどうぞ他のにしておくれやす。あの女　若旦那の氣に入つてるのは、それは分つてゐます。私が、チヤンとあなたには、あの遊女と思つて見立てたのてすもの。さうてすから、もうあなたにはあの女と定めて置いて今日だけは私に免じて他なのにしておくれやす。その代りこの次からは必ず彼女を呼びますから。』主婦は、其處に手を突いて拜む眞似をしたり、輕く掌て襦袢の襟の處を打つやうにしたりして客に哀願した。

千草は、折角の思ひて、今日こそはと樂んて來たのに、他の女には鐚一枚も惜しいと思つたけれど、それは胸の底に藏ひながら、かういふ時に强ゐて我意を外に表はさぬものと、諦めて、

『ぢや、兎に角もう一遍貰ふやうに話して見て、それてもいけなかつたら、仕方がないから他のにするとして。』千草は、矢張り仰向いたまゝ表面には、さまて小夜衣に心がないかのやうに輕く言つた。あん

まり初手から獨りの遊女に愛着してゐる心の底を、斯うい ふ眼先きの判くらしい主婦に見破られるのが、恥かしいやうな氣がした。

『それぢや、もう一遍貰ふて見て、それて行けなんだ時は、他のにするとして、それて、他のは、何樣なのにしませう。若いのにしますか、少し年を取つたのにしませうか。どんなのでも、若旦那のお好きなのを私が見立てます。』撫て廻すやうに御意を伺つた。

『あんまり若いのはよくない……』

『やつぱり少し年を取つたのが面白いてせう。……彼女くらいなのを。よろしい私が受合ました。…あゝ、今、お茶持つて參じます。』

おかみには、あゝいつたけれど、千草は、どうしても小夜衣てなければならなかつた。女に、段々數多く接して來るにつれて、彼れの頽廢的興味は、ます〱病的に鋭敏になつてゐた。女の皮膚の色や手脚の形によつて、男性の享受する快樂の種類を考へて見たり、『心中よし意氣方よし、床よしの小春どの』といふ近松の音樂に今待つ遊女を比べて見たりしてゐた。發汗したやうな、感情の疲勞したやうな、一刹那血液の循環が止つたかと思はれるまでに蒼白く變色した弱々しい小い顏が房々とした黑い頭髮に埋れてゐる有樣が強く彼れの眼の底に膠着いてゐた。薄くて小い上唇が丁度早蕨を上に向けて卷いたやうに、心持ち伸びてゐる眞中の處が、ちよいと小高くなつてゐて、そこの處の何ともいへない柔かさが

種々なことを聯想せしめた。彼れは横になつたまゝそんなことを想ひ浮べて、卷煙草の吸口をキユツト强く吸つた。

主婦はまた上つて來た。

「お嬉びなさい。小夜衣さんが今來ます。」晴やかにいひながら、千草の横に座つた。

千草は嬉しさに、覺えず顏を崩して、

「あんなに來られないと言つてゐて。來るの。」

矢張り寢たまゝわざと不機嫌さうにいつた。

「他の者では分らんから私が今自分で行つて、座敷に出て居るのを、ちよつと蔭に呼んで貰ふて、これ〱て若旦那が、ぜひ小夜衣さんに來てもらひたいといふ話しをしましたら、小夜衣さんも、あの人なら、行くから。といふて、今すぐ來ます。」

「もう來るの？」

「もう直き來ます。その代り今日はちよとだすぜ。挨拶といふて隱れて來て貰ひましたのやから。あなたも直ぐ階下に來ておくれやす。階下にお寢間を取らせますよつて。」おかみは急いた。

千草は、何のことやら少しわけが解らぬながら、促さるゝまゝに箱段を降りて行つた。

降りながら、箱段の上り口の處を見ると、小夜衣が白い駱駝の襟卷を手に持つて、此方を見上げて、默つたまゝ顏中で笑つてゐる。

おかみは、茶室の、もう一つ奥の八疊に急がしく綿のよささうな大きな蒲團を自分で運びながら、

「さあ、あなた方は此方へ。……今やから言ひますが、自家のお客さんが、昨日から、小夜衣さんを呼んでゐて、今朝からまた他の貸座敷へこの女を連れて遊びに行てをるのを、今私が行て小夜衣さんに逢ふて、來てもらひましたんや。……自家の古いお客だすけど、お茶屋稼が癖で、長うなると、もう二軒でも三軒でも歩いて廻る人やから。……あんまり遲うなると、今に此方へ歸つて來ますから。……さあ〳〵此方へ。お越し。」

暮れ近くなると、茶の間の長火鉢の前には、定客らしいのが二人三人集つてゐた。

「どうしてゐて。さあ、彼方い行かう。」

小夜衣は、甘つたれるやうに、まだ笑ひつゞけながら、千草の袖を引いて、主婦の延べてゐる寢床の上を渡つて、ガラス越しに、隣家の大きな土藏に仕切れた猫の額ほどの小庭の見える障子の際に行つてぺつたりと座つた。

「まあこゝへお座んなさい。あれからどうしてゐて。」

小夜衣は、座りながら、千草の兩方の袂を下から引張つた。千草は左甚五郎の爲るまゝになる京人形見たいに、小夜衣に魂を奪られてゐてもするやうに、引張られるまゝに、きちんと腰を折つて、小夜衣の膝の上に、自分の膝を突いた。

「あなたが、來たといつて、此家のお輕ちやんが、自分で呼びに來たから、お客にお菓子を買つて來る

といつて、欺まして脱けて來てやつた。……その代り長くゐられないの。……これ、今日は此樣な風をして、お可笑いてせう。」と、言つて、遊女は、肱を上げるやうにして、寝卷のまゝの裲襠の袖口をこちちへ向けて見せた。

また雪空にでも變つたのか、急に暗くなつて、シン／＼と底冷えがして來た。

「おゝ寒い！ 彼方い行かう。」千草は、羽織の兩袖をダラリと、懷手をしたまゝ、今主婦の延べて行つた蒲團の方に眼配せした。

「あゝ、あつちい行かう！」

その袖の端を捉つたまゝでゐた小夜衣はまた甘えるやうにいつた。

二人は、厚い柔かい敷蒲團の上に行つて座つた。

「好きな人とお樂しみの處を、私が來て邪魔をして濟まないナ。」

「そんなことありますか。そんなことありますか。」小夜衣は、白い小さい歯を嚙み合すやうにして、懷手のまゝでゐる千草の襟先を兩手に捉んでグイ／＼押した。

「あゝ、もう可い！／＼」と、笑ひながら、手足の自由を奪はれた千草は、後にはねた掛蒲團の上に倒れかゝつた。

四

新春になつて初めて行つた時には都合よく出來て、小夜衣は早く來た。

茶の間の主婦の座る頭の上には、壁の其處ら中に、南地五花街事務所の規定を木版にした、藝娼妓の花代の細表が貼つてあつたり、新に披露目をした藝娼妓の名前を大きく誌した札が幾枚となく後から後からと重ねて貼つてあつた。

主婦は、新しい茶を入れて、長火鉢の向に座つた千草に出しながら、彼れが、倍々小夜衣に想ひ着くやうな噂をいろ／＼してゐた。

『今日は、まあ、丁度よく小夜衣はんが店にゐてよかつた。よく賣れる妓だすよつてに、なか／＼斯様なことおまへんのやて。あの通り別看板だすからナ。』と、おかみの眼指した柱の上には、『別座祝ひ』と特別に太く書いた大きな紙が貼つてあつた。

『私も、此の商買をしてゐますから、自家でも随分多勢の藝者や娼妓を手にかけますが、小夜衣さんのやうな女は、もうこの難波新地切つて、おまへんのや。『別座』といへば、花の賣り上げ高によつて、一等二等から、下までいろ／＼ある、その一等よりも、まだずつと上て、別座に追ひ越す者はないのだす。あの女のことを、皆な小どもの神様々々といふてゐます。上品で、賢うて、それて氣に張りがあつて、人情があつて、私は、まだこの、今の商買をせん時分から、度々小夜衣さんとは一座をして、あの女の心は、よう知つてゐます。あなたが、初めて此家へお越しになつた時、私、もう一ト目チラと容子を見て、このお客さんには、小夜衣さんと、私、もう自身て定めたんや。』主婦は、千草の顔を見ると、屡々それを繰返へした。

なるほど、さう言はれて見ると、千草にも、小夜衣の上品で、賢さうな處は解る。さう思ふと、彼れの心には小夜衣が次第に好くなつて來た。

「今日は、朝迄にしても可いんでせう。」

「あゝ。」

「あゝ、嬉しい。」

「おれも嬉しい。初めて泊ることが出來て。この前は一寸だし、その前の時は、雨の中を歸るし。あんな痛かつたことはない。」

「あたいも嬉しいわ。」

夜の更けるにつれて、隣座敷にも二タ組ばかりの客があがつて、三味線に太鼓を入れた騒々しい散財が初まつた。遠くの方からも、同じ物の音が、建込んだ家々に返響を返すやうに、ハッキリと聞えて來た。枕の直ぐ下の街では、新内や淨瑠璃の流しが、幾群となく通つて行つた。戀ひのつじ占、身の上判斷が、古い想ひ出のある聲を揚げて呼び歩いた。一時が鳴つても二時が鳴つても、夜更しをする茶屋の男衆女衆などが食べるやうな物を賣る呼び聲が絶えなかつた。

まだ宵の中から小座敷に忍んだやうにして寢疲れてゐた二人は、遲くから連れ立つて湯に入りに行つた。

「大丈夫よ、遊廓の湯は、夜の三時までは、あるから。」

遊女は言つた。「貴郎、先に入つてゐらつしやい。私、ちよつと自家に行つて、お湯の道具を取つて來るから。」

置き屋が店には、今時分まだ晝のやうな火影が輝いてゐて、急がしさうに立ち動いてゐる入れ方が色彩の强い友染メリンスの寢卷の小包を持ち廻つてゐるのが艶めかしかつた。湯屋の近くは、濕つた暗の中に白い靄がほの〴〵と立騰つてゐるのが其處らの火光に映つて、家根の空を赤く取彩つてゐる。殊に女湯は立て込んでゐるらしく、しどけなく伊達卷をした上に、縮緬の羽織を被つて、小走りの下駄の音を立てゝ驅込んで來るのがある。櫛卷に解いた頭髮に毛筋立を挿込んで、襟頸を眞白に塗つた顏をテラ〳〵さして、暖簾を潜つて出て行く者もあつた。

千草には、强いて見やうとしないのに、いろんな色つぽい粧ひをした女が着物を脫いだり着たりするのがよく見えた。溫かい、甘酸ばいやうな更けた湯の匂ひが、柔らかに彼れの鼻を襲ふた。東京の洗湯と違つて、大阪のは、番臺の處に開きがなかつた。あつても平常開放してあつた。

浴槽の奧の處の仕切りの板に、何の用に供するのか、女湯と男湯とに出這り出來るほどの口が切つてあつて、恍惚となつて、湯に漬つてゐる、千草に其處の朦朧と湯氣の立つた中から、

「あなた、石鹼をお使ひなさい。」と言つて、遊女が手を差出した。

やつと二時を聞いてから、帳場でも一同寢床に入つたらしい。

「私、あなた、好き……あなたの、その頼りないやうな處が好き。」小夜衣は、小供らしい口調で好く言ふことを、またいつて、染々と千草の目元を見詰めた。千草も、また小夜衣の黒い、能く働く瞳を食べて了ひたいやうな心地て凝乎と見入つた。女が顔を近けると白粉臭い浴後の匂ひがプンと鼻を刺激した。

「あなたの眼は好い目ねえ。」

「お前の眼の方が、俺は好きだ。長く切れてゐて。鼻だつて細工が細かい。……それより此處の黒子が私には一番好い。」さう言ひながら、千草は、遊女の、白粉の色鮮やかな頰の上を指の尖てちよいと突いた。

二人は暁方になつて漸と睡つた。

五

まだ深い夢に入りながら、グッスリと寢込んでゐる貸座敷々々々の大戸を、情け容赦もなくドン／＼叩いて、花街の遠くの方から、朝迎へに來る茶屋男や茶屋女の呼ひ聲が、霜に凍つた空氣に冴えて、溫く寢てゐた千草の甘い曉夢を破つた。

「河半さん！々々。河半さん！々々。……小式部さん、朝迎へ。」

「伊丹仲さん！々々。伊丹仲さん！々々。……東雲さん、朝迎へ。どうしませう？……あゝ左樣かア。」

それが女衆の呼び聲だと、『あゝ、左樣かァ。』と喚く言葉尻がある調子を帶びてゐて、宛ながら、翌朝の別れを悲む歌でゞもあるかのやうに、靜かに眠つてゐる朝の街に流れて行つた。

初めてそれを聞く千草の耳には、その聲が何とも名狀し難い懷かしい情思をそゝるのであつた。芝居の好きな人には、幕明きの木の音、笛の音が、どんなに懷かしく聞えるであらう。相撲の好きな者には氣負やたやうな呼び出し奴の聲が、どんなに嬉しく響くであらう。

けれども、千草がかういふ旅の空て、疲れた骸軀を、淺間しい一現茶屋の寢床の上に横えて、敢果ない一夜妻の情に、その爛れた悲しい心を委ねるのは、もつと賴りないことを、賴みとするからであつた。

ある年若い盲人は、その不具な盲目の爲に、人間として享有すべき種々な樂しみを享樂することが出來なかつた。さうして段々成長して物情がついて來るに從つて、倍々己れの身の不具を悲んで、精神が沈鬱になり、果ては氣が變になつて、火事の時に打つ半鐘の音に聞入ることを好んて、後には、秘に、自分て放火をして置いて、警鐘の鳴るのを物蔭で、聞き惚れてゐたといふことを聞いた。

恰度、その朝迎への呼び聲が、若い日の多くの仇なる希望に失樂して、些の生効もなく彷徨へる、今の千草には、その盲人に半鐘の音が與へる如く官能に不健全な快感を與へた。

『津の國屋さん！々々。津の國屋さん！々々。……　小夜衣さん朝迎へ。』

といふ呼び聲は、其の家に寢てゐる者の中ては、誰れよりも、一番早く千草の神經に傳つた。

漸と寢呆けた聲を出して戸外に返辭をした仲居は、ミシリ〳〵箱段を踏んて、襖の外から、

「小夜衣さん、朝迎へ。どういたしませう。」

と、言つて訊くのだが、後日には、毎時も朝迎へは、もう後三本にして、大抵朝後にした。さうして朝後はつい晝までになり、晝までは、また晝後になり、暮れまでになり、夜半までになつて、流連になることもあつた。

六

津の國屋の、伊豫者の仲居の、一寸した物の言ひ振りに感興を殺いだことがあつて、千草は、その後二三度貸座敷を變へて遊んだ。

遊蕩の味を深く身に染みて覺えた者には、待ち兼ねて江戸爲替の三百兩が着くと、それを懷中にして門を飛び出す忠兵衛の心持はよく解るのである。色欲は身を滅ぼし易い。千草は、それ故に、遊蕩を他人に向つて敢て勸めはせぬが、その代り自身だけには如何なる智識が難有い教訓を以つて濟度しやうとしてもそれをどうすることも出來ない底深い本能に根ざした興味のあることを是認してゐた。時としては、彼れは、自分はそれ故にこそ生きもすれ、またそれ故には死んでも遺憾はないとさへ考へることがあつた。彼れは嘗て、高名な通俗道德學者の書いた結婚論を讀んで獨りで笑つたことがあつた。それは斯ういふことを言つてゐたからである。……必ず生殖を目的とする結婚でなければ不道德である。結婚は戀愛から入つて行くべきものではない。……成程それは眞理に違ひない。トルストイもさういふ事を言つてゐる。が、生殖を目的としなければならぬといふのは、國家とか社會とかいふ、人類の共同

生活を强めることを標準に假定した目的から打算した論である。今、千草は、それに就いて斯う思つてゐる。若し人間の共同生活を强めなければならぬとすれば、自分の如き天性虚弱な者の子孫を生殖するのは、强めるといふ目的に矛盾してゐる。それ故に自分だけでも、せめて必然の結果として子孫を生殖せしめるやうな結婚は、可成これを避けて、恰ど實を結ばぬ仇花のやうな戀愛を樂しみたいといふのが彼れの希望であつた。自分のやうな健全なる意味の人間生活から踏み外した者は、トルストイのいふやうに子孫を得て戀愛を確證しなくつても止むを得ぬ。せめてシュニッレールの語るやうな、むしろ、生理的に必然の結果たる生殖をば憎むやうな戀愛をしたいと思つた。さうしてまた彼れは斯う思つた。もし、これから彼のコーカサスの高山を慕ふて深く分け登らうとする二十四歳のオレニンをして、わが梅川忠兵衛の如き情熱に充ちた、美しい戀愛を見せしめたならば、或は彼れも亦たコーカサスに入ることを止めて、戀愛に赴いたかも知れぬ。偶然にも忠兵衛もオレニンと同じく二十四歳であつた。從來芝居に仕來つた忠兵衛は、型の通りの生白い色男であるが、千草が近松の作によつて解釋した忠兵衛は、戀愛の宗教に殉して、身の破滅をも厭はぬ、この上もなく美しい殉死者であつた。千草は、ヨーロッパの、特に最近の作者の、美しい戀愛を主眼にして書かれた作を思つて、近松をもロミオ・エンド・ジュリエットやパオロ・エンド・フランチェスカの作者達と、同じ詩聖の列に置いて考へずにはゐられなかつた。

　千草自身は、若いオレニンや忠兵衛の年配を、もう十餘年も前に、効もなく過去つてゐるのであるが、自分獨りでさへ持て剩してゐる、役にもたゝぬ身をば、朝夕さういふ情欲の巷にのみ運ぶのは、一つ

は、何處の都會に行つて見てもさうであるが、特に大阪の地では、花柳街の街區が粋に整つてゐて、居まはりが清淨て、建物が古めかしく落着いてゐるのが、彼れをして、飽ずこの一廓の行燈の火影を忍び歩きせしめたのであるが、まだ何となく食べ殘してゐるやうな心地のある、彼れが敗殘の生活の殘肴を汚く漁つて歩くに他ならなかつた。

　そればかりでなく、千草は、恰も、ラスコルニコフが、ソニアを哀れむ如く、遊女といふものに一と通りならぬ哀れみを持つてゐた。さういふ泥水に身を沈めてゐる者には、固より憎むべき惡性の女もあつたが、また、さうでない、眞から氣の毒な女も、數多くあつた。彼れは、種々な女を知れば知るほどさういふ者を發見した。さうして、それを哀んだ。近松の作の中に、憂き勤めといふ言葉が幾度び繰返されてあるか。も一つ古い時代の謠曲文學の中に、いかに遊女の遣る瀨ない、切なる戀ひが詩化されてあるか、千草は、果敢ない遊女の戀ひを味ひ哀れむには、近松の心中物よりも、謠曲の「班女」や「松風」や「江口」などの方がいゝとさへ、この頃考へ初めたのである。『冥途の飛脚』の道行きの文章には、「班女」の文章から出てゐる處が、間々あつた。

　千草は、自身、謠曲はやらないが、たゞ取り留めもなくそんなことを、いろ／＼に想ひ浮べながら、靜かに黄昏れてゆく大阪の街を獨りて歩いてゐた。淡路の方の空に、冬の夕陽の名殘りをとゞめた薄明が、街の屋根と屋根との間に遠く眺められた。旗のやうに棚引いてゐる夕暮れの雲が、冷い風に顫動してゐるやうに見えた。

七

千草は、さういふ心持ちから、此の日頃段々思ひ募つて來る小夜衣の身をいろ〳〵に考へ初めた。女は、下野の産れて、渡良瀬川の上流の、足利郡の草深い田舍であつた。家はその邊て、代々大盡と歌はれた素封家てあつた。獨り息子て我儘に育つた父が極道の有りたけを盡して、先祖から傳つた財産を蕩盡した結果、三人目の娘にあたる小夜衣は、まだ母親の胎内にゐながら、離縁になつた。母親の實家の古河の舊い醫者の家に來て産れた。それから、せめて此の子獨りは自分の手て大きくしたいといふのを父親の方て、沒義道に、まだ孤の上から引取つて、渡良瀬川の上流の山の中に連れて歸つた。乳の無い處から直ぐ里兒に遣られた。其處て五つ六つまて育てられて、六つの歳に、同じ村の中の金持ちへ養女に遣られた。其家を自分の實家とばかり思つて成長くなつた小夜衣は、十五六になるまて、幸福な娘てあつた。けれども自分を可愛がつてくれた祖母さんや、養母さんが續いて亡くなつてからは、これまても死んだ人達よりも誰れよりも一番可愛がつてくれた養父さんの愛情には、少しも變りはなかつたけれど、後から入つて來たお父さんの若い外妾が、養父さんの見てゐない處て、小い小夜衣を、意地惡くつゝいた。今まて稚い娘の幸福しか感じなかつた小夜衣の胸には、初めて氷のやうな人間が映て來た。さうして自分の本當の家がまだ他にあるといふやうなことが、誰れいふとなく娘の耳に傳つた。小夜衣は、急に、今の家よりもまだ大きいといふその實の吾が家が何處にあるのか見たくなつた。生の父母は、どんな人てあらう。亡くなつた先の養母さんや、今の養父さんよりも、まだもつと優しい人てあらう。そんなて

と々種々に考へて、遂々堪え切れずなつて、默つて自家を脱け出して、うろ覺えに聞いてゐる實父の家を探ねて行つた。

けれども、若い娘の希望は仇であつた。そこには山の裾を圍の中に取り入れた廣い屋敷に壁の崩れかかつた大きな家や土藏が幾棟も立つてゐるばかりで、伽藍とした座敷の内には、年老いた祖父と祖母とが、二十歳あまりの、上の姉さんだけを傍に置いて、寂しい日を送つてゐた。そこに來れば生れて初めて會へるものと樂んだ母は、もう自分達の母親ではなかつた。祖父に勘當せられた父には、とつくに繼母が出來て、其等も其處にゐなかつた。

村の者の同情で、年老いて村長を勤めながら、姉娘一人を抱えて不如意な、その日を送つてゐる祖父母の傍に小夜衣は何時までも置いて貰ふことは出來なかつた。兎に角籍を取戻してから彼女は、足利や桐生と、伯母さん達の家に寄食者となつて廻つた。

その間にも父の墮落と亂行と意氣地なしとは底を知らなかつた。最初は僅かばかりの前借で高崎の藝者屋に下地ッ兒に賣られた。それを振り出しに、東京の地でも二度三度住み換えをしてゐたが、遂〳〵仕舞には本人には無斷で大阪の難波新地に娼妓に賣つて、身の代金を受取つて置いて、後から色〳〵因果を含ませられた。父は、さういふ話しをしたり、錢の無心を言つたりする時には、極つて、何を言つてもお前の身體を授けてやつた親の爲だから、承知をしてくれ。と、言つた。

千草は、先刻も思つたやうに、親が苟めの欲念から、病弱な子を後に殘す罪業深い行爲といふ思想か

ら、ツイまた小夜衣の父の所業に考へ及ぼして、一體人の親は、何處まで無慈悲な親權を縦にして差支へないのだらう。といふやうなことをも思ひ惑ふた。

八

その日千草は、當分錢の入るあてもなく、暫らくは小夜衣の顏も見ることが叶はぬ。と、味氣ない宿に閉ぢ籠つて凝乎と諦めてゐたのに、お午すぎになつて、フト思ひもそめぬ東京のある處から僅かばかりの爲替が舞ひ込んで來た。千草は、その書留の朱肉の印の捺された狀袋が、机の上に載つてゐるのを見ると、ほと〳〵嬉れし涙が滲んで、これだけあれば悠然今晩一ト晩小夜衣に逢える。と、東京の方に向いて、彼れは手を合して拜んだ。彼れは忽ちにして生き效を感じて來た。さうしてまたもや大阪の街にさまよひ出たのである。

丁度暮れちよつと前まで、時刻を移す爲に、いろんなことを思ひ耽りながら、貸し間をする家でもありはせぬかと、鰻谷町の方から疊屋町、笠屋町を經て、久し振りに心齋橋筋の美しい狹い通りの飾り窓などを窺いて歩いた。

桐壺や鵜飼の入口に、此家等ばかりは、まだ昔しの面影をとゞめた古風の行燈に、覺束ない火影のさしそめた芝居うらを、忍び〳〵歩いてゐる千草は、わけもなく四邊の情調に誘はれて、小夜衣が首尾よく店にゐてくれゝばいゝがなアと、うはの空に思ひ詰めて、夕ぐれの寒さに、ゾッと戀ひ風が身に染む心地した。早く他から口のかゝらぬ間にと、急ぎ足になりながら、有り合はした小店で、鼻紙と手拭を

買つて、小さく疊んで懐に入れた。それから二つばかり角を曲つたり露地を通りぬけたりして、少し行くと、丁度小夜衣の店の筋向の、本茶屋めいた店付の家へ、小聲で呼ばれるまゝに上つた。

「あゝ、小夜衣はん、お馴染だつか。」

と、言つて、聞きに行つた仲居が直ぐ歸つて來て、

「小夜衣はん、暮れまでになつてゐますよつて、もう三十分ほどしたら明きますさうだす。そしたらおこしますと申しました。どうぞ暫らく待つとくれやす。」

待つ間もなく小夜衣は、仲居に連れられて階段を上つて來て、入り口の處で、仲居が襖を明けて、身横によける傍から、靜ッと床の間の方を見た。

「御存じ?」と、仲居のいふのを餘處に聞いて、

「えゝ。……貴郎だつたのか。」いくらか浮かぬ面持になりながら、千草の火鉢の向に來て座つた。仲居が行つてから、

「どうして、あなた、此樣な處に來たの。津の國屋に何故行かないの。」

夕化粧の際立つ白い顔を、ポッと赤く激したやうに詰問した。

「どうしてッて、俺は、津の國屋に行くのは、何だか厭だから。」

「何だか厭だつて、何が厭なの。あなた厭でも、私が、それぢや困る。」

「お前、何うして困る。おれはお客だ。何家からお前を呼ばうと勝手だ。」

「そりや、あなたは、何家から呼ばうと勝手でも、東京ぢや、さうだけれど、大阪ぢや、さう行かないんだもの。あなたが、私を、初めて津の國屋から呼んだら、それからは、どうしても津の國屋から呼ばなければいけないの。さうしないと、私が、警察に呼び付けられて、拘留せられるんだもの。」小夜衣は、關東女の、幾許か荒つぽい言葉で言つた。

「さうかい。そんなことをすると、お前が警察に引張られるの。そんな酷いことをするの。ぢや、どうしやう？」千草は、わざと呆れたやうに仰山に言つた。

「どうもしなくつても可いの。唯、男衆に、津の國屋に答へさしてさへ置けば。」

その代り、他の家から呼ぶと、津の國屋へは、その度毎に屆けなければならなかつた。もしそれを無斷てゐて、津の國屋に知れて、五花街事務所に屆け出されると、遊女は、警察に出なければならぬ規定てあつた。千草は、大阪の、斯かる商賣にも組合仲間の規定の恐ろしく嚴重なのに獨りで感心した。

「さうか、それなら、それと早く理由を話して聞かすれば可いのに、最初ッから、折角白粉を塗つて來た顏を赤くして、お前怒るから、俺は吃驚した。」と、千草は何處までも浮戯けたやうに眞面目に言つた。

「どうも濟みません。」小夜衣は、急に平常の人懷しい調子に直つて、火鉢の向から千草の兩掌を握つて、

「まだ早いから、これから活動を見に行きませうか。」甘えるやうに言つた。

千草は、東京でも大阪でも女が、活動寫眞を觀ることを好いてゐるのを、恰も女がお薩を好いてゐるのに何處も變りのないと同じやうに感じてゐるので、これまで、顏さへ見れば、活動へ行きませうか、

錢が掛らなくて、面白いからと、强請むのを、法善寺裏の寄席に落語を聞きに連れて行つたり、東與や柴藤へ鰻を食べに連れて行つたりして誤魔化して逃れてゐたのだが、その晩は、娘小供に父親がお供をするやうな、寛慈な心持ちになつて、道頓堀の活動寫眞に行つた。

ユーゴオの何とかを、更にローヤンチックにセンチメンタルに脚色した泰西劇だの、大阪式の新派劇だのを、千草は耐忍しい〳〵他の事を默想しながら見てゐた。眼に淚を滲ませて、熱心に見てゐる小夜衣は、新派劇の幕毎に映る『親の愛』とか『戀の惱み』とか言つたやうな文字を小聲で讀んだ。

「お前は學者だねえ。」千草は、小夜衣の耳に口を當てゝ暗中に囁やいた。

彼れは、多勢の處に斯うしてゐるよりも早く二人ばかりの處へ行きたかつた。

下足場で、散々群衆にもまれて、千草は漸との思ひて、自分のと一緒に遊女の下駄を取つてやつた。

九

ズラリと立ち並んだ芝居と活動寫眞とが一時に閉場た道頓堀の通りは、群衆が押返すやうに蠢動いてゐた。一月末の冷たい夜風が襟先や腋の下のあたりから肌を刺すやうに浸みた。

「おゝ寒い〳〵！」

小夜衣は、ガタ〳〵身慄ひをしながら、芝居の反對の側の店先の人影の疎らな處を選つて急いだ。

「お前は、また馬鹿に薄着をしてゐるんだもの。」

千草は、澁い壁色のお召の外套を着て、白い駱駝の襟卷をしてゐる小夜衣の貧弱な姿を、哀れみに充

ちた眼で横からジロ〳〵見た。懐手をしてゐる肩付が小供のやうに小さくつて、コートの袖が下垂れを着たやうに垂れてゐた。實際、小夜衣は、明けて二十三になるのに、まだほんの十五六の小娘位の身體をしてゐた。

「渡良瀬川の上流から、この遠國の大阪まで流れて來て、何といふ淺間しい身の上であらう。』と、思はれて、千草は、名狀し難い哀傷に迫られた。

「勤めは痛い！」

寢てゐる時など、どうかすると其樣なことを言つて、ホツと太息を洩すことなどあつても、身體が二つあつても三つあつても引き足らぬほどよく賣れて、親方からは、衣裝から何から、他の多勢の抱妓とは、一人だけ別に大切に取扱はれてゐた。温順い女の割に平時氣がさら〳〵してゐて、格別商賣を苦にもしてゐなかつた。

絣の好く揃つた大島紬の着物に、寢卷の長襦袢を着更ながら、幅の詰つた水色繻子の丸帶をキユツと背後で男結びに締めて、その上をポンと一つ叩きながら、

「好いてせう。奴の小萬見たやうで。…。自家で私くらい何でも構はない人間はないの。その代り信用があるわ。誰れても小夜衣さんは、男のやうだつて。洒然してゐて。」

それは小夜衣が、自身でいふ通りであつた。藝者上りらしい厚皮しい處もなければ、女郎臭い卑しい根性など微塵もなかつた。千草には、何處よりも一番、そこを蟲が好いたらしい。

下野の山の中に生れたにしては、驚くばかり骨細て、華奢であつた。容貌に貴族的な遺傳があつた。

「斯様な好い女性を、運命は、何うして、斯様な淺間しい境遇に陷らしたのであらう。」

千草は、またもや、いふて歸らぬことを思ひながら、群衆を分けて歩いた。二三間先にも一人眼に着く銀杏返しの好い女が、斜に、反對に向つて行くのが見えた。それは併し背が大きかつた。小夜衣が獨り小さかつた。千草は、小夜衣のことが、いろ／＼に氣になつた。

「おい、何を食べに行かう？」

「何でも、あなたが好きな物を。」

「ぢや、鳥？　それとも蠣船？……俺は、東京にゐる時から長い間、大阪の蠣船を樂しみにしてゐた。蠣船と文樂座との爲に大阪に來たと言つても可いんだけれど、蠣飯は、案外不味ねえ。」

「さうねえ。あれて、御飯が、も少し味が付いてゐると可いんだけど。……おゝ寒い／＼。早く何處かへ入りませう。」

二人は、戎橋を渡つて行く者と、九郎右衛門町の方へ眞直に行く者と、難波の方へ折れて歸る群衆とを、立ちながら、見るともなく眺めてゐた。

「あゝ、彼處に好さゝうな鳥料理があつたのを知つてゐる。」千草は、さう言つて、九郎右衛門町の通りをズン／＼先に立つて歩いた。さうして道頓堀の河岸の側の鳥辰と行燈に誌した洒落れた入口の、撒水した花崗石を踏んで行つた。

十

老舗らしい古い木造りの、清楚とした二階に通ると、好い鹽梅に客が隙いてゐた。

『大變靜かだわねえ。もう大分遲いのよ。これから早く食べて歸つて直ぐ寢ましやうよ。』

「あゝ、さうしやう。」

女中が、ボリ〳〵青い火焔の燃え上つてゐる火を、どつさり入れて持つて來た。

「おゝ、溫かい。……寒かつたわ！」小夜衣は身を慄はして見せた。

「戶外は、お寒おまつしやろ。」

『寒ござんすねえ、姐ちやん。……今晩お酒を少し飮みませうか。』

『あゝ飮まう。ぢや姐さんお酒を。』

小夜衣は、眞白い胸當てを膝の上に擴げて、鍋の中に、種々な物を取入れながら、

『あなた、その燒鳥を上つて御覽なさい。おいしいから。』

『あゝ……成程此奴は甘い。何時か、其處の明陽軒に行つた時、女中に任して置いたら、折角の牛肉の味を不味くしてしまつた。この家は、落着いた好い家だナ。」

千草は、其處らを見廻しながら、心の中で、東京の鳥料理の家などを思ひ比べてゐた。

一本の酒が、まだ半分も減らぬ間に二人の顏は、もう火照つて來た。

『お前も、すぐ顏が赤くなるねえ。』

『それに、今日は寒かつた處へ急に飲んだから……目がチロ〳〵するわ。』

『お前の、その手をやると、手の切れさうな眼尻りの長く切れてゐるのが、何とも言へず好い。』

千草は、またそれをいつて、灰汁拔けのした小夜衣の顏をジロ〳〵と見てゐた。折角かうして逢ひながら、多勢の中に交つてゐるのを、千草は物足りなく思つてゐたのがやつと二人ばかりになつて、差向ひて飲食してゐるのが何とも言へず歡ばしかつた。

男でも女でも物を食べる時に下品な、そゝつかしい食べ方をする者が克くあるが、賤しい小夜衣は、小さい口で毎時靜かな食べ方をした。

『お前の箸で取つておくれ。』

男は、女が箸に挾んで差出すのを、食べながら、

『おい、もつと、此方へお寄り。』

『誰れか來ますよ。』

丁度其處へ、男女の客が、大阪臭い言葉を、あたり構はず高聲に話しながら、上つて來た。

『あゝ、あんな奴が遣つて來た。早く歸らう。大阪の奴は、よく隣の襖を明けて見るよ。』

厚皮しい年増藝者などのキヤツ〳〵云ふ聲がしたかと思ふと、サツと、向の襖を一尺ばかり明けて見た。

『失禮だわ！』小夜衣は屹度なつた聲で言つた。

十一

夜は、いたく更けた。二人は九郎右衛門の通りを芝居裏の方に曲つて行つた。

「二人で斯うして歩いてゐる處を、津の國屋のお母ちゃんにでも見られたら大變だ。あなた、その鳶の襟をよく立てゝ！……もつと〳〵。その鳥打ちの椽も下げて。」

小夜衣は、津の國屋の主婦に目付るのを、大變なことのやうに恐れた。すると、暗い横丁を忍び〳〵歩いて行く處を、誰れかゞ擦れ違つて行きながら、

「小夜衣はん！」

と、聲を掛けた。

「あゝ、お母ちゃん！」小夜衣は、直ぐ聲の主が分つたと見えて、後戻りしかけた。

「まあ、えゝわ〳〵。また此次。」

さう言ひ棄てゝ、津の國屋の主婦は、定客らしい二三人連れと向へ行つて了つた。

「そら御覧なさい！　私の言つた通りだ。」

「津の國屋の主婦か。誰れかと思つた。」

「狹いんだもの。直ぐ見付つてしまふ。」

「見付つたつて構はないぢやないか。お前は大變に氣にするねえ。」

「そりや、あなたには何でもなからうけれど、私が今日明日此の土地にゐなくなる者なら、どうだつて

構はないけれど、まだ此の土地に長くゐなければならない身體だもの。」

「向へ屆けて置いたと言つたから構はないぢやないか。」

「いくら屆けて置いたつて、あゝして二人歩いたゐる處を、甘く見付かつたら、惡いぢやありませんか。」

「さうかい、そんなに喧しいのかい。大阪ぢや女郎買ひも、なか〱六ケシいね。」

「あなた、もう私の處に來てくれなくつてもいゝから、津の國屋の外から、私を呼ぶのは、止して下さい。」

「さうか、來てくれなくつても可ければ、俺も是非來なければならぬことはない。……ぢや、これから直ぐ歸らう。」

「えゝ、お歸んなさい。」

千草は、一人で先にサッ〱と歩いて行つた。

一處に歸つて行くと、仲居は待ち受けてゐて、

「お歸りやす。えらい遲うおましたな。……どうぞ此方へ。」

仲居は、先に立つて、三階の奧つた小間に案内した。そこには、もう柔かい友染の蒲團に炬燵を入れてあつた。

仲居は、行き掛けながら、蔭から、

「小夜衣はん、ちよつと。」と、呼んだ。

『店から男衆が、もう先刻から何度も來て、仕舞には、自家で待つてゐましたんや。』
小夜衣は、直ぐ入つて來て、
『おゝ寒い！／＼。まあ、此處で少しあたりませう。あなたも其處へお入んなさい。』
さう言つて、夜具をはねて、炬燵に入つた。
千草は、何事でもなさゝうな津の國屋のことが、まだ十分に得心出來ぬので、先刻の小夜衣の膠もない物の言ひ振りが、胸に納りかねてゐた。さうして懷手をして、そこに突立つたまゝ、
『店から何の用？……挨拶だらう。』
『いえッ、違ふ。まあ。おあたんなさい。』小夜衣は何事もなさゝうに頭振を振つた。
『貰ひか、挨拶だらう。それに違ひない。』千草は、今時分から挨拶になど遊女を出してやることを好まなかつた。
『津の國屋も、津の國屋ねえ。お客が自分の處へ來なければ、お客の氣嫌を惡くしたのは分つてゐるんだもの。仲居でも謝罪によこすが當然だ。』
『小夜衣はん、ちよつと。』また仲居が、室の外から聲をかけた。
千草は、一人で面白くなかつた。
『あなたねえ、これから、今一寸此處で寢て、今晩私は自家へ歸つて寢るから、あなたヾけ一人此處へ泊つて、翌朝の朝津の國屋から私を呼んで下さい、今男衆にさう言つて遣つたから、後で津の國屋から

姐ちゃんが屹度此處へ謝罪に來るから、さうしたら、さうして下さい。……翌朝の朝私いくら早くても行くから。さうしないと、津の國屋に面が濟まぬ。」

千草は、小夜衣のいふことを聞いてゐて、腹の中で、(甘いことを言やがるな)と思つた。他のお客が貰ひを掛けてゐるに違ひない。それを、津の國屋の事にかこつけて誤魔化さうとするのが憎らしい。

「ナニ、俺は朝寢坊だから、朝早いのは、眞平だ。」

「さうねえ、あんまり早いのもいけないわねえ。」

「挨拶に行つて、間男をしてお出て！」

千草は、少しづゝ神經的の皮肉を用ゐ初めた。

「挨拶に行つて來てもよくつて？」小夜衣は、炬燵に寄りかゝりながら、チラリと横に向いて、千草の顏を盜み見た。

その、女の眼尻に、千草は、一寸凄い眼の働きを認めた。

「好きな男が、宵から來て待つてゐるんだ。……お氣の毒だ。大阪には、ピカ〳〵する指環を三つも四つも篏めた色男が多いよ。……行つて逢つて來ると可い。」

「本當に行つてもよくつて？」冷かに立つた。

「…………」

「行かないと、また男衆に、の事件を五拾錢遣らなけりやならないよ。詰らないぢやなくつて。」

「五拾錢惜いと、何時言つた？　それを惜む位ならば、まだ明い間から、面白くもない活動寫眞のお供をして、苦しい目をしてお前の下足番なんかしやしない。」

「どうも濟みません。」口の先で言つた。

「寒いからと、言つて鳥料理に入つて、これから早く歸つて寢やうと言つたぢやないか。……　今日は、お前に御奉公をしたのだ。……　挨拶に行かうと思へば行つてお出で。」

「ですから、もう行きやしなくつてよ。……　それよりお湯に行つて來やうか。」

「あゝ、湯に行かう。」

二人は湯に出て行つた。

「もう十一時だ。」千草は、通りの時計を覗いて見て言つた。

「十一時どころですか。もう二時だ。」小夜衣は、小走りに走りながら、「私、一寸、自家に行つて道具を取つて來るから、あなた先へ行つていらつしやい。寒いから、よく暖まつて入らつしやい。」さう言ひ棄てゝ店の方に去つた。

千草は、悠然湯に漬つて、歸つて來ても小夜衣は、容易に戻つて來なかつた。彼れは、段々心が面白くなくなつて來た。靜と獨りて床の中に横つてはゐられなくなつた。急性に手を拍つて仲居を呼んだ。

「女は如何した。」

「どうも相濟みません。えらいお湯が長うおますな。」

「湯ぢやないんだよ。畜生め。人を馬鹿にしてゐやがる。」

「お湯と違ひまつか。」

「違ふよ。挨拶に行きやがつたんだよ。」

「まあ、さうだすか。私、また旦那はんと一處にお湯に行たこと〻思ふてましたのや。さうだすか、それはどうも相濟みません。一遍店に見にやります。」

仲居は降りて行つた。

暫らくすると、仲居は、また上つて來た。

「御免やす。……やつぱりお湯に行てはります。今直參りますから、どうぞ、少しの間辛抱しとくれやす。……茶熱いのをお上りやす。」

今まで待つたよりも、また倍も待つたけれど、小夜衣は、まだ歸つて來なかつた。

仲居は幾度となく三階まで上つたり下りたりした。

「……小夜衣はん、本當に、どねえしなはつたんやろ。もう三時過ぎてまんがナ。自家でも表締めて寢んなりまへんがナ。ほんとに旦那はんに申譯おまへん。もう一度行て、急いで參りますよつて、どうぞもう暫らく待つとくれやす。」

仲居は、しとやかに、宥めて置いて降りて行つた。その後から、千草は、堪えず、またパチ〱手を拍つた。

『俺は、もう歸るからナ。畜生人を馬鹿にしてゐやあがる。』千草は、奮然として寢床から起き上つた。仲居は、驚いて、狼狽てゝ、其處に膝を突きつゝ、着物を着やうとしてゐる千草の兩の袂を執るやうにしながら、

『もう、ちよつと待つとくれやす。今また他の者を迎へにやりましたから、旦那はんに、そんなことしられますと、私等、後で帳場で叱られます。どうぞお願ひだす。ちよつと待つとくれやす。……挨拶と知つたら、女を出して遣るんやおまへなんだに。』仲居は、悲しげに千草を引留めた。

『いや、お前方には、濟まないがナ。あの女が惡いんだよ。……ヘン人を馬鹿にするないッ。贅六の啄きッ枯した女郎なんか、此方で厭だ。』

千草は、獨り語を言ひながら仲居の留めるのも聞かず、颯々と着物を着て鳶を被つて歸る用意をした。今時分、好きな男の處へ行つて、あゝもしてゐる、斯うもしてゐると想像すると、忌々しさに胸が引搔れるやうだ。寢ながら今か、今かと待つてゐると、ゐても立つてもゐられない心地がするけれど、斯うして潔よく起き上つて、歸る決心をして見ると、いくらか胸が透いたやうだ。あんな、一ト晩の中にさへ幾人と數知れぬ男に肌を觸れる遊女か、何處が好いんだ。どうして、あんな女に思ひ染んだのだらう。丁度今宵を好い機會にキッパリと思ひ斷る。さうすれば心が樂だ。俺は歸るんだ。歸つた後へ、小夜衣が戻つて來て、俺が居なかつたら、何と思ふか、その時、自分が、かうして歸つて行く、せめてもの効がある。小夜衣に何とか思はしさへすれば、いくらか腹が治まる。

彼れは三階の奥から降りた。

「いますぐ參ります。もう店まで歸つてゐますから。」

さう言つて、仲居が二人がゝりで引留めたけれど、千草は、颯々と通りに歩いて出ねば腹の虫が抑へきれなかつた。さうして一人の仲居は、小女の行つてゐる後からまた店へ走つて行つた。一人は千草の袖を捉へながら、中筋の通りを何處までも追ふて來た。夜更しをする煮賣屋さへ店を仕舞つた。通りはもう何處のお茶屋も潜戸を締めて寢てゐた。

「おれは、もう歸るんだから、其處を放してくれッ。」

少しく邪見に言ひ切つて、スタ／＼道を急いだ。十七八日頃の冬の月が、人足絶えた街を明々と照してゐた。千草は振り返つて見ると、仲居が、月光を浴びながら、窘しく突立つて此方を見てゐるのが見えた。それを見ると、またスタ／＼歩いた。少し行つて、此度振り返ると、仲居は、もう見えなかつた。

さうすると、千草は、俄にまた遊女が腹立しくなつて來た。難波の通りに出ると、夜働ぎの車が二三人街角に寒く固つてゐた。それを認めると、千草は始めて電車も疾になくなつたことに氣が着いた。

小夜衣奴を、どうしてくれやうと、焦れながら、復たトボ／＼先刻のお茶屋の方へ引返した。

「おゝ、旦那はん、お歸りやす。小夜衣はん今直き參ります。」戸口に立つてゐた仲居が傍に寄つて來た。

「ナニ、遊女なんか、もう來なくたつて可い。……併し自分獨り泊まつて行かう。」

「どうぞ、さうしておくれやす。……小夜衣はん、今家にゐました。私逢ふて來ました。」

暫らく店先で仲居どもと話してから、千草は、元の小座敷に戻つて、暖々と寝轉んだ。

さうしてゐる處へ、バタ／＼と足音を立てゝ小夜衣が歸つて來た。

「千いさん、何うしてゐて？」息をはづませてゐる。

「待つたてせう。…… もう何處へも行かないわ！」

「今から行かないのは當然だ。馬鹿にするないッ！」千草はクルリと背を向けた。

小夜衣は、急いで、着物を長繻絆に着更へながら、

「千いさん、怒つてや厭。怒つてや厭。千いさん。」

と、言ひながら、兩手て、男の頭を抱えて、無理に自分の方へ捩ぢ向けた。

「寝る邪魔するな、總嫁め！」千草は、またクルリと向へ轉がつた。（をはり）——三年二月十一日

下手人

森田草平

上の卷

一

空模様の所爲か、四邊は夕暮れの樣に暗かつた。

芝生の中の飛石を避けて、黒塗の松葉杖をつゝましやかに突きながら、一人の若い女がこと〳〵と歸つて行く。太刀男は沓脱石の上の庭下駄を突掛けたまま、のそ〳〵と後を追つた。葡萄棚の下で、頸筋にひやりとした。雨か知らと、思はず振仰いだが、未だ降つては來ないらしい。

庭の木戸の傍で、前の女は杖を突いたまゝ待つて居た。太刀男はそれを見ると、駈寄つて、がた〳〵云はせながら、木戸の戸を開けて遣つた。

「何うも此戸は工合が惡い。」

斯う言つて、太刀男は赤く成つた掌を見て居た。杖の女は相手の顏を見上げたまゝ、木戸を出ようともしない。やがて、

『先生!』と喚び掛けた。

太刀男は默つて振返つた。

『今し方先生の仰有いましたことね――』と言ひ掛けて、一寸言葉を途切らした。

『何? 私には解らない。』

『でも、左樣仰有いましたでせう。女の知合ひが出來るのは不安だつて、相對して話をして居ても――』

斯うは言つたものゝ、太刀男には大抵見當が着いて居た。

太刀男は眼を反したまゝ默つて居た。

實際、太刀男は左樣言つた。此頃中頭の加減が惡い所爲かも知れないが、誰にも會ひたくない。誰も訪ねて呉れないが可い。自分を所好だなぞと云はれるのは、一層不安で堪らない。何時此人が來なく成るかと思ふと、相對して話して居ても――と、左樣言つた時、女は妙な顏をして聽いて居たが、今やつと思ふことを言出したものらしい。

『私も左樣なんてせうか』と、思ひ切つた樣に言ひながら、まじ〳〵と相手の顏を見守つて居た。

『左樣さね、倭文ちやんも矢張女だからな。』

杖の女は眼を地上に落したまゝ默つて仕舞つた。

此子は半歳程前から太刀男の家へ出入りするやうに成つた。一生懸命に小説が書きたいと云ふので、身體の不自由な所から自宅でも同意して、阿母さんに連れられて來た。太刀男は此二三年小説も書かず、謂はゞ文壇から葬られた形に成つて居たので、自分の寂しさに、何といふ事もなく相手に成つて居た。其後、女は一日置に遣つて來た。とぼ〳〵と影の樣に來ては、影の樣に歸つて行く。太刀男は女の來る日を心待ちに待つ樣に成つた。

が、其頃から太刀男の心に一種の不安が有つた。女の來る日を心待ちに待ちながら、寧そ來て呉れなければ可いとも思ふ樣に成つた。女は歳は未だうら若い。世間も何も知らない。其純な心持に此方の一言一行を反應されるのが怖しいやうな氣もした。が、それが爲めばかりではない。「矢張俺は左樣だ」と、太刀男は相手のふつくらした前髪を見詰めながら考へた。「戀人か、さもなければ赤の他人、此二つの何方かでなけりや自分は安んじて異性に接することは出來ない。自分を理會し同情する外に、何の希望も仕事も持たないやうな女か、それてなけりや自分の事など氣に掛けて居ない女——何方でも可い。只、中途半端な、何方着かずの狀態で、何時迄も其關係を持續することは、自分には出來相もない。」

太刀男は寧そ此儘口に出して言つて仕舞はうかとも思つた。が、それが相手に何んな影響を與へるだらうと思ふと、怖しいやうな氣がして、

「だがね、そりやア私の病氣だから今に癒るよ。ぢや、又明日ね。」

「えゝ、又參ります」と言ひながら、倭文ちやんは丁寧に頭を下げた。古い煉瓦塀に沿うて、とぼ〳〵歸つて行く。

太刀男は成たけ見ない樣にして、ぱたりと木戸を閉め切つた。其儘木戸を離れて、五六歩引返したが、不圖葡萄棚の下に立停つた。

『戀人か、さもなければ赤の他人！』

それでなければ異性に接しられないと云ふのは、矢張自分は自分だな。太刀男は落葉を掻き搜して、久しい間埋もれた昔の自分を看出したやうな氣がした。そして、うそ〳〵と片頰に笑(ゑみ)を含んだが、其後から消えて行つた。

太刀男はぼんやり自分の家を見上げた。大名長屋のやうな壁に枯れた蔦が匍ひ上つて、一寸西洋の城の塔(タワー)を見るやうな趣がある。石段の下だけに、二階の窓が一層高く見える。太刀男は自分の住居(すまひ)ながら珍しいものを見るやうな氣がして、凝乎と見上げて居た。

此家を借りて引移つた時、友達が訪ねて來て、何だか化物屋敷のやうだねと何氣なしに言つた。太刀男は其言葉を心に泛べながら、そろ〳〵元の室(へや)へ歩を移した。

二

太刀男は椽に片足掛けて、障子を半ば引開けた時、何うも室の中へ這入る氣がしなかつた。室の中は陰氣な戸外(そと)の景氣(けしき)よりも更に陰氣で有つた。天井の低い、茶席めいた四疊半で、太刀男はこれを書齋に

も客間にも當てゝ居る。青い瀬戸物の火鉢に火が熄えかけて、其前の座蒲團には、今迄伯父ちやんの坐つて居た膝の跡が縒れて殘つて居る。障子に近い一閑張の机に書きかけの原稿紙が載つて、萬年筆が一本ころがつて居る。何やら飜譯の原書と見えて、赤い表紙のエスキラスの全集とフリユーゲルの獨英字彙と、其外には何もない。

太刀男はそれを見遣りながら、殆ど自分にも聞えぬやうな溜息を吐いた。そして、折角かけた片足を卸したまゝ、くるりと向直つて、濡椽に腰を掛けた。

眼は庭の木立を見て居た、石燈籠を見て居た。それから、それを透して眞直に蠟のやうな大空を見て居た。が、太刀男は何にも見て居るのではない。

かうして永い間居た。

太刀男は大學を出て、間もなく或女に戀をした。女が變つた性格だけに、其戀は色彩を帶びた。そして、其結果は無殘な失敗に終つて、殆ふく世間から葬られやうとした。太刀男は水の中に溺れる人のやうな心持て小説を書いた。其小説は一時世間の注目を惹いて、此分て行けば作家として世の中に立て相に見えた。が、運命は只次の不幸を一層大きく見せるために、一寸微笑んで見せたに止まつた。次の小説は悲しい運命に遭逢した。世の人は彼に欺かれてもした樣に憤つて、彼から背き去つた。それからは書く物も〳〵只世人の嗤笑を招くに過ぎなかつた。焦躁れは焦燥る程、結果は好くなかつた。到頭、自分ても小説が書けなく成つた。

其後三箇年といふもの、太刀男はずつと飜譯て生活して來た。希臘から現代に至る古今の大作を蛾が米倉の米でも惹いて行く樣に、片端からこそ〳〵と飜譯した。彼自身も强ひられて心にもない創作をするよりは、此方が餘程興味を惹いた。が、それも最初の間で、此頃は飜譯と聞いただけでもうんざりする樣に成つた。名篇大作が喉頭に痞へて、心から

enough! enough!

の感に堪へない。

が、矢張如何することも出來なかつた。矢張夜が明ければ、机に向つて紙を展べ、一字づゝ桝の中へ嵌めて行く外はなかつた。何時迄こんな事をして居るのだらう。何だか牢獄に繋がれた囚人が板敷の上に坐つたまゝ、何時迄といふ期限も知らず、來る日も〳〵經木眞田を編むで居るやうな氣がして、われながら心細い日も有つた。が、彼は他人に訴へると云ふことを知らない——友人にも、現在一緒に居る妻にも。

「あゝ、かうして死ぬるのかな。」

太刀男は眼の中が熱いやうな氣がして、そつと眼を閉ぢた。男が泣いたのだ、不意に忌々相にして立上つた。

少時芝生の上を彼方此方歩いて居た。最初は急に、だん〳〵足取が緩く成つた。何時の間にか口癖に成つた傳道の書の一節に自分一流の節を附けて、口の中で誦して居た。

「ダビテの子エルサレムの王傳道者の言、傳道者言く、空の空、空の空なる哉、都て空なり。日の下に人の勞して爲ところの諸の動作は、その身に何の益かあらん。世は去り世は來る、地は永久に長存なり。日は出て日は入り、またその出し處に喘ぎ行くなり。風は南に行き又轉りて北に向ひ、旋轉に旋りて行き、風復その旋轉る處にかへる。河は海に流れ入る、海は盈ること無し。河はその出きたれる處に復還り行くなり。萬の物は勞苦す、人これを言つくすことあたはず。目に見に飽ことなく、耳は聞に盈ること無し。曩に有し者はまた後にあるべし、曩に成し事はまた後に成べし。日の下には新しき者あらざるなり。――

「空の空なるかな、都て空なり。」

太刀男は二たび濡椽に腰を卸して、仰向けに倒れたまゝ繰回した。勿論、自分では其一行一句たりと雖信じて居やうとは思はなかつた。彼は自分がこんな虚無思想にかぶれて居やうとは、想像するだに堪へられない樣に思つて居た。けれども、此世を空と觀するダビテの子の底の知れないやうな絶望の聲は耳に快い。ほろ〳〵と涙の溢れるやうな氣持にも成る。彼は飽迄其思想に同感するのでなく、其聲に魅せられるのだと信じて居た。涙は頰に傳つた。其儘眼を閉いて居ると、心持も淸々しう成つて行く。

頭の上でことりと音がした。不圖、眼を開いて、上眼使ひに枕頭を見上げると、お玉が紅茶を入れて持つて來たのだ。太刀男は其儘又眼を閉ぢた。

涙は何時の間にか乾いて居た。或は最初から乾いて居たのかも知れない。

「ね、お倭文さんは最う歸つたのですか。」

「あゝ」と、太刀男は懶げに返辭をした。が、直に附け足して言つた。「雨が降り相だからね、周章て歸つたんだよ。」

何故こんな言譯をするのか。こんな言譯しなければ成らぬ迄、夫婦の間に意思の疎通を缺くのが、何よりも太刀男には忌々しかつた。お玉は何時迄も返辭をしない。

て、死破と跳ね起きながら、凝乎と女の顔を眺め遣つた。

「おい、如何したんだい。」

「えゝ」と、お玉は眞當面に相手の顔を見返しながら、「でも、お倭文さんも可笑しな子ですわね。何時でも知らん間に來ては、又知らん間に歸つて行くんだよ。」

あゝ、又そんな事を言出すのか。太刀男は眉を顰めた。頭からがみ〳〵と罵つて遣たいやうな氣もした。が、其結果は餘りに好く分つて居た。少許でも女を啓發することには成らないで、只女の心をいよいよ依估地にするばかりだ。て、

「何を言つてるんだな」と、苦々しげに言ひながら、太刀男は立つて机の前に坐り直した。そして、片手に冷えた紅茶の茶碗を取上げたまゝ、まじ〳〵と碁盤罫紙を見詰めて居た。

お玉はそれを眼で見送つたまゝ、坐つた向きさへ變へやうとしなかつた。

太刀男はわざと女の方を見ない樣にしながら、一碗の紅茶を啜つた。て、空に成つた茶碗を下に置か

うとして、不圖女の方へ眼が行くと、お玉は矢張身動きもしないで居た。

『おい、如何したんだい』と、やゝ肝癪に觸つたやうな聲で訊いた。

『いゝえ』と、お玉は只それだけ言つた。

少時間を措いて、女は又、『如何もしやアしませんよ』と附け足した。それが故意とらしい。

太刀男は何か言はうとして、口をむぐ〳〵させて居たが、

『ぢや、火鉢の火を持つて來て呉れ。炭がたつて仕舞たぢやないか』と心にもないことを言つて、女に座を立たせやうとした。

お玉は默つて立上つた。

やがて襖越しに何やら言ふ女の聲がした。が、何を言つたのやら、能くは聞えなかつた。太刀男は振向いたまゝ、襖紙の模様を眺めて居ると、

『ね、此方にも火が有りませんから、今おこして持つて行きますよ』と、二度目にははツきり聞えた。

『あゝ』と返辭をしたまゝ、太刀男は向直つた。

何うも續いて飜譯する氣がしない。て、兎に角書きかけの原稿紙をはぐつて捨てながら、新しい紙に向つて見た。此間から頭に泛んだ材料て、書けたら何か創作がして見たい。が、久しく自分自身のために筆を執らなかつた太刀男には、何となく氣後れがして、一字を下すにも容易でない。少時白紙を見詰めたまゝ坐つて居たが、ほつと熱い息を吐くと一緒に萬年筆を投出した。其儘ごろりと仰向けに倒れた。

又お玉のいやな顏が眼に泛んで來た。

何故あゝだらう。俺は最う何んな女にだつて心を動かされさうもない。動かしたくも動かせないのだ俺が小說の書けなく成つたのも――一つは女に對する憧憬を失つたからだ。マドンナ崇拜を失へば、誰だつて小說が拙く成る譯だ。人生に對する興味を失つたやうなものだからな。

太刀男は自分の前に相手が聞いてても居る樣に推論した。そして、自分ながら結論の突飛なのに思はず微笑した。が、同時に其中にも動かされない眞理が有るやうな氣がして、却々笑ひ事でない樣にも思つた。彼の顏は又引緊つて來た。

それにしても、俺は如何してこんなに早く異性に對する興味を失つたらう。云ふ迄もなく、情慾が衰へたからだ。情慾が衰へたのは――それにはいろ〳〵な原因も有らう。他人よりも早く春情を萠したと云ふことも有る、十五六の時から三四年前迄つゞいた不節制な生活も有る。が、そんな事は要するに末だ。主要な原因は、矢張彼の女が傍に居るからだ、傍に居て、俺の情慾をすつかり吸ひ取つて仕舞ふからだ。

太刀男は成たけ汚ない屬性を女の上に浴せやうとした。そして、それに依つて、一人お玉ばかりでない、世界の女といふ女に挑戰して居るやうな心持がした。

少時、何も考へないで眼を閉いて居た。

が、不意に戸外へ出て外氣に當らなければ、一刻も居られないやうな氣がして立上つた。次の間へ這

入ると、折釘に掛けた外套を取つて引被けたまゝ、直に帽子を持つて出掛けやうとした。

「何處へ被往しやるんです」と、長火鉢の前に座つて居たお玉が訊いた。其聲が人を咎める樣に聞えた。見ると、額に病人らしい癇筋を立てゝ、火鉢の上に俯向いて居た所爲か、肉の薄い顔が火の點いた樣にほてつて居る。

太刀男はそれを見ただけて苛々した。が、わざと何氣ない體に、

「うむ、一寸其處まで」と言つた。

「だつて、最う夕御飯てすよ。」

「あゝ、それ迄には歸つて來るさ」と言ひながら、其儘玄關の方へ出やうとした。

お玉は遣込められでもした樣に、唇を嚙んだまゝ、凝乎と見送つて居たが、

「もしッ」と、堪らな相に喚び止めた。

「何だ」と、太刀男は振返つた。

「お手紙が來てますよ」と、お玉は唇をびく／＼させながら、わなゝく手に帶の間から一通の手紙を取出した。何うせ被往しやるものなら、これを讀んでから行つてお上げなすッた方が御都合が可いてせうよ。」

かう言つて、男の前に突着けた。

太刀男は女の權幕に呆れて、何事かと思ひながら默つて其手紙を取上げた。が、ひよいと其表書に眼を

着けると、われにもなく顏色が變つた。四角な封筒に、人目を眩ますためか、名宛は美しい横文字で書いてあるけれど、紛ふ方なき彼の女の手蹟である。今頃何と思つてこんな手紙を寄越したんだらうと、突嗟に思ひ惑ひながら、太刀男は一寸封を切り兼ねた。

「ね、早く讀んでお上げなさらんか」と、お玉は傍から意地わるく催促した。「最うちやんと知つてますから、私の前だつて遠慮せずとも可いんですよ。」

勿論、二人の關係はお玉の邪推して居るやうなものぢやない。お玉に知られたつて――それが本當に知られるのなら――些とも差支の有る譯のものぢやない。寧ろ二人の中には關係といふ程の關係はないと云つた方が可い。それを――あゝ、お玉が先刻からぷり／＼して居たのは、こんな物を見て氣を廻して居たのかと思ふと、一時に込み上げて來る癇癪を抑へながら、わざと平氣な顏を裝つて、

「何時來たんだい」と訊いて見た。

「何時でも宜う御座んすよ。早く開けて御覽なさらないか」と、お玉は執拗く繰返した。

「うむ、今見るさ」と言ひながら、太刀男は封を破つた。

中味も英語で書いてあつた。太刀男ははつと思ひながら、さら／＼と紙の上に眼を走らせた。時々意味が解らなく成つて、後戻りをしては又讀み下した。書いた方でも、こんな風で讀まれやうとは思ひも掛けなかつたに違ひない。

「ね、そら――私達に解らない樣に、そんな横文字で書いて居るんだよ。何てえ厚顏しいんだらう。本

當に、敎育のある女の樣ぢやないわね」と、お玉は傍から覗き込む樣にしながら、言葉迄くづして罵つた。其眼はいよ〳〵險しく成つて來た。

太刀男は一通り讀んで仕舞つて、紙片を下に置いたまゝ、ぽかんとして相手の顏を見詰めて居た。が、後れ走せに女の言葉が耳へ這入つた時、此女の下卑た所を見せ附けられたやうな氣がして、又むら〳〵と成つた。何か知らがみ〳〵と呶鳴つて遣りたい。て、何やら口を開かうとした時、

「又、貴方も左樣ぢやないか」と、女の方から言出した。「あんなに白ばつくれて、此頃は手紙も何も來やアしないよと云つて居ながら、此通り手紙の遣取りをして居るんですね。何日、何處で會つてるんだか知れたもんぢやアない。」

「何よ言つてるんだ。」

太刀男は自分でも吃驚するやうな聲が出た。が、女の下卑た物言ひを聽いて、今にも掴みかゝつて來さうな眼尻の引釣つたヒステリックな顏を見ると、何だか自分とは階級の違つた、一時の憤怒に素性を曝け出してかへり見ない女のやうな氣がして、眞面目に辯解く氣がない、又辯解をして見た所で解つて呉れ相もない。太刀男は眉の間をぴく〳〵させながら、只一言、

「今に解るよ」と、言つた。

「えゝ、解るでせうよ」と、女は即座に言ひ返した。

少時又沈默がつゞいた。太刀男はとつおいつ考へて居たが、やがて其不愉快な沈默に堪えないやうな

氣がして、

「ぢや可いね、行つて來るよ」と言ひながら立上つた。そして、相手の返辭も待たずに、つか〳〵と玄關の方へ出て行つた。

お玉は默つてそれを見送つて居た。何と言つて可いか、自分でも心が定まらぬらしい。

太刀男は手荒に玄關の戶を開けて戶外へ出た。「ぴしやり」と硝子戶が音を立てゝ閉つた時、不圖背後から喚び掛けられたやうに思つて、足を停めた。が、氣の所爲と見えて、二たび何の音も聞えない。又、ばた〳〵と玄關前の石段を驅け降りた。

三

太刀男は自家から逃出してもした樣に、眞直に自分の前を見詰めたまゝ、森川町の通りを驅足で步いて居た。大學の正門前まで來ると、鐵路の上を走る電車のやうにくるりと曲つて、門の中へ這入つた。足許にがち〳〵と小石の轢る音がした時、始めて氣が附いた樣に步調を緩めた。

目の前に古い赤煉瓦の建物を見た。ぼんやりゴシック式の尖かつた塔の頂邊を見上げながら、不圖、今日の手紙の主を想出した。太刀男はわれに還つた。

此手紙の主については一場の話がある。

今年六月、恰度倭文ちやんが自宅へ來出した頃、それと前後して、太刀男はある日未知の女から一本の手紙を受取つた。それは只一週間程前に、太刀男が或公開の文學會へ出て一場の話をした。其話を聞

びたから、一度太刀男の許を訪ねたいと云ふのだ。二三日して、其女は自身で遣つて來た。

其日は何事もなく、只初めて會つた男と女とが話すやうな事を話して歸つた。それから一週間ばかりして、二日つゞいて訪ねて來た。二日とも、何のために來たのか解らないやうな周章(あわ)てた歸りやうをした。が、二日目の夜おそく、太刀男は其女から二度目の手紙を受取つた。それは女の告白であつた。

手紙の文面に據れば、女は二年前から太刀男を知つて居るのだといふ。顔を知つたのは二年前だけれど、作物の上では、太刀男の處女作が出た當時から知つて居ると云ふのだ。女は其時から自分の作の主人公と離れがたないもの丶様に思つた。そして、二年の間ひとり心に秘めて來た。が、最近二たび其顔を見てから、到頭默つて居られなく成つたと云ふのである。

太刀男は手紙を握つたまゝ、只迷つた。

第一女が男に先立つて、こんな事を思ふと云ふのは、太刀男には不可解であつた。太刀男のこれ迄の經驗から云へば、女は飽迄受働的のものであつた。男に灯を點ぜられて始めて光を放つ燈火(ともしび)の火皿(ひざら)のやうなもので有つた。それに二年の間默つて思つて居たと云ふのも、何だか芝居氣らしい。俺は最う男と女とて打つ芝居の相手には成れない。

太刀男は一概にかう女をダムして見た。

が、自分の知らない間(うち)に、二年も前から自分を思つて居て呉れた女があるといふことは、嘘にしても嬉しくないことはなかつた。て、如何返辭を出したものだらうかと迷つて居る間(うち)に、又女から第二の手

紙が來た。

それは自分の輕擧を悔ゆるやうな手紙で有つた。「矢張私は默つて居るべきであつた。私は決して今の世の新しい女ではない。淨瑠璃で云へば、紙治のお三のやうな女に生れて來たのです。生れ立ちからお三に出來た女は、男を一度も知らないで、お三の役目をつとめる宿世でも御座いませう。貴方に奧樣のあることも知つて居る、貴方の思つて被座しやる方は、今でも矢張小說の中のお方だと云ふことも知らぬではない。それで居て、如何しても思ひ斷たれない私は、矢張あの治兵衞に捨てられた後のお三に成る外はない。私は甘んじてお三に成ります。只、私は默つて左樣成れば可かつたのだ、一人で左樣成つて居れば可かつたのだ。こんな女が一人世の中にあるとお知らせして、貴方のお心を騷がせたとて、それが何に成らう。最う幾許(いくら)〳〵悔んでも追附かないけれど」と。

思はぬ人を思つて、女が童貞の一生を送る。そんな事が實現されやうとは夢にも思はない。太刀男は女の覺束ない一向きな心を笑ひもした、憫れみもした。殊に女が自分の生活と相手の生活とを、ごつちやにして、一人で極めてかゝつて居るやうな、あから樣な過信が可笑しくも有つた。けれども、それは何の女にも有勝ちな過失である。何んな女でも、女は自分の方から言出せば、それを承知せぬやうなあてぎな男はないと思つて居るらしい。が、それを許せば、女の心持は可憫(いぢ)らしかつた。自分の云つてることが嘘だと云ふことも知らないで居るだけに、一層可憫らしかつた。

て、到頭太刀男は其返辭を出した。何んな返辭を出したか、委しい事はおぼえても居ないが、只二人

の關係を其上進めやうとはしなかつた。そんな返辭を出しながら、矢張心待ちに女の返辭を待つて居た。今一度位は女の方から何とか云つて來さうなものだと思つて居た。が、女はそれ限り啞の樣に默つて仕舞つた。何時迄待つても、何とも言つて寄越さない。太刀男は今更へまな事をしたやうな氣がして、此方から返辭を出したのが後悔された。お玉が机の抽斗を開けて、女の手紙を見たと云ふので、折々針を刺すやうなことを言出すのも、笑つて聞き流しては居るものゝ、心の中では苦々しかつた。

それから五個月を經た今日に成つて、女から思ひ掛けない手紙を受取つた。太刀男は今其手紙の中の文句を想出しながら、ひろい運動場の柵に添うて、櫻の並木の下をこつ／＼歩いて居た。櫻の葉は黄ばむで、下の石壘の上にも、土手の草原の上にも、一杯に散り敷いて、時々かさこそと風に舞ひ上つた。

其手紙に據れば、女は近い間に或職業を見付けて仙臺へ赴任するのださうな。兼て太刀男に誓つた言葉を衞るためには何か知ら自分で仕事をする身に成らなければ、何か知ら自宅の前に獨身生活をつゞけて行く理由を立てなければ許されない。て、元自分の卒業した學校の女の西洋人から勸められる儘に、いよ／＼決心して首都を後に立つ氣に成つた。一つは自宅に居て、心にもない緣談を持掛けられる面倒を遁れるためでも有るが、一つは此方に居れば、如何しても自分で自分の心の動搖が制し切れない。それから遁れるには、矢張太刀男の身邊を遠く離れる外はない。こんな事を書いて來て、女は最後に附け加へた。いよ／＼彼方へ立つ前には、最一度お目に懸りたい、又懸れるものと思つて居た。が、それは此頃に成つて思ひ止まつた。こんな手紙を差上げるのも憚られないてはないが、これだけは如何しても默つ

て立つことが出來なかつた。何卒忘れずにおぼえて居て下さい。陸奥のはてには、一人の女が夜毎日毎内に流るゝ涙を隱して、音もなく生きて居ることを。そして、貴方が其女を必要とする時が來れば、何時でも兩腕を開いて貴方を歡迎しやうと用意して居ることをと。

最後の三四行は詩の句でも諳んじて居て、其儘引寫でもしたやうに流暢な英語で有つた。太刀男は一人稱にも二人稱にも、男と女との區別さへない外國語で喚び掛けられた可笑しさを想ひ起しながら、強ひて笑はうとして見た。前面の坂に添うて、ベルツ、スクリッパ兩國手の胸像が眼に着く。太刀男は柵を越して、横樣に土手を攀ぢながら、先づ胸像の臺石に腰を掛けた。

少時默つて地面を見詰めて居た。

やがて又振仰いて醫科大學の時計臺を見上げながら、「うむ、私は貴方のために遠方へ落ちて行くのです、貴方のために一身を犧牲にするのですと云ふやうな手紙を貰つた所で、俺は何んな返辭が出來るんだい」と、憎さげに呟いて見た。「何も俺の知つたことぢやアない、俺の關係したことぢやアない。」

太刀男は何とも未だ女の言ふことが眞當面に信ぜられない。信ぜられないだけに、かうして笑つて仕舞ふのが一番安全だと考へた。が、若し本當に女の言ふ通りだとしたら、本當に自家の信念に向つて一生を捧げるものだとしたら――太刀男は半分喫ひかけた卷煙草の火の熄えたのを指の先に挾だまゝ、凝乎と考へ込んで居たが、ぷいと吸殼を大地に捨てた。

愛、愛の力は怖しい。本當にそんな理想的な愛があるものなら、それに刄向ふ力はない。俺か彼の女

の愛に酬ひやうが、酬ひなからうが、彼の女は只俺を愛し得たといふ一事に依つて、最う俺を自分の所有としたのだ。兎に角、俺は愛されたのだ。俺はそれを如何するども出來ない。幾許金城鐵壁を築いて防いて見た所て、それを阻む譯には行かない。同じ意味て、われ／＼は神の愛を斥けることが出來ないのだ。萬有の上に光被する父の愛を斥ける譯には行かないのだ。あゝ、若し彼の女が左樣いふ心持て自分に對して居られたら、神がわれ／＼の眼に見えぬ樣に、自分に隱れて居られるのだとしたら――

此時、油氣のない髮をぐる／＼卷にして、喉から片耳へ掛けて繃帶した女が、二人の看護婦に扶けられながら、そろ／＼と草履ばきの足を運んて來た。通りすがりに、其女はぎよろりとした眼で太刀男を見遣つた。太刀男は俯向いて居たのて、それを知らなかつた。が、不圖眼を上げて、二三歩遣り過した女の鳥肌の立つた血の氣のない横顔が見えた時、思はずぶる／＼と身震ひした。一時に高く飛翔するやうな思想の緒が途切れて仕舞つた。

少時（しばらく）、其後姿（うしろすがた）を見送つて居たが、太刀男の心には、不圖家に殘したお玉の面影が映つた。何故（なぜ）といふことはない。

時計臺の針は動いて居なかつた。太刀男はのそ／＼立上つて裏門を出た。本郷警察署の門前に立つて、ぼんやり往來の電車を眺めて居たが、又何か想ひ着いたやうに切通しの坂の方へ歩いて行つた。矢張自分と自分に話をして居るやうに地面を見詰めたまゝ、とぼ／＼と歩いて行く。電車は後から／＼此男を追越して行つた。

「他人事ぢやない、俺のことだ。俺自身、今の儘て埋もれて仕舞ひたくなければ、如何しても彼の牢獄から遁れ出る外はない。少くとも生活狀態を一變しなけりや――」

太刀男は不圖彼の女と一緒に走つたらと云ふやうな氣がした。何處へても可い、家を遁れ、社會を遁れて――が、そんな考へは、溜水から湧く水泡の樣に消えた。て、如何うしても生活狀態を一變することが出來ないとすりや、俺は最う無期徒刑に處せられたやうなものだ。此儘生を終る迄經木眞田を編んて居る外はない。

「成程、そりや窮厄に陷つて見なけりや味解されない幸福も有らう。が、そんな幸福は俺は最う味ひ盡した。

太刀男は自分て自分を笑ひたいやうな氣持に成つた。不圖、荷馬車を曳いた一疋の瘠馬が泥濘の坂道に歩み惱んて居るのが眼に着いた。湯島天神の裏て、蔭に成つた道が濘つて居るのと、いやが上に切石を積んだ荷が重いのとて、幾許馬が足掻いて見ても、車の輪は泥に喰ひ入つたまゝ一寸も動かない。馬士は矢鱈に馬の尻を打つた。打つた、〳〵、終ひにはわれを忘れて、自分ても何を爲て居るやら、眼も見えない樣に打ちつゞけた。

「えゝ、おい。最つと曳かねえかい。弱い畜生だな、死んても可いから曳けやい。」

又一つぴしりと鞭を喰はした。馬は前足て土を蹴る樣にして、彼方へよろ〳〵此方へよろ〳〵しながら、力一杯曳上げやうとしたが、如何しても車の輪が動かない。一本々々肋骨の出た脇腹は大波を打つて、鞍の下から後脚へ瀧津瀨のやうに汗が流れて居る。眼の色も血走つて居るらしい。

「何てえ、〳〵」と叫喚きながら、馬士は又鞭を振上げた。自分ても涙一杯眼に溜めてゐる。泣いては打ち、泣いては打つた。此儘打棄つて置けば、馬も人間もやがて氣が狂つて仕舞ひさうな。

通りがゝりの小僧や小商人らしいのが、二三人足を停めて見て居た。太刀男も其後ろに立つて、ぼんやり馬士の顔を見較べて居たが、不意に自分も一緒に成つて泣きたいやうな氣がして來た。泣きながら、彼の痩せた馬が打つて見たい。

て、如何成るかと、馬と馬士との成行も心に懸りながら、見て居られないので、そつと足を上げた。ふら〳〵と氣抜けした様に廣小路の方へ行く。

電車の線路が十文字に行違ふ角に立つて、不圖彼の女の宅は此街を眞直に行つた所だなと思つた。かねて女の家は厩橋から程近い本所の川の縁にあると聞いて居た。太刀男は少時其方を見詰めたまゝ立つて居た。

が、又思ひ返したと見えて、公園の方へ足を向けた。上野の森の下を通つて、だん〳〵根津の家へ歸つて行く。

四

上野の森蔭を辿りながら、太刀男は何うも此儘家へ歸る氣がなかつた。何處かへ行きたい、何處かへ廻つて歸りたい。

「矢張あの女の家でも見て來るかな。」

太刀男は又こつそり彼の女の近隣へ行つて見たいやうな氣がした。彼の女が自分に隱れて自分を思つて居て異れるなら、此方も彼の女に隱れてこつそり彼の女の容子が覗つて遣りたい。彼の女の容子が見えなければ、彼女の家でも——

一二間先きに、一人の車夫が楫棒を握つたまゝ草鞋の紐を直して居つたが、つと立上つて、太刀男の傍へ近寄りさま、

「旦那お人力車は如何さま」と勸めた。

「うゝ、左樣だね」と言ひながら、其儘二足三足前へ出た。

「え、何方？　何方迄參ります」と、車夫は急に勢ひ附いて後から跟いて來た。

太刀男は一寸躊躇したが、えゝ、儘よと、顎でしやくりながら梶棒を卸させた。がら〳〵と曳出して、山下から御徒士町へ出た。電車通りを一直線に、厩橋の方面へ馳つて行く。が、辻車の車夫は客が焦燥れば焦燥るだけ急がない。時々手洟をかみながら緩々と曳いて行く。電車には幾度も追越された。太刀男も寧そ人力車を捨てゝ電車に乘らうかとは何度も思つたが、左樣すれば又氣が變り相で自分ながら宛に成らない。て、廻套の襟を立てゝ向風を防いだまゝ、何時迄も神妙に乘つて居た。

ひろい割合に寂れた町の家並が何時迄もつゞいた。やがて賑やかな藏前の通りを突切つて、直に厩橋の上へかゝつた。ぱつと幻燈の樣に明るく成つたかと思へば、又急に暗く成つたので、頭の中が森とする。川から吹上げて來る風が寒い。

「旦那、何方へ被入しやいます」と言ひながら、車夫はたッ〳〵たと梶棒を停めた。
　太刀男は殆ど何處へ行くと云ふことも意識して居なかつた。て、急に眼の覺めたやうな心持がして、
「うむ、まア可いや。此處で降りやうよ。」
「何なら先方樣迄お供しませう」と、車夫は梶棒を握つたまゝ離さない。
「なに、最う可いんだよ」と、太刀男は無理に立上つた。若干の賃錢を渡したまゝ、足の向いた方へ一町許り駈出したが、角の交番の前に巡査が立つて居るのを見て、二三間後戻りをしながら、おづ〳〵女の番地を訊いて見た。
「十番地は此邊てすが、何と云ふ家てす」と、巡査は外套の翼の下て腕組をしたまゝ、ゆつくり訊き返した。
　此邊が左樣だと言はれて、太刀男は一寸どぎまぎしたが、努めて何氣ない體に、
「えゝ、其の苅谷と云ふんてすが。」
「あゝ、苅谷さんてすか。それはね」と、二足三足前へ出て、暗がりの横町を指差しながら、「此横町を半丁餘り行きますとね、木の橋が有る。其橋を渡つたら、直ぐ堀割について左へ曲るんてすよ。それから二三間行つて又右へ這入るんてすがね。えゝ、好く分る家てすよ。」
　太刀男は餘り能く分らなかつた。が、好い加減に禮を述べながら、遽てゝ横丁の闇へ曲つたc片側に煉塀がつゞいて、軒燈一つない暗がりの小路てある。足許を氣にしながら、一二間歩いて居ると、後から

來た二人づれの若衆(わかしう)ががやがや言ひながら追越して行つた。太刀男はぼんやり見送つて居たが、又足を早めて其後に隨つた。

成程太鼓形の木の橋がある。それを渡つた所が明地に成つて居て、草原の中が切石が積んである。二人の男は眞直に原を横切つて行つた。太刀男は一寸考へて居たが、巡査の言葉を想出して、濠について左へ取つた。矢張右へ這入る露路がある。あゝ、これだなと思ひながら、左側につゞく二階建ての小意氣な長屋の軒燈を一つ一つ覗きながら這入つて行つた。突當りが忍返しのついた黒板塀で、如何やら袋町に成つて居るらしい。

太刀男はぼんやり其前に立停つた。不圖後ろを振返つた途端に、右側の高い城壁のやうな石の塀を廻らした角屋敷が眼に留つた。塀が高いのと暗いのとで、何んな家やら能く分らない。只、塀の上に植ゑ附けた鐵の忍返しが劍の山でも見る樣に、天の一方を指し居た。太刀男は何となく威嚇されたやうな心持を味ひながら、二三歩後へ戻つて見た。角から二間程離れた所に、岩疊な石の門があつて、未だ宵ながらぴたりと扉が閉してある。鐵網を張つた電燈の薄暗いのも陰氣臭い。其灯影に透して見ると、瀨戸の標札には苗字だけ苅谷とあつた。太刀男は何と云ふこともなくどきりとした。

勿論、何んな家とも想つて來た譯ではない。が、何うも彼の女がこんな家に住んで居やうとは思はなかつた。本所から來ると云ふので、多少一人極めに極めて居た所も有らうけれど——が、何うも此家は當り前ぢやない。此門の扉は何時迄立つて居ても開き相にない。如何かすると、年中開かないのかも知

れない。

不圖、堀端から此露路の中へ這入つて來る足音がした。太刀男は一寸狼狽した。此儘歩み出して、其男と擦れ違ふか、それとも――太刀男は只顔を見られるのが可厭さに、黒板塀に突當つて、右へ折れて見た。板塀の外れに芥溜が置いてあつて、迚も行かれ相もない所に細い露路が曲りくねつて續いて居た。軒と軒との間の溝板を踏み鳴らしながら、前後の分別もなく、一目散に駈出した。

やつと露路を拔けた時、目の前に大川が見えた。折柄上汐と見えて、ひた〳〵と石垣の下に水が押寄せて居る。何うやら横網の河岸らしい。太刀男は川の縁に立つて、ほつと吐息をついた。後から追掛けて來る者もない。向河岸の家並は一面に霧がかゝつたまゝ黒ずんで、空には五日ばかりの月が雲の途切れに寒さうな光を放つて居る。下手には、鐵橋の上を渡る電車の灯がちら〳〵と見え隱れした。

太刀男は空を見上げて、又水の上に映つた月の波紋を見た。左樣して居る間に、だん〳〵眼の中が熱くなるやうな心持がして、妙に感傷的な心持に成つた。一體、俺は此處へ何しに來たらう。女の方では、勿論俺がかうして彼の女の近くへ來て居やうとは知る筈がない。今頃は何をして居るのか知らないが、逢ひも見も出來ぬと知りながら、女の家の周りをうろ〳〵彷ついて廻る。何だか十代の昔に還つたやうな氣がして自分ながら可笑しい。

彼の女が西洋風な客間に自宅の人達と一緒に笑ひさゞめいて居る所を植込の蔭にでも隱れて居て、こつそり見やうと云ふのか。それとも二階の居間に鏡を立てゝ、電燈の光を眞當面に浴びながら、湯上り

の化粧でもして居る所を透見しやうと云ふのか。俺は矢張そんな事を考へて來たのぢやないか知ら――

太刀男はそつと自分が今し方出て來た露路の口を覗いて見た。露路の口は洞穴の樣に暗くどんよりとして、誰一人出て來さうな氣合もない。で、一足づゝ暗闇の中へ這入つて行つた。二たび女の家の前を通り抜けて見たが、軒燈の光が薄暗くとぼれて居るばかりで、何一つ前と變つたこともない。それが物足りない樣にも思ひながら、木の橋を渡らうとして、最一度振返つて見た。が、矢張何の事もない。

橋の上から見ると、通りの街がぽつと明るく見えて、往來の人の黑い影がちら〳〵する。太刀男はそれを見ると、われに還つたやうな心持がして、急にあたふたと駈出した。恰度江戸川行の電車が停つて居た。

電車の中は乘合が一人二人しかなかつた。太刀男は片隅にがつくりと腰を卸して、倒れる樣に頭を窓の硝子戸に凭せた。頭の中では、『一體、何をしに來たのだ。馬鹿な』と、自分で自分を非難せずには居られない、自分で安心するためにも。で、眼を瞑つたまゝ、成たけ何も考へまいとした。天井の電氣が薄暗いのと、乘客の出入りが少時途絶えたのとで、町の中を駛つて居ながら、時々夜汽車で平野の中を旅行して居るやうな心持に成つた。うと〳〵としては、又吃驚した樣に目を覺した。そして、三丁目へ來た時、不意に立上つて電車を降りた。

一時間後、太刀男は微醺を帶びて自宅の周りへ近いた。表の通りから横丁へ曲つた時、不圖、奧の方から三味線の音が聞えて來た。如何やらそれが自分の家らしい。矢張、お玉が肝癪まぎれに三味線を持

出して弾いて居るんだなと思ひながら、足音を忍んで、一足づゝ自宅の門に近いた。四邊が森として居るだけに、家の中に籠つた三味線の音色が憐れに寂しく聞えた。

門の鈴が鳴つても、三味線の音は止まなかつた。太刀男はのそ〳〵石段を上つて行つた。玄關の硝子戸を手荒に開けて、又ぴしやりと閉めた音が家の中に響き渡つた。はたと三味線の音は止んだが、誰も出て來ない。太刀男はつか〳〵と茶の間へ這入つた。帽子と外套とを折釘にかけて、其儘長火鉢の前に突立つて居た。

「お歸りなさい」と、お玉はやつと出て來て、背後から聲を掛けた。

太刀男は一寸振返つて見たまゝ、何とも言はずに默つて居た。女の顏は今迄かッかと熾つた炭火の上にでも俯向いて居た樣に充血して、目眦が裂けんばかりに釣し上つて居る。何だか繪に描いたやうな顏だなと思ひながら、眼を背けずには居られなかつた。

「御飯は如何です。最う濟みましたか」と、お玉は火鉢の前に坐りながら、つとめて憤怒を抑へて居るやうな聲音で訊いた。

「あゝ」と、太刀男は只それだけ言つた。

「左樣ですか。ぢや、最う私一人でしたのね」と言ひながら、ぢろりと男の顏を見上げた。

餉臺の上には、二人前の茶碗と箸箱とを伏せたまゝ、片隅に寄せてある。太刀男は一寸それに眼を留めたが、わざと左樣されるやうな氣がして、何とも言ふ氣に成れなかつた。

「今頃何處へ行つてたんです、行先も言はないで」と、お玉は到頭堪り兼ねたやうに切出した。

「何處でも可いさ。」

太刀男は鼻の先で返辭をしながら、にや〳〵と笑つた。此際笑ふのは惡いと思つたが、最う追附かない。

「可かア有りませんよ」と、お玉はいよ〳〵向きに成つた。「留守の間に、何んな急用が有つても困るぢや有りませんか。」

「俺達に急用なんか有るもんかい。ぢや、俺は最う寢るよ」と言ひながら、女一人打捨つて置いて、太刀男は自分の居間へ這入つた。一人に成ると、急に眞顔に成つて、にや〳〵笑ふやうな氣分は何處にもなかつた。此方から女の意の解けるやうなことを一言言つてさへ遣ればとは思ふもの丶、何うも彼んな風に出られて見ると、それだけの事もする氣がない。

「が、何うでもない間から、彼れぢや――」

太刀男は羽織の紐に手を掛けたま丶、凝乎と暗がりの中に立盡して居た。

五

一日置いて、明くる日の朝である。太刀男は朝飯を濟して、火桶の上に新聞をひろげながら、長い間か丶つて讀んで居た。今朝から霽れた日影は障子の棧を三段迄上つた。が、矢張新聞を下に置かなかつた。

折柄襖の外に足音がして、小母さんが顏を出した。
『お客樣ですよ。』
太刀男は慇懃相に新聞から眼を離したまゝ、『誰だい。』
『えゝ、何日か見えた女の方ですよ。ほら、本所とかから來るんだと言つた――』
太刀男はぎくりと胸を打たれた。彼の女が來た、彼のあぐりが――此中へ？　小母さんも普通ならぬやうな顏をして居る。少時、如何せうかと迷つて居たが、
『ぢや、此處へ通して下さい。』
『可いんですね、通しても』と、小母さんは念を押して立つて行つた。
やがて小母さんの後に隨いてあぐりが這入つて來た。大分興奮して居るやうな顏附ではあるが、別段家の者の容子に氣が附いて居る樣でもない。侑められる儘に、座蒲團の上に半ば膝を乘せながら、
『お邪魔では御座いませんか』と、主人の顏を見上げる樣にした。
『いえ、なに』と、太刀男は相手の女よりも、女の顏を横合ひから見い／＼茶を侑めて居る小母さんの容子に氣を取られて居た。
あぐりは小母さんが襖を立てゝ退くのを待つて、直に又言出した。
『一昨日あんな手紙を差上げて置きながら、今日お伺ひするなんて、本當に――』と言ひ差して、心持顏を赧らめた。

『いえ、なに』と、太刀男は同じ言葉を繰返した。『何處か遠方へ被任しやる樣ですね。何ですか、最う先方へお出の日取りも極まつたのですか。』

わざと襖の外へ聞えよがしに、大聲に話して見た。が、何やら興奮して、聲の調子が上ずつと居る。

左樣思ふと、一層あはてて來た。

『で、何日お立ちなんです？』

『あの、それは――』と、あぐりは口籠つた。

『併し何ですね、仙臺と云へば、隨分――』

かう言ひ〳〵、太刀男は机の上の萬年筆を取つて、有合ふ紙を引寄せて、何やら走り書きに書き出した。

『はい』と言つたまゝ、あぐりもそれと悟つて、默つて見て居た。

二人の言葉が妙に途切れた。それに氣が附いて、太刀男は又口から出任せに語り出した。

『仙臺へ行つて何をなさるのですか。』

『えゝ、その何といふことも』　と言ひ掛けた時、太刀男は書いた物を默つてあぐりの膝の前に出した。あぐりは引ツたくる樣にして、それを摑んだが、膝の上に載せたまゝ、眼を皿の樣にして讀んで行く。

紙片には、次の樣に書いてあつた。

「貴方が今日私の家へ敢て來た心持は、私には總て解つて居るやうな氣がする。貴方の忍んで居る羞恥の情も、又それを忍ばなければ成らなかつた所以も――私が貴方の手紙に對して、今日迄返辭を出さなかつたのは、如何返辭をして可いか、私には解らなかつたからだ。今でも解らない。で、一度會つて好く話合つて見たいが、何うも此處では話が出來にくい。貴方の都合で、明日の朝九時から十時迄の間に、昌平橋の停車場へ來て呉れませんか。何かの話は其時致しませう。何事も其時迄殘して置く。」

あぐりは一寸上氣したやうな顏を上げて、男の顏を見返したが、やゝ有つて、

「あの、私にも鐵筆を」と言出した。

「あゝ、これですか」と、太刀男は萬年筆を取つて遣つた。そして、女が膝の上で、何やら考へ〳〵書いて居るのを見遣りながら、二言三言喋舌つて居たが、やがてわざと厠へ立つた。

厠から出て來た時、女は指に卷いて持つて居た紙片を窃と太刀男に渡した。が、何と思つたか、

「あの、一寸最少し」と、二たび男の手から取返して、一二行黑々と塗り消した。又、それを「何卒」と太刀男の前へ出した。

女の文句は、

「では、何事もお言葉に從ひます」と、只それだけで有つた。何か知ら他に二三行書いて見て、後から眞黑に塗消したものらしい。

太刀男はそれを下に置いたまゝ、丸で方角の違つた事を言出した。あぐりは手を膝に置いて、凝乎と

其話を聴いて居たが、時々眼を上げてはぢろりと男の顔を見遣つた。そして、又差俯向いて聴いて居た。やがて、相手の言葉の途切れるのを待つて、

「では、私最う失禮いたします」と、低聲で言つて、そつと立上つた。

太刀男も默つて送つて出た。茶の間の前を通つた時、お玉は眞赤に逆上せたやうな顔をしながら、小母さんと並んで送つて出たが、あぐりの姿が玄關の硝子戸の外に消えると、屹と其處に立つて居る太刀男の顔を見返つた。其眼が釣し上つて、唇がびく／＼震へて居る。

太刀男は何か言つて遣らうかと思つたが、又思ひ返して、つか／＼と自分の居間へ歸らうとした。お玉はばた／＼と後を追掛けて來た。て、太刀男が元の座に坐ると、自分もそれと向ひ合つて蹲がんだが、火鉢の縁に膝を押附ける樣にして、片手に火箸を握つたまゝ、

「一體、彼の方は何爲に來たんです」と、先づ口火を切つた。

「うゝむ」と、太刀男は空恍けたやうな顔を上げて、「別段何爲にと云ふ譯でもないのさ。」

「何ですつて、えゝ？」と、お玉は相手に突かゝるやうに言つた。「本當に女も女ぢやないか。一昨日あんな手紙を寄越して置いて、後からのこ／＼自分で遣つて來るなんて、何てえ圖々しいんだらう。」

太刀男は默つて女の顔を見返した。勿論、今日來たについては、お玉に憤られるだけのおぼえは彼の女にも有るかも知れない。が、お玉の樣に口汚なく言つては——彼の女に氣の毒だと云ふよりも、お玉の方が下司張つて見えて仕樣がない。何故些つと謹みがないのか——太刀男は女の顔を見詰めながらぢ

〳〵して來た。やがて、

「何を言つてるんだな」と言つた限りで、つと側を向いた。

お玉は口惜し相に其横顏を睨めながら、喉元迄突かけて來る泣聲を怺へ〳〵して居たが、思はずぶるぶると身顫ひした。

「えゝ、私は何うせ――」と言ひ掛けた時、小母さんが襖を開けて顏を出して、

「あの、お時さんが」と告げた。

「あゝ、左樣」と、涙を持つた眼に點頭いたまゝ、又向直つて、「私は何うせ解らない女ですよ。何うせ學問がないんですからね」と、ぷり〳〵しながら座を立つた。賴みつけの髮結ひが來たものらしい。

其夕、太刀男は矢張大學の構內を散步して、不圖大學病院に助手をして居る小學校時代の友達を訪ねて見た。折よく友は當直て居殘つて居て、應接室へ引きながら二つ三つ談話をした。太刀男は見るたびに、だん〳〵と世俗的に成つて行く友の物越しなら容子ならを珍らし相に眺めて居たが、

「如何だ、面白いことが有るかい」と訊かれて、急にわれに還つた。

「君は如何だ、近頃儲かるかい。」

「いや、最う十七圓の月給取りぢや適はないね」と、友はわざとらしく頭を搔いたが、「時に君なんぞに話したら、屹度面白い材料に成るんだがね。いや、此處ぢやない。僕の知つてる醫者の宅に居た看護婦だがね、いや面白い話が有るんだよ。」

ふう言つて、女の語出した話に據れば、何でも其女といふのは、最初女醫が志願で伊豫の松山から出て來たが、學資がつゞかないで止むを得ず看護婦に成つた。一寸目に着く器量なので、何處へ行つても藥局なぞて騷がれたものだが、當人は始終浮かぬ顏をして、仲間の者にさへ碌々口も利かないやうな質(たち)て有つた。中にはレプラアの血統ぢやないかと云ふやうな噂も有つたが、それは解らない。平生僂麻質斯に惱んで其方の手當をして居たが、死ぬ二三日前にも、何時になく仲間の者に向つて、

「私は一つや二つぢやない、いろんな疾病(やまひ)に絡まれてるんだから、最う駄目ですよ」と言つたんださうな。

ある夜、主人(あるじ)の醫者夫婦が寢る前に茶の間で談話(はなし)をして居ると、一週間も前から寢た限(き)りの其女がこと〳〵二階から降りて來て、すうーと唐紙を開けながら、

「あの、お湯を一杯頂けませんか」と言ふんだね。主人夫婦も振返つて、閾の上に立つて居る女の姿を見た時は、眞個吃驚したさうだ。顏色が蒼醒めて、ばらりと後れ毛がかゝつて――何しろ容子が變だから、「如何したんだ」と訊いても、返辭がない。

「まア此方(こつち)へお這入り」と、細君迄强つて侑めると、よろ〳〵と火鉢の傍へ進つて來て、

「長い間、いろ〳〵お世話樣に成りましたが、私は今夜死にますから、何卒後のところを宜しく」と、手を突いて言ふぢやないか。院長も驚いて、

「馬鹿な事を言ふもんぢやない。一體、如何したんだ」と訊くとね。

「今夜死ぬつもりで莫比の注射をしました」と、はツきり言ふんださうだ。さ、それから大騒ぎに成つて、二階へ連れて行つて應急の手當をしたもの丶、最う仕方がない。夜中すや〳〵と眠りながら、其夜の明方に二十五を一期として、何の苦痛もなくことりと息を引取つたのださうな。

「歳も若かつたんだね。惜しいことをしたよ」と、友はさも殘惜し相に言葉を次いだ。『それから朝に成つて、故鄕へ電報を打たうとか何とか騷いで居るとね。其處へひツこり其女の兄貴が出て來たんぢアないか。如何したんだと訊くとね。いや、昨日の朝妹が死んだといふ電報を頂いて、取る物も取敢ず私が出て參りましたと言ふんだとよ。つまり其子が自分で電報を打つて置いたんだね、え丶』と、相手の眼の中を覗き込むやうにしながら、『一寸面白いぢやないかね。』

『さ』と、太刀男はわざと眼を反して、『で、何かい、其女の死因は分らんのかい』と訊いたが、矢張分らん方が可い。如何いふ譯で死んだか分らん方が可いと、心の中で繰回した。

『うむ、書置も何もないと云ふんだよ。』

『左樣さな。わざ〳〵書置など書いて置いて、如何いふ譯で死んだか、自分が死んでから後の人に解つて貰ふ必要は、當人にはないだらうからね』と言つたが、少時して、『併し珍しい死方をしたものだね。』

『いや、珍らしいと云へば、僕の見たのぢや』と、友は乘氣に成つて語出した。『僕が鹿兒島の高等學校に居た時、城山で見た若い男と女との心中だがね。先づ女の頸動脈を斬つて置いて、後から自分で遣つたんだよ。そりやア見事なものだつたよ。何しろ剃刀の先で彈ぢけば死ねるんだからね。何ても男とい

ふのは醫專の生徒とか云つたよ。」

太刀男は話の途中から、不圖、明日の朝あぐりと會ふ約束をしたんだなと想出した。左樣思ふと、急に氣がせいて、相手の言葉が途切れるのを待兼ながら、

「や、何うもお忙しいところを失敬した」と、立上つた。

太刀男は鳥打帽子を眉深に被つて、のめる樣に急いて歩きながら、鐵門を出た。玉川砂利が下駄の歯にきしむ。明日の朝昌平橋で女と出會ふのだと思つた時、彼は昔有つたことを二たび繰回すやうな氣がした。相手の女は違つても、矢張同じ事を繰返して居る。太刀男には、それが何とも言へない程可厭な氣がした。

「俺はそんな眞似をして如何するんだ！」

から一人で呟いて見た。何よりも先づ自分が前の女によつて得られなかつた滿足を後の女によつて補はうとして居ると思はれるのが心苦しい。殊に女の方で自分に同情した心算で居られるんだから堪らない。

「斷らう、〳〵、斷つて仕舞ふんだ。俺には女に會つた所で仕樣がない。」

太刀男は足下の大地を力任せに蹴つて見た。切通しの通りへ出て、郵便局の窓の明りが見えた時、不意に石段を昇つて行つた。正面の時計の針は未だ八時五分前を指して居た。今から出せば、今宵の間に本所迄屆かぬことは有るまい。縱しや今夜中に着かぬとしても、明日の朝未明には乾度着く——

太刀男は胸算用をしながら、わざと端書を一枚買つて、此裏に、

「明日の朝、私は用事が有つて參りません――太刀男」と、只それだけ書いた。そして、ポストへ抛り込みながら、誰かに見て居られた樣に遁て、郵便局を出た。

表の人通りの中へ交つた時、太刀男は重荷を卸した樣にほつとした。急に氣も輕々として、露店の灯影の前にちら〳〵する黑い人影の間を縫ひながら、ぶら〳〵根津權現裏の我家へ戻つて行つた。

茶の間で、小母さんを相手に久らく談話(はなし)をして居た。お玉は次の間で明りも點けずに保名を彈いて居た。太刀男は間もなく自分の居間へ戻つたが、机の前に坐つたまゝ、夜闌くる迄電燈の灯を消さなかつた。

明くる朝はやつと九時過ぎに床を出た。朝飯を濟まして、一服喫はうとしたが、卷煙草(たばこ)が切れてない。て、手拭に石鹼箱を包んて、卷煙草を買ひがてら、朝湯に行かうとした。角の煙草屋の店先に立つて、主婦さんが釣錢を吳れるのを待つて居る時、不意に傍へ來てお叩頭(ちぎ)をする女が有つた。見ると、それがあぐりて有る。太刀男ははつとした。

如何して此處へとは問ふ迄もない。頭の中はぐる〳〵と旋風(つむじかぜ)のやうに廻るばかり、何とも言出し兼ねて、只當惑した。が、併し女はそれとも氣が附かないらしい。

「十時迄彼處でお待ちしました。お出がないので、如何なすつかと思つて參りましたが、まア此處で逢へて――」

「おや、私の端書は見なかつたのですね。」

太刀男は思はず頓狂な聲を出した。

「何んなお端書てしたらう? 私は今朝八時前に家を出ましたから」と、あぐりはぼんやり男の顔を見上げた。

見なければ、見て呉れない方が可い。太刀男はほつと胸を撫下ろした。

「えゝ、私は今日差支が有つて伺はれないと云ふ――」

あぐりは只點頭いて見せた。

二人は顔を見合せたまゝ、少時言葉が途切れた。やがて女は思ひ入つた様に、一足ずつと前へ寄つて、

「あの、一寸其處迄來て頂けませんてせうか。」

「さ」と、太刀男は稍躊躇した。「何うも今日は都合が惡いんてすがね――えゝ、其間私の方から折を見て申上げます。乾度後から手紙を出します、ね。ですから、今日の事は宥して下さい。ね、左様して下さい。」

太刀男は押被せるやうに、退引させぬ様に繰返した。女も一寸思案して居たが、

「では、それをお待ち申しますから」と言ひながら、思ひ切つて踵を返した。一二間行つてから又振回つて、二たび頭を下げながら戻つて行く。

太刀男も直ぐに踵を回したが、女の幾夜も眠らないやう蒼い顔色と、思ひ入つた容子とが何時迄も眼

に逢つた

下の巻

一

明くる朝、太刀男は寢床の中て目を覺ました。一夜ぬくもりの籠つた夜着の中は好い鹽梅に暖かく、朝寒の頃だけに何うも起きづらい。て、一旦上げた頭を又引込めて、枕をかい直したまゝ、障子の光の眩しさに、そつと額の上迄夜着を引被つた。

眼は蒲團の中て開いて居た。

昨日の一時頃、太刀男は家を出て彼の女と約束した兩國の停車場に向つた。電車を降りて停車場へ向ふ道すがら、女が自分の手紙を見て、直樣遣つて來るだらうか如何かと考へて見た。何んな女てもあれだけ踏附にされたら——此間から随分おれは彼の女を踏附にした。來いと云つて置いて行かなかつたり、又勝手な時に來いと云つたり——女の方ておれに仕返しを爲ようと思つたら、今日程好い時はない。今日を置いて、男の面を見返して遣る時はない。普通の女なら、今日は來ない方が當前てある。太刀男はそんな事を考へながら、停車場の石段を登つて行つた。

て、忙し相に待合室を一巡して見たが、女の姿が見當らない。おや、矢張來ない積りだなと思ふと、かねて期したる事とは言ひながら、むら／＼と肝が立つた。それても汽車の時間はと思つて、時間表の

前に立つた時、

「もしッ」と喚びながら近づいて來る女が有つた。「先刻からあんなに喚んで居ますのに――」

聞けば、一時間も前から來て待つて居たとの話である。太刀男が途々考へて來たやうなことは、此女には氣も附かないらしい。眞個如何かして居るんぢやないかと、つく〴〵其顔が見られた。

二人は小さな停車場へ降りて、田舍路をぐる〴〵廻つて歩いた。終ひには野風が寒く成つて、矢張元の停車場前の茶屋へ戻つて來たが、何うも話が理窟に落ちて打解けない。太刀男は何よりも五六年前と同じ事を繰返して居るといふことが、自分の威嚴を傷けるやうに思はれて成らない。そして、談話はいよ〳〵心にもない理窟に流れた。

が、何かの機みに手と手が觸れて、それを握り合つた時、女は男に顔を背向けたまゝ、

「あゝ、やつと是れで安心した」と言つた。

太刀男はそれが臓へ沁み入るやうに聽いた。其一言が十千萬言にも勝つて、此女を説明して居る様に思はれた。女は甘いのかも知れない。が、何人をも何物をも疑はない女の心は、白い練絹のやうに、そつと男の心を包まずには置かない。

只、太刀男は女の手を取つて取返し難い一歩を踏出した。而も全責任を自分の肩に脊負つて――あゝ、俺は何處迄責任を脊負つたら可からうぞ。

太刀男は瓦破と跳ね起きた。臺所へ降りて顔を洗つて、それから茶の間の長火鉢の前に坐つて見た。

家の者は皆朝飯を仕舞つた後らしい。餉臺の上には、一人前の茶碗や小皿や箸箱などを載せて、其上から布帛が被けて有つた。そして、お玉一人長火鉢の猫板の上に臂を突いて、顳顬の邊りを抑へたまゝ、凝乎と待つて居た。太刀男の姿を見ると、急に顔を上げて溜息を吐きながら、

『直ぐに召上りますか』と訊いた。

『あゝ』と、太刀男は女の逆上せたやうな顔色と、涙含んだ眼とに目を附けながら、『如何したんだ？身體の加減でも惡いのか。』

『えゝ、昨宵から何うも此處ン所が痛むんですよ』と、お玉は乳房の下を抑へて見せた。

太刀男は一寸考へて居たが、『矢張風邪熱ぢやないかな。』

『何てすか』と、女は差俯向いた。

『ぢや、無理をしないで寝て居たら可いぢやアないか。酷く成つてからぢや惡いよ』と、優しく言つて見た。

『えゝ、有難う』と言つたまゝ、女はそれぢや左様しやうとは言はない。太刀男も默つて茶碗を突出した。お玉は給仕をしながら、時々空咳をしては息苦し相に胸を抑へて居た。其都度、太刀男は上眼にそれを見遣りながら、わざと何とも言はなかつた。

やつと朝飯が濟んだ時、お玉は餉臺を片附けやうとして、片膝立てながら、急に顔を蹙めて俯向き込んだ。

「如何したんてせうねえ。咳嗽をするたンびに、脊骨の側が、かう針で刺すやうに痛むんてすよ。」

『左樣さな』と、太刀男は鐵瓶の下の灰を掻捜して卷煙草に火を點けながら、「一遍神保さんに診て貰つたら如何だい。手後れして、肺炎にても成つたら堪らないよ。」

「えゝ。」

「えゝおやアないよ。何うせ醫者にかゝる程なら早い方が可いんだよ。」

「えゝ、行つて參りますわな」と、矢張火箸て灰をつゝ突きながら、「てすが、私の病氣はかうして居れは、其間癒るんてすからね。」

お玉は醫者に診て貰ふと云ふことを、何か怖いものてでも見る樣に恐れては居る。本當に肺病だと言はれたら如何しやうとても思つて居るらしい。が、それにしても、病苦を怺えながら醫者にもかゝらないて居ると云ふ所に、男に對する面當が有る。女らしい意地が有る。太刀男も最初は成るたけ女の氣に逆らはない樣に言つて居たものゝ、餘まり女が强情だと思ふと、ついむか／＼と成らざるを得ない。

『おや、お前の所好にしたが可いや。』

かう言つて、ぷいと座を立つた。

「だから、診て貰ひに行くと行つてゐるんぢや有りませんか」と、お玉は追ひ掛けるやうに言ひ放つた。

「だが、幾許醫者にかゝつても駄目てすよ。後から／＼貴方が病氣にさせるんだから――えゝ、貴方てすよ。一體、昨宵は何處へ行つたんてす？」

太刀男は思はず振返つた。

「何處へも行きやアせんさ」と、お玉の火のやうな眼を避けながら言つた。

「えゝ、隱したつて駄目ですよ。ちやんと分つてるんですからね。」

お玉の眼はいよ／＼脅迫する樣に光つた。

「何を言つてるんだな」と言ひ捨てたまゝ、太刀男は遁げるやうに自分の居間へかへつた。そして、ぴしやりと襖を閉め切つた。

お玉は何も彼も知つて居る。彼の女の彼の神經質的な鋭い眼を遁れることは出來ない。が、俺は何もお玉の妬くやうな、お玉の考へて居るやうな意味で、不都合を働いた譯ではない。それが解りさへすれば、お玉だつて氣を揉むことも憤ることもない筈だ。何故それが解らないのか。幾許解らせやうと思つても解らせることが出來ないとすりや――

「如何成るものか」と、太刀男は一人て呟いた。

其日、お玉は到頭醫者へも行かずに仕舞つた。そして、一日中空咳をせきながら、屈托相に長火鉢の緣に頰杖を突いて居た。何だかそれが張番でもして居られるやうな氣がして、太刀男は用事が有つても、成たけ外へ出ない樣にした。幾度もそれを怺えて居る間に、だん／＼怺えて居ると云ふことが怺えられない樣に成つた。

「何を馬鹿な」と、太刀男は一人て地團太踏んだ。「かうして居りや、互に生命を擦り減らして行くばか

りだつぢり〳〵と命を砥石に當てゝ行く。彼奴が死ぬか、俺が殺されるか――あゝ、寧そ死んで呉れた方が可い、死んで仕舞へば可い。』

『死んで仕舞へば可い！』不圖、此一念が心に泛んだ時、太刀男は自分ながらぎよつとした。俺は本當にお玉の死を望んで居るのか、お玉が死んでから如何しやうと云ふのか。

『俺は只一人に成りたいのだ！』

太刀男は自分て自分を胡麻化すやうに言つて見た。『俺は如何もしたくない、又如何もして貰ひたくない。只一人に成りたいのだ、最一度繫累のない身に成りたいのだ。俺は家族のために働いて、其家族のために自我の發展を妨げられるやうなことは、迚も最う我慢が出來ない。』

太刀男はお玉にも、あぐりにも離れて、一人曠野を行く寂しい自分の姿を眼に泛べて見た。そして、それに依つて、やつと安心しやうとした。

二

お玉の空咳は一層烈しく成つた。熱の差引もいよ〳〵むらに成つて、眼もきよろりと落ち凹んで來たが、顏の色は始終充血したやうに赤味を帶んで居た。何だかそれが却て物凄い樣にも思はれた。て、矢張醫者へは通はない。片手を帶の間へ挾んだまゝ、長火鉢の傍に俯向いて居て、太刀男が一寸ても外へ出やうとしやうものなら、むつくり頭を上げて、

『何處へ被行つしやるんです』と、癇高な聲て極め附けた。

「あゝ、一寸顔をあたつて來やうと思ふんだよ。」

何を白々しいと言はむばかりの顔附をして、お玉は少時男の顔を見詰めた。「えゝ、行つて被入しやい。ですが、貴方の被往しやる所は大抵分つてますよ。彼の女が又其邊へ來てるんでせう。」

「何をッ」と、太刀男は込上げて來る憤怒に息が詰つた。やがて、「お前なぞと同じ人間ぢやないや」と、捨臺詞して、やつと蟲を怺えた。

こんな女と同じ水準に立つて、一家を構へて居る。それからして、最う我慢が出來ないやうな氣がした。此女の思ふことは俺の思ふことゝてない、俺の思ふことは此女の思ふことゝてない。二人は全く別な世界に生れて來たのだ。別な種子から別な世界に生れて來た人間が、ひよんな間違ひから一緒に成つたのだ。間違ひだ、間違ひだ！

太刀には、其間違ひを自分で認めるのが何よりも苦しかつた。間違ひとは初めから分つて居たからだ。間違ひと知りながら、斯う成つたのだ。

「俺は其間違ひを抹殺するために、何れだけ骨を折つたか知れない。お玉は何故其苦心を認めて呉れないだらう。」

太刀男はがり〳〵と齒咬みをした。太刀男の眼には、お玉と添ふために捨てた女の姿が折々泛ぶやうに成つた。「俺はお玉に對して濟なないことをしたかも知れない。併しお玉よりも濟まない女が何の位有るか知れない。其女に對して、お玉は俺の共犯者ぢやアないか。お玉はそれすら認めない。俺一人を罪

人にして、自分は——自分は何の罪もないやうな顏をして居る。何といふ破廉耻だ、何といふ無知、無自覺だ！　縦しんば、お玉に何の罪を犯した覺えがないとしても、俺と同棲すると云ふことが、俺の妻に成つて、前の女の地位に座つて居ると云ふことが、既に此女の犯罪を構成するに充分ではないか。そんな自覺すらお玉にはない。宛然蟲のやうな女だ！」

　此所迄思ひ到つた時、太刀男はわれにもなく苦笑した。昔から有らゆる共犯者は敵同士の寄合と見えて、何方か一方が死ぬ迄相手を憎むやうに成るものだ。「アンナ・カレニナ」のアンナとヴロンスキイの關係がそれて有る。俺達も矢張其例に漏れない。左樣思ふと、自分ながら淺猿しい。

「そして、俺は加何だ。俺には過去を悔ゆるだけの力がない。いや、悔いても過去を取返すだけの道德的意力がない。俺は只過失を償ふに過失を以てする。前の過失に對する意識の鋭さに、それを胡麻化さうとして、又新しい過失を犯して居る。何時迄同じ事を繰回すのだ！　蟲のやうな人間は、お玉ぢやアない、俺だ——俺は如何成るのだ！」

　が、不思議なことに、太刀男はかうして容赦もなく自分を苛責めば苛責む程、自分の負擔が輕る成るやうな氣がした。だん／＼心持も浮立つて來た。

「何故併しお玉はこんな苛々した女に成つたらう。矢張子供がない所爲かな」とも思つて見た。

　其後、あぐりにも二三度會つた。尤も、會つた所で、自分の穢苦しい卑劣な心持を打明けて、相手に半ば擔はせるやうな氣にも成れない。只、まじ／＼顏を見合せたまゝ、それ儘に別れ／＼した。が、女

の疑ふ所のない、一本氣な、それて居て些とも自分に悖はないのには、何所か氣の置けるやうな所も有りながら、自宅の陰氣な、じめ〳〵した空氣に比べては、急に頭の上の空が霽れたやうな氣がして、如何しても又會はないては居られぬ様に成つた。仙臺へ行くと云つたのは如何成つたのか、女の方でも言出さなければ、此方て訊きもせず、女は何時ても太刀男の云ふが儘に遣つて來た。

「お玉が若しあぐりの様に少しも俺を疑はないて、頭から俺を信じて居て呉れたら、俺はお玉に背くやうなことは爲なかつたらう。信じて居るものを裏切る譯には行かない。」

太刀男は自分に言譯らしく一人て呟いた。

ある日、あぐりに會つて歸ると、お玉は何所かへ出て戻つた所と見えて、外出の着物を着たまゝ、何やらそは〳〵として居たが、突然

「醫者へ行つて參りましたよ」と告げた。

「ふむ」と言ひながら、太刀男は火鉢を挾んで坐つた。

「えゝ、お醫者様はちやんと仰有いました。そんな肺病や何かぢやないつて——だから、最うそんなに病氣々々と言つて頂かなくとも可いんですよ。えゝ」と、お玉は如何にも元氣が好さ相に言つた。自分てもすつかり安心して、急にいそ〳〵して居るらしい。

「左様か」と、太刀男は未だ不安らしく言つた。「何にしても、そりやア結構だ。だが、それなら尚更醫者へも詰めて通つて、薬も飲まなきやア不可ないよ。」

「えゝ」と、お玉は何時になく優しく言つて、凝乎と差俯向いて居た。ばらりと落ちた油氣のない鬢のほつれ毛も、何所やら病人らしい。太刀男はまじ〳〵とそれを見詰めながら、急に此女が可愛相なやうな氣がした。醫者の云ふことは當に成らない。が、それでも幾分か自分の肩の荷が取れたやうな氣もした。

三

が、醫者の言葉は矢張空頼みて有つた。お玉が詰めて醫者の許に通ひ出してから五日目に、風邪の心地だと言つて、宵から夜着を引被つて寢に着いたが、其夜二度ばかり咯血した。夜半に醫者を喚びに行くやら、小母さんも太刀男も慣れぬこととて、まご〳〵しながら、途方に暮れて夜を明かした。

朝の蒼白い日光が窓硝子を透して、盆の上の藥瓶や藥袋の上に射し出した。太刀男は眠たげな眼付をして、ぼんやり病人の枕頭に坐つて居た。病人は夜明け頃から少し咳き止んて、ぐつたりと仰向けに成つたまゝ、眼を閉ぢて居るが、眠つて居るのか起きて居るのか分らない。蒼白い、殆ど透きとほるやうな額の上には、一固まりの髮の毛が汗てへばり着いて居る。日頃瘠せた女だけに、眼が落込むやら顎が突出るやら、一夜の間に面變りがして、迚も息あるものとは思はれない。

「若しお玉が此儘死んだら――」

太刀男の頭の中には、昨夜からこんな考へばかりが渦のやうにぐる〳〵廻つて居た。一度ならず、二度ならず、太刀男はお玉が死んて呉れれば可いと思つた。死ね、死んぢまへと呪つたこともな　てはな

い。何だか、お玉は今其言葉を實現するために、わざと病氣に罹つた樣にも思はれる。

『今お玉が死んだら、俺が手に掛けて殺すやうなものだ。――お玉も左樣思つて死ぬに違ひない！』

太刀男は脊中に水を注がれたやうな氣がした『お玉は何時の間にか俺の心を氣取つて、俺の希望を果すために死んで行く。心の中で思つたことが、どし／＼事實と成つて行くのだ。俺は如何することも出來ない、手を束ねて見て居る外はない。』

實際、太刀男は何の役にも立たなかつた。寢床の側に坐つて居ても、如何して遣ることも知らない。默つて居るのが苦しいので、何か話し掛けやうかと思つても、病人が薄目を開いて、『貴方がこんなに爲たんだ、私を殺すんだ』と云ふやうに、凝乎と自分の顏を見られるのが苦しさに、何も言ふ氣には成れなかつた。かうして病人の顏を見守つて居るのも苦しいが、さりとて自分の居間に籠つて居るのも一層苦しい。太刀男は一人苛々しながら病人の枕頭に坐つて居た。

朝から薄曇つた空は、午後に成つてちら／＼雪を落して來た。四邊の薄暗く成つた頃、昨夜の醫者がやつと廻診に來て呉れた。太刀男は氣遣はしげに醫者の顏を見守つて居たが、只首を傾げたまゝ、何とも言はないで手を洗ひに立つた。そして、寒氣に對する注意を與へたまゝ歸つて行つた。

小母さんが車夫を遣つてと言つて留めたのを、太刀男は無理に自分で藥取りに行くにした。一つはそれに托言けて、些との間でも病人の傍を離れたかつたのだ。て、太刀男は外套の下に尻端折をして、蝙蝠傘を傾けながら出掛けて行つた。さら／＼と乾いた雪が風に舞つて、門の外には二筋三筋轍の跟が着

いた居た。

『俺は知らない、俺の知つたことぢやアない』と、太刀男は吹雪に逆らつて、幕と傘の柄に縋りながら呟いた。『彼の女は勝手に一人で死ぬんだ。死ななけりや成らぬから――死ぬ時が來て、如何しても死ななけりや成らぬから死ぬんだ。それを俺が知つたことかい。それを一々自分に責任が有る樣に考へたら、何處に誰が死んでも自分に責任のないものは有るまい。今、印度の森の中に牝猿が一疋死にかゝつて居るとしても、考へ樣に依つては、俺に責任がないこともない。一體、そんな事を考へるからしてセンチメンタルだ。俺もセンチメンタルな子供らしい考へに支配されては成らない。』

太刀男はお玉の死が自分に關係のないと云ふ證明(あかし)が立たなければ、如何しても生きて居られないやうな氣がして、飽迄此理窟を貫かうとした。縱からも横からも考へて見た。『縱しんば、お玉が自分のことを思ひ過して、其爲に病氣に成つたとしても、何てそれが俺の責任だと云ふことに成らう。二人は如何しても一緒に成つては成らない者が一緒に成つたのだ。彼の女も俺でない、他の男と一緒に成つたら、こんな不幸な結果には成らなかつたらう。又、俺にしても左樣だ。つまり彼の女は彼の女の性質として、間違ひの生んだ不幸に堪えて行くだけの力がないから、自分で自分の死を早めたのだ。それが如何成るものか。何れにしても、俺の知つたことぢやアない、俺の――』

が、幾許條理を立てゝ、理窟を附けて見ても、一目死の床に横はつて居るお玉の窶れた姿が眼に泛んだ時は、折角建てた城廓もがら／＼と崩れて仕舞つた。理窟も道理も死といふ事實の前には、何の力もな

い。太刀男は身顫ひしながら、幾度か雪の中に立停つた。

本郷三丁目の醫者の宅へ辿り着いて、やがて藥を貰つて歸途に着いた時は、最う日もとつぷりと暮れて、雪はいよ〳〵本降りに降り出した。往來も途絶えて、街の中は急に森とした。高等學校の柵について曲れば、片方は土手、片方は寺つゞきて、街燈の灯も滅多に見えない。太刀男は何やら興奮しながら、一人闇を突いて進んだ。頭が痛んで、顳顬の邊りがちく〳〵脈搏つた。雪が顔に吹附けるのも、何處を如何歩いて居るかと云ふことも覺えて居ないらしい。

不圖、一人の男が自分の前を歩いて行くのが眼に停つた。素足て、よれ〳〵の外套一枚被つて居るが、醉拂つてても居ると見えて、何やら一人ぶつ〳〵言ひながら、彼方へよろ〳〵此方へよろした。不意に此男が胴間聲を上げて唄ひ出した。

琉球へおぢやるなら草鞋穿いて
おぢやれ、琉球は…………………

が、何度遣つても、『琉球は……』迄行くと詰つて仕舞つた。そして、又始めから遣り直した。太刀男は足を早めて此男を追ひ越さうとしたが、其たンびによろ〳〵と自分の前へ蹌けて來た。畜生ッ！ 太刀男は此男に對して、何とも云はれぬ嫌惡の情を感じた。て、三度目に通り抜けやうとした時、又故とらしくよろ〳〵と蹌けて來た。

『馬鹿ッ』と言ひさま、太刀男は手を擧げて其男を突き飛ばした。男はよろ〳〵と踉けながら、土手の

下に打倒れた『うゝ——』と、一言牛の樣に唸つたが、其儘起上らない。

太刀男は氣に成るので傍へ行つて見た。其男は雪の中へ俯伏せに倒れたまゝ、身動きもしない。

『おい、〳〵』と、脊中を突いて見たが、矢張返辭がない。如何やら正氣もないらしい。

『こんな所で寢て居たら凍えて仕舞ふが』とは思つたが、又思ひ返して、其處に打捨つて置いたまゝ、すた〳〵と足早に歩き出した。

だん〳〵自宅へ近づくに伴れて、太刀男の足取は又緩く成つた。又、彼の部屋へ這入つて、お玉の死骸の樣に窶れた姿を見るのが堪らない。見たくない、〳〵。

『俺は知らない』と、心の中で又繰返して見た『俺に責任が有る？　それぢや其證明を立てゝ見るが可い。』

太刀男は執拗に其事ばかり考へやうとした。そして、自分で反證を擧げて見ては、傍からそれを破り破りした。到頭、何んな反證でも破り盡したと考へた時、彼は闇の中に物凄い微笑を泛べて居た。

門の前で一寸躊躇した。が、又思ひ切つて、つか〳〵と石段を登つて行つた『ちりちりん』と、硝子戶の鈴が鳴つた時、小母さんは遽てゝ上框へ駈出して來た。そして、背後から太刀男の外套を脫がせながら、小聲で、

『ね、又血を吐きましたよ』と、さも事有りげに告げた。

太刀男は思はずぞつとした。が、何にも言はずに、お玉の部屋へ這入つて行つた。お玉は夜着に脊を

凭せながら、蒲團の上に坐つて居た。太刀男が這入つて來たのを見て、ぢろりと其方を見遣つたが、其眼は毎ものやうに、

『何處へ行つてたんです？　私は、ちやんと知つてますよ』と言ふ樣に見えた。

『如何したんだ、えゝ？　寢てなくちや不可ないよ。さ、手を貸して遣るから、横に成るが可いよ』と、太刀男は側へ摺寄る樣にして言つた。

『えゝ』と、お玉は言はれる儘に、素直に横に成つた。

太刀男はお玉の脇の下へ手を入れながら、指の尖が女の骨立つた肋骨に觸ると、ぎよつとして、われにもなく手を離さうとした。やつと横に寢させたが、お玉は又手眞似て仰向けに成りたいらしい。又、其樣にして遣つた。

お玉は天井を見詰めたまゝ、眼だけぎろ／＼させて居た。やがて又うッすら其眼を閉ぢたが、其儘息もしない樣に見えた。電燈の下で見る所爲か、顏の色は敷布の白い色よりも白く、長い睫毛だけが美しい。

夜は靜かに更けた。戶の外で積る雪の一片づゝ襲なつて行く音が、靜かに耳へ着くやうにも思はれた。

太刀男は腕組をしたまゝ、凝乎と病人の顏を見詰めて居た。

不意に、お玉が眼を見開いて、ぢろ／＼と四邊を見廻した。太刀男は傍へ顏を寄せて、

『如何した？　えゝ、何が欲しいんだい』と訊いて見た。

が、お玉は男の顔を見返したまゝ、何とも言出さない。其冷たい眼の光は、「私は今に死にますよ。貴方は私の死ぬのを待つてるんでせう」と言ふ樣に見えた。太刀男はわれにもなくぶる〳〵と身顫ひした。

やがて、お玉は一人言のやうに、

「雪ですね」と言ひながら、靜かに其眼を閉ぢた。

——二月十三日夜——

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
京都市下京區佛光寺　東枝書肆

◎定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢　但清國を除く）

册數／國別	內國	外國
六册	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二册	金參圓	金四圓貳拾錢

以上郵稅共

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十五册（本年度十六册）分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一 **誌代郵稅** は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一 **郵便爲替** にて御送金の場合は **本郷西片町十番地中央公論社** と指定し拂渡局を **東片町局** と指定あれば途中盜取の虞なし
一 **振替貯金** 口座は **東京三十四番** なり
一 **郵券代用** 必ず **一割增** の事
一 **集金郵券** の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込** をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし幣社は直ちに其取扱をなすべし
　一金一圓迄　金五錢
　一金三圓迄　金六錢　（集金委託料及送達料共）
　一金五圓迄　金七錢
一 **受領證請求** は必ず返信料を要す

大正三年二月廿五日印刷納本
大正三年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話(長)下谷一九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

